はげまし

発行所
社団法人 機動隊員等を励ます会
東京都中央区八重洲2-4-14
〒104 ミツヤビル3階
発行人 鈴木 實
TEL 03(272)2050
購読料 年間1200円(送料共)
(但し会費の中には購読料を含む)

大警備の正念場迎える

当励ます会の支援も力入る

今年の治安情勢は極めて厳しい。一月十五日のシェワルナゼ・ソ連外相来日に続いて四月の天皇在位六十周年記念式典、五月の東京サミットとチャールズ英皇太子ご夫妻来日、さらに成田空港闘争、三月着工予定の関西新空港建設問題とかってない大警備による。こうした中で世界的なテロ活動の活発化を背景に、過激派によるゲリラやテロは強まる動きにあり、その手口も多様化している。始まった警備の正念場で、当励ます会の〝はげまし〟もそれだけに高まる。

東北支部総会

東北支部総会及び懇親会が去る一月三十日十七時三十分から仙台市パレス平安で開かれた。凍りつく寒さのなか会員三百名機動隊員等百五十名が参集した熱気溢れる会合となった。

励ます会を代表して三澤昭郎東北支部長と鈴木實・本部理事長が、隊員の日頃の精進を称え一段の奮起を力強く励ました。

来賓代表として東北管区・高田明郎警察局長と宮城県警察・三井一正本部長がそれぞれ励ます会の暖かい支援を感謝すると共に、治安維持に努力する決意を述べた。柔道世界戦二連覇の岩手県警察本部・日陰暢年巡査、部長を表彰した後、励ます会・嘉悦康人本部理事が乾杯の音頭をとり、懇親会に移った。

宮城県警察音楽隊の演奏、釜石製鐵所による虎舞いなどアトラクションが続き、万歳三唱は励ます会・柴田秀次郎東北支部世話人、手締めを宮城県機動隊及川隊長が、また励ます会・小笠原義男東北支部世話人の閉会のことばで、尽きぬ交流は幕を閉じた。

なお当励ます会の東北支部長は、前任の新田次男氏が都合により辞任され、今回より三澤昭郎氏に引継がれた。

名古屋支部総会

第十一回目を迎えた名古屋支部総会は二月三日十七時から名古屋市郵便貯金会館で、会員百五十名機動隊員等関係者二百名で開かれた。

国歌斉唱で始まり、励ます会小野目実名古屋支部長が「今後とも支援を強化していく」と挨拶した。これを受けて愛知県警察・於久昭臣本部長は「負託に応えていく」と治安万全にかける決意を述べた。

励ます会・鈴木實本部理事長が励ましの言葉と共に乾杯の音頭。懇親会は歌謡曲、寸劇、バンド演奏、合唱で大きく盛りあがった。

愛知県機動隊・三井隊長の謝辞に続いて励ます会・麻生博本部理事による万歳三唱で式次第は終ったが、国民と警察のかけ橋となる励ます会はこれからもさらに充実され、これがまた隊員達の心の支えとなっていくことはいうまでもない。

◇

当励ます会は東京本部と各支部でそれぞれ年一回の総会で機動隊員等を招いて懇親会を催すが、東北支部と名古屋支部に続いて千葉支部が二月十二日、九州支部は二月十八日に開かれた。また、北海道支部は来る三月十二日を予定している。次号で開催模様をお知らせするが、励ましの輪の拡大は隊員の士気を大いに高らしめるところとなっている。

名古屋支部総会

東北支部総会

今月の言葉

二十一年振りに優勝したプロ野球球団阪神タイガーズは、阪神ファンのフィーバーだけに止まらず、プロ野球に直接間接を問わず、経済界にも大きな影響を投げかけたことは、まだ記憶に新しい。今も続いているか否は定かではないが、原宿周辺で訳のわからぬ踊りに狂している若者、また最近のテレビ、特に正月の民放チャンネルは、どこもお笑い番組で構成され、面白おかしく全国のテレビファンを喜ばし賑わしている光景を見ていると、日本は本当に平和でのどかな昨今であるかのように見受けられる。

しかし一方では、昨年十一月二十九日の中核派による国鉄ゲリラ事件や極左暴力集団の抗争、実行の機会を窺っているかのごとく地下に潜行している各過激派と、非常に恐怖すら感じる不穏な状況が背中合わせとなっている今日の日本社会の中で、

世相

機動隊員等の方々は一刻の気持の休まる時もなく、常に国の治安に、また国民の平穏な日常生活を守るため、昼夜を問わず厳しい任務に従事しておられる。

国の治安を守る機動隊員等の皆様方も、毎日を面白おかしく過している若者達も、所詮は同じ人間であり、しかも年代層もほぼ同じである。趣味も大きく違わない青年が、片や遊びや抗議行動への参加、片やこれを取締まる側の警備に当たり、特に極左暴力集団や過激派等の警備に至っては、予測の出来ない状況の中で、勇気と正義感に燃えて、ある時は命を賭けてその任務に従事しなければならないこの矛盾を思う時、改めてこの世相の違いを痛感すると共に、その任務の厳しさに頭の下がる思いでいっぱいである。

今年は成田空港第二期工事をはじめ、東京サミットや各国要人の来日も数多く予定されている。それに伴い機動隊員等の保安警備体制は万全を期さなければならない絶対的な使命のもとで、その責任と任務を遂行されることは、我々国民も十二分に理解しているところであるが、その一方ではこの徹底したすばらしい保安警備体制を衷心より期待している。

日本の警備力は諸外国に較べて極めて優れている国であると言われており、また我々国民が国内治安を見る限りにおいても充分に認識出来るものである。それは我々が、また諸外国の人々が、機動隊員等の長年にわたる輝かしい実績の積み重ねが信頼につながって来たものであると確信しており、機動隊員等の皆様方のご活躍に心から敬意を表し感謝申し上げる。

これからも国民の期待に応え、より高い士気のもとに益々信用と信頼を得て、国の治安と社会の安全と平和維持に向けて邁進されることを期待するばかりである。（小川郁雄）

北から南から

瀬戸大橋時代を迎えて

岡山県警察本部秘書課

岡山県機動隊の庁舎は、岡山市の中心部にある緑に囲まれた総合運動公園の一端に、昭和五十八年に新築されたものです。

隊員は隊訓である「精強、練磨、団結」を合言葉に、より精強な部隊を目指し、日々実戦に訓練に励み県民生活の安全確保に努めています。

現在岡山では「燃えろ岡山」という県民運動に、全県民あげて取り組んでいます。これは来たる二十一世紀を控えて岡山の恵まれた気候、自然、県下各地の伝統、文化、産業を生かした新しい地域づくりを進めて行くというものです。そして、この「燃えろ岡山」の火付け役とも言える大イベントが、本州四国連絡橋、児島・坂出ルートの建設です。

この本州四国連絡橋というのは、瀬戸内海で隔てられている本州と四国を新しい交通路（車両用道路及び鉄道）で結ぶことにより、両地域の一体化を図り、その発展と生活利便の向上を図ろうというもので、岡山県の児島と香川県の坂出を結ぶ夢の大橋です。

工費は約一兆一千五百億円で、建設予定距離は約四十キロメートルで、海峡を横断する道路及び鉄道共用部分は吊り橋式の建設方法がとられ、南北備讃瀬戸大橋、下津井瀬戸大橋をはじめ総延長約十三キロメートルの架橋部分からなっています。架橋の上段には片側三車線、計六車線の車道、下段には二車線の鉄道が建設される予定で、その幅員は、三十五メートルにも及びます。この工事完成後には、世界でも有数の超大橋が出来上ることになります。

現在、工事は主塔などの基礎工事をほぼ終え、続いて道路共用部分を吊り上げるメーンケーブルの架設工事が行われています。このメーンケーブルは吊り橋の〝命綱〟であり、直径五・七ミリ素線を約二万四千本束ねて直径約九十四センチメートルのメーンケーブルに仕上げます。この作業は、二十四時間体制で行われています。

この本州四国連絡橋瀬戸大橋は、九年の工期をかけ、昭和六十三年の春には開通予定です。これに伴って岡山県の各方面での飛躍・発展が予想されます。岡山県警察もこれに相応した重責を担っていかなければなりません。

そこで、来るべき瀬戸大橋時代に備えて、我が機動隊においても、体制の強化、各種資器材の開発整備を図ることはもちろん、突発事件・事故を想定した実戦的訓練を行い、実力を養うとともに県民から信頼され、親しまれるより一致団結して努力しているところです。

みちのく山形へどうぞ

山形県警察本部広報課

分けてあげたいほど豊かな自然にあふれている山形。かつて〝みちのく〟と呼ばれた山形は、現代の高速交通機関を利用すれば、手軽に旅情を楽しむことができる時間的距離にある。

空路では、東京山形間五十五分で一日五往復、大阪山形間七十五分で一日二往復、札幌山形間七十分で一日一往復。鉄路では、東北新幹線仙台経由で、上野山形間三時間五分と年々更に充実してきている。

○うまい米と山形牛

我が国で四番目の広さをもつ

（第四ページへ続く）

私の家庭

警視庁機動隊

家は己れの城である。そこは自分が心から愛する者、自分を愛してくれる者の住み家であって、自分自身の作り出した空気がある。また、疲れた心身を慰め、力づけ、家族の力で守ってくれるトリデともなる。とくに激務に明け暮れる機動隊員にとっての家庭は、愛の源ということになろう。家庭を大事にする心が、国家治安における士気につながることはいうまでもない。

家族の絆

一機　森田　祐二

今から十年ほど前に見た映画に「アドベンチャーファミリー」というのがあった。大都会に住む四人家族のうち、長男が汚染された空気で喘息になり、その治療のため便利な都会の生活を捨てて山中に移り住み、多くの環境の変化や苦難を乗り越え生活する内容であった。

その時、私は、今の生活を変えてまで子供の病気のために、山の中まで行って治療することなんかないのではないかと思った。当時独身だった私は、家族というものはこのようなものかという、ただ漠然とした家族像を思い浮べるだけだった。

それが今では、妻と二人の子供があり、当時漠然としたものでしかなかった家族が、目の前に現実として存在している。毎日生活するうえで、当然のことだが、家族を意識せずにはいられない。

中学生だった頃の或る日、真夏のクラブ活動を終えた夜、目の炎症を起した。夜中になるにつれ痛みが増し、父に病院へ連れていってもらったことがあった。日頃は厳しかった父だが、この時の父は、閉ざされた病院の扉を必死でたたき、寝ている医者を起し、私の治療をお願いしたのである。

そして今、父親となった自分が、父と同じ行動をとっていたことに気がついたのは、つい最近のことである。遊びざかりの長男が転倒して後頭部を打ち、病院へかつぎ込んだ時のことである。私はその時、私自身がされたように我が子を夢中で病院へ担ぎ込んだ。私も子を持つ親として、いつの間にか私の父と、あのアドベンチャーファミリーの父親と同一線上に立って子を想っていたのである。

今、自分がおかれた立場。それは妻の前では夫であり、子供の前では父親であり、家族を守ってゆく立場にある。この経験を生かして再確認させられ、自分の中の新しい部分を発見した思いがした。

一言では言い表わすことのできない「家族」という言葉をもう一度かみしめたような経験であった。家族の絆とは、日常の出来事の中で、精一杯の愛情で、織りなしてゆくものであろうと思っている。

（分隊長）

私の家族

二機　杉野　隆平

私の故郷は、九州の佐賀県でNHKの「おしん」で一躍有名となったところである。実家は、両親が寿司屋を営んでおり、長男坊として生まれた。店舗と住む家が離れていた関係で、夜になると兄弟三人だけで過した。食事から風呂の事まで男兄弟三人でやっていて、家族揃って食事をするのは、月に一度位なものだった。

三人共、不思議に幼い頃から、寂しさを口に出すとか、親に愚痴をこぼすということはなかった。それは、私達兄弟が、両親の働く姿、苦労というものをそれぞれが肌で感じていたからだと思う。

母は、朝早くから起きて食事の仕度をし、洗濯・掃除、そして夜は、父と共に店を切り盛りしていた。夫婦揃って帰って来るのは、毎日午前二時過ぎ頃で、母はそれから帳簿つけだ何だで寝るのは、三時を回っていたと思う。そんな両親の姿を見ていたからこそ、夜、親のいない寂しさをがまんし兄弟三人で過せた反面、男兄弟だったのでよく喧嘩もした。その度に「兄弟揃っていられるのも、社会へ出るまでよ」と母はよく言ったものだが、まだ幼かった私にはよく理解できなかった。

私が高校三年の就職の時期となり、両親に相談なく警視庁を志望した。両親は、私に一度も店を継いでくれとは言わなかった。それは、商売の苦労をいやという程に味わって、子供にもつらい思いをさせてきたから、同じ思いをさせたくなかったのだろうと思う。すぐ下の弟も、店を継がず、埼玉で電気関係の会社で働いている。いつの間にか、佐賀の実家には、両親と三男だけとなった。

たまに母から手紙が届くが、寝る前には歯をみがきなさいとか、洗濯・掃除をしなさいとか、一日一回は牛乳を飲みなさいなどと、うるさいように書いてくる。やはり、いくつになっても子供なのだから仕方のないことだろう。

警視庁の警察官となって、両親は大変に喜んでくれた。五十路を過ぎた今でも、夜遅くまで働いている両親に負けないように、私も仕事に勉学に頑張っていきたい。

（中隊員）

我が家の一日

三機　小島　誠二

私の家は、妻と子供の三人家族である。昭和五十四年十一月十九日に結婚した。翌年の十一月十九日に、山口百恵と三浦友和の結婚式が行われ「僕達が先輩だね」と言ったのを覚えている。妻の名はさち子、私より一歳下の三十歳、世田谷区役所の福祉課に勤務している。

我が家の一日は、午前六時揃って起床することから始まる。妻は、朝八時に長男（優四歳）を近くの保育園に預けた後、あわただしく職場に出勤する。だから、起きてから朝の食事、子の保育園の仕度準備等で、部屋の中はちらかし放しで座る場所がない程である。

夕方に仕事を終え、それから保育園に迎えに行き、買い物を済ませ家に帰ると、すぐ食事の準備に取りかかる。夕食は七時半頃から八時半頃になる。他の家庭では食事を終えて風呂に入り、寛いでいる頃であろう。最初に妻と子供が風呂に入り、その後に私が風呂に入る。出てくると既に九時を過ぎている。それから布団を敷き、寝るのが十一時過ぎとなる。「アッ」と言う間の一日である。

長男は、小児喘息の公害認定を受けており、季節の変り目、特に冬から春、秋から冬、それに梅雨時のような天候には発作が出て一日中咳き込み、ひどい時には食べた物を全部吐き、それでも吐き足らない時は胃液まで吐く。本当に苦しそうで、親としては代ってやりたい程である。昨年はすでに十日程の入院を三回繰り返している。

何かと甘えたがる年頃であり、付き添って看病をと思うのだが、共稼ぎのためそれも十分に出来ない。しかし、妻が働きながら看病にかけつける姿を見て「お母さん、大変だね」と子供が話したということを聞き、子供も親の苦労を子供なりに良く理解してくれているんだなとしみじみ感じて、一層「親子共々頑張らねば」と強く思うのである。

こんな私達も、昨年の夏に待望の一戸建の家を買うことが出きた。三DKの小さな家だが、親子三人慎ましく暮してゆくには十分過ぎる程である。月々七万円位の返済は若干苦しいが、二人で頑張ってゆこうと思っている。これからも苦しいことも楽しいことも分ちあって、狭いながらも楽しい我が家にしていきたい。

（分隊長）

母を語る

四機　永田　健一

私の母は五十歳。泣き顔一つ見せたことのない強い母である。幼い頃の記憶は定かでないが、物心ついた時は、厳しい母であったように思う。私が警視庁警察官として採用され、いざ一人

する日、その母が目に大粒の涙を浮かべて、私の手を握りしめながら「自分で選んだ道だから中途半端で帰って来てはだめだよ。死ぬ気で頑張れ」と言った言葉が昨日のように甦ってくる。思えば本当に母には苦労をかけたような気がする。

私は高校三年間、そして大学受験のための予備校一年間と母には大変迷惑をかけた。電車通学だった私は、駅まで二十分歩き、朝六時三十分の始発列車に乗り込み、およそ一時間半、列車に揺られる生活を過ごした。私も私なりに大変だったが、自分の事であるからさほど気にならなかった。しかし、母は、本当に大変だったと思う。

夏ならともかく、冬のまだ夜の明けぬ寒い日も、一日も欠かすことなく、私の朝御飯・弁当を作ってくれた母。寝むけ眼でいる私に、「今日、学校に行かんとや」と私の体を揺すぶる母。そして、我が家を出る時は、必ず玄関先まで出て来て、私を見送ってくれた母。そんな母の姿が今でも鮮やかに甦る。こんな母の気持ちを絶対に無にしてはならないと思った。そして正直に生きようと、堅く心に誓ったのが警察学校入校の時である。

こんな優しさの中にも厳しさを秘めた母がいなかったら、今の私はなかったかもしれない。また、私が警察官としての道を歩み始めたのは、母の影響が大きい。予備校生活も半年過ぎた頃の事である。母が私に「曖昧な気持ちで大学に行くのなら、就職の事も考えなさい」と言った。中途半端ではだめだというのである。

その頃、小さい頃から憧れていた警察官の採用ポスターがやたらと目に付くようになり、「そうだ、自分の進む道はこれしかない」と思った。人の為に、何か役立つ仕事がしたいと決め警察学校の門をくぐったのであった。

早いもので警視庁巡査を拝命して五年目を迎え、神田署に勤務したのち、憧れの機動隊を希望し、一昨年四月栄えある第四機動隊に着隊することができた。機動隊は、私の想像していた以上に厳しい所だが、それ以上に夢とやりがいを与えてくれる。

私は首都治安の屋台骨を支えているという大きな夢とやりがいを胸に秘め、どんなに苦しくても、辛くても中途半端で役げだしたりせず、母の流した涙を無駄にせず、相手を思いやる心を忘れず、都民の為に涙を流せる、そんな警察官になれるよう自分なりに精一杯私の選んだ道を歩んでゆきたいと思う。母との誓いを忘れないためにも……。郷里の母を想い出すたび、この気持ちが増していく昨今である。

（中隊員）

子育て奮戦中

五機　喜多　寛

結婚して早いもので六年目となった。色々と変化する中で早くも三人目の子供たちに恵まれて賑やかに毎日を送っている。

長男は、明るくて歌の大好きな子で、昨春から幼稚園に通いだし、一段と兄ちゃんらしくなって、一日中外で遊んでいる元気な子供だ。

長女は、ちょっぴり内気だが、家の中では、両親もびっくりするくらいの口調でよくおしゃべりをし、母親から髪を結ってもらった時は、必ずと言っていいぐらいに鏡台の前に立つ、おしゃまな子供に育っている。

次女は、誕生前だがこちらから声をかけると、すぐに反応し、笑顔で答えてくれ、部屋中をゴロリゴロリと寝返りをしながら「私をいつになったらだっこしてくれるのかしら」と言いたそうな顔をして、私たちの顔を見上げている。

この三人の子供たちが中心の我が家には、毎日どこかで誰かの泣き声、笑い声、歌声などが聞こえてくる明るくて賑やかな家庭である。

そして、母親は毎日、育児に忙しくて自分の時間がないと嘆きながらも、けっこう子供達のあどけない顔を見てつい笑顔となり、疲れもどこかに飛んでしまっているようだ。

ところで私自身は、もっぱら我が家にいる時は、三人の子供たちの良き遊び相手となってしまい、父親という感じではなく、ついつい、いっしょになって遊んでしまう。しかし最近は、父親の存在感を教えるわけではないが、子供たちを叱ることが多くなってきた。

我が家はただいま子育て奮戦中といったところであるが、この子供たちが、明るく素直で健康な子供に順調に成長してくれることを願うばかりである。そして、狭い家ではあるが、仕事で疲れて帰っても心の休まる我が家であってほしいと思っている。

（教務係巡査部長）

我が家のジャンボ君

六機　小泉　英和

「あーあ、あーあ、……」毎朝六時頃になると、決まって変な声のリズムを取りながら私の腕をかみつきにくる。「早く起きろ、遅れるぞ」とばかりにである。「痛い、何んだ」と驚いてはね起きると、ニャッと笑う。

こんな悪趣味を日課としているのが、我が家の目覚まし時計役の長男「英之」である。この時の笑顔はすばらしく、眠気を吹飛ばす最高のモーニングコールとなっている。また、この趣味のおかげで私は何度も遅刻から免れているのである。

この彼こそが我が家の生活の中心をなし、九ケ月で身長七十八センチ、体重十一キログラム。一歳平均をはるかに上回るジャンボ君なのである。ジャンボ君は、大きいわりには機敏に体を動かし、豊富な運動量で部屋の中をところせましと這い回り、物を倒しすでにラグビー選手を目指しているかのようである。性格は、頑固で気が強く目標を定めると、何度邪魔されても、何回も何回もチャレンジする。非常に頼もしい。

こんな彼であるので、普段の生活はまったく赤ちゃんらしさ

がない。というのは、オモチャが大嫌いで、オモチャ遊びをさせるとすぐにほうり投げてしまう。そしてその代りに箱・新聞紙を破いたり、襖に穴をあけてはワーワーはしゃぎ回っている。

また、乳母車に乗せるとすぐに足をほうり出し大きな態度で、「アーア、アーア」と特に大きな声を出し、俺が通っているんだぞと言いたげなヤンチャ坊主なのである。

さらに極めつけは、女性が大好きなところである。しかも若い女性のみである。バス、電車に乗ると必ず若い女性をみつけては、ワッワッと話しかけ相手にさせてしまうのである。テレビに若い女性が映し出されると、どんなに暴れ回っていてもその動きの全てを止め、じっと見入ってしまう。こんなジャンボ君を、妻は将来が心配と嘆いているが、私としては非常に満足しているのである。

こんな調子の毎日であるため、病気でもかかると、我が家は火が消えたように暗く、さみしくなってしまう。いまでも二度ほど発熱したため病院にかけ込んだことがある。このような時は一日中、夫婦で心配のしどおしとなる。

特に私が夜勤の時の病気は、非常に心配で妻の不安も強いものと思う。これからも病気などせず丈夫で、いつまでもジャンボであってほしい。頑張れ、我が家のジャンボ君。

（中隊員）

尊敬する父

七機　入江　信孝

人にとって両親とは、どんな時でも忘れ得ぬ存在である。ことに男にとって、父という存在は単に男親であるばかりでなく、人生という道を歩いて行くうえにおいて、一番身近な先輩であり道標である。やや大袈裟に書いた感じもするが、少なくとも自分にとって、私の父はそう言える存在である。

父は現在四十九歳で、深川にある自動車会社に勤め、整備と営業を担当している。秋田県で生まれ、地元の学校を卒業すると同時に、集団就職で上京し、現在の会社に入社した。

以来三十年余り、自動車一筋に励み、自分で整備工場を開けるだけの技術を身に付けながらも、右も左も分らぬ東京で親代わりになり、親身に面倒を見て一人前にしてくれた先代社長の恩義に一途に応えようと努力している。一本気な性格である。そんな父だからかもしれない。当庁を初め各官公庁、大手企業との窓口を長い間任されている。人並み以上の努力を重ねて来たからこそ、現在があるのだということも決して忘れてはならないだろう。

又、家庭においては、マイホームパパと呼べる程ではないにせよ、病気がちであった母に代わって台所に立ったこともあり、大掃除などは進んでやる方であった。そして、私、弟、妹には躾では厳しいものの、休日にはよくドライブなどに連れて行ってくれた思い出も多い。

私などは、やっと社会人として歩み始めたばかりではあるが、一人の社会人となって、改めて父の考え方、軌跡を立派であると感じる。まさに、尊敬という言葉のとおりである。

最近になり、父とよくいろいろな事で話をするようになった。以前なら難しくて話に加わるどころか、内容すら理解しかねていたが、今では何でも話が出来るようになり、一緒に飲みに行くことも多くなった。まだまだ一人前とは言い難い自分ではあるが、これからも大いに語り、見習って、納得のいく一人前の社会人になろうと思う。

（中隊員）

お願いごと

八機　村井　克之

私は、一歳二ケ月の女の子です。名前は、優しく賢く美しい女性に育つようにと、父が祈りを込めて「文美」と名付けてくれました。生まれたばかりの頃は「オギャー、オギャー」と泣くばかりで、父や母を困らせたものですが、なにせ言葉が話せない為、泣くしかなかったのです。

ここでうちの家族を紹介します。父の名前は「克之」。二十八歳で警察官をしています。朝は早く、私が眠っているうちに出勤しますが、帰りは、私が寝静まってから帰ってくるということが、時にはあります。

以前、私が父と母をやっとわかるようになった頃、忙しい勤務が続いたらしく、一週間以上顔を合わせなかったことがあり、父の顔を忘れてしまい、随分と父をがっかりさせたことがありました。以来父と私は、必ず一緒にお風呂に入ることになりました。私は、頭を洗われるのが嫌いなのですが、父はそんな事におかまいなく、ゴシゴシとやります。たまに機嫌が悪く、眠い時などは「イヤだ」と泣くのですが、言葉が通じず、いつも叱られておしまいです。いつか言葉が話せるようになったら「あの時はよくもやったなあ」と言ってやるつもりです。

そして母は「弘子」と言い、同じく二十八歳で、いつも家にいて私の面倒をみてくれているので、たぶん無職です。母の取り柄はこれといってないのですが、とにかく洗濯と掃除が好きらしく、朝早くから一生懸命私のおしめを洗ってくれるので、とても感謝しています。でも、早く外で遊びたい私の気持を知ってか知らずか、幾ら泣いても「ちょっと待ってね、洗濯が終わってからね」と言います。母は、私と洗濯や掃除のどちらが大事なのかと疑いたくなります。これも話せるようになったら「あの時は恨んでいたのよ」と言ってやるつもりです。

ところで、父と母にお願いがあります。一つは、どこの家を見ても、私と同じような子が二人や三人はいます。きっと大きくなった時に、遊び相手がいないと困るからだと思います。そこで私の家にも、もう一人か二人、私の遊び相手ができるといいなあと思います。

二つ目は、私の事が原因で喧嘩するのはやめて下さい。「お前が悪い」「いいえ、あなたこそ」等の言い合いで、母が涙を流すのを見ると、私まで悲しくなってしまいます。

三つ目は、父と母の故郷の北海道へ毎年連れて行って欲しいことです。今年の夏に行ったら、四人のおじいちゃん、おばあちゃんに「かわいいね、来年も来るんだよ」と言われました。父は「忙しくなったらね」と答えていましたが、私の顔が忘れられないように必ず毎年連れて行って下さい。

お願いばかりしてしまいましたが、私も明るく素直な女の子に育つことを誓いますので、お父さん、お母さんもいつまでも仲良くね。

（操車係員）

我が家は戦場

九機　松村　徹

「お母さん、大変だ、和美がウンチだ」時ならぬ新米パパの叫び声に、これまた新米ママがおむつ片手に走り回る。

妻「典子」二十七歳、長女「和美」一歳、一女を得て、やっと家庭らしくなった我が家の一幕である。

昨年七月三十一日、午前四時四十九分、待ち待った長女「和美」が誕生した。出生時三千四百グラム、母子ともに健康との一報を成田空港警備隊に出向中に受けた私は、その後の戦場のごとき我が家を予想だにしていなかった。

長女誕生以前の我が家は、時折り国境紛争はあるものの平穏そのものであった。妻の妊娠に伴って、しだいに戦雲渦巻き、そして、運命の七月三十一日を期して、突然のゲリラ攻撃を受けることとなったのである。

我が家の小さな「戦士」は、このうえなく勇敢であり、ヤッ朝がけはもとより、所かまわず「糞尿弾」を打ち込んで来る。これを指揮する敵大将は、その勢力を誇示、開戦僅か一ケ月にして、我が陣深く侵入し、机といわずあたりはおしめの山、今や、我が勉強部屋、いや我が領土は風前の灯という有様とあいなった。

国家予算は、そのほとんどが戦費（育児費）と消え、GNP一パーセント問題が羨ましく映る程である。今後の戦況によっては晩酌、いや不謹慎であった、ガソリン、実弾さえこと欠くことになりかねない。

やがて小さな戦士は、美しく成長し、妻と同盟関係を結び、我が国を圧迫することとなろう。このうえは、一日も早く、息子という名の友軍の誕生を願う他はない。

さて、妻の関心を娘に奪われた哀れな父親の嘆きを粗末な一文に綴ってみたが、翻って考えてみると、それもこれも泣きであって、我が家は、そして私にとって幸せこのうえない日々が続いていることに他ならないのかもしれない。

子を持って知る親の恩、子供とはこんなにも手がかかるものかと、改めて両親の有り難さを身にしみて感じる今日この頃、益々その責任の重くなったこの体を大切にし、娘に誇りを持って、おまえのパパだよと胸をはって言える父親になるべく、仕事に邁進して行きたい。

（教務主任）

郷愁を断つ

特車　迫田　久

昭和五十九年一月二十八日、この日は私にとって忘れられない日である。それは、私が隊庭でレスキュー訓練中に、右足首を骨折し入院した日だからだ。警察病院に入院した私は、東京に親戚等もなく若干さみしい思いもしたが、同僚・先輩・そして上司の方々の激励と見舞をうけて、なによりもうれしく元気づけられた。

私は広島県の出身で、郷里には、父、母、弟の三人が全員元気で働いている。入院した時、母は「東京へ見舞に行かれんで、近くに住んでいればなあ」と電話で寂しそうに話していた。私は、「何も心配することはないよ、病院の設備はよいし大丈夫だよ」と答えたが、家族の反対を押し切って警視庁に就職した私を、母は、地元で就職させて家から通勤させておけば、この様な時に面倒みてあげられるのにと思ったのかも知れない。

約二ケ月間の入院生活を終えて、仕事に復帰したのは六月だった。私は、機動隊になにをしに来たんだろうと焦った。心の中では、同僚達が先に進んでしまって、一人とり残されていくような気がして、どうしようもなく寂しい時があった。このような時、母に電話をしてやるせない気持ちを打ちあけた事があった。母は「悩んでもしかたないでしょう、一人で悩んで苦しむより田舎へ帰って来なさい」と言葉をかけてくれた。しかし「ここまで頑張ってきたんだ、どの様に苦しかろうとこれから仕事を続ける」と自分に強く言いきかせ、また、母に心配させないように「警察は自分が選んだ道だ、つらくともこの仕事で頑張るよ」と言って電話を切った。

現在は分隊の組長となり、運転担当のほか、後輩の指導等充実した日々を過ごしている。昨年の八月に、二年ぶりに実家へ帰省した。「ただいま」と家の玄関を開けると、両親が「体は大丈夫か、元気でやっているか」と私に尋ねてきた。私は明るい笑顔で「元気でやっています」と答えた。実家へ帰ると、いつもにぎり寿司で私のことを歓迎してくれる父、母である。弟は、車で駅まで迎えに来てくれる。

このように、私にとっては恵まれた家族の中で、特に母は、いつも田舎へ帰るたびに「東京で耐えることが出来なくなったら、その時は帰って来なさい。あなたの実家ですから」と言ってくれる。しかし、その本心は「一生懸命ガンバレノ」と言っているんだなあと私は受けとめている。

今後私は、家族の期待に応えるためにも、自分自身を磨き、一人前の隊員になるよう努力していきたい。自分が選んだこの道を完遂してこそ、郷里にいる両親への最大の親孝行であることを肝に銘じ、今後さらに頑張っていきたいと思っている。

（中隊員）

親を思う

警視庁機動隊三機　佐藤　勇造

胸を張って堂々と歩ける人間であれ
努力と反省の日々をおくれ
人のために涙を流せる人間であれ
父は背中で教えてくれた
素直でやさしい人間であれ
頭はよくなくても人情は忘れるな
人に迷惑をかけない人間であれ
母はしぐさで教えてくれた
悲しい日、苦しい日、思い出すのが郷里であり、親である。時には枕を濡らすことも
「元気だ、心配するな」と別れると
顔中しわだらけにしてこっくりとうなずく
「ありがとう、私は幸せ者だ」

お知らせ

▽北海道支部総会＝発足以来九年目になり、会員数も一千名を越えました。六十年度の総会及び懇親会を三月十二日（水）十七時三十分より札幌市・パークホテルで開催します。

乱忘れぬ精鋭
幸あれ機動隊

大内俊司
亨和興業㈱
㈳嘉悦学園
栗田工業㈱
㈱三榮商会
村山文雄
高周波熱錬㈱
高島浩一
木村政次
黒田一
村上益一
丸定産業㈱
伊勢湾海運㈱
明鋼材㈱
広畑海運㈱
中村是一
不動鋼板工業㈱
中條鋼材㈱
新潟鋼機㈱
㈱柴田鉄店
北海鋼機㈱

読者の広場

二十一世紀を考える

嘉悦　康人

新春早々からソ連シェワルナゼ外相の来日、四月には天皇陛下ご在位六十年式典、五月の東京サミット、また、イギリス皇太子をはじめ世界各国の要人の来日。瞬時も気の抜けないこれらの警固。心ない反体制ゲバの躍動に対する警戒・警備。機動隊の皆さんのご苦労は、一般国民の気のつかないところで、増大している。

これらは、すべて人間のエゴイズムから派生している。

人類の歴史が書き記されるようになってついに二十世紀二千年という長い時間が経過しているというのに、そしてそのすべての原因も民族・国家そして個人のエゴイズムに基因しているという理由さえ判明しているのに、どうしてそれを克服し、是正出来ないのかと不思議でならない。

いま二十世紀人類社会は、この長い間の試行錯誤の最終選択に迫られていると言っても過言ではない。

一日も早く人種や民族の違いなどという愚かな差別概念を捨て去り、国家などというくだらない形態から脱して、地球上の人類が人間同志という大きな枠組の中で一体となり、地球の地域の問題から派出する有無を、善意によって流通させ、軍備とか貿易摩擦などという愚劣な係争を中止するべきである。

食糧の豊富な地域から不足した地域へ。労働力を必要とする地域への移出。消費物にしても、各地域で同一品質を競合して作らずに、有無相通ずる製作協定をする。

人類社会が一日も早く、この姿になることが二十一世紀を迎える人間の使命である。それまで死なずに頑張りましょう。

アンフェア

高島　浩一

日米貿易摩擦でのアメリカの指摘は、日本人たちの「アンフェア」だという。アンフェアというと、日本では〝不公正〟という言葉に訳されて、外国製品を締め出すための非関税障壁とか、官民一体の輸出産業育成とかいった意味に受けとめられている。しかし、アメリカ人の実感は、そんな生易しいものではないらしいことを、私は何人かのアメリカの友人から聞いている。

つまり、アメリカ人のいう日本のアンフェアとは、人間的嫌悪に近く、端的にいえば日本人はずるく悪どいのである。ゴルフのスコアをごまかすのと同様、良識のルールに違反している。兎小屋に住まって土曜も日曜も働けば、良い製品が安く出来るのは当り前だ。人間らしい生活をして、その上で儲けるのが本当の仕事だ。だいたいがバールハーバーをやった人種なのだから、まともに相手にするのが間違っていたのだ…、と少なくないアメリカ人が思っているらしい。アメリカ人は基本的には日本に好感を持っている国民なのだから、経済問題からこういった儲が出来るのは残念なことである。

そういえば、元寇の際、白兵戦で、日本軍の戦士たちは、斬り合いの前に名乗りをあげた。「やあやあ遠からんものは音にも聞け…」という、あれである。これが日本のルールであった。ところが元軍には、そういうルールはない。そのために日本の戦士は名乗り中に斬られてしまうことがあったという。その時、倒れながらこうつぶやいただろう、「アンフェアだ」。

ところで、私はいま京都に住んでいるが、京都では昨年来、古都税論争が盛んである。年末恒例の毎日新聞のいろは歌留多にも、㊀京の寺門を閉ざして除夜の鐘、とあった。そして年明け早々には、古都税で混乱を招いたとして、京都市長にざんげして貰うため猟銃を持って金閣寺に立てこもった男まで現われた。

この古都税問題について、多くの市民が、お寺さんの態度に批判的であるようにも見受けられる。もともと宗教法人だからといって税金を取られないことは自体がおかしい。お坊さんは税金で作った道路を車で走らないのか。拝観停止とは思い上りではないか。何世紀にもわたって国民全体が守ってきた国家の文化財を私物化している。――つまり、寺社側の態度はアンフェアではないかという市民感情が聞かれる。日本古来の宗教に根ざす崇敬の対象を囲んで、こういった論議が起ることと自体、関係者すべてがアンフェアなのかも知れない。

さて、こういったアンフェアは、どのようにして解決できるのだろうか。国の歴史は新しいが、世界のリーダーとして正統的でなければならないアメリカ人と、焼け跡から生活補助金を貰って立ち上り、新興成金になった日本人とのギャップ。ある意味では特権意識のお寺さんと、公共観光資産と割切る市政との乖離。どちらが良いとか悪いとかではないが、問題になっているアンフェアとは何か、ということから目をそらさず、具体的に突っ込んでゆくことが必要なのではないか。もちろん、アンフェアと指摘する側がアンフェアである場合も当然ある。

われわれの周囲には、これに限らず、まだまだ数多くのアンフェア問題がある。私の生業である電炉業界においても、業界あげた構造改善の必要性がいわれてから十年以上にもなるが、結局は〝フェアなルール〟が出来ないことから、いまなお塗炭の苦しみに喘いでいる。

しかし根本的には、少なくとも自分のやっていることが、誰かにとってアンフェアにならないか、という配慮を欠かさないことが、世の中を住み良くする最も有効な方法の一つではないだろうか。

ボート部精神で

岩国市装束町　槙島　美津子

山口県と言えば、田舎と思えますが、幕末から明治にかけて、志士、政治家、偉人を多く輩出しています。近くは、岸信介、佐藤栄作兄弟の総理大臣を出しています。

私達の住む岩国は、広島に隣接する工業都市です。山口県の東玄関といわれ、もと吉川藩六万石の城下町でもあります。岩国市を流れる錦川（岩国川）にかけてある錦帯橋は、木造五連の美しい弧を描く奇橋で、日本三名橋の一つとして名高く観光客で賑わっています。ことに城山下の吉香公園では牡丹、つつじ、菖蒲、桜、藤等四季折々の花を愛でることが出来ます。又、日本三景のひとつ、宮島が車で三十分程の所にあります。

息子にかける夢

広島市上天満町　井ノ口　洋一

息子が警視庁にお世話になって、早や三年の月日が過ぎようとしています。三年前合格通知を受け取った時の感激は、私の人生にとって最大の喜びでした。私も小学生の頃、大人になったらなりたい職業のひとつに、「オマワリさん」を夢見たものです。私の果たせなかった夢を息子がかなえてくれた事は、何か自分が警察官になった様な気分でした。

親馬鹿とは良く言ったもので、二十二歳の青春をヨチヨチ歩きながら自分の足で歩き始めた人生、楽しい事より苦しい事の方が多い人生を味わって行く事でしょう。心の支えにはなってやれても、手とり足とり教えてやる事が出来ませんが、私は息子を信じております。

カネや物を追求し、欲望のためならの風潮が益々強く感じられる現代社会ですが、人間の基本だけは忘れて欲しくない思いです。親と子の信頼関係が続く限り、息子にかける期待も、夢を見る事の楽しみも持つ事が出来るのです。警察官を志した以上、功成り名を遂げる事も大切な事ですが、常に自己を見失う事なく、警察官として人間として恥かしくない人生を進んで欲しいと願う気持です。

いささか理想の高い厳しい期待感かも知れませんが、人生の折り返し点を過ぎた私達夫婦にとっての楽しみは、子供の話題ばかりです。近き将来、息子も人生の良きパートナーを求める日が来ると思います。最後のスネをかじられる痛さよりも、その時こそ本当の子離れをしなくてはと、今から心配しています。

（警視庁三機・井ノ口徹中隊員の父親）

お国自慢はこの位にしまして、息子敏幸は、警視庁に奉職して六年が過ぎました。機動隊では、大学時代からやっていたボートの技能をかわれて、ボート選手として各種競技に出場させていただきました。又、昨年は、巡査部長昇任試験に合格した知らせを受け、私達家族も大変喜んでおります。これもひとえに、上司、先輩をはじめ同僚の皆さま方の、普段からの激励ご指導の賜物と心からお礼申し上げます。

巡査部長になっても、ボートで鍛えた体と精神をもって、今まで以上に頑張って欲しいと思います。それから、敏幸もそろそろ良いお嫁さんをもらって、親を安心させてもらいたいと思います。

最後に、機動隊の皆様のご健勝とご精進を心からお祈り申し上げます。

（警視庁元二機・槙島敏幸中隊員の母親）

〝いきいき富山〟へどうぞ

富山県警察本部総務課

〝いい人いい味いきいき富山〟三年前から始まっている富山県の観光キャンペーンである。これから富山県の自慢を思う存分したい。ぜひ一度、ご家族でいい人いい味いきいき富山におこしください。

一　観光自慢

◎　立山黒部アルペンルート

中部山岳国立公園をケーブルカー、トンネル、ロープウェーで越える国際的山岳観光ルート。日本のスイス。このルートの中に世界的にも最高クラスの黒四ダムと日本一の落差三百五十メートルをほこる称名滝がある。

◎　夏の別天地「黒部峡谷」

温泉郷宇奈月から黒部川にそって、日本一深い大峡谷を赤いトロッコ電車にゆられ、スリルとサスペンス、片道約二十キロの旅が楽しめる。

二　いい人富山の民謡

越中「おわら節」をご存じですか。毎年九月一～三日、越中八尾は風の盆。老若男女が切ない胡弓の音をバックに夜どおし唄い踊りあかす。NHKで毎年全国放映されている。

三　いい味自慢

◎　富山湾の味覚

ホタルイカの酢味噌あえ、バイ貝の刺味、寒ブリ、甘エビ、ベニズワイガニ、タラ汁等舌鼓を打っていただける新鮮な魚が一杯。富山湾は暖流と寒流いずれの魚も豊富。氷見沖では日本一の広さをもつ大敷網がある。

◎　豊産物でも

コシヒカリの産地、リンゴ、ラグビーボールより大きい黒部スイカ（ジャンボスイカ）が毎年陛下に献上されている。駅弁では、ますずしが有名。

四　その他日本一あれこれ

住宅持家率、高校進学率ともに日本一。教育県。銅器の生産、くすり、世界にほこるYKKファスナーも富山県。

（第一ページより続く）

山形県は、全国にも名高い米どころである。ササニシキに代表されるうまい山形の米は、生産性でも全国のトップレベルにある。

また〝みちのくの特級品〟山形牛は、そのおいしさで全国的に高い評価を得ている。山形の自然と県民の勤勉さとが作り上げた逸品だ。

○樹氷が招く白銀の世界―蔵王―

十二月の声を聞くと同時に、世界に誇る二百三十ヘクタールのビッグスキー場は、全国から集まるスキーヤー達であふれんばかりになる。様々な特徴のあるゲレンデが無数にあり、それらが連なって全山ひとつのスキー場になっているという豪快さと、なんといっても樹氷の美しさが見ものだ。白いモンスターを横目に樹氷原コースを滑りおりる爽快感は、他所では味わえないすばらしいものがある。

○果樹王国山形

山形県は、柑橘類以外のほとんどの果樹が栽培されており、特に山形のサクランボは、昔から初夏の味覚の王様として全国で賞味されており、生産量は全国の約八割を占めている。

このサクランボを頭として、西洋ナシ、ブドウ、リンゴ、モモ、柿など全国生産量の上位を占める果実が多い。リンゴは青森、長野に次いで全国第三位の生産量で、スターキング、ゴールデンデリシャスなど高級品種が主体に作られている。

○日本一の将棋駒の里―天童―

天童といえば将棋というように、全国一を誇る将棋の産地として有名な天童市では、全国の九十五％の将棋の駒が生産されている。江戸末期頃から生産され始め、天童駒の特徴は書き駒で、ほとんど手造りである。

最後に「行く末は、誰が肌ふれん　紅の花」（芭蕉）―紅花のふるさとである自然いっぱいの山形へ、どうぞおいで下さい。（注）県観光物産課・同広報課資料から抜粋（転載）

はげまし

発行所
社団法人 機動隊員等を励ます会
東京都中央区八重洲2-4-14
〒104 ミツヤビル3階
発行人 鈴木 實
TEL 03(272)2050
購読料 年間1200円(送料共)
(但し会費の中には購読料を含む)

失敗許されない大警備迫る

支部総会 千葉と九州で

機動隊員等が対応しなければならない大きな警備が間近かに迫ってきた。天皇在位六十年記念式典に続く東京サミット、チャールズ英皇太子ご夫妻来日、さらに成田空港や関西新空港建設問題と、ゲリラにとっては盛りだくさんの攻撃目標が目白押しである。昨年のゲリラは五十二、五十三年に次ぐ史上三位の多発ぶりであった。警備当局にとっては、万が一にも失敗の許されない正念場にあって、当励ます会は、機動隊員が日頃鍛えてきた実力をフルに発揮、完璧に使命を遂行できるよう励まし続けるばかりである。二月に開催された千葉支部と九州支部での励ましは例年以上に大きく高まった。

千葉支部総会

当励ます会のなかで一番若い千葉支部も第五回の総会を迎えた。二月十二日千葉グランドホテルで会員二百名、これに機動隊員等約百名を招いての支部総会及び懇親会が催された。

国歌斉唱、殉職者に対して黙禱を捧げ、小川郁雄・千葉支部長と鈴木實・理事長が「機動隊員の苦労をねぎらうと共にさらに精進されるように」と挨拶したのを受けて、千葉県警察・菊岡平八郎本部長と千葉市・小林紘助役がそれぞれ来賓祝辞を述べた。

千葉支部長より機動隊へ記念品を贈呈、新東京国際空港・三井善政警備隊長が決意新たに警備に万全を期すと力強く謝辞。励ます会・麻生博監事による乾杯の音頭で懇親会に移り、最後は千葉支部・曽根貞雄副支部長発声の万歳三唱で幕を閉じた。

九州支部総会

第十二回目の九州支部総会は二月十八日、会員約二百二十名が福岡市八仙閣に参集して盛大に開催された。

励ます会九州支部・飯田正雄世話人の司会で、まず自見真清・九州支部長と鈴木實・理事長がそれぞれ力強く励ましのテ葉を述べた。来賓として九州管区警察・高橋弘局長と福岡県警察・木村武本部長が励ます会に謝意を表すると共に、引続き警備の万全に注力すると挨拶した。

東京本部・嘉悦康人理事による乾杯の音頭で懇親会に入った。隊員達出演の余興などを加えて心の交流は最高潮に盛りあがり、励ます会・木村政次大阪支部長の万歳三唱で、式次第は滞りなく終了した。

上：千葉支部　下：九州支部総会及び懇親会

今月の言葉

鏡を見る習慣を

皮膚科の医師によれば、顔面の皮膚は神経が集まっているため、顔を見ればその人の健康状態、精神状態がわかるらしい。確かに、顔色が悪ければ、どこか健康に支障があるし、精神が顔色に影響することもある。昔から「お前の顔に書いてある」とよく言われるが、顔というのはごまかせないものである。

毎朝ひげを剃り、鏡で顔を見る。この時、ただひげが剃れたかどうかを見るだけでなく、自分の「人相」はどうだろうかという事を鏡で見て、自分の健康状態、精神状態を見たいものである。とくに精神状態は顔に表われるもので、うっとうしい顔をしていると、職場などで人に不快感を与えることもある。その意味でも朝はひげを剃るためだけではなく、自分の人相を見、精神状態を知るためにも、鏡を見ることは大切である。

かってリンカーンが大統領になったときに、周囲の者がスタッフとして推した人物があった。しかし、リンカーンはどうしても彼をスタッフとして採用しなかった。その理由を尋ねると、「彼は人相が悪い。四十を過ぎたら、自分の顔に責任を持たなければならない」と言ったのは有名な話である。

さらに後ろ姿、歩き方も大事な要件である。後ろ姿を見る方が、前から見るよりもその人がよくわかることもある。そのために、背筋を伸ばして歩くことは、後ろ姿をよくする方法である。

明の永楽大帝を補佐した袁柳荘の「相書」の中に「行相」の一項目があり、歩行の姿を規定している。「行は正直昂然たらんことを欲す」と言い、大地をしっかりと踏んで堂々と闊歩するのを最高としている。そして「偏体、揺頭、蛇行、雀鼠、腰折、項歪は好ましからず」と戒めている。

偏体とは体を曲げて歩くこと、揺頭とは首を揺って歩くこと、蛇行とは蛇のようにふらふら歩くこと、雀鼠とは堂々と闊歩しないでちょこちょこ、ぴょんぴょんはねて歩くこと、腰折とは腰を曲げて歩くこと、項歪とは首がゆがんでいることである。

首をまっすぐにして両肩の上に頭をのせて堂々と歩く姿は、見ていて気持の良いものである。人相は今更どうなるものでもないが、姿勢を改めることは本人の心掛け次第ですぐ実行できるものである。毎朝、鏡の前で自分の「人相」を見るとともに、姿勢をじっくりと見て「行相」を改める習慣をぜひ身につけたいものである。

（廣 慶太郎）

北から南から

詩情豊かな能登路への誘い

石川県警察本部警務部秘書課

百万石の城下町、金沢。素朴で詩情豊かな能登半島。山中、山代、片山津、粟津などの情緒あふれる加賀温泉郷。年間六百万人を超す観光客で賑わう石川県は、全国でも有数の観光地である。

今回は兼六園、金沢城、尾山神社、武家屋敷など金沢の町並みを充分堪能した後、車でちょっと足を伸ばしていただきたいコースをご紹介しよう。

○なぎさドライブウェイ

内灘から能登海浜道路にのり、今浜で降りると千里浜海水浴場がある。この海岸は日本唯一の天然海浜道路となっており、ほんの波打ち際を車で走ることができる。夏は海水浴客が多くて無理だが、春から初夏、秋にかけては波しぶきをあげて走るとても爽快だ。車を止めていつまでもキラキラ光る水面を見つめ、打ち寄せる波の音を聞いていたくなるような所だ。

○能登島

昭和五十七年に開通した能登島大橋は全長一千五十mで、海を渡る橋としては日本で二番目に長いものである。七尾湾に浮かぶこの白い橋は、碧い海とあいまって優美なものである。

この橋の開通により能登島は離島に別れを告げ、水族館を中心とする〝のとじま臨海公園〟もできた。水族館には三百種以上の海や川の生物がいて、マリンガールによる餌付けやイルカショーなども見られる。その他モノレールや遊覧船に乗ったり、海釣りなども楽しめる。

○恋路海岸

海岸の一角に一人の若者と、若者に寄り添う娘の像がある。二人は恋人同志で、毎夜沖合の小さな島でかがり火を合図して会っていた。ところがある日、娘に横恋慕した村の男がかがり火の位置をずらしたために若者は溺死してしまった。それを知った娘はひどく悲しみ、若者を追ってその海に身を投じた。以後この海岸は〝恋路海岸〟と呼ばれるようになった。

現在ではこの悲恋物語よりもロマンチックな名前で人気のある恋路だが、海岸沿いに松の木が並び小さな島が浮んでいたり、名前に負けないくらい素敵な所である。またこの恋路海岸やもう少し北上した所にある見付海岸は、海がとてもきれいなので海水浴場としても有名である。

八雲たつ神々の国〝しまね〟

島根県警察本部警務部総務課

島根県は、中国地方を東西に走る中国山脈の北側斜面にあって日本海に臨み、南北は平均三十八キロメートルと狭隘だが、東西は反対にすこぶる長く、極端に細長い特異な地形をしている。

県の東部地区を出雲（いずも）、県西部を石見（いわみ）と称し、更に、島根半島の沖合い五十キロメートルの日本海に浮かぶ隠岐（おき）を加えて、全県下は三つの地域に分かれており、気候、風土、歴史、産業、生活習慣、方言などそれぞれに異なった特色をもっている。

特に「古事記」「日本書紀」などに現れている神々の物語は、出雲地方を活動の中心としており、かって出雲が、日本歴史の創世期に果たした重要な役割りを感じさせる。また、当地で話される出雲弁は、松本清張の小説「砂の器」において出雲弁と東北弁との類似性が事件解決のキーポイントになっているが、

（第3ページへ続く）

警察の威信かけた正念場
完遂以外にない
警視庁機動隊

今年は「警備の年」といわれている。天皇御在位六十年記念奉祝行事、とくに五月開催される東京サミットは、わが国の国際信用と警察の威信をかけて警備の万全を期さなければならない。警視庁を始めとする全国各機動隊員等そのものが鼎の軽重を問われるときでもある。また、ここへきてテロ・ゲリラは再び高揚期を迎えている。それだけに一段と厳しい条件下での警備になるが、機動隊員等は与えられた使命の完遂に創意工夫怠りない。年初に立てた今年の決意を、年男達に改めて語って頂いた。

不言実行
一機　藤岡　弘達

私の干支である寅年が巡ってきた。昭和三十七年一月二十四日生れ、寅年、いわゆる年男である。警察社会に入ってわずか六年であるが、本年はそういう意味においても、公私共に大きく飛躍する年にしたい。

具体的に言えば、まず昇任試験であるが、何はともあれ「有言実行」ではなく「不言実行」で努力していきたい。周りの同僚や先輩が、三つ星で退隊していく姿を何度となく見てきたが、やはり祝福ばかりしていられない時にきている。全力を尽くし、これに対処する所存だ。

次に計画的貯蓄である。これからはますます出費が多くなる時期である。結婚は今のところ考えていないが、いざという時のために、コツコツと貯金していこうと思う。

そして最後は、与えられた仕事の完遂である。本年は天皇在位六十年記念式典、東京サミットなど大警備の続く年である。

「山に登りては側路に耐え、雪を踏んでは危機に耐う」これは、山では坂道に耐えて登り、雪の中では危ない橋に耐えて進むという中国のことわざである。つまり「耐える」という事の大切さを示唆したものである。

我々機動隊の仕事は、まさにこの「耐える」仕事であると痛感している。

一〇・二〇成田闘争においてわが中隊は、第三ゲートを背にし、丸太を先頭に突入してきた極左暴力集団の攻撃をものともせず守り抜いた。私が思うに、この勝因は、まさに「耐える」という一語に尽きる。そして、耐えたからこそ次の検挙活動に際し大きな爆発力となって、大量検挙する事ができたのではないかと思う。

これから本当に重要かつ大切な警備が我々を待ち構えている。世界一安全な都市東京を守る警視庁の一員として、微力ながら精進努力することを、年頭にあたり誓うものである。（中隊員）

これでもか、これでもか
二機　北原　敏男

「人生には節がある」は、よく聞く言葉である。今年は、十二年に一回という私にとっては節目の年である。毎年、目標を決めてそれに向かっていくのだが、必ず反省と後悔が残る。しかしながら、その反省と後悔を何らかの形で、自分自身にプラスにしなければならないと思う。

反省や後悔は、誰しもが持つものだ。そこで、その反省する事や後悔する事にどう対処していくかが、その人の長い人生を、大きく左右するのではないだろうか。そこで、反省や後悔を教訓に、今年の抱負を述べたい。

その一つは、まず健康である事。物事を行なうとき、不健康な状態でいると自然にうまくいかない。健康には、肉体的な健康と精神的な健康と二通りあるが、病気や怪我等をすることによって肉体が不健康となる。例えば、家族の一人が病気になったとすると、家族みんなが心配顔となり、次第に家庭が暗くなる。そして、ついには他の人にまで影響を与えてしまう。

精神的な健康とは、平常心を保つことだと思う。平常心が一度狂ってしまうと、段々と深みにはまってしまう。物事を正確に判断して対処することができなくなり、ついには悩み詰めて病気になってしまうということである。そこで、常に健康を保持するために、体力を錬磨し、肉体的にも精神的にも健康であることに心掛けたい。

二つ目は、「職務を全うする」という事である。この「全うする」は常識的な言葉であるが、これが実に難しい。昨年一年間を振り返って、本当に職務を全うできたと言える事は数少ない。自分なりに何故職務を全うできなかったかと原因を究明してみた。結論は、事なかれ主義、つまり「これでいいだろう」と自分自身が納得いくまで事に当たらなかったのが原因である。今年は、この「これでいいだろう」を「これでもか、これでもか」と積極的な方向で、職務を全うすることに心掛けたい。

三つ目に、私は今年結婚して家庭を持つ。これからは二人の生活がスタートする。これまでは自分一人の生活、責任で済んだのが、これからは、すべて二人分の生活責任を負わなければならない。そこで公私ともに、自覚をより一層高め、責任ある行動に心掛けたい。（中隊員）

脚下照顧
三機　中村正一郎

禅に「脚下照顧」という言葉がある。まず足もとを見つめ、こから正せということである。自分自身常に反省を怠るなという意味であるが、機動隊の一員として職責を全うしようとするとき、足もとは、まさしく私自身のことであり、まず自分自身を厳しく律する姿勢なくしては、いかなる進歩もありえない。

寅年である今年は、私自身の生涯にとって、一つの区切りとして重要な年である。この意義ある一年を悔いのないようにするため、次のことを念頭において努力したい。

一、知識、能力の向上。教養は理屈ではなく、多くの事を知っていることが大前提である。したがって、社会人としての常識を養うと共に、幹部として、警備活動上必要とされる法令・警備技術の習得に努めると共に、人格の陶冶に努める必要がある。自己の立場に対する厳しい自覚のもとに研さんしていきたい。

二、体力の練磨。集団警備力とは、人間による物理力が中心となる。幹部は、その行使において、部隊の先頭に立って、統制していかなければならないものであるから、何よりも先ず自己の体力の練磨に努め、いかに厳しい現場であろうとも、これに耐えていくだけの体力を作らなければならない。

三、指導性の発揮。分隊長の指導性の欠如が、しばしば問題になる。特に機動隊は、急変する現場で迅速に行動しなければ重大な結果を招くことになる。したがって、分隊長には、首根っこを引きずっても隊員を動かす気迫がなくてはならない。気迫の欠如が、指導性を弱める大きな原因となっている。

言うべきことは言う。時には叱責することが真の愛情であり、部下の信頼を得る道であり、かつ義務であることを忘れてはならない。現在の状況に甘んずることなく、基本に徹し、厳しい訓練で強い精神力と機敏な行動力を涵養し、いかなる困難に直面しても、敢然と任務を遂行する、旺盛な使命感と責任感を培っていきたい。（分隊長）

今年の抱負
四機　山田　裕

私は昨年十月二十五日、鬼の四機の異名を持つ第四機動隊に着隊し、日も浅く、戸惑いの連続だが、首都東京の治安を護る治安の闘士になりきるため日々努力をしている現在である。

今年の「寅年」は私の年である。この記念すべき年を、念願であった機動隊員として迎えることが出来、幸せこの上ない。本年は東京サミットを初めとして重要警備が目白押しであるが、私の抱負を述べてみたい。

一、機動隊員であることの自覚。一〇・二〇成田警備に見られたように、極左暴力集団は火炎ビン、投石、鉄パイプを使用して機動隊に立ち向かって来ている。十数年前にもこれと同じような事態が見られたが「時代は繰り返される」と言われるとおり、これからも極左のテロ・ゲリラはますますエスカレートすることであろう。これらに対処するため、常に自分の足元を見つめつつ、心身を鍛え、体力・気力の充実を図っていく覚悟である。

二、リーダーシップを発揮する。近頃は集団警備力を発揮する事象が少なくなり、部隊も小隊長、分隊長指揮による警戒警備が増えつつあり、分隊長の役割が重要になってきている。自己啓発に努めると共に、世論や社会情勢等あらゆるものに関心をもち、情報収集をし、いざ事案が発生したような場合でも、あわてることなく、冷静、沈着かつすみやかに対応出来るような実力を身につけておきたい。また隊員とのディスカッションを行ない意思の疎通を図り、中隊の要として、リーダーシップを発揮していきたい。

三、勉学の励行。機動隊に着隊するに当たっての目的の一つが、昇任試験合格の栄冠を勝ち取ることである。常に自分自身を磨き、地道な努力を重ねて目的を達成していきたい。

最後に前任署の署長が「警備には絶対ミスがあってはならない。警備には百点満点か零点しかなく、常に百点満点を取らなければならない宿命がある」と訓示したことがある。この言葉を胸に、東京サミット警備、天皇在位六十周年記念警備等に全力投球していく覚悟である。（分隊長）

私に任せなさい
五機　多田　和也

昭和三十七年一月十五日生まれ、今年は年男の私である。文字通り私の年にすべく、次のことを目標に警視庁の機動隊員として、自信と誇りを持ち続け頑張って行きたい。

第一に昇任試験合格。私にとって二回目の「寅」、ここで自分をひと回り大きくすべく、節目として日々努力勉学に励みたい。そして、昇任試験に合格し幅広い知識と教養をもった幹部になりたい。

第二に副隊長伝令としての抱負。昭和六十年十月二十日、私はこの日を生涯忘れることはないであろう。着隊以来二年十ケ月、幾度となく体験した成田警備だが、あの時ほど極左暴力集団に対する怒りと憎しみを覚えたことはなかった。しかし、あの荒れた三里塚交差点での現場では、自分でも驚くぐらい冷静に、伝令として任務を全うできたのではないかと思っている。ブロックのような石の雨や、次から次と襲いくる鉄棒による攻撃から、怪我もなく指揮官を守り通せたことである。しかし、帰隊後、同僚の負傷した姿を見た時、改めて、極左暴力集団に対する憤りを覚えるとともに警備の難しさを痛感した。

今年は、「サミット警備」という、私にとっては未経験の警備が待っている。伝令としていか加えてさらに研究を重ね、サミット警備に万全で臨みたい。

第三に仕事の精通。私の仕事は会計の物品担当である。小さな消しゴムひとつから輸送車といった大きなものまで、隊内の消耗品、備品の管理、請求、返納、供用、修理といった手続等をしている。上司・先輩からは「どんなに些細なミスも許されない」と教えられている。実際自分ではたいしたことではないと思っても、隊員全員に迷惑がかかるかもしれないからだ。

一日も早く、「物品のことなら私に任せなさい」と誰にでも堂々と胸を張って言えるように努力していきたい。

私の人生の節目である今年は、「縁の下の力持ち」として、又、副隊長伝令として、与えられた職務を全うし、ゴールに向かってトラ年にトライする覚悟だ（会計係員）

夢は中隊長
六機　中野　敦志

「検挙前へ!!」私の命令で部隊が一団となって暴徒を制圧・検挙していく。そんな不法事案が起こってはいけないのだが、十二年後の年男になったときに、機動隊の中隊長として勤務している私の夢の姿である。こんな夢を、同僚に面と向かって話したら笑われるかも知れないが、夢は夢として大きく持ちたいと思っている。

「男子、三日会わざれば刮目して見るべし」という諺がある。三日は別としても、この十二年は大きく成長するのに充分な期間であると思う。

私の十二年前は、学生服を着た中学生で、今こうして機動隊員として、日々首都治安維持のための仕事をしているとは、考えもしなかった。十二年後の姿が中隊長とはいかなくても、今よりも大きく飛躍していたいものだと思っている。

その十二年のスタートである昭和六十一年の抱負だが、今まで何か始めようと思っても腰が重く、何もできずに終っていたので、これからは何事にも行動的に挑戦して見たい。

今年の目標は、(一)昇任試験合格に向けて勉学を励行する、(二)機動隊員として強じんな体力と精神力を身につける、ということである。ありきたりの事かも知れないが、有意義な機動隊生活を送るためにも努力していき

たい。

昭和六十一年、それは私にとっては大切な年だが、警視庁にとっても威信をかけた数々の重要な警備を迎える年である。その中でも、五月の「先進国首脳会議・東京サミット」を無事終了させることが、当面の重大な任務ともいえる。前回の「東京サミット」が開催されたときは、まだ学生だったが、今回は機動隊員として重要な警備に従事できることは、光栄でありまた大きな緊張感で一杯だ。

ある人から「東京サミット」に従事した際の苦労話しを聞いたことがある。その中で、印象に残っている言葉は「厳しく、辛い警備だったが、終ったときの充実感と重要な警備に従事できたという満足感は、厳しければ厳しい程大きい」ということであった。私もその人のように、充実感と満足感を後輩に話すことができるように、重要な警備を無事完遂するため、機動隊の一人として頑張っていく所存である。（中隊員）

意義ある節目に

七機　小田　明彦

機動隊に着隊して二年が過ぎた。この間、SNAC警備をはじめ沖縄派遣、成田警備など数々の警備に従事し、現在は、中隊の伝令（記録担当）として、日夜警備に励んでいる。この意義ある年私の年である。この意義ある年を第七機動隊員として迎えることを喜びとし、抱負を述べてみたい。

第一は、巡査部長昇任試験に合格するということである。私にとって、初めて巡査部長昇任試験を受験する記念すべき年だ。昇任試験に合格することは、単に階級を上げるだけではなく、自分自身に打ち克って自分をひと回り大きくすることでもあると思っている。この記念すべき節目を大切にし、自分の時間を管理し、日々の努力を怠ることのないようにしたい。

第二に、体力、気力を錬磨する。我が中隊は、「警備訓練の四中」と他の中隊から羨ましがられる?ほどの訓練を実施する中隊だ。「訓練に泣き、実戦に勝ち抜く」を合言葉に、共に汗を流している。今年は最大の警備といわれるサミット警備を控え、そこで「3310作戦」と題して、駆け走三百三十一キロメートルの走破と、腕立て伏せ三百三十一回を実施するというものである。首都治安維持に相応しい機動隊員になるためにも励んでいきたい。

第三に、健康管理である。今年も厳しい警備が続くが、与えられた任務は完全に遂行していかなければならない。そのためには、健康管理に十分注意し、常にベストの体調で仕事に臨んでいきたい。

新米の伝令としては、まだまだ学ばなければならないことが多々あるが、期待に応えるよう努力を怠らず、また訓練・勉学に励み、有事には訓練で培った集団警備力を存分に発揮し、首都東京の治安維持の一翼を担っていきたいと考えている。（中隊員）

チャレンジ精神

八機　川井　信也

私は、年男として二十四歳を迎える今年は、次のことを目標としてトライして行く決意である。

まず、"虎"の威を借る"狐"にならないことである。警視庁という大きな組織の中の一員として勤務しているが、それだけを看板にして勤務していては、まさに"狐"になってしまう。看板に相応しい実力が必要であると思う。そのために、私は相撲小隊員として、常に厳しい稽古に励み、気力・体力の充実をはかっていきたい。勤務においても、単に上司に言われたことだけをやればよいという考えではなく、どうすればゲリラを防圧できるか、事象が発生したならばどう対応するか等を常に念頭において、創意工夫を凝らしてゆく機動隊員になりたい。

次は、「虎穴に入らずんば虎児を得ず」の精神を発揮することである。今年から昇任試験の受験資格ができた。最初だからまだ無理だろう、ダメだろうではなく、週休・非番等を効果的に活用して計画的な勉学に努め、真摯な気持で昇任試験にチャレンジしたい。

また、我々機動隊員には、いろいろな資格や免許を取得する機会が与えられている。自分が消極的になっては、これらの資格を取得することはできない。取れる資格はなんでも取ろうという前向きの気持で取り組む決意だ。とりあえず今年は、警備無線と青免の取得が目標である。

最後に、鎌倉警視総監が就任の挨拶で述べられた「国民、都民に信頼される警察、そのためには、逞しい警察でなくてはならない。また、あらん限りの知恵を出し、みんなで汗をかこう、みんなで泥をかぶろう」ということを実践していき、都民に信頼される警察となるよう努力していきたいと思っている。（中隊員）

飛躍の年

九機　長島　邦裕

我が第九機動隊が「治安の礎」として誕生してから、今年で十七年目になる。「発隊当時は、新宿区若松町の台地に第八機動隊と同居し、暑さ寒さをまともに受ける急造のプレハブ隊舎、更に、付近が閑静な住宅街のため、警備訓練・柔剣訓練も声を出さずに行なったこと等、初期にはいろいろと苦労した」という。

私は栄えある第九機動隊に赴任し、現在、警備係員として勤務している。諸先輩が血と汗と涙によって築きあげた良き伝統を受け継ぎ、微力ではあるが全力を尽くして第九機動隊を更に発展させ、首都治安の一翼を担いたいと思っている。

特に、今年は「年男」である私にとって例年より高い目標をかかげ、それを遂行し自分自身人生の節目にしたいと思っている。

強い信念と使命感をもつ＝機動隊は治安の最後の砦である。これはただ単に強いだけではなく、国民全体の信頼の上に立ち、国家及び国民の生活を侵害する者に対しては、自らの生命身体の危険を顧みず、敢然として立ち向かっていくことである。

最近の警備情勢は、昭和四十五年当時の街頭武装闘争時代に似ている。そのころ、「本当の日本人を見たければ機動隊に行け」と言われた。これは全学連の激しい攻撃に機動隊の仲間が次々と倒れ、「今日こそはオレもか」と死傷を覚悟して、入浴の上、新しい下着に着替えて出動した隊員を称賛した言葉である。

柔軟な思考と万全な「詰め」の徹底＝今年は先進国首脳会議、天皇陛下御在位六十周年記念式典、更には成田空港警備等重要な警衛警護警備が控えている。極左暴力集団は、無制限・無制約のゲリラを呼号しており、その手段・方法は、悪質・巧妙化している。彼らの攻撃は、時として一般常識の枠を越える場合がある。このため、彼らが敢行すると思われるあらゆる事態を想定し、「まさかのスキ」を突かれることのないように、柔軟な思考と万全の詰めをもって対応することが重要である。

私は警備係員として、警備の万全を期するため、全力を傾注して警備計画の策定に当たりたい。警視庁機動隊の果たすべき責務の重要さを再認識し、身を引き締め、今日の努力を惜しまず、旺盛な研究心・問題意識をもって努力をする。また、人間的な優しさと思いやりを兼ね備えた人間機動隊員としての努力と、築かれた伝統を守り、使命完遂のため邁進していく覚悟である。（警備係巡査部長）

悔いのない年に

特車　久保田明彦

特科車両隊に着隊して早くも二回目の正月を迎えた。私は二十四歳の年男である。今年を人生における節目の年として、悔いの残らないようにがんばっていきたい。

今年は"大仕事の年"である。五月上旬に開催される東京サミットをはじめとする大警備、そして「昇任試験」という二つの仕事がある。私はこの仕事を完遂するため、三つの目標を掲げてみた。

第一に、強い体力づくり。ゲバ棒や投石が飛びかう成田等のデモ警備、不眠不休で行なう「忍」の常駐警備においても、必要とされるのはやはり強い体力だ。この強い体力を養うために、柔剣道の朝練、マラソン等今まで以上に積極的に汗を流して行こうと思う。

第二に、基本に徹する。今年はサミット（先進国首脳会議）という大警備も控えており、警察官個々人の果たす任務の役割は大きく、それによる成功不成功は、社会に大きな影響を与えるものと思う。私は一機動隊員として成功に終わらすため、たとえどんなに小さい任務であっても今まで培われた基本を忘れず、忠実にひとつひとつやり抜いていこうと思っている。

第三に自分に厳しく。これはもちろん仕事にもいえるが、昇任試験にもいえる。去年、私は「よし、来年は昇任試験がある。今年のうちに勉強しよう」と固い決意に燃えていた。しかしその決意も毎日の雑事に追われて次第に細くなり、「まあ来年も勉強できるからいいや」と、すごす結果となってしまった。それではいけない。だめになってしまう。私は今年一年、二度と同じ失敗をくり返さないため自分に厳しく、ねばりと根性で努力していく覚悟である。

「継続は力なり」とよく言われるが、もちろんこれは、地道にコツコツやっていかなければできないものだ。私はこの一年、この三つの目標を忘れず、何事にも負けない精神と闘志で誠実に遂行し、警察官として、自分自身としても悔いの残らないように機動隊生活をしていく覚悟である。（中隊員）

（第1ページより続く）

彼の地と遠く離れたこの出雲の地に何故これほど似たズーズー弁があるのかまことに不思議な特色といえよう。

◎神々の物語

皆さんは「須佐之男命」とか「八岐大蛇」をご存知でしょう。日本神話に登場する主人公たちで、須佐之男命が八岐大蛇と云う、頭が八つ、尾も八つ、身の丈は八つの丘にも及ぶ大蛇を退治して稲田姫を助ける物語である。

皇室に伝わる三種の神器の一つ「天叢雲剣」は、この時大蛇の尾から出現したものとされており、また、大蛇を退治した所は「とりかみの里」といわれ、現在は全国で唯一の昔ながらの"たたら吹き"による玉鋼を生産し、伝統的な日本刀の原料として全国の刀匠に送られている。

神々の物語は、この大蛇退治の外に「国引き神話」や「国譲り神話」など数多くあるが、これらの物語に登場する神々は、遠い神話の世界であるにもかかわらず、現在でも豊かな自然と深い歴史性や温かい人間性につつまれて生き生きと息づいている。

◎縁結びの神"出雲大社"

天照大神が大国主命のために建立させたという出雲大社は、その壮大な建造物といい、伝統的な神事といい神話の国、出雲の代表的な存在だ。

大国主命は「大黒さま」の愛称で親しまれ、本来は国土創成の神さまであったのが、中世後期頃から福の神となり、近世では縁結びの神となって幅広い信仰を集めている。

陰暦十月は、全国的に神さまの居ない月「神無月」と云うが、出雲地方では、神さまの居る月「神在月」と云っている。これは、全国の八百万の神々が出雲大社に集合し、縁結びの話し合いなど諸々の相談ごとをするところから、このように云われている。

最近、全国でこれまでに発見された銅剣の総数を一挙に上まわる三百五十八本の銅剣が、出雲の荒神谷遺跡一カ所から発掘され、続いて銅鐸および銅矛などが発見されたことにより古代出雲熱が沸騰している。

しまね路は、中国山脈に連なる山岳風景、山陰海岸独特の海蝕景観、県下各地に湧き出す温泉群、四季折々に姿をかえる豊かな自然にかこまれている。めんめんと受け継がれている数々の神話や歴史、豊かな文化遺産、文豪ラフカディオハーン（小泉八雲）が絶賛した山紫水明の湖都松江、これを象徴する宍道湖と松江城等々、忘れ得ぬ日本の面影をいまだ色濃く残している。

ハッと鳥取、ホッと鳥取

鳥取県警察本部警備部機動隊

わがふるさと鳥取は、因幡、伯耆の両国からなる面積（三千四百九十一平方キロ）は全国で四十一位、人口（六十一万三千名）は、全国最少という小規模県である。その県民性は純朴で、やさしい思いやりがある半面、内に秘めた意地や反骨精神は旺盛で、「山椒は小粒でピリリと辛い」ところがある。

鳥取というと「山陰」とか「裏日本」で表現され「弁当を忘れても傘を忘れるな」とかいわれて、とかくジメジメしたイメージを持たれる人が多いようだ。しかし、実際には雪が多い割りに対馬暖流の影響で比較的暖かく、大気の澄み切った日も多い。

県下の地勢は、日本海に面して東西に長く、南北に短く、海岸線から約三十キロも南下すると、そこには一千メートル級の中国山脈と大山系火山群が迫り、平野が少なく、ほぼ八十六パーセントは山地である。

美しい海と山の自然、県下十ケ所からなる温泉群―これらは、まさに全県観光を標榜するにふさわしいものとなっている。

◎　日本一の大砂丘

県東部の山陰海岸国立公園に、鳥取の代名詞的存在である鳥取大砂丘がある。東西十六キロ、南北約二キロの海岸砂丘で、風化土砂が沿岸潮流と季節風によって吹きよせられて出来たもの。広さもさることながら「スリバチ」と呼ばれる大小の凹地が発達し、その起伏量が最高九十二メートルにも及ぶ日本一の大砂丘といえる。

表面には、とりわけ美しい風紋や砂簾などの特異な景観がみられ、青い海と大砂丘のコントラストは、言葉で表わすことのできない絶景だ。鳥取砂丘のエピソードとして、戦前は鳥取歩兵四十連隊のかっこうの演習地だったことがある。最近ではNHKドラマ「夢千代日記」のロケ地として全国に放映されている。

◎　四季折々の秀峰大山

県西部には、大山隠岐国立公園の中心である、西日本随一の秀峰大山（標高一千七百十一メートル）があり、別名「伯耆富士」とも呼ばれている。春の新緑、夏の登山、秋の紅葉、冬のスキーと四季折々の景観及びレジャー、スポーツで大衆に親しまれている。志賀直哉も大正三年の夏、大山に遊び、この素晴しい眺望を「暗夜行路」に記述した。

鳥取県の二大名所である砂丘、大山について紹介したが、まだ名勝地が数数あり、特に県下全域にわたって、温泉が非常に多く、中でも、県中部のラジューム温泉「三朝」、県西部の海水の塩分を含み、石けんの泡がたたない「皆生」両温泉は特に有名である。

観光のあとは、露店風呂で鳥取の代表的民謡「貝がら節」に耳をかたむけながら、地酒を一献かわすのもまた格別であろうかと思う。是非他県で味わえない情緒豊かな鳥取へ"きんさいな!!"

読者の広場

寅年の感懐

松本三良

年が明けますと、改まっていろいろ思うことが多い中に、今年はとりわけ教育改革ということが大きく浮かび上ります。秋頃までには臨教審の答申が出されますが、先年の土光行革答申のように、国民の圧倒的な支持が得られるようなものになることを切望いたします。

二十一世紀の国民像を見据えた教育改革で一番大きな問題は、心の教育ではないでしょうか。コンピューターやロボットが、人間の仕事の大部分を代行してくれる時代において、単に頭がいい、仕事を上手にするというだけでは高い評価を得ることはできません。創造性に富み、豊かな人間性、心を備えた人が求められるのではないでしょうか。

この心の教育こそ、現在最も欠けているもの、正さねばならぬものであります。心の成長によって国際的なリーダーシップを取れるような人を育てねばなりません。そのためには一世紀ぐらいかかるかも知れません。しかし、その種はいま蒔いておかねばなりません。その種はまさに教育勅語だと思います。

「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭倹己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ学ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓発シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ広メ・・」。ことに掲げられた徳目、目指している人間像こそ、現在の教育がなおざりにして来たものであり、経済大国日本 ― 精神大国日本人が具備しなければならぬものであると思うのです。

偏差値に目の色を変え、「一億総学習塾」で一流校への進学に浮身をやつしている間に、児童・生徒と教師との信頼関係が全く損なわれ、校内暴力だ、いじめだと、教育界が荒廃してしまっています。この現状は、心の教育に目を向けることを忘れ果てた結果にほかありません。

しかしながら悲観的な現状の中で、ひとつだけ心強いと思いましたのは、五十九年十一月に文部省の統計数理研究所が発表した「国民性の研究」です。昭和二十八年から五年ごとに実施されているアンケート調査なのですが、「あなたにとって一番大切な道徳は何ですか」という問いに対して、七三%が親孝行をあげ、その次が恩返しの五〇%となっています。

しかも調査のたびに親孝行のパーセンテージが増えています。若い人たちが意外に、そういう考えを持ち出しているのです。これこそ、心の教育の可能性を確信させる萌芽であると思うのです。

心の教育の一環として、わが社では毎年正月の鏡開きの日に武道大会を催しております。今年も一月九日、例年どおり機動隊と名古屋製鉄所から柔・剣道選手のご参加を得て開催しました。神前での拝礼に始まり、柔剣道に分れて、厳しい寒さの中、平素鍛えに鍛えた体と技とを、裂帛の気合とともに相手にたたきつける迫力、試合前後の洗練された礼儀作法、これを見ていますと、本当に新年を迎えたなあという思いがひしひしと感じられ、身体の中から喜びが湧いて来ます。

機動隊と名古屋製鉄所との対抗試合では、ここ数年は名古屋製鉄所の完敗に終っていますので、私が冒頭の挨拶の中で、今年あたりは名古屋製鉄所の雪辱が見られるのでは、と軽い冗談を言ったせいでもありますまいが、何と剣道では二勝三引分で名古屋製鉄所が勝ちました。大会後の懇親会はこの話で持切りで、中には私の挨拶を受けて機動隊が手加減したのかなあとの軽口まで飛び出す和気藹々ぶりでした。

今後とも武道大会を通じて、機動隊と名古屋製鉄所との交流を積み重ねて行きたいと思います。また、それによってわが社員の心の教育にも一層強い弾みが加わるのだと新年の感懐を深くした次第でした。

機動隊の皆さんの益々の御活躍御発展を祈ります。

荒野の花・エリカ

麻生博

毎年冬になると、花屋の店先にエリカが置かれる。三十糎ほどの幹に、小さな紫紅色の花をいっぱいつけた小振りな鉢植である。ある年一鉢買ったが、一ケ月もすると花が散ってしまって、思い出のエリカと外観似ていても、全く異種の縁遠いものであった。それでも冬が来ると、店先のエリカに釣られになる。

私は二十年近く前、ドイツに住み、自動車を馳って欧州各地を馳けめぐる忙しい日々を送っている中に、オランダが一番好きな国になった。オランダは、その国土の大半が海より低く、運河と道路が交錯する所では船が自動車の上を通る程である。湿地帯だけに清潔なことこの上もなく、国土は整理され、整備管理が行き届いている。主婦が清浄好きなのが定評で、曇った窓ガラスなぞ探してもない。その上、子供を可愛いがる、喜々と群り遊んでいる子供の姿は他の国では見られない。

ある時、行きずりに民家に一泊したことがある。見ず知らずの異邦人に調度品をそのままにしてある寝室を提供してくれた。朝食もコンチネンタル（大陸風）の粗末なものでなく、食パンの上に厚いハムとチーズ・目玉焼きがのせてあった。コーヒーも呑み放題である。豊かな温かい国である。

ドイツとの国境近くにゴッホ・ハウスがあり、アントワープはルーベンス、アムステルダムはレンブランドが夫々活躍した所で、近代絵画の夜明けの担い手でもある。日本人の好む低地々帯の風車、チューリップ畑は、オランダを飾る一風景に過ぎない。

私がエリカに出会ったのも、このオランダの高地、所謂ハイデ（HEIDE）、訳すれば荒野とも荒地と云われれる所である。ハイデ一面が赤い蓮華草に覆われた様に、遥か彼方まで紫紅色で満ち満ちていた。故郷の赤い蓮華草の野原を見るようで、段と望郷の念にかられた。同行のドイツ人に聞くとハイデ・クラウト（HEIDE KRAUT 荒野の櫨木花）、又の名をエリカ（ERIKA）というと教えられた。

高山植物の様に乾いていて、水のない花瓶に入れ、居間に飾っておいても、数年の間ドライフラワーのようにその美しい姿を変えなかった。砂地の荒野でこのような可憐な美しい色で、しかも逞しい生命力をもつ雑草に感激した。生れた次男に英利と名付けたのも、エリカにあやかりたい思いからである。

このハイデでは、更に強烈な思い出がある。エリカの満ち満ちた原野で散開し、ほふくし、突撃を繰り返す兵士達の姿を見た時である。その後もしばしば汗にまみれ、泥だらけの兵隊の訓練を見た。ベルギーでも然りだ。第一次・第二次大戦で数日で占領されたような小国で、なお泥まみれの訓練が繰り返されているのである。永世中立国のスイスでも国民皆兵で、徴兵制が敷かれ、各家毎に実弾と小銃が備えられていると聞いている。国を護るという素朴な国民感情の発露を見た思いがする。

日本では、政治家マスコミの間で一%枠とか、防衛か福祉かとか防衛論議が盛んである。私はこうした小国の防衛努力を見るにつけ、防衛の原点、国民の一人一人が「国を護る、国を愛する」という素朴な感情の堀り越しが、建前論議より一層大切であるように思えてならない。

自分の選んだ道

新潟市東中野山　畑山昭治

長男の龍治が生れたところは、新潟市から約三十キロほど離れた城下町、新発田市です。赤穂義士の一人、堀部安兵衛の生誕地としても知られ、毎年十二月十四日には義士祭が催されます。今も美しい堀と石垣は昔のままの姿で保存され、城も復元されています。盂蘭盆には、毎年、家族そろって先祖の墓参りに訪れています。

龍治が二歳半のころ、新潟市の海岸にほど近い有明台に引越しました。夏は毎日のように海水浴に興じ、白砂青松の四季の海に親しんだものです。とりわけ、秋の夕暮れの真赤な夕陽が、はるか佐渡の山向こうに沈もうとしている光景は「海は荒海、向こうは佐渡よ。すずめ鳴け鳴け、もう日は暮れた。みんな呼べ呼べ、お星さま出たぞ」という、北原白秋の詩情の世界そのものでした。

近くには悠久の大河、信濃川が流れ、よく初夏の川辺で網を持ち、小魚やざりがにをすくったり、一日中、昆虫採集に熱中していた幼いころの姿が、今も昨日のことのように想い浮かびます。

五歳のころ、忘れられない出来事である新潟地震が起こりました。あれは新潟国体が終わり、ほっとした直後の、六月十六日の昼過ぎのことです。突然襲ってきた自然の猛威に、道路・線路は、ずたずたに切断され、橋は崩れ落ち、建物は至る所で倒壊し、電気・水道・ガスは止まり、人々は右往左往するばかりの悲惨な有様でしたが、やがて猛然と復興に立ちあがり、現在は、その傷跡さえも見当りません。これも、全国から寄せられた温かい救いの手があったからだと思います。

八歳の春、飯豊・五頭連山と、越後平野が一望に見渡せる新潟市内の東中野山へ引越して少年期を送り、高校卒業後、進学のため親元を離れて上京して行きました。

龍治は、自分の選んだ道を進むことが出来、幸せだと思います。苦しい時は、幼少年期を育んでくれた美しい故郷と人情厚い人々を想い起こし、耐えぬいてください。そして、心の底から美しい日本を愛し、使命を遂行して下さい。（警視庁四機・畑山龍治中隊員の父親）

寄付金

豊国興産㈱・スカイコート㈱より三月四日付で計三十万円のご寄付がありました。当励ます会の運営に有効に活用させて頂くと共に厚くお礼申しあげます。

警視庁・治安警備合同訓練

燃える若い命
栄光の機動隊

鈴木實
小川運輸㈱
東鋼業㈱
日誠総業㈱
津田鋼材㈱
山陽特殊製鋼㈱
杉尾榮俊
高周波熱錬㈱
西戸榮一
姫田清美
橋本尚吾
宮崎精鋼㈱
松田鉄鋼㈱
田島鋼材㈱
豊田通商㈱
広島シャーリング工業㈱
三和鉄構建設㈱
自見産業㈱
飯田正雄
藤田金属㈱
金森藤平商事㈱

はげまし

発行所
社団法人 機動隊員等を励ます会
東京都中央区八重洲2-4-14
〒104 ミツヤビル3階
発行人 鈴木 實
TEL 03(272)2050
購読料 年間1200円(送料共)
(但し会費の中には購読料を含む)

警察と国民結ぶかけ橋

北海道支部総会

警察と国民を結ぶかけ橋となっているのが機動隊員等を励ます会であるが、組織も社団法人として東京本部と全国で八つの支部を数えている。それぞれが年一度の総会で、励ましの精神をその都度かみしめているが、最北部の北海道支部の昭和六十年度支部総会および懇親会が三月十二日十七時三十分から札幌市パークホテルで機動隊員等多数を招いて盛大に開かれた。

励ます会・小原信二北海道支部長の開会挨拶で始まり、横路孝弘・北海道知事、板垣武四・札幌市長がそれぞれ来賓として「機動隊の苦労をねぎらうと共に励ます会の一段の発展を」と祝辞を述べ、山田忠孝・北海道警察本部長は「さらに精進して治安維持に万全の体制をとっていく」と力強く挨拶した。

励ます会・鈴木實理事長が乾杯の音頭をとり余興に移ったが、会員と隊員によるカラオケでの熱唱は会場の空気を盛り上げ、最後は三上正義・北海道警察機動隊長の「期待に応えていく」謝辞と励ます会・広崎直世話人による万歳三唱で閉会した。

懇親会に出席した若い隊員達は異口同音に「こうした励ます会の支援に感謝し、これからも治安一筋に頑張っていく」と顔を紅潮させていた。

〝首都厳戒〟前に大訓練

機動隊員等三千四百人が参加

警察の真価が問われる大きな国家的行事の警備が迫ってきた。天皇御在位60年式典、東京サミットなど警備の正念場である。いささかのミスも許されない重防警備を前にして、警視庁は3月中旬、機動隊員等3千4百人が参加した大規模な警備合同訓練をした。励ます会としては、揺るぎない警備態勢の確立によって、任務が完全に遂行できるよう励ますばかりである。実戦さながらの訓練は頼もしい限りである。

今月の言葉

サミットを前にして

国土が狭く資源に恵まれず人口過剰な我國は、高度の工業生産と貿易に頼る以外に世界の中で生存を続ける道はない。しかし昨今の國際経済不況の中で、我國のみが先進國・途上國を問わず、年間五百億ドル以上の貿易黒字で國際金融市場にも大きく進出して居ることは、世界の中で我國を孤立させかねない情況に立ち至って居る。なかでも貿易摩擦は米國に対し最も著しく向国議会の絶えざる保護主義立法の誘因となる他、防衛問題とも絡み両國関係に暗い影を落して居る。EC諸國に対しても紛議を構えて居るが、我國に取っては近隣の中國・韓國並びにフィリピンを初めとするアセアン諸國の方が重要である。即ちアジア諸國の経済安定が累積債務・安全保障の両面からも望ましいからである。

この問題の解決策として、第一に望まれて来たのは為替レートの是正であったが、昨秋以来急激な変動で円は三〇%も切上った。しかしその変化が急激過ぎて輸出依存構造の我國産業は早急な対応が難しく、深刻な苦境に追い込まれて居るにかかわらず、短期間に輸出の減少は期待出来ない。又、円高で原燃料や消費材の輸入が促進されるとしても、現に原油は暴落し、消費材は需要と流通機構に問題があり余り期待は出来ない。

第二に内需の振興策であるが、行革の建前上財政支出に依る公共投資は増加出来ないので、金融緩和と民間活力のみに頼ると云う方策は早期実現が難しく、多少の減税に依り可処分所得を増加し消費を促すとしても、國民の貯蓄性向に変化はなく、財源の捻出に問題は残る。従って行革を一時停止し、然るべき建設投資等を断行する強力的財政が望まれる。

第三に外貨を単に金利稼ぎのみを目的として海外で運用するよりも、我國企業自体が尚一層海外に進出し、その國の雇用と需要の創出に貢献することが望ましい。その際、我國の優れた技術や管理手法に依り経営することは当然と思われるが、将来は開放された多國籍企業として進出國に同化を図って行くべきであろう。

第四の対策は市場開放の断行である。米麦以外の農林産品其の他完全自由化に踏み切る等、小出しの政策を排し非関税障壁等陰湿な官僚統制を撤廃すべきである。貿易自由化を実践して輸入を増加すると共に、理論的には外國の凡ての掣肘を排除し得るのである。もとより我國は大きな試練に直面するが、これこそ勇気を持って克服すべきことである。

第五に経済摩擦は文化摩擦とも云われる。敗戦後四〇年の歴史を経ても、我々は國際社会で事ある毎に極めて特殊な人種として取扱われる。我國の政官財界が「日本株式会社」を組織し、模倣と重労働で世界を侵略するが如く未だに誤解され批難される状態では、将来の発展は覚束ない。由来我々の正義観は多分に主観的である。謙虚に己を知り彼の立場を理解して忍耐強く啓蒙を続けて行く努力が必要である。また如何に財政不如意でも開発援助資金（ODA）國際交流基金の支出は強化して行かねばならない。青年海外協力は二〇周年を迎え大きな効果を収めたが、これも拡大が望ましい。科学医学の分野でも芸術文化の領域でも國際交流に貢献し、我々のアイデンティティーも主張して行くべきである。

さて、我が機動隊員諸君が不動の警備体制を準備しつつあるサミットが来月東京で開催される。我國のおかれた立場は前述の通りで参加国の集中攻撃の矢面に立たされる事が予想される。たとえ短いサミットが無事終ったとしても問題の解決は容易なことではなく、各國の保護貿易傾向は、我國の将来を脅威し続けるであろう。従って政治に携わる人々の勇断実行を切に期待するものである。

（滋岡長平）

お知らせ

当励ます会の東京本部総会と中国支部総会が下記の通り開催されます。会員各位のご参会お待ちしております。

励ます会六十一年度通常総会＝六月十九日（木）十五時から東京半蔵門会館にて。

中国支部総会＝六月十一日（水）十七時三十分から広島県市社会福祉会館にて。

私の経験したサミット警備

全力で任務全う

警視庁機動隊

第十二回主要国首脳会議が間近に迫った。昭和五十四年六月の東京サミットに続いて、東京での開催は第二回目である。各種警備事象の中でもサミット警備は最大級であり、日本の警察の威信をかけた大警備ともいわれるだけに、失敗は絶対に許されない。

機動隊はこの重防警備へ向けてそれぞれが気力・体力・技術の向上をはかり、訓練を反復実施してきた。少しのミスも出さずと緊張は高まるばかりだが、バイロンがいうように「最高の予言者は過去である」。ここで七年前のサミット警備を経験した隊員に登場して貰った。隊員のご健闘を祈念してやまない。

優しかった先輩

一機　柳下　敏彦

サミット警備を間近に控え、次第に緊張感が高まりつつあるが、サミット警備といえば、前回五十四年の東京サミットが思い出される。

私にとって、もっとも思い出の深いものは同じ第一機動隊員として従事した中核派の代々木公園B地区から芝二三号地までのデモ警備である。この時は、既に警備も終盤を迎え、連日、不眠不休のため心身共に疲労困憊の状態であったと記憶している。

当時は、新入隊員として、水筒、消火器、濡れ毛布を腰にぶら下げ、大楯を持ち三十数度の炎天下をふらふらになりながら、心死になって先輩について行ったのがこの警備であった。

我が第二中隊は、デモコースの主要交差点の「まな板」部隊であり、五輪橋から神宮前、表参道、青山五丁目、西麻布、六本木、新一の橋、赤羽橋を左折して芝二三号地までの、実に長い距離を追い上げては配備、追い上げては配備の繰り返しであった。

デモ出発から我々の駆け足転進が始まり、デモコースも任務もよく理解できない私は、「何故こんなに急いで走らなくてはならないのだろう」とか、「このデモはどこまで行けば終るんだろう」などとつまらない事を考えていたものである。

しかし、我々の努力もむなしく、解散地にたどりついた時、既にデモ先頭は解散地に到着しており、追いつくことができなかった。全員が真赤な顔、全身ずぶ濡れで他の部隊の後方についた時、新隊員ながらも「もう少しだったのに悔しい」と思ったことは今でも忘れられない。

それから我々は、増上寺の脇で待機となった。坂を登る足は重かったが、土の上に座った時の快感は最高だった。全員が土の上に座り、組長から「柳下、水筒を出せ」と言われ、私がポケットからそれを出すと、今度は「お前がここまで持ってきたんだ。お前から飲んでみんなにまわしてくれ」とやさしい言葉がとんできた。私は「こんなにうまい水が飲めるなんて……。自分も先輩になったら後輩にこんな言葉をかけてやろう。サミット警備万歳」と心の中で叫びながら、生ぬるい水を飲んだ。

暑さで、防護衣に包まれた全身から「あせも」が赤くブツブツに吹出て、終いには赤鬼のごとくなったのもサミット警備の良き思い出の一つである。目前に迫ったサミット警備も、前回以上に厳しいものとなるであろうが、汗まみれの警備のあとのすがすがしい充実感を求めて、全力を尽して頑張っていきたい。

（分隊長（当時一機中隊員））

テキスト片手に

二機　工藤　純夫

昭和五十四年六月、東京で初めての主要国首脳会議が開かれた。警視庁始まって以来の最大規模の警備であった。私は、幸運にも機動隊員として、サミット警備に従事することができた。

五十三年四月に、第二機動隊に着隊してから一年二か月目の事であった。私の属する第一中隊は、サミット粉砕を呼号する過激派グループなどの情報のある中で、各国首脳要人の出入りの多い米国大使館の警備に従事することになった。

治安の情勢にあわせて早くから厳戒態勢が敷かれることになり、当番、非番の二交替制による不眠不休の厳しい勤務が始まった。初日から、警視庁最大の警備ということで意気込みだけは大きかったものの、六月とは思えぬ連日三十度を越える暑さと長雨、また、見えざる敵との闘いの中で、一日目から緊張の連続で、果たして最後まで完遂できるか、一抹の不安があった。

このサミット警備を通して自分自身得るものも多かった。当初、地域住民の反応は無関心で冷たい感じを受けたが、日がたつにつれて住民の意識は温かい理解に変わっていくように思えた。われわれに対し「頑張って下さい。御苦労様、体に気をつけて下さい」等の激励の声が寄せられるようになった。

外国人の出入りが多いので、地理指導等数多くの外国人との対応には大変苦心した。高校・大学と英語を学び、ある程度わかるつもりであったが、実際に外国人と話してみるとちんぷんかんぷんで、テキスト片手に身振り手振りで応対したことなどと思い出す。

又、特機隊員がお茶を飲もうとして、鉄製の水筒を蓋をしたままガス台にかけ、爆発して火傷をした珍事など、普段では考えられない事も数多くあり、思い出に残っている。

六月三十日午後一時五十五分、総本から解除命令が伝達された。隊員の間から誰ともなしに「バンザイ！」という歓声が起こった。どの顔にも、サミット警備を無事完了したのだという、安堵と満足感が満ちあふれていた。

私は、満足感もさることながら、最後まで病気もせずに完遂できたことで大きな自信を得た。今回のサミット警備は、前回の体験を生かし、一生懸命頑張るつもりである。

（会計係員（当時二機中隊員））

体力と気力の限界

三機　古賀　敬三

昭和五十四年六月二十八日、二十九日の両日は第五回主要国首脳会議が開催された日である。これに先がけて、英国大使館の常駐警備、カーター米大統領の来日警備。同大統領の明治神宮視察、宮中晩さん会、国立劇場における歌舞伎観賞警備警備。サミットに反対する極左の集会デモ警備、夜中の高速道路対策、国会地区突発対策警備等々、一連の警備に第二機動隊員として従事した。炎天下に当番・非番の区別もない連日連夜、仮眠三時間という、体力と気力の限界に挑んだ厳しい大警備であった。

隊員が警備完遂のため一丸となり、体力消耗の極限ともいえる中でも、先輩は後輩を思いやり、後輩は先輩を立てる。この機動隊の素晴らしい人間関係が、士気を盛り上げ、誰一人愚痴をこぼさず無事乗り切った。あらゆる事象を想定した猛訓練にもへこたれず、限界まで鍛練に邁進したことが、大きな基盤となり、警備を無事果たすことが出来たのではないかと思う。

実に七年ぶりの第二回東京サミット警備である。この七年の間に極左等は研究に研究を重ね、ゲリラ等の作戦を練っているであろう。この警備が、警視庁いや日本警察の名誉と威信をかけたものであることを再認識絶対に裏をかかれることのないようにしなければならない。

幸いなことに現在私は庶務係で勤務している。隊員と接する機会が非常に多い係である。機会あるごとに、自分のサミット体験を踏まえ若い隊員を指導・教養し、来たるべき大警備を、隊員一丸となって乗り切る覚悟である。（庶務係　巡査部長（当時一機中隊員））

全部、やり直し!!

四機　岡　仁蔵

前回のサミット警備は、第六機動隊の技術係巡査部長として従事した。当時を思い起こし、苦労したこと等について述べる。

「全部、やり直し」。これは、当時の我々技術係数名が徹夜でパイプ柵、検問に使う机等の資器材をセットした現場を、隊長が巡視した時の第一声であった。我々は脂汗を流しながら現着した部隊の応援で資器材のセットをやり直した。

事前準備は、第八機動隊に新潟から陸送された新品のアングルを受領することから始まった。続いて技術係倉庫に何本もある通称エリザベスロープ（青色、五十メートルから二百メートル）をいつでも使えるように、「より」を戻す作業と巻取る作業を行った。ロープの端から素手で「より」を戻していくのは、腕が疲れ「より」が戻ったと思ってもまだ残っている等、これには思わぬ時間を要した。

パイプ柵については、自分の背丈位まで積みあげ、いつでも使用できるように整頓した。また、「沿道配置における捕捉要領」は、自隊をはじめ、方機部隊の訓練指導を行った。方機隊員からは、捕捉部位や制圧要領等について真剣な質問があり、説明をしても自説を通して頑張る者もいるなど説得理解させるのに苦労した。

いよいよ米国カーター大統領の来日警備。我々は到着前日の夕方から資器材を積み込み、担当区である羽田空港へ出発した。

国内線発着ロビーにパイプ柵・机等を搬入し、発着客の誘導路や検問場所のセットを徹夜で行った。軍手にはパイプ柵の真新しい銀粉がつき体中汗まみれ、腰も痛くなるなか、夜が白々と明けてきた。「よし、終り」、技術主任の号令が出るとその場に座り込んだ。皆の顔や手は疲労と汗で黒ずんでいたが明るい表情だった。緊張のためか眠気もなく目が冴えている我々は、部隊の到着を待った。

隊長が現着し、前記の開口一番、「全部、やり直し」の叱咤が飛んだ。我々は、奮起し資器材のセットをやり直した。

六月二十四日午後五時五十五分、厳戒態勢の中、米国大統領専用機「エアー・フォース・ワン」が無事事着陸、スポットインした。警備が本格的になると、我々は資器材のセット及び撤収作業に明け暮れた。緊張と苦労の警備が終り、慰労会の席でいただいた酒の味は格別であった。

あの時から警備環境や情勢が大きく変わった。我が国で、再び行われるサミット警備には、経験を生かし本腰を入れて頑張っていきたい。（操車係主任（当時六機技術係巡査部長））

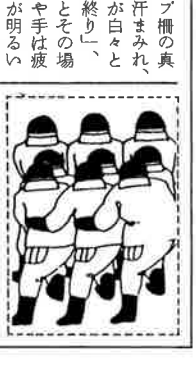
非番の朝

五機　外谷地友幸

われわれ第五機動隊は、光栄にも東京サミット会議の本会場である迎賓館の警備についた。約一ケ月にわたる迎賓館での当番・非番の繰り返し、夜間は寝台車もなく、砂利の上に毛布を敷いて仮眠し、立番していても自然と目がとじてしまうほどの睡眠不足、正直いって厳しいものであった。

その厳しさも、迎賓館を守っている責任感と誇りによってもちこたえていたように思える。そうしたうちに、六月八日の早朝、迎賓館の上空もうっすらと明るくなった頃、正門前の若葉東公園で火炎車炎上事件が発生したのである。

この時の悔しさは今でも忘れられない。公園の立木に火炎車が激突、白煙をあげて炎上してしまったのである。「これだけ厳しい警戒をしていて」という思いと、過激派にやられてしまった悔しさ、サミット会議を目前にひかえて、この警備を完遂できるのだろうかという不安と緊張で一杯であった。そしてこの警備は満点が零点しかない。失敗の許されない警備である、と再確認した貴重な非番の朝でもあったことを覚えている。



しかし、そんなサミット警備も終ってしまうと、良き思い出となってくる。あの最後の日、代表一行の飛行機が羽田を飛び立ったという無線を聞き、そして解除命令。そのとたんに「ホッ」としたと同時に、任務を完遂した満足感と長い緊張からの解放感はなんとも言えない思いであった。そして分隊での打ち上げの時飲んだビールのうまさは、忘れられない。

あれから七年、二回目のサミット警備を経験する私だが、あの時の経験を生かして、先頭に立ってこの警備を完遂しなければならない責任を痛感する。

（操車係員（当時五機中隊員））

サミット雑談

六機　田中　忠

前回のサミット期間中、私が二機隊員として担当したのは、各国首脳の御道筋である首都高速道路の警備であった。

高速道路といえば、その特殊性から、即、重大事故につながる危険があるばかりでなく、守備範囲が広いため不法行為企図者にとっては、攻撃の絶好の場所に挙げられる。

これらの悪条件が多い地区を担当し、アメリカ大統領来日に伴う高速警備を初陣とし、各国首脳をはじめVIPが勢ぞろいしてからは、連日に亘る「規制」「解除」の繰り返しがつづいた。この警備では、高速道路での不穏な事案を特に考慮し、これを防止するため各国の首脳が通過する際には、順行だけでなく、逆行車線も完全にクリアーにするといった異例の規制を

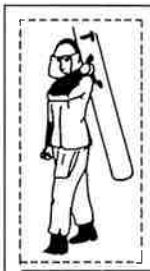
とることになった。

これらを完璧に行うだけでも大変なものであるうえ、単独行動をとる要人、日程の大幅な変更といったハプニングの多い警備ではあったが、これといった問題もなくスムーズに規制が行われた。その裏には、随分と胆をつぶした場面もあった。カーター大統領一家が当初予定にない行動に出たときもそうである。

六本木の焼き鳥屋で夕食をとるといった情報から、急きょ予定にないコースの規制命令が入り、緊急転進の結果、間一髪の規制や、一つの規制から次の規制までわずか数分といった、綱渡り的な規制も数多くあり、そのたびにひやりとしたことは強く印象に残っている。一分一秒が勝負といった緊張の連続で、しかも、炎天下ぼうっとする頭で、イヤホンを通しての情報一つ一つに全神経を傾注し、耽々と目の前を通過する車両の流れを追う。絶対に失敗は許されない。

こうした厳しい警備も、カナダ首相搭乗機の離陸をもって無事終了した。あとに残ったものは、「何もなかった」といった安堵感と「何もさせなかった」という満足感であった。

サミット警備では、多くのエピソードを生んだ。その一つに、幽霊の出る車両といった怪奇じみた話が隊員の間で広まったこともある。これは、遊撃車両のボディに女性の顔が浮き出すといった話しである。真偽のほどは定かではないが、警備中、高速道路の出口に停車していた部隊車両の後方から、アベックの乗る車が追突し、女性の顔が㌍の分厚い鉄板に貼り付き、どうやらその顔が夜な夜な浮かび上がるという話しである。今となってみれば、眉つば物の感もするが、あんな話こんな話題を数多く、私達に残した思い出の多いサミット警備であった。（分隊長（当時二機中隊員））



テント村出現

七機　上田　正則

私は、前回のサミット警備に機動隊員の一人として従事することができ大変貴重な体験をした。空前の大警備、警視庁創設以来かってない大警備と、どの新聞の見出しを見ても最大級の形容を用いて表現していた。この警備の重要性の報道そのままに、隊員にもビーンと張りつめたものが感じられた。誰もがこの手で大警備を乗り切ってやるという強い信念を持っているのがわかった。

我々がかって経験したことのない、精神的にも肉体的にも厳しい勤務であったが、全員一丸となってこの警備をやりとげた後の満足感というものは、何ものにもかえることの出来ない貴重な宝物として、以後の仕事に生き続けて来ている。

厳しく辛い勤務ではあったが、時にはブッと笑みの出ることもあった。私の隊はホテル・ニューオータニの警備を担当したが、部隊の待機場所は、豪華なシャンデリアが燦然と輝く一室ではなく、普段極左各派の集会が行われ、ノボリ・ヘルメットが目立つ清水谷公園内であった。この時ばかりは、公園内一面に目を見張るようなテント村が出現し、通る人の目を驚かせたものであった。

今回、二回目のサミット警備に従事できることは、私にとってこの上無い喜びであるが同時に、近時益々テロ・ゲリラの手段が悪質かつ巧妙化していることを考えると、今回のサミット警備は前回以上の厳しさになることと思う。正しく史上空前の大警備となることは必至であろう。微力ではあるが、この大警備に際し、警備係の一員として全力を尽くし、任務を全うする決意である。（警備係　巡査部長（当時四機中隊員））

都民の協力

八機　森田　悟

昭和五十四年四月二十日に入隊してまもなくの大警備が主要国首脳会議警備であった。入隊して二ケ月という新隊員ではあったが、無事任務を完遂できた充実感と喜びをはっきり覚えている。第八機動隊は、特命高速道路警備とアメリカ大使館警備に当たった。

私は第四中隊員として、アメリカ大使館の直近外周を担当した。任務は、カーター米大統領及びその一行の身辺の絶対安全と大使館の防護であった。新隊員である私は、重要防護対象の警備は初めてであったので、先輩隊員から、いつどこからどのような形態で攻撃してくるかわからない見えざる敵と戦うのが重防警備の任務であると教えられたが、とまどいと不安が先に立ち、緊張の毎日だったように記憶している。

まして同一箇所同一勤務ということで、正福寺裏固定を期間中担当した。勤務は立番、待機、そして大統領の出入時の増強配備、一斉検索と、待機の時間がなく連続四時間位の立番勤務が続いた時もあった。

他の部隊では、過労のため立番中に倒れた者もいたほど厳しい勤務であった。しかし、日を経るに従って連日の炎天下、あるいは熱帯夜で懸命になって努力している各勤務員の姿に、住民の意識は驚きと感謝に変わり、数日後には住民から、「お巡りさんご苦労様、頑張って下さい」等の激励の言葉をかけられるようになった。地域住民の協力を得るための基本が何であるかを改めて知らされたように思う。

サミット警備は数多くの貴重な教訓を残した充実した警備であった。

私にとって機動隊生活中二度目のサミット警備が待ちかまえている。前回以上の厳しい情勢下で警備を実施しなければならない。それだけに第八機動隊の古参隊員として、また、サミット警備経験者として、今回のサミット警備も無事完遂し、充実感がもてるように努力して行きたい。（警備係員（当時八機中隊員））

警備のプロとして

九機　川村　正宏

前回の主要国首脳会議で、私、警備部警護課兼務を任命され、車列警護のため、西ドイツ・シュミット首相の警護警備に当たった。

何度かVIPの警護警備を経験したことがあり、重要性についてはある程度の知識はあった。しかし、警護課長の事前教養によって、その警護の難しさと重要性を再認識させられた。訓練はあらゆる想定のもと、早朝、夜間を問わず、厳しい訓練が実施されたが、音をあげるものは一人もいなかった。本番さながらの訓練を数多く実施するに従って、車列警護員相互間の息もぴったり合い、どんな事態にも動揺することなく即応体制がとれるまでになった。

サミットの開催日が刻一刻と迫るにつれ、いやがうえにも気持の高ぶりは隠しようがなく、六月二十七日、いよいよシュミット首相の羽田空港到着を待つこととなった。特別機のタラップから、シュミット首相が手をあげながら降りる姿に接したとき、峻厳そのものの感を深くし、やはり想像していたとおり、偉大な指導者だという認識が脳裏に焼きついた。

翌二十八日、迎賓館でのサミット会議に際しては、いよいよ本番だという実感があり、自分自身、送迎途中の警護には格段の発着時間は二分間隔であることと、外務省の定めた順序で就任順、閣僚は国のアルファベット順に到着・出発順序となった。このため我々にとっては、一台の無線機、一台の携帯受令機が「命の綱」となった。

時間を考え、先行白バイと連絡をとり、「白バイさん、七十キロぐらいで願います」と指示する。時には、百キロぐらいまで速度を上げることもあった。また、行事変更もあり、すべて無線機・受令機が頼りであった。もし受令機・無線機が聞こえなくなったらどうしようかと予備電池の確認、電源電圧の点検など万全には万全を期して当たった。結果的には、なんの事故もなく所期の通信機能を確保することができた。

六月二十九日、車列を組み羽田空港まで最後の警備に従事する。一行が特別機で離日したとき、ほっとすると同時に、そのすごく長い三日間のことを振り返った。わずか三日間の警護ではあったが、一人の脱落者も事故もなく、警護を無事に終えることができたのは、完璧な事前準備と、各隊員がそれぞれの持場で真剣に職務に取り組んだ結果によるものと痛感した。（教務係員（当時九機中隊員））

一服の清涼剤

特車　鈴木　英夫

長時間の立番で、足の指がめり込む程むくみ、毎日毎日が睡眠不足の連続。一言で言い表わすと、これが私のサミット警備感である。

先進国首脳が一堂に会して開催された東京サミット。当時は、過剰警備云々と批判をあびたが、直接従事した私にとって、自分の任務を全うできた満足感と、警備終了後、国島総監の「自分の気持ちとしては、百点以上の出来だと思っている」の二言が、今でも鮮明に記憶に残っている。その苛酷な警備の中でのユーク な体験は、ダンゴ虫、ガマ蛙にまつわる思い出である。

ダンゴ虫の思い出

サミット警備の前段階として、私の所属していた第七機動隊第三中隊は、たびたび重防対象の警戒警備に従事した。その日は、国会の防護が任務で、バス一台を正門にセットし、警戒に当たった。

車内には、各種の資料が満載され、とても一個小隊が仮眠をとれる状態ではなかった。そこで一計を構し、数人が正門脇の植込みの中で仮眠をとる事にした。私達有志9数名は、くもの巣を払いながら内側の木の密集している所に新聞紙を敷き、その上に毛布を一枚重ね、仮眠体制に入った。

始めは蚊が気になり、眠れなかったが、疲労の為か数分で夢心地になり、朝を迎えた。すると、寝ていた自分の回りに土の粒が数十個散らばっていたので「おかしいな」と思いながら手で払うと、それは丸くなったダンゴ虫であった。こちらも驚いたが、むこうも驚いたらしく、スタコラ我が家へと帰っていった。

ガマ蛙の思い出

迎賓館の常駐警備での事、東京サミットの会議場である迎賓館は、東宮御所と隣接している。当日の私の担当区は、その接地点であった。目の前が皇族の御所であり、夜ともなれば辺り一面まっ暗で鼻をつままれてもわからない状態であった。

闇の中で耳をすまし目を凝らして警戒していると、突然「ガサガサ」と草を踏み分けるような足音が聞こえてきた。「スワ」不審者かと手に持っていた警杖を強く握りしめ、音のする方に目を向けると、数メートル先の草が動いているのを発見した。

すると、三十センチはあろうかと思われる大ガマ蛙がノシノシと歩いているではないか。私は、この「不審者」に驚くとともに、何やら親しみすら感じた。

これらの事は、私にとって厳しい一連の警備の中での一服の清涼剤となった。

サミット警備を再び経験することになるが「やらなければならない事は、全力でやり通す」という信念を、さらに強くしている。（教務係　巡査部長（当時七機中隊員））

北から南から

常陸国『茨城』散遊

茨城県警察本部秘書課

徳川御三家である水戸を県都とする「茨城」、東京から遠く感ずるが、意外やすぐ近くに存在するのである。

上野から常磐線で三十分、阪東太郎の異名を持つ清流利根川を渡ると茨城の地に立つ。この辺は今や首都圏と化し、警視庁警友諸兄もかなりお住いになっている。

更に十五分、県南の中心土浦に至ると、帆引船で有名な霞ケ浦が目前にせまる。ここが科学の頭脳「筑波研究学園都市」の表玄関である。学園都市は、つくば万博エキスポ'85の開催で国内はもちろん世界の注目を集めた。

土浦の北方には、紫峰「筑波山」が浮き上がる。西の富士、東の筑波と並び称され万葉集にも筑波を詠んだ歌が一番多い。また、土浦から霞ケ浦のささ波に身をゆだねて約三十キロ、歌や詩で知られる水郷潮来「あやめ」はあまりにも有名。ある人は、四季折々の汲めども尽きぬ詩情に「日本のベニス」と呼んだ。かっての文豪徳富蘇峰翁は「水郷の美・天下に冠たり」と絶賛した。そのすぐ隣りに鹿島港、石油コンビナート、そして三大神宮の一つで、古くから常陸国の一の宮として尊信される大社「鹿島神宮」がある。

土浦を更に北上すること三十分、県都「水戸」、ここには日本三公園のひとつ偕楽園がある。九代水戸藩主斉昭が「衆と偕に楽しむ」遊息所と定め、十一万平方米に及ぶ敷地には二千二百本の梅林があり、開花時には芳香を放つ。

南崖上には好文亭があり、優雅で高尚な格調の中に迫力を抱かせる。市街地の中心部、警察本部東側には弘道館が静かなたたずまいを見せる。徳川時代に藩内の子弟に「文武不岐」を講じ、「水戸学」振興の原動力となったところ。しかも藩校が完全な形で残っているのも全国的に珍しい。梅の老木が多く偕楽園と並ぶ梅の名所。

「水戸を離れて東へ三里……」磯節で有名な大洗。水戸からバスで三十分、風光明媚な景勝地である。

水戸から更に北上、車窓から日本の原子力発祥の地「東海村」を眺めながら約二十分、工都「日立」に至る。この付近は関東平野も終りになり東に果てしなく続く海岸線、西になだらかな山並を見る。この地区はいたるところ工場、さすが世界の工業都市日立である。

この日立から西に二十キロで奥久慈に至る。八溝山系の美しさは古くから知られ、中央部に日本三名瀑の一つ「袋田の滝」が四段にわたって豪快に落下、のどかな出湯が湯煙を上げる。秋の紅葉はまた一段と素晴らしい。

思いのまま茨城を紹介したが、まだまだ素晴らしい名所旧跡がある。名物「納豆料理、あんこう鍋」に舌鼓を打ちながら、出湯につかり地酒を…。ゆっくりと常陸国「茨城」を散遊するには四泊五日はかかるだろう。

ふるさとの味自慢二つ

愛知県警察本部広報課

ふるさとの味、郷土料理をご紹介する。

鳥料理～名古屋（メニューも味も多彩）

きしめんと並ぶ名古屋の代表的な料理が鳥料理。名古屋で鳥料理といえば、かしわ料理と鶏肉をさすもの。名古屋には、名古屋コーチンといわれる赤茶色羽毛におおわれ、脂肪がたっぷりついたニワトリがおり、この肉がおいしいといわれ食べられていた。煮てよし、焼いてよし、揚げてもよし、もちろん刺し身にしてもよし、好みに応じた食べ方がある。

鍋物は、すき焼き風のとり肉、特産の赤みそで味つけをした味噌鍋など多様だが、伝統的な食べ方は水たき。かしわとともにネギ、シラタキ、シイタケ、シュンギクなどの季節の野菜を煮込み、しょうゆとポン酢にもみじおろしでいただく。

焼き物では、串焼きが一般的

（第4ページへ続く）

読者の広場

水泳日本

滝上俊一

実年に達した私も、機会ある毎にヘルスクラブに通い、健康の保持に努力していますが、特に水泳は、全身運動で非常に良いように思います。健康目的の水泳とは少々異なりますが、昨夏パンハシフィック水泳大会を見に代々木のオリンピックプールに参りましたので、その感想をお話したいと思います。

私共の年代の者は「水泳日本」と云う言葉が懐かしく忘れられないのですが、現在の我国の競泳記録は世界の一流国とあまりにかけ離れているのに驚きました。何故こうなったのか、如何にすれば再び世界の頂点に近づけるのか等々専門的な事は、日本水泳連盟他関係の方々が日夜腐心して居られるでしょうが、レースを直接見ていると、テレビに映らない模様がいくつか目につきました。

先ず外国選手の何人かが、レース後に水から上ると精魂尽き果てた感じでそのまま倒れ込んで居る姿と、割合に平気でサッサと退場していく日本選手との対照的な様子でした。どちらも一生懸命に泳いだ結果とはいいながら、何か少し違うような気がしてなりませんでした。

又、入場して来る時の態度を見て居ると、アメリカの選手などは口笛を吹いていたりしてリラックスしているというか、真面目な日本選手と比較して随分違うなと思いました。国民性の違いから来るものなのか、レースの一瞬にのみ集中する為のテクニックなのか大変興味深く感じました。

身長の点では、外国選手の方が大きくて、同じ距離を泳ぐのに有利な気はしますが、最近の日本選手は大きい人も多く、昔程の身長差は無くなっていると思います。又外国選手の中には日本人並の体格の人も結構良い記録で泳いでいましたので、身長とか体格の点でのハンディは直接記録に関係が少ないと思います。記録を向上させるには、各国の、社会的環境とか選手の家庭や日常生活に至るまで、選手の育成に関連するバックグラウンド全般について研究の必要があるのでしょうか。

素人目で感じた事を述べましたが、関係の方々の努力で、一刻も早く最良の方法を講じて頂きたいものです。昨年は、日本水泳連盟会長にかってのフジヤマのトビウオ古橋広之進氏が就任された折でもあり、日経紙上で同氏の自伝を拝見しました。

〃水泳日本〃の栄光の再び輝く日の近い事を心から祈って居ります。

春、春

高嶋四郎雄

若い人には馴染みがうすいかもしれないが、二十四節気は、大自然の時計の文字のように刻まれた季節の道しるべである。

冬至、小寒、立春、雨水、啓蟄、春分……この文字盤の中で、啓蟄、春分、清明にかけての季節の移り変りが、いちばんはなやかで、心を浮き立たせるときである。

日本の四季は複雑微妙であり、春夏秋冬の季節の移り変りのきめこまかさを日本人は生活実感として熟知している。

春ほど待たれる季節はない。「冬来りなば、春遠からじ」と冬の初めから春が待ち遠しい。立春とは名ばかり、春立つとは暦の上のことで、立春の実感はまだ冬である。本年は特に戦後の降雪量、最高を記録する大雪で、雪害等も多発した。長かった雪国や山国の方々には春の胎動は待ち遠しく、その目覚めは一層感動的であると思われる。

三月ともなると、寒い日があっても、その間にほっとする暖かい日がしだいにふえてくる。風のない日の陽差しは思ったより強くなってくる。家の庭にも沈丁花が咲き、ヒイラギナンテンの花も見られるようになった。

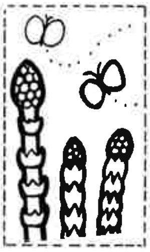
今年は寒さが厳しかったせいか、梅、桜の開花宣言は日本各地とも遅れ、特に梅の季節が長く、一輪ほころび、寒さにふるえ、一輪が咲いてはまた身をすくめるといった調子である。

春は人の心もなごみ、水はぬるみ、山河もやさしさを表わしてくるが、この春は歩みが遅かった。「奈良二月堂のお水取りがすむまでは寒い」、「暑さ寒さも彼岸まで」とか伝えられ、やはり春の到来は春分頃で、春分になっても未だ寒さが残っている。

東京の平均気温で春彼岸は約十度、秋彼岸は約二十一度で十度余り温度が低いそうである。この稿が出る頃は本格的な春到来だろう。春は入・進学や就職、結婚、そして行楽シーズンとなり、何かと多忙な時期である。又、季節の移り目でもある。機動隊員の皆さんも健康に留意され、一層のご活躍を心から祈念します。

雪国の粘り強さで

岩手県大船渡市　佐々木ハヤ



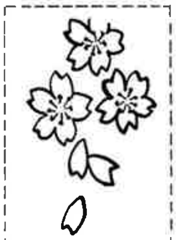
昨年は比較的平穏な一年でした。夏は暖かく米も豊作、冬は雪も少なく良い年となりました。岩手と言えば雪国ということが脳裏に浮かび、田舎のイメージが多分にあると思いますが、最近ではその風潮も変わりつつあります。

東北新幹線の開通で東京へも短時間で行けるようになったのをはじめ、著名人としては前総理大臣の鈴木善幸氏、スポーツではラグビーの新日鉄釜石と全国的にも有名になりつつあります。

私共の住む大船渡は、三陸海岸の漁港で、一年中四季折々の鮮な海の幸が味わえ、海水浴場も多く、観光の名所でもあり、潮の香りが何とも言えない所です。

お国自慢はこのくらいにしまして、息子が警視庁に勤務してから早や三年の歳月が流れました。子供の頃から警察官に憧れていた息子は、どうしてもその夢をあきらめませんでした。が私共は、さてこの子に勤まるかどうかと、正直なところ不安でしたが、本人がどうしてもと言うので私共も決心がつきました。現在機動隊員の一員として勤務できるのも、ひとえに上司・先輩をはじめ同僚の皆様方の普段からの激励・ご指導の賜物と深く心から感謝しております。

これから、犯罪も多く厳しい時代になると思いますが、息子も雪国で鍛えた粘り強さで困難に打ち勝ってもらいたいと思います。最後に、機動隊の皆様のこれからの、益々のご発展とご健勝を心からお祈り申し上げます。（警視庁五機　佐々木勝利中隊員の母親）



（第3ページより続く）

だが、かしわをミンチにしてシイタケの上にのせて焼いた「つみれ」、同じくミンチを棒状にして焼き、タレと生タマゴをつけて食べる「つくね」など、かしわと他の素材とがうまくマッチしている。

このほか、唐揚げは一般の家庭でも楽しめるものであり、さっと湯通しした霜降りといわれる刺し身もあっさりとしておいしくいただけよう。

いな饅頭～海部郡蟹江町（おなかがミソの出世魚）

海部郡一帯は東海の潮来と呼ばれ、愛知の水郷地帯であった。河川や水路は、生活や農作業に重要な役割を果たしていた。

ボラ、フナ、コイの釣り場としてもよく知られており、そんな身近な素材を活かした味覚が「いな饅頭」である。饅頭といってもアンを入れた和菓子ではなく魚料理。

ボラは出世魚の一つ、成長するにつれてハク、オボコ、イナ、ボラ、トドと呼び名が変わる。イナは、体長二十～三十センチ、ちょうど脂の乗ってきた成魚。河口で獲れるためドロ臭さがつきものだが、これを見事に消して調理されている。まずウロコ、エラ、ハラワタを取り、次に中骨を抜く。この時、ハラワタはエラの間からフォークを入れて中骨も同様に特殊な細身の包丁で切り、抜き取るが、外観を損なわないよう高度な熟練が必要とされる。

中骨を抜かれてスマートになったイナには、あらかじめ砂糖とミリンで練り上げ、銀杏、麻の実、柚子、シイタケを加えたミソを、エラの間からつめて、元どおりのふっくらした姿にする。これを弱火でじっくり焼き上げれば出来上がり。一見姿焼風だが、イナの中につめられたミソが饅頭のアンのようになり、ミソの風味がじんわりイナの身にしみている。

はしで身をほぐし、ミソと一緒にほおばると柚子の香りが何ともいえず食欲をそそる。「いな饅頭」は十月から四月までが時期である。こんな料理を一度ご賞味されては、いかがですか。

おおらかな太陽の国

宮崎県警察本部総務課

黒潮がはこぶ暖風と降りそそぐ陽光に恵まれた宮崎は、フェニックスに象徴されるように、まさに太陽と緑の園で、四季の別なく、花々が咲きほこっている。素朴でおおらかな詩〃宮崎の民謡〃にのせ、観光地の一部を紹介しましょう。

○鵜戸さん参りは春三月よ
　参るハラセ
　参るその日が御縁日
　アー　コンキコンキ
　（シャンシャン馬道中唄）

黒潮の花の道、日南海岸ルートの中ほどに、鵜戸神宮がある。ここは、ウガヤフキアエズノミコトが祭神だが、同ミコトの生誕等その由緒から、縁むすび、安産の神として参拝客がたえず、神域は、太平洋に面した大洞窟にあって、これに続く奇岩、怪石に日向灘の荒波がくだけ散るさまは実に壮観である。この鵜戸にお参りするため、嫁を馬にのせ、その道中唄われるのが、この唄である。

○庭の山椒の木　鳴る鈴かけて
　ヨーホイ
　鈴の鳴るときゃ
　出ておじゃれヨー
　（稗搗節）

椎葉の里、奥日向ルートの一つで、フェリーの発着港日向市から奥へ約二時間行ったところに現存する那須家住宅（鶴富屋敷）は上椎葉にあり、その先祖は、源氏の武将那須大八郎の恋人鶴富姫（平家の娘）と伝えている。建物は寝殿造りの典型を示す民家で重要文化財指定。この地に多い苗字の「那須」は源氏、「椎葉」は平家の系譜ともいわれており、現在ロマンの地として話題を集めている。

○こゝの山の刈干しゃ
　すんだよー
　明日は
　田圃で稲刈ろかよー
　（刈干切唄）

神楽の里、高千穂ルートは、延岡市から五ヶ瀬川沿いに遡り神話のふるさと高千穂があり、高天原、天香具山など、天孫降臨ゆかりの地名を残しており、雲海や高千穂峡の断崖は、その神話性を実感する。

また、神話ゆかりの天岩戸神社、天安河原、それに岩戸神社等で奉納される岩戸神楽を見聞するとき、古代の息吹きが身近かに伝わってくる。

そのほか神話の里、西都原ルート、照葉樹林に映える綾ルート、リニヤモーターカーの実験線がある日豊海岸ルート等がある。

正義の楯持つ　精鋭機動隊
大内俊司
スカイコート㈱
㈱周東商会
㈻嘉悦学園
亨和興業㈱
光洋商事㈱
東鋼業㈱
杉尾榮俊
高周波熱錬㈱
高島浩一
西戸榮一
姫田清美
加納保成
東海レベラー鋼業㈱
野口直志
広島シャーリング工業㈱
豊鋼材工業㈱
高橋重廣
藤田金属㈱
北越メタル㈱
北海鋼機㈱

はげまし

発行所
社団法人 機動隊員等を励ます会
東京都中央区八重洲2-4-14
〒104 ミツヤビル3階
発行人 鈴木 實
TEL 03(272)2050
購読料 年間1200円(送料共)
(但し会費の中には購読料を含む)

空前の大警備完遂

過激派のゲリラ封じ込む

天皇ご在位六十年記念式典に続く東京サミット、チャールズ英皇太子ご夫妻来日といった一連の国家的行事が滞りなく終った。去る一月のシェワルナゼ・ソ連外相の来日以来、警視庁にとっては最も長い半年であった。

重要警備の核となった機動隊にも、この数カ月間の厳戒警備中には見せたことのない安堵の笑みが浮かんでいるが、警備当局にとっては万が一にも失敗の許されない正念場を無事乗り切っただけに、その充実感はひとしおである。

東京サミット期間をはさんで首都は厳戒態勢に入った。警視庁は、鎌倉総監を本部長とする最高警備本部を設置、他府県警察機動隊の応援も得て、連日三万人の警察官を動員して、都市のすみずみまで目を光らせた。この間、都心部は五十メートルおきに警官の姿が見られるほどの史上空前の大規模警備となり、その鋭い警備の視線に「過剰警備」の声が一部でなかったわけではない。

それだけに過激派の暴挙が懸念されるところだが、いまや戦後第二のゲリラ高揚期ともいわれる。極左過激派各セクトは、こうした行事に爆弾や発射物まで使用してのゲリラ行動を予告しており、現実に「天皇在位式典粉砕」を叫ぶ過激派は会場に近づけず、静岡や大阪で東海道・山陽新幹線などに、時限発火装置を仕掛けたり、サミットに反対して迎賓館を狙って迫撃弾を発射するなどのゲリラ事件を起こしたものだ。

国民の共感を全く得ないテロやゲリラは絶対許されない。法秩序と治安が犯されるばかりか、国際的な信用をも失ってしまうことになる。いまや国家的行事は平穏に終了した。ここで改めて、崇高な使命に誇りを持ち、苛酷な警備を完遂した隊員達に惜しまぬ拍手を贈りたい。

（上）サミット警備で宿舎と空港を警戒する機動隊員
（中）空から警戒する飛行船　（下）御在位式典に反対するデモ隊の規制

警察協力章　鈴木實理事長に

当励ます会の鈴木實理事長に、去る三月三十一日、警察庁・山田英雄長官から警察協力章が贈られた。

「多年にわたり機動隊員等を励ます会の副理事長及び理事長として、国民に対する理解を深める活動を推進して隊員の士気高揚に多大の貢献をされ、その功労は特に顕著であった」ことに対する表彰である。

これに対して同氏は「協力章は励ます会の会員を代表して受けたものであり、今後とも励ます会をさらに充実強化していく」と語った。

今月の言葉

国益再考

最近の日本を取り巻く政治・経済環境は刻々と厳しくなっている。現に対米貿易黒字は六十年度は五〇〇億ドルに達しようとしているし、対外純資産もかっての植民地時代の大英帝国、第二次世界大戦後のアメリカ（ビックスアメリカーナ）と比肩できるような増加ぶりである。このことは日本の時代の到来ともいえようが、反面、将来方向の選択をまちがうと困難な状況に落ち込む可能性もある訳である。その意味から現在ほど日本の国家としての総合的な利益を考えることが必要な時期はないといえよう。

ところで、先日放送局の世論調査で興味ぶかい質問があった。それは日本が今後重視すべきものは何かということに対し「国内利益優先」が「国際協調重視」を上回ったというものであった。実は私が興味をもったのは数字の多少ではなくて、国内利益と国際協調を対比する図式である。歴史的にみれば日本は遣唐使、安土桃山、明治時代以降の限られた時期以外は基本的には閉鎖社会であったことから、この図式は日本の平均的な思考方法なのであろう。だが政治・経済・文化・自然など全てにわたって国家の相互依存が深まった現在、本当にこの思考方法でよいのであろうか。現にこの円高下、輸入が大宗を占める牛肉・小麦の値段が国内生産家保護のために下がらないような「ひずみ」も露呈し始めている。

一方、日本経済を考える時、わが国は資源の乏しい国であり、工業原料の大部分を輸入に頼らざるを得ないという基本的な問題を有していることを忘れてはならない。今日、諸悪の根源の如くいわれる国際収支の大幅黒字も、第二次世界大戦後日本人が努力し貿易立国として築き上げてきたものであり、又、日本人は兎小屋に住み働き蜂のように働くのであると国際的に非難されているが、これらはいずれもそうしなければ、今日の日本を築きあげられなかったからに他ならない。

ただ海外へ行ってみると、国の経済力としては日本より遙かに低いにもかかわらず立派な道路や公共施設があり、個人的にも立派な家に住み、我々より優雅な生活をしている国民があるが、これらをみる時、日本の国力の底の浅さをつくづく感じるのは事実である。日本も外国から非難される程の大幅黒字国になったのであるから、もっと社会資本の充実等内需の拡大に取り組むべきであるがこれも単なる建設工事の拡大のみでなく、産業構造・社会構造を含めて長い目でみた日本の立場の中で、総合的な施策を追求すべきであろう。

現在、日本に必要なのは国内利益と国際協調のバランスのとれた「国益論」である。

（小原信二）

お知らせ

当励ます会の総会が下記の通り開催されます。ご参会お待ちしています

六十一年度通常総会＝六月十九日（木）十五時から東京半蔵門会館にて。

中国支部総会＝六月十一日（水）十七時三十分から広島市社会福祉会館にて。

寄付金ありがとうございました。

▽上野金属産業㈱五十万円（三月三十一日付）
▽五十鈴鋼材㈱一百万円（四月八日付）
▽匿名氏三十万円（四月二十五日付）

ホープ登場

大阪府警察第一機動隊

私自身、大阪府警の柔道特練に入り、二府二県の大会や近畿管区大会と応援してきたが、少しムードが違う気がして仕方なかった。それもそのはず、我が大阪府警察はこの全国大会で三年連続で警察日本一に輝いているし、どうしても追われる立場になる訳だから、追う立場よりも嫌だろうし、同時にプレッシャーというものもあるだろうと思う。

それに優勝の座を守り続ける事は大変な事だ。全国の警察が打倒大阪府警という気迫で臨み、大阪としては半分勝って当たり前という雰囲気に会場がなっていた。

しかしいざ試合が始まれば、そんな事はいっていられない。先輩のほとんどが優勝の経験があるからだが、そのなかに私と同期でもある岡田先輩が全国大会で初めて出場する。「岡田先にいけよ！」と先輩方の熱い声援が飛び、岡田先輩も期待に応えようと、前に前にと出て、攻めまくり、私の目には決して初めて出場する者とは思えないぐらいの戦いぶりである。

そう簡単に、一本勝ちやポイントを取れるものではない。しかし、岡田先輩は見事我々の期待に応えてくれ、一本勝ちしたのだ。一試合が済むと岡田先輩も何か吹っ切れたのだろうか、二試合目は冷静で自分のペースで試合を運び、あっという間に一本勝ちをし、ポイントゲッター的な存在になってきた。初めての大試合で大阪府警のポイントゲッターという大役をやってのけるのだから、実力だけでなく、集中力や勝負度胸があるのだろう。

いよいよ決勝戦だ。相手は警視庁、今回も同じ顔合わせで、東西の横綱同士の対戦である。我が大阪には岡田先輩という新鋭がいる。いざ試合が始まれば、岡田先輩の前まで内容負けでリードされ、ここで出番まさしくホープ登場である。皆の期待を背負って攻めまくったが、一瞬のすきをつかれ涙をのんだ。

しかし私の目には「俺が取り返す」という気迫のこもった試合だったと思う。岡田先輩の事だから、今年は大きく活躍してくれると思う。

剣道

一中隊　坂口　栄一

私は昨年九月二十四日に交野の警察学校を卒業し、当第一機動隊に赴任して来た。

剣道特練生の第一中三小隊に配属され、小さい頃からの夢でもあった。一生続けられる剣道を、警察剣道で有名な大阪府警で腕を磨ける事は、この上ない喜びであり、剣道特練生として恥ずかしくない人物になるよう決意を新たにして第一機動隊の門をくぐった。

剣道を始めたのが小学校四年生の時だった。剣道を始めるまでは、よく風邪をひいていたが、始めてからは病気ひとつせず今日までもきた。剣道は、身体と心を鍛える為には、とてもいい武道だと思う。

剣道を始める動機は、私の小学生時代に剣道七段の堀先生が、教頭として転勤して来られ、すぐ部活動として発足した。その時剣道というものを、まだ実際に見たことのない私の目に入って来たのが、先生の防具を着装した時のなんとも男らしい姿勢であった。

幼心にそれに憧れ入部したのが、私と剣道との出会いでもあった。入部する時に、厳しい父に絶対途中で弱音を言わず、最後まで頑張るという約束をしたのだが、自分が考えていたより、剣道は、困難なもので、何回かやめたいと思った事もあった。こういう時には、いつも父と私との男と男の約束だと自分に言い聞かせて続けた。

中学校に進むと、試合などの回数も増え、毎日毎日が厳しい練習だったが、勝った時の喜びは、文章では表現出来ない程のものがある。高校は、自分の意志で選び、できれば剣道の盛んな所で、もっと自分を鍛えたいと思い、鹿児島実業高校に進み、大口先生の指導の下、剣道の修業に励んだ。

高校だけではもの足らず、まだまだ剣道の修業をしたいと思い、大学は、関東の亜細亜大学に進み、四年間の学業と共に、剣道をやってきた。小学校から大学までの学生時代の修業を通じて感じたことは、「剣道は人間形成の道である」ということである。

私の抱負としては、物事に問題意識、チャレンジ精神を持ち、何事に対しても工夫研究して、一歩一歩確実に目標に向かって前進していきたいと思っている。

陸上

二中隊　浜田　和利

私と陸上競技（長距離）との付き合いは今年で十六年目を迎える。今までに地球を何周もしている計算になる。よく飽きもせずに走り続けていると思われるかも知れないが、私にとってそれは人生のひとつの生き方であると考える。中学、高校、大学、社会人として成長していく過程のなかで、私の人間性、競技に対する考え方も変わってきた。

大学時代は明と暗の時期だった。自己記録を一秒でも更新したい、先輩に少しでも追いつきたいと一日四回の練習を繰り返した純粋な下級生時代。それとは逆に、関西学生チャンピオンとなり、周囲の人の立場も考えずに自分だけ強かったらそれでいいという利己的な言動や行動をとっていた大学二年生時。しかし、関西連覇を目指したレースの五日前に、不注意で左手首を骨折し、そのお陰と言えば変に聞こえるかも知れないが、マネージャー、同僚、そして後輩等周囲の人々の暖かさを知り、改めて自分を見つめ直す事が出来、部員二百六十人の主将という役をまかされ、競技面でも幾つもの関西学生記録を樹立する事が出来た。自分一人で人生は生きて行けないという教訓を得たのもこの時期であり、人間として、男として、成長が著しかったのが私の大学時代であった。

今、私は大阪府警陸上部の一員である。大学を卒業してから五年間は、一匹狼的存在で競技を続けていた自分だが、これからは、駅伝というチームワークを必要とする競技に出場出来る楽しみで一杯である。警察官という組織の一員としての自覚を持ち、自分の力を信じて自分の為に頑張る事が、大きな意味で全ての為になると思う。

現代は多くの犯罪が起き、我々の出動も多くなってきている。走る事はきつい。一年中休む事が出来ない、一日休むと三日遅れるのである。しかし、つらいと思った事はない。なぜなら自分がまだ未熟だから……。

サッカー

四中隊　古田　利一

昨年十一月一日付けで第四中隊第一小隊、すなわちサッカー小隊に配属された。

摂津高校時代にはサッカー部でプレーしていた。私にとって高校時代のサッカーは、決して華やかなものではなかった。二年生後半になってやっとレギュラーとしてプレーできるようになったが、三年生前半で早くも引退という形になってしまった。

高校で最後までプレーできなかったこともあって、社会人のチームでプレーすることが念願だった。そして、その第一歩を今、ようやく踏み出すことができた。この大阪府警察サッカー部で、自分の納得がいくまでサッカーをしていきたいと思う。そしてそのために、二つの目標を立てた。

一、必ずレギュラーポジションをとる。しかし、現在のプレーでは、到底レギュラーにはなれない。今後は人一倍練習を重ねるしかない。これが、レギュラーになる早道だと考えている。

二、自分のサッカーをする。私の目指すサッカーは、攻撃的なサッカーである。点を取ることだけが攻撃ではないと思っている。一つの局面局面において攻撃的なプレーをすることが、ゲームに勝つポイントであると考える。私のポジションはバックスである。その私にとって攻撃的サッカーとは、相手のフォワードに絶対自由にプレーさせないことだ。このようなプレーができるよう努力する。

以上のことを達成すべく練習に打ち込み必ずやり抜く覚悟である。そして、私の信念である「力必達」という言葉を胸に、これからも頑張っていく。

ウェイトリフティング

三中隊　丸山　卓也

一九七二年のミュンヘンオリンピックにおけるウェイトリフティングが、私とこの競技との衝撃的な出会いだった。当時小学生であった私は、テレビ中継を見て、これこそ真の男のスポーツだと感動して、バーベルをにぎる決意をした。

高校に入学し、あこがれのウェイトリフティング部に在籍した私は、インターハイ優勝を目指し、日夜トレーニングに励んだ。時には、激しい筋肉痛で夜も眠れないことや、厳しい先輩の指導等で幾度も泣き、又やめようかと思ったこともあった。しかし、プラットホームの上でバーベルを握るたび、「ここで投げたらあかん」と、ファイトが沸いてきたものだ。

優勝こそ逃したが、インターハイで入賞した私は、更にウェイトリフティングを極めるべく、大学へ進学することにした。西日本学生選手権を制覇した私は、ウェイトリフティング界の偉大な先輩である、大川克弘さんの誘いを受け、大阪府警の門をたたいたのである。

現在、私はウェイトリフティング競技を通して、一、精神力の向上、一、心の触れ合う人間関係、一、体力の向上、一、社会人（人間）としてのしつけ、を体得する所存である。

今年は、第三中隊の上司、先輩、同僚の理解ある環境の中で、私の最大の目標である全日本選手権大会出場に向かって日々努力精進し、必ずやその目標を達成する覚悟だ。

スナイパーズ

三中隊　松原　斎

機動隊に転勤して三カ月が過ぎた。わずか三カ月という短い期間だが、右も左もわからない新隊員の私にとっては苦しいとの方が多かった。しかし、野球チームのスナイパーズに入れてもらうことができ、隊の生活において大きな支えとなり、特に他の小隊の先輩方と交流を深めることができて大変うれしく、今になって初めて野球をやっていてよかったと思う。

野球歴というほど大袈裟なものではないが、小学校三年生の時に町内のソフトボールチームに入ったのがきっかけであった。その頃、父がこのチームの監督で、兄がレギュラーとして活躍していた。練習がきつく、毎朝五時に起きてランニングやキャッチボールをしていた。五年生の時には捕手としてレギュラーになった。しかし、練習試合では二十五連勝という成績を残したにもかかわらず、大会では準優勝で終わり、府下の大会への夢は消えてしまった。

中学校に入学し、ソフトボールから準硬式野球へと大きく変わった。準硬式は硬式とほとんど変わらない。今まで捕手をやっていたが、それでは満足できなくなり、守備の花形、そして憧れの的である投手をやろうと思った。三年生の時に背番号一を貰った時は非常に感激したにもかかわらず、連敗が続くにつれてその時の感激など忘れてしまった。投手は思っていたほど花形ではなかった。試合に負ければ誰よりもみじめで、格好の悪いポジションだった。中学校の時は、二回勝った記憶があるだけで終わってしまった。

高校になってからも投手をやっていた。試合に負け、腰を痛め、監督から怒られ、散々な目にあい、やけくそになって投げたのが良かったのか、二年生の春の大会で府下ベスト一六まで進出できた。たった一度だけ花を咲かせたのである。野球部を引退してから三年以上キャッチボールすらしたことがなかったのだが、スナイパーズに入れてもらうことができ、もう一度花を咲かそうと思っている。

ラグビー

一中隊　岡本　哲也

私は昨年九月に、第一機動隊一中一小隊に赴任してきた。ラグビーは高校の時から始めて今年で八年目になる。

高校でラグビーを始めた頃は、ルールもよくわからずに先輩達のやる事をただ真似ていただけという感じだったが、二年生の終り頃になってやっとラグビーがおもしろいものだと感じた。

ラグビーは、試合が始まればバレーやバスケットの様に試合を中断して作戦タイムをとるわけにいかず、自分達だけでゲームを組み立てなければならない。相手選手とのぶつかり合いもラグビーならではのものではないだろうか。

三年生の時は全国大会にも出る事ができ思い出深い三年間を送る事ができた。その後大阪商業大学に進学し、幸いにも一年目から試合に出る事ができたが、Bリーグ時代が三年生まで続き、上位のAリーグに昇格する事を目標に頑張ってきた。そして、三年生のシーズンにおいてやっと念願のAリーグ昇格を果たすことができた。

四年生の時は副主将をやらせてもらい、秋期リーグ戦では三勝した。大学の四年間は苦しく、つらい毎日で大変長く感じたが、それも今振り返って見ると短く感じられ、「本当に四年間もやっていたのか」と思う。

現在は大阪府警のラグビー部の一員である。今までの事は、良い思い出として、これからは新たな気持で、社会人としてのラグビー人生を送っていきたい。

ラグビーの事についても、まだまだ未熟な事ばかりなので、今年は私にとって確実に進歩ある年にしたい。高校の先輩、大学の先輩も多いので先輩を見習い、精一杯頑張って行きたいと思っている。

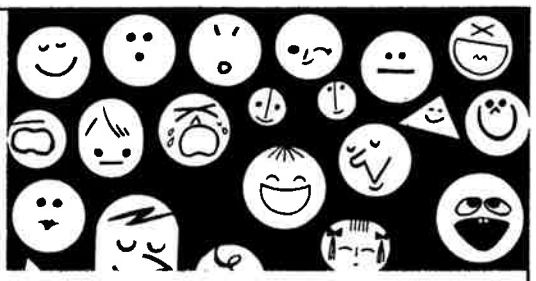
柔道

一中隊　久代　雅之

大阪府警の最終の目標である全国警察柔道大会。いつも明るい先輩も試合当日に近づくにつれて、顔つきも変わってくる。

我が小隊の人気者

大阪府警察第二機動隊



五中隊一小隊　後藤　克樹

我が小隊の人気者と言っても、全員が個性のある面白い人ばかりなので、誰のことを書こうか迷った。結局、私の後輩であり、現在マラソン特練で大いに頑張っている葉狩貴幸君（二二歳）について、書くことにした。

彼は昭和六十年四月に入隊してきた。ちょうど、私達が成田の出動から帰ってきた日だった。入隊した直後は、他の新隊員と同じ様に、不安が一杯で緊張した毎日を過ごしていたようだ。彼が、小隊の人気者になったのは、それから六ケ月程たった頃からだった。

人気者になったのは、小隊旅行の頃。普段はおとなしく真面目な男だが、酒を飲むと、これがかなり性格が変わる。酒を飲むと、怒ったり泣いたりする人がいるが、彼はその反対で、非常に明るくなる。人の歌に合わせて楽器を鳴らしたり踊ったりで、大変賑やかだ。得意な踊りは、テレビでやっている「ザほんち」のおさむちゃん踊りである。これに関しては、二機で、いえ大阪府警で彼の右に出る者はいないだろう。

最近では、普段でもユーモアに富んだことを言うようになり、入隊当初の暗い雰囲気が嘘のようだ。彼には、もともとこういう才能があっただろう。機動隊員と言うことで、おとなしくしていたのだろうか。私は、彼のこの才能をもっともっと引き出してやりたいと思っている。

最後に、私が彼に望むことは、非常に恐い顔をして、たまに一点をじっと睨みつけることと、独り言を言う二つの癖を治してもらいたいということである。

五中隊二小隊　郷田　禎洋

小隊の人気者として、一人の人物を紹介したい。別名「いただきます隊員」とも「あっそうですか隊員」とも呼ばれている。そう、彼の名は、「川田一馬隊員」である。

彼は、今だかって人がくれると言った物を「いいです」と断ったことがなく、人からものを言われたら「あっ、そうですか」としか答えない。同期生なので彼の性格等はわかっているつもりだが、時として全く理解の出来ない行動をとることがある。

先日も、記念すべき事件があった。我が小隊は、夕食時に時々『我が二機の食堂である二鷹』の五百円弁当を利用していたが、今まで代金や注文数を間違えたことがないのに、この日に限って弁当がどうしても一個足りない。それも、釧宮分隊長の大事な弁当が……。飯のことでは目くじらを立てる我々隊員にとって、これは大きな事件だが、そこは機動隊員、落ち着いて原因の究明に当たった。注文数と弁当の個数は合っているのに一個足らないと言うことは、注文していない者が弁当に箸をつけているということになる。

その彼は、我々がてんやわんやしている時に、何食わぬ顔で箸を進めていた。「かわたぁ、注文したんかぁ」一喝が飛んだ。彼は、ほおばった飯を見せながら、一言答えた。「あっ……」、彼は弁当注文時に、「愛妻弁当があります」といらない旨を申告していながら、何故かしら「二鷹の弁当」を食べていたのである。これには、皆さすがに唖然とし、開いた口が塞がらなかった。そこは釧宮分隊長、大きな心で川田隊員の愛妻弁当に箸をつけた。

こんなふうに、本当に不可解な行動をとる彼だが大変楽しい人間なので、二小隊の人気者として、我々共々よろしくお願いしたい。

五中隊三小隊　佐々木良幸

厳しい機動隊員の団体生活ではあるが、緊張の糸も張り詰めてばかりいれば、いつかは切れてしまう。その緊張の糸をほぐすのが、我が小隊の国武隊員である。

国武隊員。大分県は林業で有名な「日田」の山奥の出身。二二歳の血気盛んな若者である。真四角の顔に太い眉毛、ハリネズミの様な顔で、一見いかつい顔。しかし、笑えば童顔、表情豊かな彼の顔を見ているだけで笑えてくる。

私と一緒に赴任してきたのだが、この国武隊員は、マラソン特練をすれば足首を痛め、野球の練習でノックを受けては足首を痛め、柔道をしては足首を痛め、遊撃訓練をすれば又、足首を痛める。私達は、『慢性わがまま足首脱臼症』と呼んでいる。

しかし、彼は元気である。足首を痛めて勤務を休んだ時、主任や室長が心配されて見舞いに行かれたが、部屋に居るはずの彼はそこにおらず、近くの公園に居たそうである。彼は、リハビリと称してバトミントンをしていたのである。

そんな国武隊員。話しのネタが尽きることがなく、よく喋り、よく笑う。淋しがり屋ではないと思うが、最近は、寮を出てアパートを借り、一人住まいを始めたばかり。家に帰っても話相手がいないという境遇にあるため、出勤してきては、話相手を求めて誰にでも話しかける。

最後に、元気過ぎて先輩に睨まれても、なお我が小隊のムード・メーカーとして、明るさを絶やさない国武隊員に、心から敬意を表する。

五中隊四小隊　木山　誠之

我が五中四小の人気者と言えば、まず思い浮かぶのがこの二人、日上君と松本君である。私がこの第二機動隊へ赴任したのは約二年前だが、この二人はその当時一緒に赴任してきた私の同期である。

日上君の風貌は、腹が出て頭はスポーツ刈り。耳は原形をとどめないほど潰れており、一見労務者風。そして、あの「裸の大将放浪記」の山下清に非常によく似ている。違う所と言えば、額の真ん中にあるホクロ位だ。

そんな彼は、柔道が強く新旧隊員対抗柔道大会では、先輩を絞め落としてしまったほどである。しかし、実はおっとりしたちょっとどこか抜けた人の良い人間である。そんな彼の性格からついたあだ名が「父っつあん」この「父っつあん」は大変な頑張り屋で、アクアの潜水士免許に四回も挑戦した程で、その根性には見習うべきものがあ！

部屋でも頼りになる存在だ。

そして、その君と人気を二分する一人に松本君がいる。彼は「昭一」の愛称で親しまれているが、人気者たる所以は、その人柄にある。いつも笑顔を絶やすことなく、何も悩みがないんじゃないだろうかと思われる位にこにこしている。部屋においてはマスコット的存在で、普段は野球部のマネージャーとして頑張っている。

ところで人気者と呼ばれるには、その個人の存在が他よりも輝いており、誰からでも好かれ、慕われるような人格の持ち主であると考える。そして、我が五中四小隊にはそんな魅力のある先輩や後輩が、私の周りにはまだたくさんおられるが、それは又、次の機会に紹介したい。

六中隊一小隊　市来　嘉男

我が小隊の人気者は、上久哲司さんである。何故彼が人気者かと言うと、大きな眉毛に左右に張り出た頬骨、それに何と言っても、限りのない喋りである。話の中に彼が参加すれば、もう誰にも止められず、独演状態になり、他の者はただぼう然と指をくわえて喋りぶりを見ているだけである。

顔面肥大で、大きな声で限り無く喋られれば、これは相手に対する威圧であり暴力になりかねない。私が一方的に書くと主観的になるので、我が小隊の諸先輩・同僚方々に意見を述べてもらいたい。

Tさん、静かにせんか！

Uさん、有言不実行ではいけません

Kさん、口から生まれた口太郎

Mさん、上久、年休、もろき

ゆう、オバQ

等等、人それぞれだが、これだけでも彼がどんな人物か御理解頂けるだろう。

しかし、その彼の話し方から伺えることは、物事に対する自信であり、何者にも負けない説得力である。事実、彼の話しには常に物語があり、ああまたうるさいやつが喋り出したと思いつつも、なぜか話の結末を聞かざるを得ないと言う、話しの魔術にかかってしまい、彼の話術に魅了されてしまう。

広く浅い知識、崇高な教養力と彼独自の豊富なユーモアセンスは、当隊の中でも有数の雄弁家として高く評価されている。

（？）

何はともあれ、二十一世紀を迎え、新たな飛躍をしようとする大阪府警察に、彼の存在は絶対不可欠であり、彼なくしての機動隊の明日は考えられない。上久巡査、どうぞこれからも我が一小隊のため、ひいては大阪府警のためにあなたのその雄弁力を絶やさぬよう、これからのあなたの一層の努力を希望する。

六中隊二小隊　伊吹健太郎

我が六中二小隊きっての人気者は、第一分隊の辰谷裕司先輩である。色白な甘いマスクで、我々二小隊ではもちろんのこと、六中隊の皆から、通称「辰」の愛称で呼ばれ慕われている。

彼と私の出会いは、私が、不安と希望を胸に抱いて、警察学校の門をくぐった時であった。彼は私の半年先輩で、私のクラスの指導学生だった。私が入校して間もないある日のこと、風邪で熱を出しどうしょうもなく彼に打ち明けたところ、彼は、私を親切に保養室につれて行き「心配することないからゆっくり休めよ」と、優しい言葉をかけてくれた。あの時のことは、今でもくっきりと脳裏に焼き付いている。

そんな彼と再会し、この第二機動隊で共に汗を流せることは、私にとって力強くそして幸せだと思う。彼は良き先輩であり、何でも快く話をしてくれる良き相談相手でもある。仕事面にあっては、自らが先に立って行動し、実践をもって私達に教えてくれる。

また、元気で明朗なスポーツマンでもある。中学時代から続けているバレーボールを生かし、今も我が六中隊のバレー部で、日々厳しい練習に耐えて活躍し、小隊内のスポーツ行事にあっても中心となって計画実践していく。

そんな彼であるので、後輩からはもちろんのこと、他の先輩からの信頼度も高く、頼まれ事も多い様だ。今日も、待機室の片隅で、室長、副室長の「おーい辰」という声が聞こえてきそうだ。

私も、一日でも早く彼のように後輩から慕われ、先輩からも信頼を寄せられるような隊員になるよう、日々努力するとともに、彼と共に一丸となって、力強く明るく他に負けない二小隊を目指していく。

六中隊三小隊　神田　真志

我が六中三小隊の人気者は、中野宏昭君である。身長一七八センチメートル、体重八二キロの大きな体に人なつっこい顔は、まさしく我が小隊の人気者にふさわしい。

彼のことを語るのに忘れてはならないのは、何といっても「大喰い」であることだ。その点、今や小隊では彼に勝つ者はいない。しかも彼の場合は、単に「大喰い」であるというだけでなく、食べる物が大変ユニークだ。御飯類が好きで注文する時など、「ヤキメシ大にヤキメシ」とか「定食にライス大」とか、とにかく御飯類が大好きで腹一杯食べないと機嫌が悪く、味は二の次にして、まるで腹に入れることに満足感を得ているようだ。しかも食事をする時は、普段の行動から想像できない程機敏さを発揮する。

食べ物にまつわる事として、次の様なエピソードがある。出動先で弁当が余った日の事である。彼は隊を出て家に帰る途中、忘れ物をしたといって、隊に戻ってきた。しかし真実は、忘れ物などでなく、そこでなんと出動先で余った弁当を食べていたのである。このことからも、彼の食べ物に対する執着心は、一倍強いことが分かる。

そんな食べ物に関するエピソードを数多く持つ彼だが、昨年は、剣道特練生として練習に励んでいた。大変な頑張りやで、皆怪我で休んでいた時なども、彼は怪我一つせず、毎日頑張っていた。食べる事も人一倍強いが、ここぞという時の頑張りも小隊随一のものを持っている。

そんな彼に、最近仲間が出来た。新分隊長の鋤園主任と新隊員の竹本君である。三人合わせて巷では、ホイ三兄弟とか、中野三兄弟とか言われている。三人並ぶと、そっくりな顔、体つきで誰かわからない程だ。いつも元気で、健康的な中野君は、まさしく我が小隊の人気者である。今年もその人気で、小隊、中隊のために頑張ってもらいたいと思う。

六中隊四小隊　磯野　浩芳

我が四小隊に阪神タイガースの熱狂的なファン（トラキチと、みんなは呼んでいる）がいる。この人のトラキチは、第二機動隊では知らない人がいないと言われる程有名な○先輩だ。

私は、何度か○先輩の自宅へ遊びに行ったことがあるが、部屋の中は、阪神タイガースの球団旗あり、はっぴあり、帽子あり、メガホンありと至るところに黄色と黒色のストライプで、埋め尽くされている。さらに驚いたことには、カセットテープから流れてくる音楽は、「阪神タイガースの球団歌である。「六甲おろし」がかかっている。野球に興味のない人は、理解に苦しむのではないだろうか。

しかし、○先輩も昨年のタイガースの優勝フィーバーに伴う一部のトラキチの暴動とも言える行動には顔をしかめて、「あんなファンは、本当の阪神ファンではない」と嘆いていた。やはり真のトラキチとは、○先輩の様なおとなしい（？）のをいうのではないだろうか。

プロ野球は今年もまた、熱い闘いが展開される。私も、昨年の阪神タイガースに負けない様、隊内生活では○先輩に追いつけ追い越せで頑張りたい。でも今年は、巨人も負けませんよ。○先輩、覚悟して下さい。

七中隊一小隊　林田　昇

何人かの人間が集まれば、必ずと言ってよいほどそこには、みんなの注目の的になったり、

（第4ページへ続く）

読者の広場

陽春雑感

南　保夫

近年にない豪雪に見舞われて、交通麻痺やら停電やら……。近代都市機能も、この種の天災には滅法弱い。さんざん痛めつけられたはずの東京の街角に、それでも春は、爛漫の桜をともなって、ちゃんとお出ましになるのである。七六年ぶりのハレー彗星が地球に最接近しようと、三寒四温が、四寒三温になろうと、冬の次はまぎれもなく春。上野公園でも、千鳥ケ渕でも、飛鳥山でも東京中の桜という桜はこぞってしっかり、いまを盛りの妍を競い合う。

空前の円高も、鉄冷えもなんのその……春宵一刻価千金、桜花を愛でる人々の表情には、不安のケもない。日本は本当に平和なのである。それにしても、当然といえばそれまでだが、春夏秋冬、それなり調和ある季節のたたずまいを与えてくれる天の配剤には、感謝脱帽のほかはない。

さて、毎年このシーズンになると、春休みのレジャー客で混雑する主要ターミナルのプラットホームでは、日本独特の風景が展開される。転勤のサラリーマンを見送る人の輪が数組、ほとんどの背中がなぜか重い人生ドラマを背負っているように私の眼には映る。

送る人、送られる人、それぞれの感概を思うと、なにがなし身につまされて、キュンとしたものが胸を打つ。古来、日本人は、満開の桜を見ると、誰もが美しいと感動する反面、間もなく散ってゆく短い花の命を想う。欧米人にはない感情移入である。今どきの若い人たちは、こんなやくたいもない非現実的な話は、ドライに切って捨てるだろうが、まだ多くの、われらの仲間が「会うは別れのはじめ」などと初対面のときから別れを予想してしまう日本人的発想を断ち切れないでいると思うが、どうだろう。

仏教に「盛りがくれば必ず衰える。会えば必ず別れがくる」という教えがあるそうだから、日本人ばかりではなく、仏教の影響を受けている一部の東洋人にも、おそらく別れに特殊な感情をもっている者がいるに違いない。去ってゆく上司や友を送別会で共に泣き、旬日を経ずしてふたたび駅頭に送る。いまやそれらは単なるセレモニー化した感がなくもないが、すべてが殺伐荒涼とした、この東京砂漠の乾き切った人情のどこかに、そんな、ひっそりとしたウェットな部分があってもいいのではないか。

これが欧米人の場合となるとまったく角度の変った切り口からの発想となるから面白い。ちなみにキリスト教には「明日のことを思いわずらうな、今日を大事に生きよ」という教えがある。大へん短絡な断定だが、こうした考えが彼等の根底にあるからこそ「人と出会っても別れのことなど考えないし、気にしない。どんな親友と別れたとしても、また新しい友をつくればよい」というような、我々から見れば、まったくの現実主義で、なんの感傷もないままの〝別れ〟ができるのだろう。

とはいうものの、洋の東西を問わず記憶にとどまる〝別れ〟の名場面は枚挙にいとまがないのである。それぞれの文化的背景、思想、宗教の相違があっても人と人の別れには、やはりどこかに相通ずる接点があるのかも知れない。

陽春の一日、あの満開の華やぎが嘘のように、すっかり芽吹いた、庭の桜の大木を見上げながら、私の雑念はとめどがない。

勝ち残る集団とは

杉尾榮俊

先日、世界有数のコンサルタント会社マッキンゼー社の有能なスタッフによって書かれた、ウィニングパフォーマンスという本を読んだ。その内容は、米国の中堅企業が企業競争に勝ち残る為に、いかなる努力をしてきたかを、実例を引いて解説しているものである。

その中で、企業の指導者は、成長の過程で三度変身する事が述べられている。第一段階は企画が小さく、指導者は技術や商売のやり方・経理・人の管理すべてに精通した一種のスーパーマンであり、次に企業が拡大するにつれて、自分の持っていた権限を少しずつ部下にまかせ、危なかしくても、口を出すのを抑制し、部下が育っていくのを忍耐強く待つ段階。そして最後は、自分の指導理念をしっかり組織に植えつけて、後輩に道を譲る段階の、三段階変化を遂げる事が企業発展に必要だと説いている。

日本の警察も、明治時代に川路利良がその原型を作り、戦後、衣がえをし、民衆の警察として生まれかわり、治安の維持・民政の安定面で大変な役割を果たしてきたが、機動隊組織が発展成長していく為には、十人十色といわれる様に、多くの個性を持った隊員が自己を規律し、組織の為に働きうる様指導者が、そのポジションに応じて変身していく事が必要なのではないだろうか。

組織の中味が異るので、単純な類推はすべきではなかろうが、民間企業であれ、公的機関であれ、その目的を達成する為には、そこに働く人達が心からその組織に対する共感と、働きがいを求めるような組織である必要があり、指導者は、昇進の階段を登るたびに、自らを変身させていく必要があるのではなかろうか。

民間人は、公的なサービスを支える為にどれだけの努力が払われているかには着目しない。どれだけの良質なサービスが提供されているかによって評価するのである。国鉄の様な状況でも、一人の職員の素晴らしいサービスは、投書欄を飾り正当な評価を得る事ができるのである。

隊員の皆さんは、日本の治安と民政の維持の為大変な努力をしていると私は思うが、それが素晴らしい評価を受けるか否かは、その隊員を率いるリーダーが、組織の提供する公的サービスが大衆にどう評価され、それをどう改善していくかを常に考えていく事によって決まるのである。

EVC（エコノミック・バリュー・フォーカスタマー）＝消費者にとっての経済価値に代P、S、VN（パブリック・サービス・バリューフォーネーション）＝国民にとっての公的サービス価値となる概念によって警備活動を見直すと、サミットの警備も再評価されるのではなかろうか。桜吹雪の中で、五月晴れの中での皆さんの努力が報われる事を祈っている。

息子にかける夢

北海道天塩町　川原政治

長男雅博の生まれたところは、北海道留萌市である。ここは、北海道の北部ブロックに位置し、厳寒の所である。関東、関西等の人々からすれば、その寒さは、想像もつかないものと言えるであろう。しかし、空の便が発達した今日、本州と本道とは随分近くになり、本道のことについてよく知られるようになった。

雅博は、昭和五十六年三月、留萌高等学校を卒業し、進学と就職のいずれかの道を選択せざるを得ない状況で、大学合格校を蹴ってまでも、最終的に警視庁で働くことに決めたことは、随分と心が揺れ動いたものと察する。

このような心境で、「自分で自分の人生」を決定したということは、素晴らしいものと感じざるを得ない。従って、それだけに自分に厳しい人生でなければならないと思うわけである。また、自分の失敗などを、決して友だちや上司のせいにしてはならないということを肝に銘じなければならない。

日本の国家は、他国に例を見ない平和な国そのものと思う。この国で生活していること自体、本当に幸せと感じる一人である。否、私一人ではないと思う。それは、日本の国が法治国家として、世界各国に比べて類をみない警察の組織が体系化されているということでしょう。日本の警察が世界一であるからこそ、世界一の平和国家になっているのである。

息子よ、警察の組織並びに治安維持等については、十分なる理解を持っていると思うが、今後共、このことを意識するなかで、自分を磨いていくことが大切である。世の人は、殺人や詐欺等の犯罪に対して、一時でも速く逮捕解決してくれることを願っているのである。

勇気と努力する精神で、日本の警察官は素晴らしいという誇りを失うことのないよう、精進しなければならない。父として、切に願うものである。

（警視庁六機・川原雅博中隊員の父親）

（第3ページより続く）

すぐ話題にのぼる人がいる。私の小隊もその例外ではない。A君がその人だ。やる事なす事全般にわたり、話題を提供している。どうして、こんなに周囲から目を向けられるのかと思うほどだが、その理由として次の三つが挙げられるかと思う。

まず第一に、ユニークな顔立ちである。一瞥見ると誰もが忘れられない表情で、親しみやすいところがある。

次に、真面目さの中に身体に似合わないヒョウキンな性格である。生まれつきユーモアのセンスがあるらしく、それが表情に面白おかしく（時々憎たらしくなることも）滲み出る。それが時には、先輩に怒られる原因にもなっているが、なかなかにして得難い。

第三に、「七中の西郷さん」と言われる身体のコミカルな動きが挙げられる。想像してもらったらわかるように、あのドカベン級の体型は、単に動くだけでもちょっとした絵になるのに、それに加えてチョコマカとした面白い動きをされると、もうたまらなくなり、思わず笑いころげたくなる。

この三点が、何をするにしても話題が絶えない要素となっているみたいだ。これは、私から見れば是非とも無くしてはもらいたくないものであり、これからの彼の人生において何らかの役に立つことがあると思う。

七中隊三小隊　人見　保

我が七中三小隊は、七三機会（なみきかい）という会を作り、小隊長をはじめ各隊員間の融和団結をはかり、レクレーション、各種行事等の活動を活発に行っている。そのおかげで、六十年秋から六十一年春にかけて、六人が良き伴侶を得て、家族ぐるみの付き合いをしており、隠し事のない明るい小隊になっている。

その上、「学の三小隊」と言われてきた良き伝統を引き継いで、文武両道を目指し〝昇任試験突破〟を合言葉に全員が一丸となって取り組み、より強い機動隊作りに励んでいる。

ここで、七三機会の個性の強い面白い隊員を二三紹介したい。

まず第一人目は、副室長の重責を兼ねながら、数多くの特練に参加している藤井隊員である。彼は、七中隊の表看板である漕艇部が、鳥取国体に出場することが出来た時の原動力となった人物で、ありとあらゆるスポーツに秀でて、マラソン特練をはじめバレーボール、ソフトボール等の特練生として七中隊に貢献しているスーパーマンだ。

次は、鈴木君と佐藤君がいる。この両君の特徴は、第二機動隊で一、二を競う短身で、現在のところ隊歴か、たんこぶか知らないが鈴木君が五ミリ勝っている。

三人目は、縁の下の力持ち的存在の久保園隊員である。漕艇部では、年間約五回の合宿を支えるマネージャーとして活躍し、小隊では、花壇コンクールで過去二年間、春・秋の四期連続優勝という輝かしい成績を、園芸班長として残している。

進取克己団結
規律の機動隊
鈴木實
小川運輸㈱
芝本龍平
山大鉄商㈱
関東銑鐵㈱
大野興業㈱
東南貿易㈱
高周波熱錬㈱
西野公庸
竹之上誠剛
浅田弥三郎
石原幸男
松田鉄鋼㈱
豊田通商㈱
広畑海運㈱
丸橋正彦
自見産業㈱
三星金属工業㈱
早達運送㈱
平和農産工業㈱
㈱佐藤製線所

はげまし

発行所
社団法人 機動隊員等を励ます会
東京都中央区八重洲2-4-14
〒104 ミツヤビル3階
発行人 鈴木 實
TEL 03(272)2050
購読料 年間1200円(送料共)
(但し会費の中には購読料を含む)

成田二期でまた不穏

ゲリラ封じ込みに 機動隊出番

成田空港は五月二十日に開港八周年を迎えた。空港利用客は年々増え、新東京国際空港公団は二期工事の早期着工を訴える。対する反対同盟はあくまでも「実力阻止」の構えを崩さない。これに乗ずる新左翼過激派は成田反対闘争に組織の命運をかけているといわれる。火炎弾、追撃弾などエスカレートするばかりの新しい〝ゲリラの季節〟に、わが機動隊の出番はこれからもますます増えてくる。天皇ご在位六十年式典、東京サミットの長く厳しい警備で無事、その使命を果たしてほっと一息ついているが、これからも続くであろうゲリラやテロに対応して、隊員達はきょうも体力の練磨や訓練に怠りない。不穏な空気が高まる成田空港に焦点をあててみた。

成田空港に反対している三里塚・芝山連合反対同盟の北原派は五月二十五日、「空港二期工事阻止」などを掲げた集会を開いた。開港日に合わせて、毎年この時期に開いている集会だが、二千百七十人が参加し、「空港を廃港に追い込もう」と気勢をあげてデモ行進した。千葉県警は、全国からの応援で機動隊を軸に八千五百人の警察官を動員して警戒に当たり混乱を防いだが、「二期工事」でまたもや新たな局面を迎えている。

最大闘争目標にする新左翼

成田問題は新左翼、とくに最大党派の中核派が最大の闘争目標としてきた。発射物を使ったゲリラ活動は去年四月以来、すでに七回も起こっており、そのロケット弾は場合によっては離着陸機も狙える威力を見せている。

昨年四月に射程一キロの弾が飛んだが、サミット期間中に、迎賓館をまたいで三・五キロも飛んだ翼付き弾で、警備体制はまたもや新たな対応を迫られてきた。

過激派は地下組織の戦力増強と公然部隊の武装化で、一気に戦闘力を高め、五十九年から使い始めた発射弾も当初の火炎瓶程度から矢羽根つきの金属弾、火炎弾、また去年から爆弾が五年ぶりに復活するなどエスカレートするばかりである。

警備に万全期す 機動隊

戦後第二のゲリラ高揚期とされるこの中で、善良な国民の期待は、警察によるゲリラ封じ込みしかない。軍隊や兵器まで動員する警備体制は、わが国では敷かれていない。治安のすべては警察が頼りになるが、幸いにして警察首脳は「最小の権限で最大の警備効果を上げる」と自信をもっていい切る。

常に警備の最前線に立ってきた機動隊は全員が強い使命感に燃えている。日頃培ってきた気力と体力、技の向上とその団結力で、〝本番〟には十二分にその機動力を発揮してくれることは間違いない。成田の近況を隊員に語って頂こう。

空警隊だより

成田より愛をこめて

二空機　井上　明

私は飛行機が好きだ。あの鳥のような機体が、大空を舞い、色々な情報を与えてくれる。

私は今、ジャンボジェット機が上空を飛びかう、新東京国際空港警備隊の待機寮に住んでいる。九年ぶりの寮生活である。ここで成田出向者を代表して成田での寮生活の利点を挙げてみたい。

まず第一に、預金ができる事である。寮は空港内にあり、食事や生活に必要な物は空港内の食堂や売店で賄う事ができるうえ、夜外出しようにも周囲に店はなく、車で二十分程かかる成田駅まで足を運ばなくてはならない。そうなるとどうしても足が遠のく。従って自然と預金がふえるという寸法である。

第二に、勉強ができる。出向する前に心配していたジェット音も窓が二重構造のためさほど気にならず、室は八畳の洋室に二人、冷暖房完備のうえ、ベッド、机が用意されている。また当非の勤務が続き、外出も面倒なので時間があるから「勉強でも」という気になってしまう。それに加えて、警視庁出向者は同室のため、相互切磋琢磨して勉強にはもってこいの環境である。

最後に多くの人を知る事ができるという点である。現在、私の勤務する第二空港機動隊では、本県（千葉県）隊員の他に、警視庁、福島県、奈良県の隊員が出向しており、今年から倍増され、さらに滋賀、熊本等が加わる予定である。それぞれ地域は異なるが、同世代の若者が、同じ勤務・同じ寮生活で泣き笑いを演じるため、おのずと心が通じ合う。生涯の友を得るには格好の場である。

以上述べた事は、もちろん警視庁機動隊の寮でも可能な事ばかりだろう。要は目標に対する「心構え」「やる気」である。しかし、都会では、目くるめく喧噪と様々な誘惑により、目標を定めてもなかなか達成できないのが現実だろう。

これを読んで心あたりがあれば、自ら進んで成田を希望してみると良い。一年間ですっかりと綺麗に「都会の汚れた誘惑」を忘れさせ、人間的にひと回り大きくなれる事を保障する。

（前警視庁八機分隊長）

我常戦場

一空機　細川　信哉

一般人にとって「成田空港」と聞くと「海外旅行」を連想するだろうが、警察官は「ナリタ」という響きをもっと重く感じるに違いない。

極左との接点であり、現に成田では集会デモが続いている。成田に新空港建設を計画した際、いったい誰が今日の光景を予想しただろうか。空警隊へ出向して六ヶ月になるが「ここは戦場だ」「野戦だ」と成田ではよく言われる。

「我常戦場」と表現されるが、空港周辺を常駐極左に囲まれ、監視塔から目と鼻の先の団結小屋を監視していると、その事を痛感させられる。そんな毎日だが、時として極左は一体どんな日常生活を送っているのだろうかと考える事がある。

彼等は果して集会に参加する時だけ、その仮面をはずし極左としてふるまうのだろうか。いや、日常生活のすべてが、頭も体もすべてが極左暴力集団であると私は思う。

初任科当時「頭のてっぺんから足のつま先まで警察官になれ」と檄をとばした教官助教を思い出すが、彼等は正に正真正銘、筋金入りの極左なのである。我々機動隊は極左に限らず、暴力団や右翼などあらゆる輩を相手にする以上、対象以上にプロの集団であることを必要とされる。

暴力団は、特注スーツに身を包み高級外車に乗り込んでいる時だけが「暴力団」ではなく、やはり、寝ている時も、入浴中も暴力団だ。右翼も同様に体のどこを切っても金太郎あめのように私生活も右翼である。我々警察官は、勤務中だけの「パートタイムポリスマン」では、根本的に勝てないような気がする。

国電浅草橋駅襲撃事件などゲリラ事件で、国民は極左に対し強い態度で臨む警察官を望むように世論は傾いている。「力」が正義ではなく正義が「力」だと。正義を具体化する精強な機動隊、戦う機動隊、その一員としてこれからも空警隊での貴重な経験を生かし、勤務に励んでいきたい。

（前警視庁三機中隊員）

北から南から

風光明媚な自然見て歩き

鹿児島県警察本部機動隊

花は霧島　煙草は国分
燃えてあがるは…　桜島
波静かな錦江湾に浮かび、火を吐き続ける雄大な桜島など、風光明媚な自然に囲まれた、本土最南端の鹿児島県は、全国有数の観光都市である。明治維新の中心人物、西郷南洲翁を近代警察の創設者となった川路大警視等々多くの偉人を輩出したこの地「薩摩」を、私達県民は、大きな誇りとしている。

桜　島

県庁所在地鹿児島市の東方約四キロ海を隔て、青々と蹬む波静かな錦江湾に浮かぶ桜島は、標高千百十八メートルの活火山で、昨年は史上最高の爆発回数四百七十四回を記録（昭和三十五年四百十四回）し、周辺地域に灰害をもたらした。鹿児島市街地の東端にある、島津七十七万石の磯庭園から眺める桜島は、時間の経過とともに刻々とその姿を変え、旅人の目を楽しませ、心を雄大にさせてくれる。近くの老舗で出される、二本の竹棒にさされた餅を炭火で焼き、独特のたれをかけた両櫻餅（ジャンボモチ）は、素朴な味が食通にうけている。

蟲音と共に、多量の火山灰を吹きあげる桜島は、過去幾多の大噴火により、今は大隅半島と陸続きになっている。桜島を一周する溶岩道路の両側には、噴火によって造られた溶岩の奇岩が連なり、過去の噴火の激しさをしのばせる。

この厳しい自然環境の中での産物としては、世界で一番大きい桜島大根と世界で一番小さい桜島小みかんで、桜島大根は十キロを越えるものもあり、煮付け料理等にはもってこいの材料だ。桜島小みかんは、赤ちゃんの拳よりも小さく、何よりもましておいしい。

霧島連山

鹿児島から車で約九十分、鹿児島・宮崎県境に聳え立つ霧島連山は、県民の身近な登山コースとして親しまれ、五月末から六月にかけて、県花・深山霧島つつじが満開となり、山裾を真紅や紫に燃えたたせる。秋には紅葉、冬には樹氷と、四季折々に姿をかえる霧島連山は、見事と云うほかはなく、山裾の温泉

（第3ページへ続く）

今月の言葉

東京サミットを終えて

五月は東京サミット、チャールズ英皇太子ご夫妻の来日と、機動隊の皆さんにとっては、盆と正月が何年分か一緒に来たかのような大変な時期だったと思います。いずれも大過なくその任を終えられたことは、国民にとっても誠に誉れ高いことですし、長い準備期間も含めて、本当にご苦労さまでしたと、心の底から御礼申し上げます。米国のリビア攻撃、ソ連の原発事故など世界的な大事件の後の、そして又、日本にとっては急激な円高が進行する最中での東京サミットですから、万一のことでもあれば……と関係者の方々のご心労は大変なものだったろうとお察し致します。

サミット自体も、各国首脳がそれぞれに満足感を表明して帰国の途についたということは、会議の成功を意味していますし、円高現象を通して日本国民が否応なしに国際情勢に目を向けざるを得なくなったことも、結果としては良いことだったと思います。そして又、各国元首が天皇陛下にお会いお出来たことに大変感激されたという話や、その後の英皇太子ご夫妻の活躍ぶりを拝見しても、改めて皇室と皇室外交の重要性を再認識したことです。

一部では迫撃弾騒ぎ等もあり、今やテロリズムは現代に於ける形を変えた戦争であるという情況認識からすれば、今後の治安維持にまたひとつ新たな課題が課せられたようですが、こと今回の警備に限っていえば、こうした事件は、むしろ余計な過剰警備非難の声を沈黙させる効果があったくらいで、全体的には大成功と言えるのではないでしょうか。

いつもながら残念なことは、一部のマスコミに、自分の国籍も忘れたかのような、何事に対しても批判することのみが報道の正義であり、革新的であるかのような記事が多かっ識せずにはいられません。

批判的という視点で書きさえすれば、どんな人の意見でも報道するという姿勢には、過激派の火器よりももっと大きな危険を感じます。頑張っている人には心からの励ましやねぎらいの言葉をかけるという行為が何故もっと素直に出来ないのか、日本という国が他国と較べてどういう状態だから円高に対して外国は冷淡なのか、良い点は良いこととしての認識を国民に知らしめるということが今ほど大切な時期はないと思います。

機動隊の皆さんも、治安の良さは世界一といわれる我国の情況に自信と誇りを持たれると同時に、それ故にこそ隊員の一人ひとりが、国民のリーダーたり得るように、更なる心身の練磨を心より願う次第です。

（自見眞清）

経験と自信を今後に生かす

大警備完遂

警視庁機動隊

東京サミットが無事完了した。この裏方になったのが世界に誇る完璧な警備である。とくに機動隊は長期に及ぶ変則的かつ苛酷な勤務となった。見えざる敵に全神経を注ぎ、不眠不休の連続に精神的・肉体的にも極限状態の部隊活動であった。

隊員の一人ひとりが自己との闘いにうち克ったことが、重防警備を成功に導いたことはいうまでもない。一部マスコミで過剰警備とか戒厳令とかの批判があったが、それに倍する都民の励ましやねぎらいの言葉もあった。すべての機動隊員がこの歴史に残る大警備に従事できた喜びと満足感をかみしめているが、こうした経験と自信は、これからの警備にも生かされていくことはいうまでもない。

平常心について

一機　田嶋　範行

極左暴力集団の史上最大の蜂起戦と云われてスタートした一連の重要警備に、警備係員として従事できたことを誇りに思っている。連日連夜の警備実施の中で身をもって学んだことは「平常心」の大切さである。剣の道で云う「先の先の精神」である。

本番直前までは若干の余裕もあると自負して仕事に取り組んでいたが、予想外の早さで本番を迎え、いつの間にか狭い視野と、平常心を忘れた自分であった。我が警備係は、料理で云う「味つけ」の役割りであろうと思う。本部指示を隊任務にふさわしく「味つけ」を行うためには広い視野と平常心を忘れては、警備の万全を期すことは出来ない。益々厳しくなる情勢の中でめぐるしく変化する部隊運用を警備係員として冷静に、そして広い視野を持って仕事をしなくてはならない事をある瞬間思い起し、その日から、剣道に云う平常心を自らに語りかけながら、日々の警備計画を進めてきた。

久方ぶりに帰宅したとき、無邪気な三才になる長女の出迎えを受けて、何か自分でない新鮮さを感じ、さわやかな気分を味わった。明日からはまた新たな任務が待っている。警備係員として一歩前進出来たことを確信し、今後の仕事に生かすべく頑張って行きたい。

（警備係巡査部長）

使命感に燃えて

一機　後藤　進

「ゴキブリみたい」、これは、私がサミット警備で地下鉄出入口に固定警戒についているとき通行人に言われた言葉である。服装は紺の出動服、自らはりりしいと自負していたのに残念な気持ちになった。時まさに、ゴールデンウィーク。片や休日を行楽地で楽しく過ごす者、片やワッペン姿に身をつつみ、赤く目をはらして、ひたすら愚直に警戒を続ける機動隊員、対象的な二つの光景であった。

しかし我々機動隊員は、そんなことなど気にもせず、治安を守りいかなる暴力にも屈せず、サミット警備を完遂するという使命感に燃えた。極左のゲリラ行動で幕をあけたサミット警備、この一ケ月半にわたる警備はまさに極左対警察、悪と正義の闘いであった。豪雨の中での検問、睡魔と闘いながらの立番など、このような困難な警備を支えたものは一体何であったのだろうか。国の治安を守るべく全員が一丸となって忍耐強く警備に取り組んだ警視庁ならびに全国から動員された警察官一人ひとりの強い使命感であったと確信している。

（中隊員）

裏方達の誇り

二機　杉野　覚

連日連夜不眠不休での高速対策及び官邸警備の重責を無事完遂し、サミット警備は終った。補給班も、ベテランOB四名の増員を得て、緊張の連続の中で弁当作りに明け暮れた。子供の頃、おふくろが作ってくれた弁当を食べる時のような、真心と〝いっとき〟の余裕が伝ってくる弁当作りを、第一の目標として次のように推進してきた。

一　健康管理本部のご指導を得て、弁当のカロリー計算を行ない、栄養バランスのとれた献立をつくった。

二　特別二期以降は、昼、夕食時、インスタント味噌汁付弁当を支給し、キッチンカーが各車両を巡り、お湯の補給も合わせて行なった。

三　天皇陛下御在位六十年記念の昼食には、赤飯弁当を作り、隊員の間からも、おいしかったと好評を得た。

連日、三百キロの御飯を炊いたので、炊飯器の故障した場合を心配したが、何事もなく、また、補給班全員が一致団結して、黙々と裏方に徹してサミット警備を完遂できたことを誇りに思っている。

（補給係巡査部長）

高速対策に従事して

二機　勝目　秀吉

私は昨秋着隊した新米隊員であるが、サミット本番には、高速対策要員として、平和島インター周辺で検索、車両検問に当った。二部制の勤務になってからは、非番勤務も多くなり、文字通りの不眠不休の厳戒警備であった。独身の私は若いし、身体にも自信があったから頑張りぬいたが、有家族の幹部や先輩隊員は、非番でも自宅に帰れない日が続いたから、睡眠不足で肉体的・精神的に大変だったと思う。

車両検問では、特に夜間は十分気を張って警戒心を強くして不審者・不審物件の発見に努めた。併せて交通事故の防止にも注意した。事前の広報がきいていたので、運転者も交通規制には協力的であった。私は、都民の協力なしではサミットは成功しないということを念頭に、親切、丁寧な言葉で質問するよう努めた。

（中隊員）

頑張り魂

三機　坂牧　榮光

我々技術係スタッフは、年明けとともに、サミットに向けて資器材開発改善に取り組んできた。三機の担当区が、米大、オークラ地区と決定されてからは、ますます具体化したものへと変わってきた。

そして、一つの完成品が出来上がるまでは互いに様々な意見を出し合い、時には激しい口論になったこともあった。それだけに完成したときには感激も大きく、手を取り合って喜んだ。

四月に入ってからは週休は無し、当然非番もない我々スタッフは、疲れがみえてきた。しかし、もっと辛い警備実施にあたる中隊員がより効率よく警備実施が出来るようにと考えると、そんなことも言ってはいられなかった。

初めてのサミット警備を三機技術係員として経験。今度はこの頑張り魂を昇任試験に向けて、数年後の東京サミットの際は、同じ技術係でも巡査部長、あるいは主任として今回の貴重な教訓をいかして活躍したいと思う。

（技術係員）

爽やかな風

三機　小渕　和久

「三機副隊長あて、本警備を解除する」と無線が流れる。次に「資材撤収を行なえ」という命令。バスの中は、重大任務を終えた安堵感と充実感の声で蜂の巣を突っついたようになった。これまで成田警備やK警備等を経験してきたが、これほど厳しい勤務は初めてだった。サミットのために、体をより鍛えたりしたが、体は正直なもので、疲労が足、腹、胸、頭と蓄積されていくのが分かった。

私が主に勤務に従事したのは、米国大使館周辺の検問だった。今までのホロ付重点だったのが、自家用車からのロケット弾事件、個人タクシー表示燈盗難等で、あらゆる車両を見逃してはならないことになり、昼間帯においては、車の列が百メートルを越える時もあった。自分の担当区からは絶対にゲリラ車案を出さないこと、過労に打ち勝つことの二つだけは自分に言い聞かせて頑張った。

私の小さな努力で、各国の元首を守ったという爽やかな満足感が、五月の風と共に心の中を吹き抜け、思い出の一ページを飾ることができた。（中隊員）

パノラマ写真

四機　根本　一男

サミット警備に備え写真係は、担当区の実態資料作りに全力をあげた。「地の利」という言葉があるが、任務を完遂する為には、地形地物を細部にわたるまで知る必要があった。

そこで、非番等を利用し、担当区周辺の数多くのビルに登り、あらゆる角度から写真撮影したものの、地上数十メートルからの写真だけでは不十分であった。どうしたら実態を的確に表現できるか悩んでいたところ、隊長から「パノラマ写真を作ってみたらどうか」のヒントを得て、早速パノラマ写真作りにとりかかった。

しかし、実際に撮影してみると、レンズの特性からどうしても実物と写真に誤差が生じ、レンズやアングルを換え試行錯誤の撮影を繰り返えした。そんなある日、指揮官車の上に登ったところ、視野が広がりパノラマ写真がより人の目に近いのを発見した。

連日徹夜で仕上げたパノラマ写真は、長さ十六メートルにも及ぶものになったが、一階ホールに掲示したところ、「写真で見ると今までと違った問題点が発見できた」等の隊員の言葉を耳にし、写真係員としての誇りを感じた。実査百回をスローガンに、隊員一丸となってサミット警備を完遂した現在、その一翼を担うことが出来た喜びは、貴重なものであった。

（写真係巡査部長）

苦情から励ましに

四機　猪俣　泰之

サミット警備における私の任務は、弁慶橋上において、赤坂見附方向から進入してくる車両の検問であった。最初の頃、運転者から「どうして、トランクを見せなければならないのか」「もういいかげんにしてくれ、仕事にならないよ」等と不満の声と苦情がかなりあった。後半に入ると、検問を受ける運転者も検問に慣れ、敬礼するとトランクを開け、自動車運転免許証をフロントガラスにはりつけており、検問もスムースに行なうことができた。

ある日、運転者から「お巡りさん、夜遅くまで大変だね。サミット頑張って下さい」と励ましの言葉をかけられたときは、自分自身、今まで以上に頑張らねばと思い気力が湧いてきた。都民の協力を受け、無事に終了することができ、われながら満足している。

（中隊員）

裏方警備に徹して

五機　渡辺　智

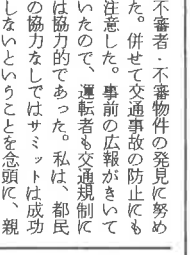
私は厚生係員として部隊の兵站を担当した。本心は、私も前線に出たかった。しかし、上司から厚生係の重要性を説かれ、気をとり直し裏方に徹しようと決意した。

私は、補給班と緊密な協力体制をとることや仕入業者との打合わせ、栄養価の高い消化のよい品物を仕入れることに努めた。そして早朝深夜の配達、本隊への常時補給も大変な仕事だ。

五月に入ると隊長指揮六個中体制となり、出動前はまさに戦場を思わせるような混雑ぶりとなった。部隊の出動後は驚くほど品物が減っており、これを補給するのに懸命に汗を流した。この頃になるとキッチンカーもフル回転である。部隊の配置箇所は広範囲にわたり、迎賓館を一周するのに約四時間もかかったがひたすら動いた。時には雨に打たれ、五月晴れに浮かれる人々を横目にみながらただ勤務する同僚のために、できることは何んでもやろうと頑張った。

テレビで参加国最後のカナダ首相機が、夕闇の中、太平洋のかなたに消えゆく姿を見て、目頭が熱くなるのを禁じ得なかった。

（厚生係員）



迎賓館攻防戦

五機　塩田　公明

不法行為を未然防止するため徹底した検問に従事した。様々な反応があった。協力的な者、またそうでない者もいる。こんな時は「忍」の一字を守る。職質は穏やかな口調の中にも鋭く攻める。五月に入りいよいよ本番である。緊張も疲労も最高度。何も考えず与えられた守備範囲を懸命に守り攻め続けた。五月四日サミット会議中またもやロケット弾の砲声にさらされた。怒りが天を突くこともあったが、ただ自分の任務に忠実であろうとした。

無我夢中のサミット警備であったが、私にとって体力と気力の限界を試す良い機会であった。私は最後の気力体力をふり絞り迎賓館を守り切った時、この大警備を完遂したという実感と充実感で胸が熱くなった。

（中隊員）

ゴミ父さん

六機　前田　善久

サミット、サミット、御苦労さん。

六機一日　ゴミ六トン。

残飯・ビン・カン・燃えるゴミ。

全部みそくそゴミ山へ、分別しなけりゃゴミ燃えぬ。

それを六機のゴキブリ班、力合わせてゴミ山を、

かき分け、かき分け這いずり回る。

端から見ていりゃブータロー、気持ちだけは機動隊。

仕事と思えば何のその、
「父さんサミット大変ね、
どんな仕事をやってんの」
子供に聞かれ、
「こりゃ 耳いたい」
役所でゴミ焼き……。
困った、困った、お父さん。
（会計係員）

車列警護要員として

六機　玉置　義方

カナダ首相を乗せたヘリコプターが、迎賓館から飛び上がった瞬間、私の胸の中に熱いものがこみ上げて来た。ヘリを自分の目で追いながら、今まで辛かったことが、走馬燈のように体の中を通り抜けた。この時の感動は、生涯忘れることが出来ない。

私は車列警護要員として、カナダ班担当を命ぜられ、数々の貴重な体験をし、さらに警察官として、これほどの誇りを感じたことはなかった。先行PC、白バイと続く首相の車列。後押え㊀の中で警戒をしつつ、見た沿道配置員の背面の姿は、本当に素晴らしかった。そして、何度も訓練した車列体形を、本番で見事にやり遂げたことも同様だった。ここまで出来たのは、警護員の気持ちがぴったり合うことができたからだ。

ここで培った大きな財産を無にしないため、また、二度と味わうことが出来ないかもしれないあの感動を胸に、次の目標に向かって、一生懸命頑張っていく。
（中隊員）

同時多発ゲリラ

七機　入江　信孝

今回のサミット警備で、私は生涯忘れることのできない貴重な体験をした。それは五月六日の朝、ゴールデンウイークも明け、普段通りの通勤でにぎわう都内の駅で発生した同時多発ゲリラだった。

私はその日、S班の爆処理車の運転担当として前進待機の場所へ向かっている途中、その第一報を傍受した。そしてすぐ転進命令。班員との合流、現場への転進、そして搬送処理のため深川射撃場までと緊急走行に継ぐ緊急走行の連続だった。これだけでも、今まで経験したことがなかった上、初めての爆発物疑現場への臨場、更に容疑物件の搬送と初めてづくしのことばかり。初めてのことへの緊張で、恐いと思う気持ちさえ持てなかった。

また、所轄署PCの先導。渋滞を抜けるまで広報しながら後押えをしてくれた一機レスキューの方々の暖かい助力も、決して忘れることはないだろう。
（操車係員）

サミット警備完遂

七機　爪生島　英雄

我が隊は迎賓館及びその周辺を担当することになり、私は迎賓館正門前の検問に従事した。検問を担当し、都民の反応が不安であったが、「体を壊さないで警備頑張って下さい」というねぎらいの声に接するたび、「よし、やらなければ」と決意を新たにさせられた。この苛酷な警備を支えたのは、都民一人ひとりの暖かい声援と各隊員のやる気と団結力であったように思う。全国から集結した警察官の連携とチームワークが生んだ全てが「サミット警備完遂」を成し遂げたのである。

私の警察人生において、世界に誇れる大警備「サミット警備」に従事できたことは、一生忘れることのできない思い出になるであろう。
（中隊員）

事前準備は万全

八機　菊地　亘

私は通信係員としてこの警備に従事することができたが、一番苦心したことは、日々変化する警備配置に合わせて無線機類を配分することであった。それは、短時間の睡眠時間を更に削る困難な作業であったが、事前の準備が整っていたせいもあり、不足等もなく無事対応することができた。ここで、改めて事前準備の大切さを思い知らされた。また、副隊長伝令無線担当としてこの大警備に従事させていただいたことも最高の喜びであり、重責ではあったが、いろいろな事を勉強することができ感無量である。

通信係員としてまだまだ未熟であり、これから更に前進していかなくてはならないが、この激務を乗り切ることができ、精神的にも自信がついた。
（通信係員）

高速道路警備

八機　前田　守彦

我が隊は、高速道路対策を担当し貴重な経験を数多く得ることができたが、何と言っても、高速道路は、危険と常に背中合わせの場所であると言えよう。

トイレに行くにも緊張を解くわけにはいかない。目の前で急ブレーキをかけられ、全身から血の気が失せる一場面もあった。中隊長曰く、「ゼブラや装備も付けずにカラスみたいに高速道路上をウロウロするやつは勤務させない」と。

そこで、私は資器材を有効に活用し、金属探知器により隊員の服装基準のB基準を確認し、「ゼブラよし。B基準よし」を復唱し、気合いを入れて配置についた。そして、離日の車列が一台、また一台と無事に通過する毎に、自分も微力ながら大警備を支えているという充実感を味わうことができた。地味で守りに徹した警備できあったが、任務を全うし、無事に終了できたことは、私にとって何よりの勲章であった。
（中隊員）

二回目のサミット警備

九機　今本　雅敏

空前の大警備が終了した。七年前は、卒配間もない頃、右も左もわからぬまま方機部隊員として第五回東京サミット警備に従事したが、今回は警備の第一線、機動隊の特務係員として、ホテル・ニューオータニの警備にあたった。

地下鉄からの過激派の吹き上がりが予想されるため、駅構内「置となり、又、中隊検問支援、その他諸取扱いの任務に従事した。期間中、過激派のロケット弾発射、同時多発発火物事件等、「ヒヤッ」とする事案が発生したが、我が担当区においては、何事もなく無事終了した。

大警備を完遂した満足感とともに、ある意味で拍子抜けした感もあった。と言うのも、「一〇・二〇、一一・二九」のような鉄パイプ、火炎ビン使用の武装闘争が予想されていたが、飛び道具等のゲリラ事案に終わり肉弾闘争が発生しなかったからであろうか。もちろん、警備が厳しく、「極左各派が封じ込まれた」と言うのが実情であると思う。

サミット警備は終了したが、警備事象は依然として厳しい。この大警備を乗り切った体力、気力を武器として、今後に臨む所存であるが、期間中の都民の多大な協力を忘れることなく、都民の満足する警備を実施するため、さらに一層の努力を惜しまない覚悟である。
（特務係巡査部長）

俺がやらずに誰がやる

九機　板橋　重記

我が九機は、ホテル・ニューオータニを担当した。私はA地区担当だが、ポイントは検問であった。歩行者検問で、外国人を相手に慣れない英語で職務質問、雨中の所持品検査と身分確認、何度も検問をうけた人の批判等々。だが、一人ひとりがこの検問所から先、不審者は絶対に入れないという信念の下、職務を遂行した。

その中で、「御苦労様」という声とともに、都民の笑顔が目に映った時は喜びで一杯になった。私達の隊訓である、至誠のもと一筋に、団結のもと励み合い、剛健のもと奮いたち、一人も弱音を吐くことなく、攻めの気持ちがあったからこそ、この大警備が完遂したのだと思う。それとともに、都民の協力なくしては完遂でき得なかったことを忘れてはならない。
（中隊員）

模型作り奮戦記

特車　坂本　守男

私達広報係員は、今回の一連の大警備を前にして約一ケ月をかけ、担当区である羽田空港整備場地区等の模型作りをした。これは、新隊員や特機隊員の教養及び単に地図上だけでは良く判らない立体的感覚を得ることを目的としたものである。しかしさ製作するとなると、なかなかうまくできず、何度となく実査を行ない自分の目で確かめては作業を進めていった。

やっとできた模型は、警備会議等で活用された後、隊の正面玄関に展示されている。更に天皇御在位六十年記念式典警備のため、秋葉原駅模型の製作下命があった。この時は、時間もなく徹夜の突貫作業であったが階段や通路が一目で判る様に分解式の模型製作にかかった。

しかし、あとすこしで完成と言う所で当隊の任務が両国駅対策に変更になったので、再度、実査をやり直しての製作と、短期間のうちに二つの模型を製作することになった。

「式典」「サミット」警備も終り、模型の役割りも解除となったが、これからも広報係員が一丸となり各種警備の万全を期していくつもりである。
（広報係員）

気力をしぼって

特車　正田　実

私は卒配約四年になるが、このような大警備を経験したことはなかった。今回のサミット警備は、想像を絶するものであった。風雨の中、寝る間もなく警備にあたり、時には、連日の当番勤務とかって経験したことのない勤務が続いた。

待機時間のバスの中は疲れ果てた顔がいくつも並び、連日の疲労を感じさせたが、次の勤務の時間が近づくにつれその顔が生き生きとよみ返り、それぞれの配置についてゆくのを見て、私も気力をふりしぼって頑張らなければいけないと思った。

皆が苦しい時、一人だけくじけることはできない。警視庁バレーボール部に籍を置く私は、このサミット警備での教訓を胸に、日頃から体力の練磨に務め、今後もあるであろうこのような大警備に、努力精進してゆく覚悟を肝に銘じた。
（中隊員）

（第1ページより続く）

につかり、芋焼酎をくみ交せば、旅の疲れもとれ、いにしえの薩摩男子が声高らかに

我が胸の燃ゆる思いに比ぶれば
煙はうすし桜島山

と詩った雄大な気持に浸れるかもしれない。名産品の一つである芋焼酎は、銘柄三百とも云われ、中でも幻の焼酎と呼ばれる人気となっている。

佐多岬
本土最南端の佐多岬は、東に太平洋、西に東シナ海を望み、岬の灯台に通ずる自然遊歩道の両側には、生息の北限と云われるソテツ・シダ類が生い繁り、熱帯のジャングルを思わせ、訪れる人を秘境の地へと誘ってくれる。また、この地は磯釣りのメッカで、釣れる魚も上物から底物までと幅広く、県内外の釣り人が繁く足を運ぶ好釣り場となっている。

まだ、素晴らしいところが沢山あるが百聞は一見に如かず、武の国、薩摩へどうぞ。

恵まれた海と緑溢れる千葉

千葉県警察本部広報課

千葉県は、明治六年に安房・上総・下総の三国が合併して生まれた。現在二十八市四十七町五村からなり、面積は約五千百四十三平方キロメートルで、人口は五百余万人に達している。

冬に花咲く外房周辺

内房の突端、洲の崎をまわると大海原が大きく開け、外房の荒磯に太平洋の荒波が押し寄せる この地域は、黒潮の影響で冬でも霜がおりることはない。

特に早春の白浜から千倉、鴨川あたりでは、キンセンカや水仙など、色とりどりの花で埋まるこの地を訪れる観光客は後をたたない。

漁港のまち銚子

NHKの連続テレビドラマ〝澤つくし〟でその名を全国に高め、古くは犬吠崎で知られる〝本州最東端のまち〟銚子。海の幸と風光に魅せられ多くの観光客で賑わっている。犬吠崎にそびえる白亜の灯台（一八六六年にリチャード・ヘンリー・ブラントンが設計、明治七年一八七四年に初点灯）は有名で、眼下に水平線が望め、新春には初日の出を見にくる人が多い。

日本でも有数の〝銚子漁港〟では、全国各地から水揚げされるサンマ・イワシ・カツオなど新鮮な魚類を買い求めることが出来、一般には珍らしい〝サンマの刺身〟なども有名である。

雄大な白い九十九里浜

太平洋の大海原が果てしなく広がる九十九里浜、太東岬から刑部岬まで六十六キロメートルに及ぶ白い砂浜と松林が織りなす雄大さはみどころといえよう。

九十九里浜の名の由来は、その昔、源頼朝が家来に六町（約六百六十五メートル）ごとに矢を立てさせたところ九十九本の矢が立ったところから九十九里浜といわれているそうだ。

太陽と緑の沖縄へどうぞ

沖縄県警察本部総務課

東京から南西へ約千七百キロ、日本の最南県沖縄から蘭の花の便りをお届けします。

沖縄那覇空港から、国道五十八号を車で約二時間北上すると、ランセンターのある海洋博記念公園に着く。国道五十八号の市街地を抜けるとサンゴ礁の青い海が広がる。この鮮やかな青い海をみながら、沖縄でよく歌われている芭蕉布の詞

海の青さに　空の青
南の風に　緑葉の
芭蕉は情けに　手を招く
常夏の国　我した島沖縄

の南国情緒豊かな甘いメロディを聞きながらしばらく北上を続けると、景観のすばらしい本部半島の一角にお目当ての沖縄海洋博覧会記念公園内の熱帯ドリームセンターに到着する。

熱帯、亜熱帯の花が咲き乱れ、夢の殿堂として今年二月にオープンした熱帯ドリームセンター中でも人気を呼んでいるのが、東洋一のランセンターと紹介される三つのラン温室である。

千四百七十八平方メートルの温室内壁を利用して、熱帯、亜熱帯の植物が植えられ、それを背景に熱帯の自然を演出しながら、変化に富んだランの展示が行なわれている。

いかにも、自然の中に地生しているかのように華麗に咲き誇っているランに思わず見とれてしまう。

花の女王、あるいは豪華、華麗な花として知られるカトレア、緑色花で唇弁が大きく、緑と白と黄色が可憐に調和したメモリア、ヘレン、ブラウン、沖縄で広く愛好されているデンドロビューム、ファレノプシスなど千七百種、八万五千株が展示されている。

開花調整で一年を通じて観賞できるのが魅力で、訪れる人々は思わず「キレイ、ワンダフル」を連発、花に見入っている。一見の価値あり、沖縄へおこしの際はぜひどうぞ!!

〝沖縄海邦国体対策準備着々と〟

きらめく太陽、ひろがる友情をテーマに開催される第四十二回国民体育大会（海邦国体）を来年に控え、沖縄県では、その準備が着々と進められている。

県警察本部では、昭和六十年四月に警備部内に国体対策課を設置し、警衛警備の万全を期して取り組み中である。

読者の広場

熊本・神風連（しんぷうれん）

麻生　博

熊本は遠い無縁の土地であった。十年前、当社に移ってから当地に工場があるので、以来しばしば訪れるようになった。

東に阿蘇の山なみ、西に島原湾・八代海を隔てて島原半島・天草諸島を望んでいる。阿蘇から流れ出る水は清くうまいし、樹々は多く緑もまた深い。西南の役の決戦場田原坂の近くの古墳群には、古代の遺跡トンカラリンという隧道がある。麓から杜のある小高い山頂まで長いトンネルが続いていて、古代人が何の目的で造ったか、未だに謎である。土地の人々は邪馬台国卑弥呼の里と信じている。

市の中央には、加藤清正が大阪城・名護屋城・蔚山城造築のノウ・ハウを生かして築いた熊本銀杏城が聳えている。細川家が三代かかって造営したという水前寺の名園もある。清正を祭ってある妙法寺の境内は広大であるし、細川家の菩提寺泰勝寺では、細川ガラシャ夫人の墓が眼を引く。

熊本から竹田を経て大分に至る七五号線（旧参勤交替道）に沿って、大きな石碑が武蔵塚である。街には武蔵ケ丘なる新興住宅地の外に「武蔵うどん」「武蔵ずし」その他武蔵の名が氾濫している。鹿児島の西郷どんのように、武蔵は土地の寵児でもある。寵児であるので、墓の数も三ケ所もあるようだ。武蔵塚の外に前述の泰勝寺にも、又、武蔵が「兵法五輪書」を書いた霊巌洞岩戸観音の境内にも、その墓と称するものを見た。岩戸観音への途中、漱石の「草枕」に出て来る峠の茶屋がある。

肥後熊本の人では、宮部鼎蔵に私はひかれる。幕末元治元年寺田屋で新撰組の襲撃を受け死するのであるが、生前、吉田松陰、高杉晋作等が、事が行き詰まると相談した貴重な人物であった。

熊大（旧制五高）の傍らの桜山神社に宮部氏の遺跡があると仄聞して訪れた。社前の鳥居わきに「宮部先生・大田黒先生外百四十四士之墓所」と記した石碑が立っていた。境内奥まった所に、宮部氏等維新に殉死した二十三士の記念碑の外に「百二十三士之碑」があり、その前に百二十三の墓が二列に並んでいった。末端にやや小型の「義犬之墓」もある。神風連の墓なのである。

明治維新後、不平士族の反乱、佐賀・神風連・秋月・萩等の乱が相次ぎ、西南の役を経て、明治新政府は確立するのである。神風連についての私の知識は乏しく、極端な国粋団体であり、電線の下を扇で頭を覆うて通ったとか、襲撃をうけた鎮台種田少将の妾が打った、「旦那はいけない。私は手傷」という電報が日本最初のものであるとか、断片的な逸話にすぎない。境内の資料館に当時の資料が陳列してあって、全貌を明らかにしている。

神風連は、宜長・篤胤の流をくむ古神道を信奉していた林桜山の指導の下に集った敬神を第一義とする宗教的集団であったようだ。

明治政府が神武復古から文明へと、かって同僚であった政府高官もまた攘夷から開化へと変貌して行き、従来の王政復古・攘夷の指導理念が次々に放棄されていくのである。明治九年二月廃刀令、六月断髪令が出る。頭領たる大田黒が、「宇気比（うけひ）」という神事で啓示を受けて、十月蜂起する。一夜にして破れ、三十人程が戦死し、残りの殆どの人が、尽忠報国の切々たる辞世の句を残して自刃している。実に美事な進退で他に類例のない異彩である。夫に殉じる妻もあるし、小篠四兄弟のようにそろって自刃した者もいる。小篠の末弟源三（十八才）の愛犬トラが墓前で与えられる食物も絶ち餓死している。「義犬之墓」の主である。

一連の乱が政治色の強いのに反し、神風連の乱は政治色の薄い、精神的色彩が色濃い。三島由紀夫が文化的活動であると云っている程である。古神道を奉ずる幕末の思想家活動家の悲劇である。島崎藤村「夜明け前」の主人公青山半造は弧独の中で、神風連は集団の中で、それぞれの生命を失っていったのである。

スポーツに親しもう実年者

南川義宣

健康で明るく、活力みなぎる生活をすることは、私達人間に幸せを呼ぶことであり、大きな願いでもあります。

実年社会を迎えた私達にも、少しずつ老化が始まる年代であり、健康に老い、年代相応の健康や体力を維持することは大きな関心事であります。

実年を迎えた皆さん、身体を動かすことやスポーツで汗を流すことは健康に良いとわかっていても、億劫になってしまうことがありませんか！いざ始めようとして尻ごみしてしまったり、テレビの前でゴロ寝を決めこんでしまったり……身に覚えのある方が多いと思います。

世界から働き過ぎと言われる私達日本人にも、週休二日制の普及や労働時間の短縮などで、以前と比べて自由な時間がずいぶん増えてきています。また家庭の主婦にしても、家事にとられる時間がかなり減ってきているのではないでしょうか。「仕事中心型」から「仕事余暇両面型」に切替える人が多くなり、余暇を、健康的で活動的な体力づくりや、スポーツを大いにエンジョイしようとする人はますます増加する傾向になっています。

高齢化社会は必然的にやってきます。実年者は、時間的にも経済的にもゆとりが出来る年代だと言われています。夫婦だけの家族では、子育てに要した時間が減って自由な時間も多くなり、又、子育てからの解放は、時間的なゆとりばかりか経済的な余裕をもたらすもので、まさに実年者こそスポーツを行いやすい年代でしょう。

実年者が健康で、生きがいに溢れる生活を送るため、〝スポーツに親しもう実年者〟を大いに呼び掛けたいと思います。

時まさに青葉若葉に映える絶好のシーズンも到来しました。余暇をご家族で、仲間どうしで有力に過ごしていただく健康づくりの施設も全国各地にて、近年充実されてきております。

四十代は職場クラブ、五十代、女性は地域クラブ、高齢者は居住地域クラブの仲間たちでスポーツ教室、講習会で、運動公園やスポーツ施設を利用しようではありませんか。

故郷からの励まし

福島県西白河郡　中村英郎

私共の家は、新白河駅近くで福島県の西郷村ですが、新幹線の駅が「村」にあるのは当駅のみです。ホームから西側を展望すると、那須連峰の茶臼岳について甲子（かし）山が、誇らしく雄然とそびえております。

日頃機動隊員の皆様におかれましては、首都の治安維持の為、日夜を問わず警備にご多忙のことと御察し申し上げます。外国の方が訪日されて、東京の第一印象はという問いに、世界のどの国よりも治安、警備面に於いて充実しており、安心して仕事なり旅行が出来ると言った回答に、私共も同感です。

反面、残念に思うのが、昨年来より多発しているゲリラ行為で、無差別、非人道な行動を行う極左集団は、暴徒以外のなにものでもありません。検挙者の中に学校の先生とか、国鉄職員と云った公務に従事する者が含まれていた事実は、呆れると同様に情けないことです。同年代の暴徒集団と対応しなければならない任務をもつ機動隊員の皆様には、胸中誠に複雑なものがあると察しておりますが、確固たる信念をもって任務の遂行にあたって下さい。

今年は、国家的行事の天皇陛下御在位六十年記念式典と、東京サミット等が開催されました。いずれも順調に終わりましたが、表面に出ない縁の下の力持ち的役割りが、この逼しい警察の治安に対処する熱意と使命感に支えられていることはいうまでもありません。

義明も今年は年男で、人生の節目の年でもあり、多少とも機動隊の歯車の一歯として、心身共に健康に留意して任務にあたることを願っております。

（警視庁七機・中村義明中隊員の父親）

立派な警察官に

山口県美祢市　山本通夫

私は息子が大学を卒業するまでは、まさか警察官に、それも天下の警視庁警察官になろうとは夢にも思いませんでした。

工業高校、大学（電気科）を卒業すれば、当然、エンジニアの道へ進むものと思っていましたが、就職浪人になって選んだ道が本職となり、〝禍い転じて福となる〟の諺の通りとなりました。

思い起こせば、五十八年六月七日の中野警察学校の入校式の感動は忘れることができません。金色のモールに飾られた紺の礼服に身を包み、キビキビとした態度を見て、仮入校のわずか一週間で人間がこんなにも変わるものかと、りりしい息子の姿に万感胸に迫り、目頭に熱いものがこみ上げてきました。それと、校内の先輩たちの規律正しい行動に、東京都の治安を担う警察官として、強じんな心と体を培うための厳しい訓練と教育をうかがい知ることができ、あらためて心強く深い感銘を受けました。

警察官は申すまでもなく、品行方正で然も健康体でなければ務まりません。高い競争率、そして厳しい採用試験に無事合格し、息子が警察官になったことを親として誇りに思っております。

これまで家族全員が人から後ろ指をさされないこと、人に絶対迷惑をかけないことをモットーにしてきましたが、息子の面目を潰すことのないよう努めていきたいと心を引き締めた次第です。

息子も警察学校で会得した使命感とプライドを念頭に、都民の信頼に応える立派な警察官になるための勉強と、体力鍛練に精進することを願ってやみません。

不束な息子ですがよろしくご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。それに皆様方の益々のご活躍とご健康を心よりお祈りいたします。

（警視庁八機・山本光弘中隊員の父親）

お知らせ

▽当励ます会の千葉支部総会が七月十八日（金）午後四時から千葉グランドホテルで開催されます。ご参会お待ちしています。

▽六十一年度の会費未納の方はお早目にお願いします。

ゲリラ許さじ技練る機動隊

㈱三榮商会　村山文雄　大洋製鋼㈱　栗田工業㈱　大東港運㈱　東京ニッケル㈱　山陽特殊製鋼㈱　高周波熱錬㈱　廣慶太郎　木村利秋　橋山和正　国見山㈱　中京製線㈱　東海鋼材工業㈱　岡谷鋼機㈱　内外運輸㈱　日鐵ボルテン㈱　金廣鋼材㈱　㈱辻作次郎商店　㈱上野百貨店　仙台運送㈱

はげまし

発行所
社団法人 機動隊員等を励ます会
東京都中央区八重洲2-4-14
〒104 ミツヤビル3階
発行人 鈴木 實
TEL 03(272)2050
購読料 年間1200円(送料共)
(但し会費の中には購読料を含む)

第10回通常総会並びに懇親会 充実へ

国民と警察のかけ橋に

機動隊員等を励ます会の第十回通常総会並びに懇親会が六月十九日十五時から東京半蔵門会館で開かれた。東京サミット等一連の大警備を完遂した機動隊員等に対する励ます会のはげましにも一段と力が入るものだ。過激化の一途をたどるゲリラの季節に備えて機動隊員は引続き努力精進しているが、そこは当励ます会の全面的な激励が心の大きな支えとなっている。

昭和四十九年三月、有志によって任意団体としてスタートした当励ます会は、満十二年を経過した。五十二年、社団法人に衣替え、第一回通常総会が開かれたが、現在では会員数一万二千名の全国的規模に拡大発展している。

第十回通常総会は、定款に定めた過半数（委任状共）の出席を得たことで、村山文雄理事が総会の成立を報告、鈴木實理事長を議長に、第一号議案（昭和六十年度事業報告並びに昭和六十年度収支決算承認の件）と第二号議案（昭和六十一年度事業計画案並びに昭和六十一年度収支予算案承認の件）がそれぞれ異議なく承認された。

功績者を表彰

総会終了後、来賓と機動隊員等代表約百五十名を招いて、励ます会会員との懇親会が始まった。

挨拶に立った鈴木實理事長は「この十年来、こうした場を持って隊員達と親しく接触、感謝と激励の意を表わしてきたが、さらに惜しまない支援を続けていく」と語り、功績者を表彰した。

当励ます会の発展に功績のあった清水建設株式会社に感謝状と記念品、また青柴謙之介、庄司春吾、中垣英男、西戸榮一、村上益一の諸氏に表彰状と記念品がそれぞれ贈呈された。

長官と総監が祝辞

来賓として警察庁山田英雄長官は「励ます会が堂々たる組織で物心両面にわたるはげましには衷心から敬意と感謝の意を表する。現在は過激派ゲリラ封じ込めのため努力しているが、これには国民の協力が必要であり、このかけ橋となるのが励ます会でもある」と挨拶。

また、警視庁鎌倉節総監は「かってない大警備も警察の総力結集で無事終ったが、国民からの暖かい支援、とくに励ます会からの熱烈なるはげましで力強く感じた。機動隊は精鋭による集団警備力を発揮、治安最後の砦とされるが、今後ともはげましをお願いする」と祝辞を述べた。

励ます会佐々木喜朗副理事長による乾杯の音頭をきっかけに、隊員と会員の交流が大きく盛りあがった。嘉悦学園女子短大生の応援接待で華やかさが加わり、徳間ジャパンの協力による歌手の登場などで会場は熱気に包まれた。

木村政次理事の発声による万歳三唱で一応幕を閉じたが、心暖まるはげましに若い隊員達はいずれもさらに頑張っていくと顔を紅潮させていた。

中国支部総会 感謝と激励

機動隊員等を励ます会中国支部の六十一年度総会並びに懇親会は六月十一日十七時三十分より広島県社会福祉会館で開催された。中国管区と広島県警機動隊員等百三十名を招き会員含めて約三百名の大盛会となった。

当励ます会を代表して、柳本武一中国支部長と鈴木實理事長がそれぞれに隊員の日頃の苦労をねぎらうとともに支部の拡大をはかっていくと挨拶した。

来賓として中国管区河村一男警察局長と広島県警察漆間英治本部長（代理）が「はげましを感謝すると同時に、期待に応えていく」ことを力強く語った。

松田武彦理事が乾杯の音頭をとり、隊員による余興を加えた懇親会は、時間の過ぎるのを忘れさせるほど高まった。

今月の言葉

富める国日本の課題

去る五月の東京サミット会議は、日本で開催された第二回目のサミットであり、各国首脳も「これまでのサミット中で最も成功したサミット」と受け止めたようだ。それは、リビアを名指しした国際テロに対し、どの先進国も国際的な秩序を乱す勢力は認めないという毅然たる姿勢を明示したことである。また、何よりも大きな成果は、昭和四十八年の第一次オイルショックによる世界的経済危機に対処しようとして五十年に第一回のサミットが開かれたが、十一年が経過した中で、ついにその石油価格の値下りが本格的に定着したことである。その意味からすると、今回のサミットで、所期の目的は完全に達成されたと言えよう。

サミットの本来の目的は、オイルショックのような経済危機に直面した際、先進国が自国本位の経済政策、殊に保護貿易政策により世界経済を混乱させるのではなく、各国が協調して自由貿易政策を推進し、世界経済の安定をはかる為に始めたのが発端である。今までのサミット会議でも紆余曲折はあったにせよ、この方向での努力が進められ、保護貿易政策の回避が出来たことは高く評価できる。

しかしながら、富める国日本が、先進各国の羨望により批判を受けたことは見逃せない。それは我が国の国際収支の大幅黒字の現実である。もともと日本は資源が乏しく、一次産品の輸入により、付加価値をつけて製品輸出をしている輸出国である。それが今年になり原油価格が暴落した事により、原油輸入大国でもある日本の輸入額は大幅な減少となるに至った。その結果、日本の国際収支への影響は他の先進諸国より極めて大きく、輸入全体の減少は二五〇億ドルとも言われている。従って日本の貿易収支の黒字は、昨年の五六〇億ドルから更に増大して今年は八〇〇億ドルにもなると予想されている。この情勢が円買いドル売りを刺激する最大の要因であり、急速なる円高傾向となって表われた。

その為、先進国は日本に対して輸入枠の拡大や輸出規制により、貿易収支の均衡を求める姿勢を一層強く打ち出してきた。日本としても国内需要の拡大、企業の海外進出等々、国際摩擦の解消に向けて対応策を打ち出しているが、国際摩擦はもはや構造的なものとなり、経済面・産業技術面での相対的優位はよほどの事態が起らない限り、今後も続くものと思われる。

もっとも今日の国際情勢をみると、日本が従来の輸出型から国際協調型へと自ら進んで構造改革を行われなければ、日本は国際社会の孤児となり、真の日本経済の発展はあり得ないと思われる。

従来はもとより、今後益々複雑化する国際舞台での経済成長、政治外交を飛躍発展させる為の原動力は国家治安である。特に今回の東京サミットでの万全な警備体制は、治安国家日本を国内のみならず全世界にさらに印象づけさせ、各国首脳より賛辞を受けたこと、英国王室来日、天皇御在位六十年等重なる行事での警備は誠に見事なもので、機動隊の力に負うところが大きいものと高く評価する次第である。

日本国家の繁栄は、政治の安定・経済の発展によることは当然ではあるが、世界に冠たる機動隊を中心とした日本の良好なる治安維持があってこその経済発展、ひいては国家の繁栄がある事はいうまでもない。かかる意味において、私は機動隊の皆様方に対し、日本国民の一員としてここに改めて深甚の謝意を表するとともに、今後とも一層の御奮闘御努力を期待するものである。（西田鉄男）

サミット警備裏話

警視庁機動隊

機動隊を中心とした警察の総力をあげて取り組んだ四月末から五月にかけての大警備は、内外の高い評価を受けた。本誌6月号に続いて今月号は警備裏話と題して再び大警備のエピソードを綴って貰ったが、いずれも警備完遂目指した強い責任と意気込みで臨んだことがひしひしと感じられる。

小さなサミット警備

一機　田嶋幸一郎

この一ケ月間の、連日連夜にわたる厳しい勤務の連続は、体力の限界への挑戦だった。が、無事完遂し、この上もない喜びと同時に、何か肩の荷がおり、さわやかな気持ちである。この厳しい勤務の中にも、それなりに楽しい面もあった。

当隊はアメリカ大使館・ホテルオークラ地区の警備を担当したが、その中で、おもしろいエピソードを紹介したい。

それは、アメリカ大使館・ホテルオークラ地区に入る車両の検問を実施していた時のことだった。通行車両のスピードを落とさせ、選別を容易にするために、道路にセフティーコーンをS字型に並べて誘導していた。そこでたまたま検問を受けた運転手が、我々に対し「ここは、教習所なんですか」と冗談まじりに言ったひと言は、相互に苦笑いの中にも、何かほのぼのとした一場面であった。

私が一番嬉しかった事は、同じ場所で、検問中の私達を励ましてくれたアメリカ人ビジネスマンのひと言であった。ホテルオークラにはアメリカから来日し、滞在しているアメリカ紳士がいる。その中の一人は毎朝ジョギングスタイルで検問している横を通り、片言の日本語で、「オハヨウゴザイマス。マイニチ、タイヘンデスネ」と声をかけてくれた。

ふり返ってみると、各国首脳が次々に離日していく様子が、基幹系情報で流された時の感動も大きいものがあったが、検問をやっていた我々と、アメリカ紳士達でも、小さなサミットが開催されていたといえそうだ。

（中隊員）

自信を生んだサミット警備

二機　中村　勝義

私はこの史上最大のサミット警備に、警備のプロである機動隊員として従事することができ、大変良い経験が出来て非常に嬉しく思っている。

わが隊は、高速対策というとで、さまざまな面で苦労し、危険もいっぱいだった。特に高速道路上では、一般車両は猛スピードで飛ばしてくる。そんな中での検問や突発(a)等の任務は、まさに命がけである。資器材等をフルに活用し、万全の態勢で臨んだが、一番困ったのはトイレであった。そこは飲物等を制限したり涙ぐましい努力で、なんとか解決した。

普段の重防警備とは異なり苦労した点が多いだけに、サミット警備を完遂した充実感というものは多大なものであった。私は、サミット警備を無事終えることが出来たいま、今後のあらゆる困難な警備に従事しようとも、それを乗り越える自信がついた。

他府県から派遣されてきた機動隊の方々は、地理不案内、環境の変化等種々の苦労があったと思う。そんな苦労の中、我々と共にサミット警備を無事成しとげられたことは頭のさがる思いで一杯だ。

我々第二機動隊員は、一人の脱落者・病人等も出すことなくこの厳しい勤務の中、サミット警備の完遂をを合言葉にやり遂げることが出来たのは、日頃から柔剣道、マラソン、各種警備訓練で汗を流した賜物だと思う。そして、皆んなが心をひとつにし、警備に当ったからこそ、この史上最大のサミット警備を乗り越えることができたと思っている。

私は機動隊員としての誇りを持ち、日頃の訓練を怠ることなく、訓練で泣いて本番で笑えるよう、常に誠実に取り組み、次の東京サミットでは幹部として従事できるよう、残された機動隊勤務〃俺がやらなきゃ誰がやる〃というチャレンジ精神で、燃えて燃え尽くすまで努力精進する覚悟だ。

（中隊員）

幻のC号ヒット

三機　児玉　孝之

副隊長指揮で、米国大使館常駐警備に従事した時のことである。米国大使館の南側約四十メートルに位置する場所で、外周道路から車がやっと通れるような細い道に通ずるビルの敷地に配置された。

最後の砦である。この直近から火炎車、爆発物、あるいはロケット弾を仕掛けられたらもう終りである。この担当区は道は狭いが、ビル内に出入りする関係者が多い。来る者、来る車両すべて職質をするが、車がどんどんと駐車をしてしまうので、一回の職質にそれほど時間をかけてはいらない。

私の担当区内に入る車両はすべて検問を済ませてあるが、「サミット」という国全体にかかわる重要な警備だけに、〃もしも〃ということを考えると、人を頼りにする訳にはいかない。

隊長、副隊長が言われたように「自己の担当区の徹底検索、自分の場所からは、ゲリラなど不法行為は出させない」という気構えで当たらなければならなかった。

この日もいつもと変わらない。しかし、またサミット開催に一歩近づいた日であった。道を知らないのか、落ち着きのない軽トラックの運転手が目に入った。まず、自分が職質をするのだが、これで何百回であろうとも、相手は今日生まれて初めて出会った人である。いくら自分が疲れていようが、言葉づかいには注意をしなければならない。

少し話をすると、「何かおかしい」という勘が働いた。総合とナンバー照会を実施。C号がヒット。オートバイ盗の歴もある。さすがに皆、気を張っている。一分もしない内に運転手を確保。逃走防止の措置がとられた。

特務主任が事情聴取、しかし、肝心の自供が得られない。そこで赤坂署へ任意同行を願った。結果は、その車は二年前盗難に遭ったが、被害者が自分でその車、〃発見し、発見届を提出しないで業者に売却したため、それを購入した会社員が、該場所に乗りつけたものと判明した。

C号ヒットの車両は幻に終ったが、私はこのサミット警備を終えて、苦しい時にこそこれを乗り越えることができる警視庁機動隊の素晴らしさを知り、同時に厳しさを知った。〃東京サミット〃私の警備人生の中で、また大きな一つの思い出となった。幻の車と共に。

（中隊員）

サミット・ベービー

四機　木原　晋

「今年は警備の年」、我々機動隊員の最も活躍する年である。とりわけ主要国首脳会議警備が初期の目的を完遂し終了した。

我が隊は隊長のもと、昨年から「サミット完遂」という一つの目的に向かって、ひたすら「妥協なき訓練」を合言葉に、体力・気力を養い、担当区である「ホテルニューオータニ」を敵の攻撃から守るべく隊員一人ひとりが「精鋭無比」となり死守したのである。

私は第三中隊の伝令長として、百二十パーセントの力を出し切った。その中から、私の見た笑いと裏話しをひろってみた。

一　下痢に泣いた小隊長

五月に入り、まさにサミット本番、今まで鍛えた体力・気力を発揮する時である。当番・日勤で全員疲れている時、F小隊長「もう十日も下痢が続き、六日間も食事をとっていない」そうである。何を食っていたのか、目だけが異様に光っていたのが印象的であった。

二　新婚部長ラブコール

五月に入り勤務は厳しくなり、五日も六日も隊に泊り込む日々が続いた。まして家庭への連絡も跡絶えがちであった。

昨年末結婚したY巡査部長、今まで何があろうと妻に対する定時連絡は有名であった。しかし、サミット本番になるとそうはいかない。やや心身共に疲れ気味であったが、三日目、自宅から電話があった。幹部いわく「何を考えているのか」、本人は命の次に大切な妻からのラブコール、他人が知るよしもない。毎日元気でさわやかな顔をしている。

三　出産をしないサミット・ベービー

新隊員のM巡査の妻は、五月六日が出産予定であり、四月の終り、準備のため実家に帰省している。

サミット期間中に生れれば「M、サミット」と名付ける等言っていたが、その名前が気に入らないのか、一週間過ぎても全く生れる気配なし、ベービーいわく「落ち着いてから生れるよ」、ともあれ元気の良い丈夫な赤ちゃんが生れてほしい。

何はともあれ、サミット警備は終了した。しかし、我々機動隊員に残された反省点は数多くあり勉強させられた。

（中隊員）

サミット警備あれこれ

五機　麥田　裕之

史上空前の警備と言われたサミット警備も緊張と多忙の中で終りを告げ、今、束の間の休息の時を得ている。今までの多忙極まりない警備を振り返ると数々の出来事が浮かんでくる。その中の興味ある話をいくつか述べてみたい。

この何ケ月間か、二交代勤務が続いて散宿隊員は自宅に帰ることなく、隊の教場に特設された待機場所で休憩をとった。この時大活躍したのが「畳」である。筑波万博で活躍できず、邪魔者扱いにされたおびただしい畳が、わが隊倉庫に眠っていたのである。ここに来て一気に陽の目を見ることができ、隊員達は疲労をいやすことができた。本警備の功労大である。

さて、本警備中、迎賓館で合わせて七発の飛行弾がとんだ。「隊員が気迫でコースを変更させた」と自負しているが、その時の緊張は言葉には言い尽くせぬものがあった。万全の警備に徹するが、もし何か飛んできたら皆で手づかみにしようと確認し合っていたが、いざ本番になるとなかなかそう簡単にはいかない。

迎賓館周辺の検索も蟻の子一匹通させぬ徹底ぶりであった。ある隊員は勢い余って「迎賓館の住人」体長二メートルに及ぶ青大将の頭をこづいてしまい、蛇に足をかみつかれてしまった。傷は軽傷であり、青大将も迎賓館に侵入する不審者と間違えたものであろうと身柄を拘束することなく説諭処分としたそうである。

こんな話もある。迎賓館当番勤務中、ある分隊長が本隊残留部隊員と交代した。表向きの理由は事務処理のためということになっている。本当の理由は短い休憩時間に発する寝言がうるさいことが原因であった。この分隊長を中心として五メートル四方は、休むことができなかったということである。

これだけ厳しい勤務に従事したにもかかわらず、誰一人として病気で休む者もなくこの大警備を終了できたことは第五機動隊の誇りであり、私も参加できたことに言い知れぬ満足感を覚えている。この貴重な経験を活かし、今後の隊務に精進していきたい。

（庶務係員）

羽田空港の一週間

六機　安藤　薫

サミット本番が始まった。いよいよ今日から、広報係員として今年の始めから準備してきた空港警備が続くと思いながら、着替えをたっぷり詰め込んだバックを持って家を出た。

ときには眠らずに作ってきた、約百枚の看板が役立つだろうと期待し、その自信も十分に持っていた。それからの毎日は、その看板に苦労させられた。各国首脳の来日が終ったと設置した看板の撤収、夜十一時を過ぎたら翌日の為に一部の看板を設置する。朝は部隊より先発して、残りの看板と高所対策車でオーバーハングの看板を取り付ける。昼間は各配置場所で広報を実施する。まったく忙しく疲れる毎日の連続だった。部隊の配備に遅れずにできたのも、操車係や技術係の協力のおかげだと思う。

私の担当は第二到着ロビーだった。規制中のロビーからモノレール駅へ逆流する人がとても多く、人の流れを左に流さなくてはならなかった。

空港に到着して帰りを急ぐ人は、どうしても最初に目につく正面の通路に進んでしまう。『モノレールの入口は左側です』と書いてある看板の下で「モノレールを利用の方は左へ進んで下さい。中央通路からはモノレール駅へ入れません。左側の出口を利用して下さい」と広報していると、「モノレールの入口はどこですか」と聞いてくる人や「モノレールで帰ろう」と言いながら規制中の通路を進もうとする人がいる。ガックリと力が抜けてしまいそうな事が何度もあった。人のせいにするより、看板のでき具合…と、貼る場所が悪かったのかと反省。応急措置で文字を加えたり、新しく作ったりして何とかやりくりすることができた。

あと何日だ！と残りの日数を数えながら過ごした一週間、体は重く腰は痛く、疲れたけれども気持は充実してとてもやりがいのある一週間だった。

一つ、広報の仕事とは関係なかったけれども印象に残ることがあった。タクシー乗り場でケンカをしていた若い男の被疑者を追いかけて捕まえたこと。まさかチケットロビー前で派手に追いかけっこをするとは思ってもいなかった。

一週間ぶりに通勤姿で家に帰る時、季節はもう春を過ぎて初夏になっていた。（広報係員）

迎賓館警備異常なし

七機　奥沢　寛

私は、サミット直近の約二ケ月間のほとんどを、迎賓館周辺警備に従事した。その間のエピソードを若干書いてみたい。

まずこの期間中、報道関係者の数の多さには驚かされた。当

初、迎賓館正門などに配置されようものなら「やった、テレビに出るぞ、雑誌に載るぞ」と喜んだが、会議の開催が近づくにつれ、一部の雑誌等にあることないことが、興味本位に書かれ、すっかり報道関係者アレルギーとなってしまった。ある日、夜間の待機中のところへ突然、照明の強い光を浴びせられたときには、おもわず逃げ出したい衝動にかられてしまった。

また、外国人の取扱いについても大変困った。外国人と言えば英語という観念があったが、私が取扱った外国人は、チュニジア、ドイツ、フランスといった国の人々で、言葉がさっぱりわからない人達であった。自分は、今、全く知らない異国の地にいるのではないかという錯覚すら覚えたほどである。

ところで、私にとって今回の警備は、体の疲れ、また、足のだるさと睡魔との戦いであった。特に五月に入ると勤務も激烈を極め、疲労はピークに達した。車内待機の時も、大勢の人間を上回る資器材に埋もれて身動きひとつ出来ない状態、加えてうだるような暑さ、むしろ車内にいる方が疲れるのではないかとさえ思えるほどだった。

そんな状態でも耐えられたのは、サミット警備を完遂しなければという強い責任感があったからである。深夜、人通りもなくなり、無線の音だけが耳に入るようになると睡魔が襲ってきた。立番しながら居眠りするようなことがあってはならないので、私もその対策に頭をひねった。そして、隊歌を小声で歌うことが一番ではないかという結論となった。しかし、この方法は、人に気付かれると非常に恥ずかしいという問題を残したのである。もっともこれは、私歌唱力のせいでもあるが・・・

サミットでの思い出は尽きないが、是非とも一言紹介しておきたいのは、今度の警備を通じて、付近の住民、観光客、中には何回もの検問等によりわずらわしさを感じているであろう方までもが「本当に御苦労様です」との言葉をかけてくれたことである。サミット警備完遂の陰には、このような都民の理解と協力があったことを改めて認識し、深く感謝したい。

（中隊員）

警察手帳拝見

八機　薄井　義人

我が隊は、大警備のたびに高速対策という特殊な任務に従事する。今回のサミット警備も同様で、場馴れしている私たちは「高速の八機」という、いわば、当隊の代名詞になっているこの伝統に恥じぬよう一生懸命努力し、警備に従事してきた。

しかし、高速対策を大の得意分野としている私たちにとって、一つだけ顔をしかめたくなるような任務がある。それは、高速道路のトンネル内すべての事前検索である。検索といえば聞こえはいいが、中隊長から隊員の末端まで一人ひとりが竹ボウキ、ブラシなどを手にして一日中トンネル内の側溝、換気口、ガードレールの支柱、天井までもくまなく点検し、あらかじめ用意しておいたシールで封印するのである。気分はまるで炭鉱夫のようである。

封印作業についてのエピソードは高速対策の伝統の中でも数多くあるが、今回は、千代田トンネルに向かう途中で思いもかけないハプニングが起きてしまった。

私たち十数名は、小型のマイクロバスに乗車し、平場から高速道路にあがった。そろそろ目的地のトンネルに到着するので、全員が災害用の白ヘルメットをかぶりマスクを着装した。前回の警備ではトンネル内で気管をおかしくしたなどの悪いうわさを聞いていたので、各車両ごとに酸素吸入器が配布され、それでも心配な隊員は着装したマスクの上からさらにタオルで口を覆った。マイクロバスに積載してある資器材は竹ぼうき、ドライバー、ガムテープにカッター、その他もろもろで準備万端である。八機炭鉱夫部隊は覚悟を決め気合十分であった。しかし、どうもいつもと様子が違う。

その日は、たまたま他の部隊が、各ランプ等、高速道路の要点の配備についていたのである。私たちのマイクロバスが通過するのをみて、警戒員は驚いた様子で、無線のやりとりを始めた。昼食の時間帯であったので警備車両内で食事をしている者の姿も見え、私たちの姿を見るなり箸をおとしてしまった者も見うけられた。

そして、二ヶ所目の配備場所を通過しようとしたとき、ある警戒員が無線のアンテナを折りながら慌てて車から飛び降り駆け足でマイクロバスに近づいてきて、私たちに対し職務質問を始めた。我々全員が左胸につけているサミットバッチを指さし警備メモを提示したが、それでも彼らは、我々がほんとうの警察官であると信じてくれない。そのうち、「警察手帳をみせてくれ」などと言われ、このような〝モグラ作業〟では手帳を携行していない私たちは困ってしまった。偶然にも私たちの隊員の中に顔見知りの者がいて、顔と顔の確認で、その場を穏やかに静めることができたのである。

うそのような話であるが、その間、時間にして二十分間、警察官同志でも信じることができないサミット警備の愚直な姿勢を肌で感じた一幕であった。

（中隊員）

人生の記念すべき一ページ

九機　川眞田敏雄

今回のサミットはオランダ首相警護車の運転担当として、本警備に従事できたことを、私の警察人生の記念すべき一ページになったと心の底から喜んでいる。

サミット警備の万全を期するため、私達は三月にけん銃射撃訓練及び車両運転訓練を実施した。警護車両運転訓練で、担当指導員の気迫のこもった厳しい訓練に接するにつけ、その任務の　さを痛感した。

四月から私達は、警護課併任になると聞かされ、嬉しい反面とても不安であった。警護は(×)身辺の絶対安全の確保である。具体的な任務を警護課員の先輩に聞いてみるや「天災、人災等あらゆる危険から(×)を守る。手段・方法は自分で考えろ」と厳しく指導された。その目は真剣で、お前を短時間で一人前の警護員にしてやると言わんばかりの気迫が感じられた。よし、俺も伊達にSPバッチを付けているんじゃない。警視庁、日本警察の代表であるという気持で警護を実施するんだと意気込み、訓練に汗を流した。

本番を前にして、サミット警備記録の映画による視聴覚教養及び目的意識の高揚、体力作り、車両操作能力の向上、自ら仕事を求める姿勢、突発事案に備え綿密な実査、図上訓練を反復実施し、的確な警備措置がとれるよう努力した。運転訓練、地理、道順の研究等早朝から夜遅くまで、食事もそこそこに日夜、忙しい日々が過ぎて行った。

五月四日いよいよ本番である。市ケ谷自衛隊ヘリポートで車列準備完了。緊張のあまり気持の高揚が最高潮に達する。指揮官の「出発」の号令で、なにか吹っ切れたように平静さを取りもどす。ホテル・ニューオータニまで所要五分、頭の中で『このビルから物が投げられたら、交差点で不法車両が突入したら等の不法行為や不法事案を想定』警戒しながら宿舎に無事到着。朝早くから夜遅くまで突発日程に備えて拠点に宿泊、平均睡眠四時間ではあったが、緊張していたせいか全然眠くなかった。

五月七日、迎賓館から離日の途につくオランダ首相一行を乗せて離陸するヘリを見送った時、何事もなく無事任務を遂行できた満足感で胸が一杯になった。

本警備を完遂できたのも、影ながら応援してくれた家族の理解・協力の賜物と深く感謝している。この経験を生かし、警察人生の良き糧として、日々努力精進する覚悟である。

（操車係員）

トランク内の激励看板

特車　太田　忠夫

一　素早い立上りで後方治安万全

〝至急至急！寮裏非常ベル〟が宿直責任者T本部付の指示により、教務主任以下三名が隊の北側へ急行、他の二名は外周検索に入った。過激派が粉砕を叫ぶサミット会議直前の五月某日午前三時頃の学校応援部隊の至急報である。三分後、素早い立上りにより〝犯人〟を確保したところ、野良ネコと判明、一件落着。

当隊が誇る技術開発センターが制作した自慢の「センサー」が正常に作動した一幕であった。後方治安をあずかる庶務本部付もこの強い味方に思わずニンマリ？（以降、ネコゲリラ四件発生したことは割愛する）

二　招かざる〝珍客〟に大わらわ！

五月六日（雨）、一中・三中・五中・六中が深夜帯四キロ検問のため、二～三時間仮眠をとるとの勤務連絡が流れた。道場百組待機室四十組のフトンを宿直・庶務・会計が主となり用意、準備OKである。そんなとき雨水が五階道場の柱をつたわり、四階の第十待機室に〝侵入〟していた。とりあえずバケツ、洗面器五コ位で対応、さてさて過激派ならぬこの自然を相手に奮闘するハメになった。

こういうとき必ず陣頭指揮に立つのが会計係のO巡査部長である。隊施設についてはネズミの穴まで把握しているO部長の指揮のもと、道場の侵入防止班、第十待機室侵入防止班に分かれ作業にかかった。道場はビニールで雨水の進路変更に成功した。しかし、わずかながら柱をつたわる水は、待機室の天井を依然として浸しているのである。O部長は、ついに老体にムチをうって天井に転進した。作業すること三十分、どうにかくい止めることに成功した。隊訓の融和団結、自主積極の勝利である。

三　徹底検問の成果？

羽田空港入港者（車）に対する検問をサミット一ケ月前から当隊が担当していた五月某日、空港に向かう乗用車を検問、トランクを開けたところダンボール箱を発見、一瞬緊張したK隊員とM隊員であったが「激励、警備の皆さん江」を現認。問いただしたところ「少しですが皆さんに食べてもらおうと思って持ってきたカップラーメンです」と思わぬ「激励品」を発見して措置に戸惑うこと数分、現本に報告。現本を通じて受領することになり、両隊員と相手方の三者顔を見合わせ安堵。

この他、検問中トランクを開けたところ「おまわりさん、警備ご苦労さまです」「頑張って下さい」等の激励看板が非常に多く見られ非番の疲れをいやしてくれたことをつけ加えたい。

サミット無事終了！国民の理解と協力が最大の励みであったと声を大にしていたい。

（庶務係巡査部長）

瞳を凝らして

第一空港機動隊長　大沼　弘亘

我々の目は、物の姿を見るときそれが遠近、明暗、大小、動や静何れの状況に在っても瞳が絶妙の働きをし、最良の映像を取り込んでくれている。

ところで、物を見るのに意識して見る場合と漫然と眺めるときの差は極めて大きい。意識した場合の方がより正確に見える。また、見る対象についての有無によってもその捉え方が異なる。加えて、見る角度、位置、背景でも認識に大きく影響する。

我々空港警備隊員は、極左暴力集団等、不法行為を企図・実行を狙っているものと昼夜を分たず対峙し、各種警備活動を推進しているところである。

この活動の中で我々が見なければならないもの、捉えるべきものは、彼らの日常行動・発言等、平面的・外形的なものだけではいけない。

目に映る姿の裏に秘められた彼らの「真の目的」を正確に捉え、各種行動の中から「次の行動」をも見極め、更にはその本質を知らなければならないのである。

従って、彼らについては、瞬時も目を離さず、その鼓動、息遣いを知る位までの認識を我々一人ひとりが持ち、得られたものは組織に反映し、部隊活動にも生かしていく事が大切だと感じている。

さらに、我々は極左暴力集団等のみに目を奪われていてはならない。警察活動に理解を示してくれている多くの市民はもとより、協力に消極的な立場をとる人々についてまでも目を配り、我々が社会に果すべき役割＝治安維持＝を全うするには、どうしたら良いかを真剣に考える必要がある。

我々の活動の在り方、市民の意識や受け止め方、将来に及ぼす影響等、大局的立場に立って考え、しかも、現場活動の微妙さを処理する力を養っていかなければいけない。

私達は、黒い目を持っている。西洋人の様に「茶・青・黄」等の目を持つ者に比べ、黒い目は、微妙な色調等を見分ける能力が優れているという。

真剣に見つめてみよう。二つの黒い瞳を輝かせてみよう。今まで見えなかったものが、きっと見えてくると思うのだが……。

空の玄関守る

新東京国際空港警備隊

成田空港は空港警備隊の警戒するなか安全に運用されている。しかし、二期工事に反対する極左暴力集団は、ことある度に過激な街頭武装闘争を展開して一時たりとも目が放せない。

空の玄関を守るのは全国都道府県機動隊から特別に出向してきた精鋭達による混成部隊である。1年ないしは2年間、それぞれの故郷や家族と離れて任務に従事するが、その声を聞こう。

空警隊の思い出

一空機　半澤　健二

思い起こせば、桜の花もまだ咲かぬ昭和六十年四月二日に空港警備隊に着隊して、一年が過ぎた。

この一年を振り返ってみると、やはり思い出深いのは、四月八日、同十二日の連続飛翔弾事件である。

まだ新隊員訓練期間中で、成田空港周辺等の地理もほとんど分からない状況下での緊急出動。「旧工事局で、車に飛翔弾命中」とか、「五監視炎上中」などと、次から次へと入って来る無線情報を聞くたびに、「生まれて初めて体験する飛翔弾、成田への

（第4ページへ続く）

読者の広場

還暦を過ぎて

小野目　実

思えば昨年、人から「還暦ですね」と云われ、自分自身がそういう年になったんだなあという感慨にふけるとともに、六十年間の思い出が瞼に浮かんできました。

私は、大正十四年に愛知県西尾市に生まれ、一才の時に父親と死別、家業が男性ばかりの仕事であり、母親が若かったので、祖母に引き取られ、現在の豊田市（旧誉母町）で育ちました。

昭和初期に満州事変が起こり、十二年小学校六年の時に支那事変勃発、十六年中学校四年の時は大東亜戦争が起きました。特に思い出しますのは小学校の壁新聞に、盧溝橋で事変が起きたことを報していた頃のことです。

二十六才で寡婦になった母親が「お前が大きくなる頃には戦争は終っているなあ」といったその言葉が未だに忘れられず、軍国時代の追憶として残っております。

そう云われました私も、二十年最後の現役兵として、重兵第十三部隊に入隊しましたが、三ケ月足らずで終戦を迎え、十月四日復員、翌五日トヨタ自動車に復職しました。

トヨタでは、ノンプロ野球の一塁手として頑張りましたが、強豪大日本土木との都市対抗予選試合で、一塁守備の時にイレギュラーした球で生爪をはぎまして、爪がのびるまでの半年間に体重が増え続け、八十キロをオーバーしました。その後、長い間遠ざかっていたグランドにでましたが、球が怖くなり、スライディングが出来なくなったため、選手の資格なしと自覚し、野球部を退部いたしました。

三十四年七月に関係会社に出向、転勤となり、現在まで頑張って居ります。

今にして、六十年間をふりかえりますと、父の死、母の労苦、戦争体験、野球、仕事がこやしとなり、今の私をかたちづくったと思われます。

還暦を契機としまして、次の自分への最後の務めに全力投球して完全燃焼していきたいと思いました。幸いに私は体が丈夫ですので、大いに頑張って、後進に道を譲るために悔いのない仕事をしていきたいと、思う今日此頃です。

住めば田舎

滋岡長平

二十数年前、埼玉に隣接する此所大泉学園に住処を建て始めた頃、山の手育ちの上司からそんな草深い処に住むのかと呆れられたものである。

其の後、上下水道から電話迄整備され、西武の駅から朝霞に至る桜並木の表通りはレストランからスーパー迄華やかに立並ぶ街に成長したが、通りの両側のきちんと区画整理され、一方交通に規制されて居る住宅街は未だに閑静な環境を保って居る。昨今やや場違いなアパートも散見する様にはなったが、一戸建が大半で、広くても二百坪を越すものは少なく、略百坪内外に揃えられた家々は、銘々に植木や草をあしらった庭を持って居る。

従って花の絶えることはないが、特に春先は白梅に始まって紅梅、豊後梅、彼岸桜、辛夷と続き、染井吉野、木蓮など応接に遑がない。四月の末ともなれば万緑の中に八重桜、枝垂桜、楓嫩葉などが点綴し散歩の目を娯しませる。

二十三区の中で最も緑が多く、従って野鳥や昆虫の種類が豊富なのが我が練馬区である。野鳥で年中庭を占領して騒がしいのは青い尻尾を振る尾長鳥である。近所に棲む雉鳩の夫婦は仄暗い暁方に愛を語り合って我等の安眠を妨げる。肌寒い三月早々に隣家の梅林に屯して発声練習を始めるのは云わずと知れた藪鶯である。また猫の額の様な菜園に細々と育った搗菜を啄みつくしたのは嘴の黄色い椋鳥であった。

大泉の各所には小公園が散在して居る。牧野富太郎博士の記念庭園が学園駅の南側にある。高・低木から草木に至るまで博士由縁の約三百種が植栽され、仙台屋桜、大王松、肉桂、香橙、メタセコイア等が特に眼を惹く。碩学の九十六年の生涯を物語る記念館には「草を褥に木の根を枕、花を愛して五十年」亡き夫人を慕ぶ「世の中のあらむ限りや寿恵子笹」の書も展示されて居る。

また大泉町一丁目には、個人が区に提供した清水山の小公園があり、別名片栗公園と云われ珍しい片栗の群生地である。ほんのり薄紫の匂う白い可憐な六弁の花が大きな斜面地を点々と埋めつくして居り、三月から四月の中旬にかけて訪ねて来る人が多い。

「物部の八十少女らが汲みまがふ寺井の上の堅香子の花」此は万葉集の編者と目される大伴家持が任地の越中国府で詠んだ名歌で、カタカゴとは片栗の古名である。清水山にもその通り谷間に滾々として湧く泉があり、片栗は低湿の地を好むらしい。越中国府の故地、富山県高岡市には片栗の群落は既に無く、近年此所からの分苗を受けて栽培して居る由である。

云う迄もなく、我々の周囲から緑は徐々に失われて行きつつある。時の流れで自然の生態系が破壊されても、人類だけが永久に生き続けて行けるとは誰しも考えないであろうから、叡知と勇気を奮って自然の保存には努力が続けられよう。

それは兎も角、都心から相当離れては居るが、終の栖となる場所の選択に間違いはなかったと自讃し乍ら、厳しかった冬に堪えて再び青々と蘇った庭の樹々を眺めつつ、たまゆうの幸福感をかみしめて居る昨今である。

息子よ頑張れ

北海道名寄市　河村弘一

北海道の春の季節は遅く訪れます。半年の冬眠からさめ、周囲の高い山々は未だ雪で白一色ですが、川には雪溶け水が流れ出し、十勝川にも落葉を含んだ濁水が流れ、川幅を広げて海に流れ込んでいます。手近な山肌にはコブシの白い花、山桜のピンク色の固り等が見えたかと思うと、数日にして萌黄色の木々の若芽と変って行きます。

広い北海道ですので、桜前線は約一ケ月かかって通り過ぎて行きます。旅をする人には何度もお花見が出来て楽しい土地です。私は道内を転勤して歩きましたが、子供が小さい時に見た静内の御料牧場の桜並木の見事さは忘れられません。

帯広の隣り、池田町の十勝ワインは今流行の北海道一村一品運動の元祖です。町営レストランで、夕日の十勝平野を見渡しながらの『いけだ牛』のステーキとロゼワインは時の経つのを忘れさせます。

この広い大地と木々に囲まれた自然の中に育った息子から、東京に行って警察官になりたいと言われた時には、正直言って驚きました。身内にはその様な職業の者もなく、生活環境の変る地でとの心配が先に立ちました。しかし一年間の警察学校での訓練生活を受けた後は、見違えるように成長して居たので安心しました。警察官という職業を選んでくれて良かったと思います。

又、今年の二月からは機動隊で訓練中のことですが、仕事については、私共には治安活動をテレビニュースで見る位の知識しかありません。

機動隊の仕事は祭礼、花火大会等の行事の雑踏警戒や各種の災害発生に伴う救助活動、各国主要人の警備等と聞いて居ります。息子も早く一人前の隊員になるよう、日夜訓練に励んでもらいたいと願い、そして広い心を持った警察官であるよう希望します。

（警視庁九機・河村弘明中隊員の父親）

（第3ページより続く）

出向は始まったばかりなのに、これから一年どうなるのか」という思いが交錯し緊張は増すばかりだった。

それから一年、色々なことがあったが、その中でも特に思い出に残る事件と言えば、九・二九菱田地区でのデモ警備であり、成田にきて初めて極左暴力集団と衝突をした出来事だった。握り拳よりも大きい、しかもゴツゴツした石が雨の様に降って来て頭に当たった。その一撃は、ヘルメットをもまっぷたつ。それにも負けず、前へ前へと前進する部隊、本当に燃えたデモ警備であった。

私は宮城県から一年の出向として成田の地を踏んだ訳だが、各県から集まって来た同僚との出合い、宮城県では体験できないデモ警備等、公私共に学んだことが多かったが、帰県してからもこれらの貴重な経験をこれからの勤務に生かしていきたいと思う。

空警隊に勤務して

二空機　宍戸　博

私は、昨年四月に福島県警から出向してきた。福島県からの空警隊出向は、これが初めてではなく、正確にいえば第三次出向になる。第一次が昭和五十三年、第二次が昭和五十四年、以来実に六年ぶりの出向だ。

この一年で最も印象に残っていることは、なんといっても一〇・二〇警備であった。その中で、中核派の活動家一名を逮捕できたということは、私にとってこの上もない貴重な経験となった。また、場外勤務のマイクロバスの運転も記憶にとどめるところが大きく、厳寒酷暑の悪条件下、一当務に十六時間も運転したことがあった。

しかし、私達福島県警出向者全員が各級昇任試験に合格でき、また、このように厳しい勤務の中、病気や怪我がなかったことはなにより幸いなことだったと思う。

ただ、私にとって唯一の心残りは、二期工事の本格警備に従事しないまま帰県してしまうことである。引き続き在隊される皆さん、健康にはくれぐれも留意され、来るべき日に向けて頑張って下さい。

一年半を振り返って

三空機　谷口　実

昭和五十九年九月、成田用水菱田工区着工。この時私達は、まだ入隊間もない頃で、勤務については右も左も分からない状態だった。

当番勤務の連続で、しかも連日の非番勤務、そして当番日は早朝出勤と、厳しい勤務が続いた。一週間程たちやっと通常の非番日が来たが、この時程非番が嬉しかったことはない。一年半を振り返り、この時の勤務が一番厳しく、最も印象に残っている。

四月の火炎弾、九月の公団職員土木部長宅への放火ゲリラ、一〇・二〇極左との激突、一一・二九国電ゲリラ等、事案を身近に経験したことにより、通常人の常識では考えられない行動をする集団であり、許すことのできない集団である〝極左〟に対する認識を新たにした。

空警隊での勤務は厳しかったが、駅伝大会、柔・剣道大会特練への参加と、良い思い出もできた。ただひとつ残念なことは、休日を利用して関東各地を旅行したいという所期の目的が、厳しい勤務の状況からほとんど達成出来なかったことであるが、全国から参集した警察官と共に勤務し、多くの友人ができたことは、警察人生において大きなプラスであったと思う。これからも、成田で共に苦労した同僚を大切にしていきたい。

一段と厳しくなる情勢の中で成田を離れることは心残りだが、空警隊の活躍を祈っている者が京都にも多数いるということで許してもらいたいと思う。

寄付金

六月十九日付で黒田一氏、村上益一氏、西戸榮一氏、北原安定氏の諸氏よりご寄付がありました。厚く御礼申しあげます。

暑中お見舞い申しあげます

(株)周東商会　東鋼業(株)　杉尾榮俊　(株)スチールセンター　日誠総業(株)　高周波熱錬(株)　木村政次　谷本鉄鋼(株)　黒田一　村上益一　宮崎精鋼(株)　丸定産業(株)　伊勢湾海運(株)　中村是一　三和鉄構建設(株)　不動鋼板工業(株)　飯田正雄　中條鋼材(株)　近藤与助工業(株)　新潟鋼機(株)　三福商事(株)

はげまし

発行所
社団法人 機動隊員等を励ます会
東京都中央区八重洲2-4-14
〒104 ミツヤビル3階
発行人 鈴木 實
TEL 03(272)2050
購読料 年間1200円(送料共)
(但し会費の中には購読料を含む)

第6回千葉支部総会並びに懇親会

隊員を激励

強い使命感に燃える機動隊

当励ます会の組織は、社団法人として東京本部と全国に八つの支部を数えている。支部のなかで一番若い千葉支部も第六回の支部総会を七月十八日、千葉グランドホテルで会員二百名、これに機動隊員等約百名を招いて盛大に開催された。

機動隊は、警備実施の中核部隊として治安警備および災害警備にあたっているが、そのなかでも千葉県は成田空港を抱えているだけに、新しい〝ゲリラ〟の季節に隊員達の緊張は高まるばかりだ。

すでに国際空港二期工事の早期着工をめぐって反対同盟は「実力阻止」の構えを打出しており、わが機動隊の出番はますます増えてくる。

こうした隊員を励ますために開かれた支部総会および懇親会は開会の辞、国家斉唱に続いて殉職者に対する黙禱が捧げられた。

励ます会・小川郁雄千葉支部長と曽根貞雄・副支部長が歓迎の言葉を述べ、励ます会を代表して鈴木實・理事長が「隊員の日頃の労をねぎらい引続きの精迎を期待する」と力強く励ました。

来賓として沼田武・千葉県知事、菊岡平八郎・千葉県警察本部長と松井旭・千葉市長がそれぞれ祝辞を述べ、励ます会から機動隊へ記念品が贈呈された。

鈴木勝美・空港警備隊長が「今後とも警備万全で期待に応えていく」と謝辞。千葉支部・井上金次郎世話人の乾杯の音頭で懇親会に移り、最後は千葉支部・菅浦一世話人の万歳三唱で閉会したが、こうした励ましを受けた若い隊員は全員が強い使命感に燃えていた。

自然災害の救助活動

警視庁機動隊が合同訓練

九月は大風、風水害の月といわれる。北太平洋の熱帯で発生する、域内の最大風速が十七メートル以上の強い低気圧を台風といい、大西洋の熱帯で発生してアメリカ大陸を襲うものをハリケーン、インド洋に発生するものをサイクロンと呼ぶが、我が国は地象的・気象的にも地震、台風や大雨による自然災害が起こりやすい。

こうした災害に対する諸対策がいろいろ構じられているが、天災を完全に回避することもできない。この中で自然災害に対する救助活動も機動隊の主な任務のひとつである。日頃からの訓練に怠りないが、これに寄せる国民の信頼は年々高まっている。

警視庁機動隊の風水害警備合同訓練が七月中旬、東京・江戸川大橋上流左岸河川敷で披露された。

訓練は「台風の接近に伴い都内全域が記録的な豪雨、崖崩れや道路冠水のため通行不能の状態が随所に発生、一部堤防が決壊した」ことを想定して行われたが、樗原正博副総監を査閲官とし、総指揮官が樋口久稔第一機動隊長、参加部隊は機動隊及び特科車両隊が一千二百名、航空隊（ヘリコプター三機）十七名、他に警備犬二頭といった陣容である。

機動隊員による浸透防止のシート張り工法、洗掘防止の長フルコン工法、地下街入口等の浸水防止都市型工法、漏水・噴出防止の釜築き工法、マンホールの漏水噴出防止工法、被災者安全渡河の架橋工法、越水防止の積土のう工法、越水防止の鋼板せき板工法、また、夜間における埋没家屋等からの救助やヘリコプター・舟艇による漂流者の救助が相次いで展開された。

常日頃から鍛えてきた機動隊の合同訓練で見せた的確で素早い動きは、一旦事ある時にわれわれ国民の生命と財産を守ってくれることが全面的に期待されている。

今月の言葉

切　匙

どこの世界にも御節介が居る。私の知合いで、「ジェネラル・ビジィボディー」という綽名のアメリカ人がいるが、「御節介閣下」とでもいうのか、軍籍もない筈なのにジェネラル（将軍）の称号を受けているのだからよほど堂々として余計な世話をやき、周りの人を辟易させているに違いない。私自身も、多分に御節介だと自認しているが、スケールが小さく、せいぜいキャプテン（大尉）ぐらいのところだと思っている。

おせっかいの語源は「切匙」。切匙は杓子を縦に半分に割った形の、江戸時代からの台所用具で、スリバチの内側についた味噌などを、ほじくり出すのに使う。つまり、細かいところまで行きとどく意味だという。

ところで、この言葉についてだが〝おせっかい〟は〝面倒見が良い〟のと根本的にちがう。つまり前者は自分の尺度でものを考え、ひとに押しつけるから迷惑がられ、後者は相手の尺度で考え行動するから感謝される。

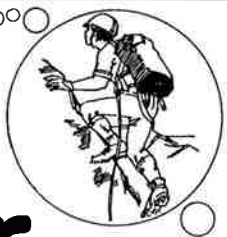
よくあることだが、エレベーターに乗っていて、乗り遅れそうな人のために、閉まる扉を押さえる人がいる。ほかの乗り合わせている人たちの中に、一刻を争う都合があるかないかは考えない。そして乗り遅れそうな人が、実は、もっと空いていて、既に到着している隣りのエレベーターに乗ろうとしていたとする。押える本人は、小さな善行の満足感を持つのだろうが、自分の意志を無視された同乗者、カンちがいの親切を施された人、いずれもみなドッチラケである。――こういうのが、おせっかいの初歩的な例で、間の抜けた要因を備えているのも特徴である。

親切は、相手や関係者が、親切であると評価して、はじめて親切になる。

こういったことは、ボランティア活動や対外援助、あるいはまた共存共栄のための業界活動などに当たっても、充分に心すべきであろう。インマヌエル・カントの言葉の中に、つぎの一節がある。〝互いに自由を妨げない範囲において、各人の自由を拡張することが、自由の法則である〟親切がおせっかいになってしまわないための、基本ルールであろう。

断っておくが、われわれの励ましの精神は、おせっかいでも親切でもなく、市民としての感謝と真心そのものである。（謙之介）

いきいき Summer 警視庁機動隊



猛暑を乗り切る

一機　大谷　松司

今年もまた長く、暑い夏がやって来た。我々機動隊員にとって、夏は嬉しくもあり、反面、暑さに耐えながら各種警備を完遂していかなければならない厳しい季節の到来でもある。

一機に着隊して今年で二度目の夏を迎えた。昨年の夏は、自分自身が着隊して間がなく、新隊員という立場上、その日その日の仕事を覚えるのが精一杯で、ただ先輩の言うがままに漠然と右往左往して来たに過ぎなかった。従ってアッという間に夏が通り過ぎてしまった。

しかし、今年は後輩もでき若干だが精神的にも余裕が出てきた。そこで今年の夏をより充実したものにするために、自分なりに暑さに打ち勝つ〝猛暑対策計画目標〟を立てた。

その一つは、体力作りである。暑い夏を乗り切るには、何と言っても体力がものをいう。重防警備や突発的な治安情勢に、いついかなる場合でも、対処できるだけの体力気力を養っておくため、日頃の警備訓練は勿論のこと、幸いにも当隊は皇居が近いので、余暇を有効に利用し、自分なりにジョギングを楽しみ、体力増強に努める。

二つ目は昇任試験対策である。現在私は大学に通学している。この時期は学校も夏休みに入っており、余暇の時間を昇任試験の勉学にふりわけ、簡単なものから少しずつでも続けて行く。

そして、最後は健康管理だ。我々にとって夏の健康管理は最も重要な問題であり、体調がベストでないと気力も衰えてしまう。最近は、夏バテ防止対策が色々あるようだが、結局は自分の体は自分で管理・調整する以外にない。暴飲暴食を避け、自分自身の不注意から体を壊さぬよう、特に体調には細心の注意を払って行きたい。

星凍る厳寒の冬の勤務も厳しいが、炎熱の猛暑の中での勤務もまた過酷である。様々な障害があるにせよ、最終的には自分自身との気力の闘いであり、暑さに負けずに、自己の立てた目標に向って自分に厳しく、この夏を乗り切っていきたい。

（中隊員）

沖縄への思い

二機　中嶋　栄二

何歳になっても夏休みというと浮き浮きと楽しいものである。ましてや直接治安の重責を担い、昼に夜に厳しい機動隊勤務の中での夏休みである。

このように書きながら、私自身、警察官になってからは、夏休みで遊び回ったという記憶はほとんどない。警察官としての自覚がそうさせたのか、それとも元々出不精のせいなのか、判然としない。

機動隊の特徴は、やはり若さだと思う。夏に若さの集結するところと言えば、まず海が出てくる。そしてマリーンスポーツである。私は今年の夏休みに『ザ・夏』にピッタリあてはまる沖縄の海へ行くことに決めている。今、沖縄のぬけるように透き通った海のパンフレットを見ているだけでウキウキしてくる。

沖縄の美しい海へ行くからには、いろいろなマリーンスポーツに挑戦してみるつもりだ。紺青の海で南風に乗ってウインドサーフィンにチャレンジしてみたい。以前からやろうやろうと思っていたことを、今年は実現できそうだ。それから、海の上をかけ抜けるジェットスキーにも挑戦してみたい。海の上でバイクに乗っている感じで、絶対に最高だと思う。正しい指導の下でダイビングもやって見たい。海底散歩で美しいサンゴ礁と魚の群れとたわむれる……等、頭の中に浮かんでくる。

それから、旅にはいろいろな人との出合いがある。違った土地に住む人や、年のちがった人と話すことは、今まで自分の知らなかったことなどを吸収でき、人間性も高められると思う。これも旅での大きな目的の一つでもあるが、私は、常に警察官としての誇りと自覚を忘れずに、事故の防止を念頭に置いて行動するつもりである。隠れてこそこそしたりせずに、堂々と社会人として決められたことを守り、許される範囲で思い切り沖縄の美しい海で夏休みをエンジョイしてきたいと思っている。

（操車係員）

海と山が招く

三機　角田　康夫

ギラギラと焼けつく太陽。私の夏がやって来た。海と山、その両方が私の相性にピッタリ合うのだ。夏バテなどは私にとって全く無関係。暑いからと言って、日陰やクーラーのきいた部屋にいるのは、かえって健康に悪い。

小さい頃からスイミングスクールで鍛えた体で、魚のように水中を泳ぎ回るといやなことも吹き飛んでしまう。小学生時代から泳いでいたせいで、肩幅や胸囲が大きくなり、洋服を選ぶのに苦労するが、水泳という魅力に比べたら、そんなことは気にならない。

もう一つの楽しみは山である。誰か「山がそこにあるから登るのだ」と言ったが、これはやはり登山愛好家でなくては理解できない言葉だ。夏山のすがすがしい空気、雄大な景色を見ると、人生とはかくも素晴らしいものかと、生きている喜びを感ずるとともに大自然の厳しさを痛感する。

日本のアルプスは私の第二のふる里である。登山の疲労と、のどの渇きで辛くてどうしようもないときに、岩の間からあふれ出る水は、どこの高級レストランでも味わえない格別のドリンクであり、大自然の中、星をながめながらテントの中で寝ることはなんともいえないロマンチックな気分である。

私ももう二十四歳、いつまでも楽しんでばかりはいられない。昇任試験合格、良き伴侶を得ること、仕事のプロに徹することがこれからの私の目標である。

この夏をきっかけに新しいスタートをきり、登山と水泳で鍛えた体力・気力を生かし、仕事に勉学に励んでいきたい。

（中隊員）

夏を制する

四機　河路　政春

私の夏は、特練に始まり特練で終る。実に早いもので、九月に着隊三年目になるが、毎年、私の夏は、特練で明け暮れる。武道小隊は、猛者軍団で一年間好きな剣道で鍛えられ、今ではきってもきれない存在となっている。未熟ながらも操車係員として、特練の出稽古等運転も兼ねている。

目標は、着隊以来の合言葉「夏を制する」、勿論、夏の署課対抗柔剣道大会で優勝することにある。

当隊は、ここ二年余り優勝の二文字から遠のいているだけに、今年の夏にかける意気込みは、私のみならず既に特練員全員に満ち満ちていることは言うまでもない。「勝負」まことに厳しい世界である。まして勝つことは実に難しい限りである。相手も同様、勝ちにくる。

勝負は時の運と言われるが、私としては、決して一概に言えない様な気がしてならない。確かに運も左右するが、勝負の岐路は運ではない。稽古量、稽古内容が考えられる。が勝負の岐路は、選手一人ひとりの内に秘めた精神力で決まると、私は確信している。選手ひとりひとりの技量差は、いかんともしがたいが、精神力に差はないのである。

「俺は暑さに、猛稽古にあれだけ堪えてきたのだ」「俺は勝つ」この闘争心むきだしの精神力が勝負を決すると思うのである。自分の精神力の弱さに妥協して「気」で負けたら勝負にも負けるし、どこでも同じである。ただ、「気」すなわち精神力が勝負というものを大きく左右するのである。

これは柔剣道に限らず、精神力の強さは我々警察社会のすべてに共通し要求される。今年も大いに道場で自分を鍛え、錬磨して夏にかけ、優勝の二文字をこの手で勝ちとり、最高の夏にしたいと燃えている。

（操車係員）

北海道の夏

五機　我妻　繁

私の育った北海道釧路市は、ひし形の北海道の右下の真中に位置し、通称「道東」といわれる。道東は、霧の摩周湖に代表されるように霧が多く発生する。霧という言葉にはロマンチックな響きがあるが、この地方の人々にとって、これほど厄介なものはない。それは短い北海道の夏が霧のために更に短くなるからである。

しかしこんな霧におおわれた日ばかりではない。霧の晴れた日には、スカイブルーの空が一面に広がり、その中に雲がポカリポカリと浮かびのどかな風景が現出する。道産子にのんびり屋が多いといわれるのはこの空を見て育ったからではないだろうか。

また、釧路港は、水揚日本一を誇る北洋漁業の拠点港であり、鮭をはじめいろいろな魚も登ってくる。

私の実家の近くを流れる阿寒川（水源地は阿寒湖）には、夏になるとシシャモの大群が登ってくる。子供の頃は裸で川に入り、シシャモを手づかみでとったものであり、夏の楽しみの一つであった。

もう一つ楽しみなことは港祭りという夏祭りである。漁師達が、神輿を担いで街をねり歩く。丸太棒のような腕をした屈強な海の男達が、神輿を担ぐ姿はまさに壮観で迫力充分である。この港祭りが終ると、釧路の短い夏は終り、秋が訪れてくる。

北海道の夏は短いが、気候が良く空気も美味しく、旅行には最適である。平均温度は十七度前後なので、この時季北海道旅行を計画されている方は、セーターを一枚用意されたほうがよいと思う。

剣道一直線

六機　宮内　浩幸

私は今年二月十九日第六機動隊に着隊し、そして武道小隊勤務を命ぜられ、何もわからないことばかりで、あっという間に過ぎていったような感じがする。私にとって、着隊してから最初の夏を迎えることになったわけだが、夏という事で、休暇を利用してどこかに旅行するのもいいが、まず第一に、私は武道小隊ということで、夏といえば特練、そして稽古ということしか頭の中になく、他のことを考える余裕はない。

今年の夏は、剣道特練に全エネルギーを集中する。武道小隊の中でも、決して強い方ではないので、一日も早く先輩達に追い越せるよう頑張りたい。それには、まず練習に厳しさを求め、決して弱音を吐かず前へ前へ出ることが大事だと思う。心の中で「苦しいのは自分だけではなく、全員が苦しいんだ」と言いきかせ、最後まで食らいついていくだけの心構えを持ちたい。

次に、先輩より一本でもいいから、数多く練習することだと思う。同じ練習量では力の差があるので、追いつけるまでには至らない。ただ単に練習量をこなすだけというのではなく、内容の充実した稽古。つまり、時間の経過と共に流されるような稽古ではなく、気剣体の一致した稽古。相手の目を鋭くにらみ、剣先に力を集中させ、相手が少しでも隙を見せれば、相手を倒すほどの勢いで、攻めて、攻めまくる稽古をしたい。

そして、自分の気持ちをしっかりと持つことだ。練習をはじめる前、もう一度気持ちを引き締めて、練習に臨みたい。練習がきつくなってくると気持ちがふらつくが、自分に厳しく、そのようなことがないように気持をしっかりと持ち、自分の選んだ道を進んでいきたい。そして、立派な武道小隊員になれるように常に目標を持ち、日々努力していきたい。

着隊した最初の夏、初めての特練となるわけだが、体当り精神で精一杯努力し、剣道四連覇の偉業と正選手の座をもぎ取る決意で努力する覚悟である。

（中隊員）

優勝に賭ける

七機　為我井　晃

第七機動隊バスケットボール部は、毎年二月頃から夏のシーズンに向けて非番・週休等寸暇を惜しみ、基礎体力・チームプレーなどの強化を図っている。ところが、今年は、一連の警備のため十分な練習が出来ず、一抹の不安を残している。

昨年は、全国官公庁バスケットボール大会で善戦の末、準優勝することができた。「今年こそは優勝」を全員の合言葉にして、出遅れた分を短期間に取り戻すべく、また、酷暑にも負けない基礎体力を作るため、訓練に励んでいる。

その一つとして、下半身の強化を行っている。「下半身が弱いとスポーツは出来ない」とさえ言われる。この強化のためには、腹筋と背筋を鍛えなければならない。その為、練習中ミスなどした時には、罰として腹筋、背筋の回数を多くするなどの方法で、これらの筋肉を鍛えている。

次は、持久力をつけることである。「走ることが好きだ」と言う人は少ない。それは、走ることほど単純で苦しく、孤独なものはないからである。私も単に走ることは、大の苦手なので、ただ単に走るのではなく、途中にダッシュ、馬跳びなどを加えて変化をつけている。しかし、マラソンをしたからといって直

ちに持久力がつくものではない。毎日毎日の積み重ねが持久力をつける秘訣だと思う。

また、バスケットボールは、一人でプレーするものでなく、五人のプレーヤーが心を一つにして行うスポーツである。したがって、栄冠を勝ちとるためには、体力の向上だけでなく、チームワークの強化も不可欠である。しかし、我々は、学生のように毎日の練習を通じて、チームワークを養うというわけにはいかない。そこで、暇を見つけては作戦盤を使ってイメージトレーニングをしたり、時には勤務終了後に酒を飲み交し、バスケット談義をすることによりチームワークを養っている。

今年は一連の警備のため、充分な練習ができたとはいえない。しかし、昨年の「全国官公庁バスケットボール大会」での準優勝の経験と酷暑での練習を生かし、今年こそは「関東実業団二部リーグ」に優勝し、念願である「一部リーグ」入りを果たすとともに「全国官公庁バスケットボール大会」にも優勝し、警視庁バスケットボール部大躍進の年にしたいと考えている。

（特務係員）

黙々と走る

八機　石井　眞一

〝夏〟といえば、すぐにバテたり、疲れたりすることを連想するが、私は、夏こそ何でもできるチャンスがあると思う。夏は、開放的で活動的な時期だ。まさにチャンスが到来といえる。そこで、何をしたらよいかということが問題になってくる。何もせずにただ漫然と過ごすことは、時間の浪費以外の何ものでもない。

八機に着隊して半年になるが、今、一番痛感することは「機動隊員は体力が資本である」ということだ。いついかなる警備であろうとも、最後には、体力がものをいうことになり、生死の分岐点になる。

私自身、百パーセント体力に自信があるとは言いきれない。時には、体力の限界を感じる。したがって、夏こそ体力の向上に絶好のチャンスなのである。この夏こそ体力をつけることに専念したい。

体力の向上といえば、柔剣道、その他のスポーツが考えられるが、私にとって、一番てっとり早い方法は、「走る」ことに尽きる。走ることは、持久力の源だ。目的地を決め、一定のペースで走れば、夏なんてなんのその、暑さが吹き飛んでしまう。

「苦しみの中に楽しさあり」この言葉は、スポーツ全般に通じる。汗をかいて黙々と走る。時には付近の風景を見ながら、一時の余裕と自信がみなぎる。そして、目的地に到着したことの喜びを感じる。なんと素晴らしいことだろう。人生の喜びを感ずる。すべてを忘れさせてくれる。

私にとって走ることは、最良のスポーツの一つになっている。いつどこでも気軽に、自分の体一つさえあれば走る楽しさを味わえる。走ることを将来の体力向上の目標と定め、時間の許す限り継続することを心がけたい。

（中隊員）

私は高山病

九機　赤木　則夫

全長百数十キロメートルに及ぶ日本の代表的山岳地帯、北アルプス。我々三人のパーティが今回目指すのは、その中で、表銀座の愛称で親しまれている、燕岳から槍ケ岳へ至るコースで、雄大な眺望と咲き乱れる高山植物群の中を行く豪華コースである。

中央玄関口の中房温泉の露天風呂に、首までつかりながら明日からの山行に思いを巡らす。「山登り」の最も楽しい一時でもある。

翌朝、まだ夜が明けきらない温泉場を後に、いよいよ縦走開始である。取り付きの合戦尾根は、北アルプス三大急登と呼ばれており、苦しい樹林帯の登りから始まる。重荷に喘ぎながらもひたすら登る。やっとの思いで、暗い樹林帯をぬける頃には夜も明け、展望も開けてくる。

数時間前まで頭上を流れていた雲が足下を泳いでいる。道端には、高山植物が顔を見せはじめ、目指す槍の尖塔が見えてくると、今日の宿泊地、燕岳テント場も近い。

眼前にどっしり構えた燕岳は花崗岩の白砂とハイマツで装った優美な山で、山頂までは、ほんの腹ごなし程度の往復である。山頂からは、高瀬渓流を隔てて目指す山並をパノラマで望むことが出来る。その夜のテントは焼肉の入山パーティ。雪渓割りウイスキーの喉越しは格別である。

二日目は、山々を眺めながらの起伏おだやかなお花畑のプロムナードのはずが、誰かの行いが悪かったのか、霧に眺めを遮られての登りとなった。途中雷鳥親子の歓迎に気を取りなおして目的のテント場へ着く。こんな日は、早寝に限る。

三日目、今日はいよいよ槍ケ岳への登頂だ。朝食もそこそこに出発、空気がすがすがしい。「今日は晴れてくれ」の願いが叶ってか、あたりが明るくなるにしたがい、足下に海雲が山々の頂を島の様に浮べて広がる。

西岳を右に折れると急降下し、最低鞍部の水俣乗越に出る。ノンビリムードもここまでで東鎌尾根の険路にかかる。クサリ場、鉄バシゴに助けられながら一歩一歩高度を上げていくと、槍の肩（三、一八〇メートル）の頂が天に突き上げている。槍の穂先は、十坪程の広さながら、北アルプスの名主にふさわしい大展望である。明日は下山日、満天の星空を肴に、ありったけの名残りを惜しみつつ就寝。

最終日は、上高地までの下り、岩礫の急斜面をジグザグに下降して行く。槍の姿が消える頃、大雪渓の出迎えがある。最後までサービスがいいと思いつつ槍沢沿いに下る。一ノ俣横尾、徳沢と下り、上高地着。観光地の宿命か人の群れる河童橋を横目に車中の人となる。

二人三様の思い出を胸に、缶ビールで乾杯。「なぜ山に登るの」というが、私はこれも一つの高山病ではなかろうかと思っている。

（分隊長）

故郷の夏

特車　斉藤　浩文

私の故郷、北海道泊村に夏が来るのは、ニセコ連峰の残雪が解ける七月上旬である。北海道の夏は短く、必然的に学校の夏休みも二十五日しかない。

故郷にいた時分には、夏休みになると実家の「ウニ採り」の手伝いに駆り出される。朝六時になると母にたたき起こされて浜の番屋（掘っ立て小屋）へ行き、バケツで海水を汲む等の準備をして、朝五時から海に出ている父を待つ。しばらくして、サイレンの音とともに沖合いから、次々と磯舟が、紫色・赤茶色のウニを山盛りにして、その昔、漁師達が石材で造った小さな港に帰ってくる。

それからが私の大事な仕事だ。磯舟から番屋にウニを運ぶ、それを左手に厚いゴム手袋をはめてウニを持つ、右手に出刃包丁を持って一個ずつ割る作業を行うが、一日に五百個位割る。

両親と手伝いのおばさん達は、私の割った殻の中からウニの身をきれいにとっていく。ウニ割りの仕事が終わると、近くの番屋から同じく手伝いを終えた遊び仲間と泳ぎに行くのが唯一の楽しみだった。

我が泊村に砂浜はないが、海岸から沖合い百メートル位までは遠浅で、その先は急に深くなっている。海水浴と違い、岩場で泳ぐことが多いので、自然にアワビ等の貝類を採るようになり、三時のおやつがわりに焚火で焼いて食べたりした。

またある時には、筏を造って沖に出て帰れなくなったり、ゴムボートで岬を越え、三キロメートル位離れたところまで行った事もあった。こんな時は、在のお巡りさんや消防団員に怒られてしまい、シュンとなったが、今となっては良い思い出である。

このように、朝から夜まで一日中海で過ごして、夏休みが終るのが普通だった。皆さんも、故郷で野に入って山菜を採ったり、海や川で魚を釣ったりした思い出があることと思う。

今年の夏は帰省し、サミット警備で苦労したことを土産話しに「ウニ採り」の手伝いをしたい。遠きにありて、故郷を思い出すのもいいものだ。

（中隊員）

北から南から

富士山麓に涼を求めて

山梨県警察本部教養課

夏でも涼しい富士五湖方面を中心に御案内したい。

山中湖

富士北麓にある山中湖・河口湖・西湖・精進湖・本栖湖の五つの湖を富士五湖と呼ぶ。この中で、特に山中湖は、海抜九百八十二メートルという、日本でも三番目に高地にあり、夏でも比較的的涼しく、五湖の中でも一番大きな湖である。

ここには、若者に人気のテニス民宿が数多くあり、また、キャンプ場もある。そして、特に夏は、ウィンドサーフィンや水上スキー、ヨットなどのウォータースポーツをする人々でにぎわう。ワカサギやブラックバスなどの釣り場としても知られている。貸自転車で湖畔を一周するのも、なかなかいいものだ（ペアで乗れば、楽しさも二倍になるだろう）。

湖畔には、民間会社の保養施設が多数あり、本県の「山中湖畔荘」もあるので、山中湖へおいでの節は御利用ください。

鳴沢氷穴

河口湖I・Cから西へ向かい、国道一三九号をしばらく行くと、道路の両側が原生林になる。これが青木ケ原樹海と呼ばれる大樹海で、一度迷い込んだら二度と出られなくなると言われている。そのため、自殺の名所（？）として有名になっている。

国道を西進していくと「鳴沢氷穴」という案内板がある。そこを左折すると、すぐに氷穴の入口に着く。ここは、大昔に富士山が噴火した際に出来たもので、洞内は、夏でもひんやりとしていて、つららや氷柱がいっぱいだ。涼を求めるには最適な場所なので、一度、行かれてみてはいかがだろう。

山梨県立美術館

最後は富士とは関係ないが、山梨の自慢するものの一つとして、県立美術館を紹介する。

甲府駅から芦安または社会福祉村行きのバスに乗り、美術館前バス停で下車（正門前）。あるいは貢川行きバスに乗り、貢川営業所バス停で下車（徒歩で十分くらい）。

この美術館には、フランスの有名な画家『ジャン・フランソワ・ミレー』の「種をまく人」「夕暮れに羊を連れ帰る羊飼い」などが収蔵されており、ミレーの美術館とも呼ばれている。開館以来、県外からも多数が訪れている。

友誘遊YOUのくまもと

熊本県警察本部教養課

友誘遊これは、熊本県が展開中の日本一づくり運動のキャッチフレーズである。日本一はもち論、世界一、東洋一など数多い〝自慢〟の中から、名所と旧跡、伝統工芸について紹介させて頂く。

名所旧跡自慢

○熊本城　～日本城郭史の頂点に立つ不落の名城～

熊本市の中心にそびえる熊本城は、日本三大名城の一つに数えられ、加藤清正が慶長六年（一六〇一）から同十一年にわたって、その情熱を傾け、知嚢をしぼり、自ら先頭に立って築きあげたものである。

それは攻むるに難く、守るにやすき実戦の堅城で、周囲十二キロメートルの偉容を誇り、うっそうと茂る楠の緑に包まれ、城下町熊本のシンボルでもある。天守閣には、加藤家、細川家などの国宝クラスの史料が展示されている。

○阿蘇山～世界一のカルデラ～

世界一のカルデラの規模で知られる阿蘇山は、九州のほぼ中央、県の東部に位置し、熊本市から約五十キロの地点にある。

地鳴りとともに噴煙をあげる中岳（一三三三m）を中央に、その東方が最高峰の高岳（一五九二m）、鋸歯状の根子岳、北方に丹頂形の杵島岳、その南に烏帽子岳があり、これを阿蘇五岳と称している。

五岳の麓には、見渡すかぎりの草原が広がり、日を追うごとに緑のジュータンが、すそ野から頂上へ向かって延びて行き、四月から五月下旬にかけて、この緑の草原には、リンドウ、スミレなどの野草をはじめ、天然記念物のミヤマキリシマツツジの大群生が、一せいに咲きほこり、観光客の目を楽しませてくれる。山上からは、はるかに外輪の山並みが、屏風のように五岳を取りまいており、その眺望は極めて雄大で、まさに〝世界の阿蘇〟ならではの景観だ。

（昭和九年阿蘇国立公園指定）

○水前寺成趣園

約三百年前五代細川綱利の時に築造された桃山式回遊庭園。細川家の庭園だったが、明治維新後、一般の出入りが許された。

東海道五十三次を型どり、築山と岩、松を巧みに配し、湧き出る清水には、コイが泳ぎ、憩れることを知らない。池のほとりには、細川幽斉藤孝が、智に親王に古今集の奥儀を伝授したといわれる「古今伝授の間」（茶室）がある。

伝統工芸自慢

○肥後象眼（全工程手作り）

熊本の工芸品の中には、県内だけでなく、広く県外の人々に愛用されているものが数多くある。肥後象眼もその代表的なものの一つで、加藤清正公の時代からその技法が伝えられ、金銀の模様を打ち込んだ象眼は、上品な奥ゆかしい美しさがある。

このほか、熊本が誇る自慢の数々については、紙面の都合でご紹介出来ないのが残念だ。

上州の四季を訪ねて

群馬県警察本部教養課

上州は皆さん既にご存知でしょう。都心から僅か百キロ、時間もますます縮まっている。忙しい中にも暇を見つけて上州群馬へお出かけください。緑の山、清らかな水、まぶしい光、碧い空…豊かな自然とこまやかな人情。この上州群馬の四季をご案内しよう。

春…谷川岳の雪とけ水が音をたてて流れ、山にも春がやってくる。安中秋間の梅林が匂い、高崎観音山の桜が咲くころ、人々が待ちかねたお花見となる。沿道には、焼まんじゅうやみそつけおでんを売る店が並ぶ。山には、山菜を摘む人が、われさきにと繰り込む。新緑が深くなると…もう、春もおわり。

夏…梅雨あけのころ、尾瀬の湿原に花たちが舞い、朝もやをぬって、夏ウグイスやカッコウ、コマドリが歌う。午後にひとふり夕立ちがあって、山々がニコッと顔を出す。雪渓の残る真夏の谷にハーケンを打ち込む音。谷川での渓流づり、下流ではなくても、水と緑がいっぱいだ。

秋…上信越国境の山々が次第に色を染め、赤城、榛名、妙義と上州の山が燃え立ち、梨狩り、栗拾い、舞茸採りと実りが

（第4ページへ続く）

読者の広場

拝啓 中曽根総理大臣殿

佐々木　喜朗

同日選挙の大勝おめでとうございました。勝利は確信しておりましたが、これ程の議席の獲得になるとは総理御自身も予想されなかったことと拝察いたしております。

一体、何故このような現象が起きたのでしょうか。勿論、難しいといわれていた同日選挙を実現した戦術的勝利も一因だったでしょう。また、ニュー・リーダー達のハッスルも大きな理由の一つだったと思われます。しかし、ただそれだけの表面的なことだけではなかったのではないでしょうか。もっと大きな要因が背後にあるような気がしてなりません。

今更、戦後の話しをするのは時代錯誤の誹を免れないかもしれませんが、私共の世代には戦中・戦後の体験は生活実感として脈うっております。饑じい思いをして豆を食っていた時代、若い娘が進駐軍兵士の腕にぶら下るようにして春を売っていた時代を体験した私共には、今の豊かさは信じられない思いであります。

いろいろ云いたいことはあるにしても、これだけの実績を残してきた戦後の政治に対して、国民の大多数は、やはり、心の底では一番信頼を寄せているのではないでしょうか。

革命前夜のような二・一ストの頃、全面講和か単独講和かで揺れ動いた講和條約締結の頃、安保條約改訂の騒動、そして、総理の手がけられた行政改革等々、泥を冠りながら一つずつ積みあげてきた実績を国民は知っております。煽動するだけで責任を取ろうとしない革新政党の行動様式、革新といいながらも現実的には保身のカモフラージュにすぎない事実に国民は騙されてはおりません。

そして今の若い人達は、マルクス・レーニン主義がいかに非人道的であるかを歴史的現実として知っております。一九八〇年代は保守への回帰の時代であると云われておりますが、それは保守への回帰ではなく、改革への期待であると云って過言ではありますまい。

現在、日本を取りまく環境はまことに厳しいものがあります。特に経済界は、急激且つ大巾な円高によって戦後一番大きな試練に立たされております。昭和初期の金解禁時にたとえる人もいる程です。こういう重大な局面に立った時、人は一番信頼する者をリーダーとして選択するものです。それが今回の選挙の意味ではないでしょうか。

民主主義はある時は頼りなく、ある時はまだるっこい、所詮は衆愚政治ではないかと焦燥感にかられます。しかしクリティカルな局面に立ち向った時、一番正しい選択をするのも民主主義ではないでしょうか。総理も選挙後の談話で「人力だけの勝利ではない。天の声として謹んでこの結果をお受けしたい」と述べられたのは、まさに、この事を表現されているものと感銘いたしました。僭越ながら、単に修飾的な美辞麗句でなく、心の底からそう思っていただきたいと念じるものであります。

二十一世紀に向けて、本当の意味での豊かな日本を築くために、解決しなければならない問題は山積しております。経済構造の変革、社会資本の整備、住宅の改善、税制の改革、そして教育の問題等々、いずれをとっても大問題であります。総理の云っておられる戦後政治の総決算として、責任をもって一つずつ解決してゆくことが将来の日本人の幸せに繋がってゆくものと確信しております。

失礼を顧みず、生意気なことを申し述べましたが、どうぞ御自愛の上、ますますの御活躍を心から祈念するものであります。

敬具

ひとりごと

木村　政次

最近の総理府による国民の税金に対する意識調査によると、色々な角度から分析されているが主な点は次の様なものである。

重税感を抱く者七四%、不公平感を抱く者八七%、直接税方式か間接税方式かは略見合いで、間接税の利点を認める回答の多かったのは、最近の新聞論調傾向から見て意外だった。又、全く税の負担感のない者が二・一%あったのはサラリーマン層の八九%が不平不満を訴えているのと比較して注目を引いた。

税金はどの国と云わず国民の基本的義務であり、徴税方法はその国の社会的歴史的背景もあって一律ではないし、又、これという絶対的方法もない事から、何処の国でも不平不満は皆無という訳にはゆかない。

不平不満の因ってくる処は、㈠自己の税率税額が、自分の生活水準から見て何とも重いと感ずる、㈡他人と比較して不公平と感ずる時は更に刺激される、㈢納税に対するペイバックも之又他人より尠いと分ると、不平不満は益々嵩じて来る。つまり㈠の絶対額より㈡㈢の不公平感が不平不満の大きな原因となっている様だ。

不公平を感ずる主な理由は調査の結果によると、㈠脱税がかなりまかり通っている、㈡法律上税優遇を受けている者の存在とその派手な生活態度等となっている。何かで読んだ事があるが「この国では税率の低い者程威張っている」という一節があったが、事の正否は別としても一概に否定出来ない一面もある。又、金持ちから沢山とればよいという短絡的発想から働く意欲を喪失させるのも大きな問題であろう。

こうした不平不満が国民的規模で嵩じた場合はどうなるかは分らないが、さりとてこれという特効薬がある訳でもないから、全く廻りくどい話だが国民の税意識を高めるしか他にない様に思われる。我々日本人はその国民性にもよるが、納税期になると毎年定って世論が沸くが、時間と共に何時の間にか下火になってゆく。根本的には税意識の低さによる。特に税の使われ方に関心が薄い様に思われる。

我々は税金の事は観念的には分っている積りだが、実生活との結びつきとなると仲々実感として迫ってくるものがない。給料日になると、明細書から税額幾ら、手取り幾ら、高いなぁと思うだけである。まして家庭で給料を受取る奥様方は、手取り幾らから始り家計簿の収入面に手取額を記入する事からその月の家計がスタートする。

処で税意識の高揚に家計簿の記入方法を換えて見ては如何であろう。従来の手取額記入を総収入幾らと記入する。支出面には所得税、市民税、社会保険料幾らから出発すれば、税の使われ方に自ら関心が高まる。各種補助金、社会福祉、行政一般の経費及びサービスに関心が高まると同時に国民納税意識も高揚され理解度も深まれば、脱税や不平不満もかなり緩和されると思えるのだが。

尾瀬 片品村の思い出

麻生　博

六月初、会社の若い人々が尾瀬ハイキングを計画して、参加を勧誘して来た。

若者達のプランらしく、二十三時新宿発車中泊のバスで、戸倉を経て鳩待峠に着いたのは午前六時であった。山小屋の裏に積まれた雪は残っていたし、二千米を超す東の燧ヶ岳、西の至仙山には残雪が雪渓をつくっていた。

千四百米の尾瀬湿原には、処々に美しい水芭蕉の群生が真白に彩っていた。又、眞黄色なリューキンカが群生していたし、その間にショウジョウハカマが可憐なピンクの花をのぞかしていた。遠くの山々からは、カッコウの声、鶯の囀りが聞えて来る。食用蛙ならぬ昔ながらの蛙の声もなつかしい。すべてが牧歌的である。

天狗小屋を過ぎると、土地が乾いているのか渡り板が一枚になる。二～三十糎巾の板の上を二～三粁も歩くのである。人々の歩調は変らず、踏みはずす人もいない。もし、これが数メーターの高さであったら、足がすくんで歩けないのでないかなどと思ったりした。心構えが大切なのだ。

帰路、一二〇号国道を片品村・老神・糸之瀬村を経て沼田インターに出る。道路は舗装され、西側の家々、ドライブインが

般に見受けられる国道風景である。

私は四十数年前、この道を歩いたのだ。昭和十七年秋、近衛第五連隊迫撃砲大隊が赤城山麓西厩舎で編成され、見習士官の私は、小隊長として沼田駅から糸之瀬川を渡って参加したのである。海上機動部隊に組入れられるべく編成され、新兵器十二糎迫撃砲装備する新設部隊の訓練は激しかった。

秋も深まり、戦地に向う日が近くなった時、中隊で行軍遭遇戦の一泊演習が行われ、この道を通って片品村に行ったのである。当時、道は狭く、西側には田畑が連なり、桑畑が道を覆っていた。疎らな茅葺の家が点在し、その軒先には名物の干柿が吊されてあった。

夕暮れ、へとへとであったが、服装隊伍を整え、軍歌を歌いながら片品村に入った。両側には小学生が手に手に日の丸の小旗を振って村民と共に迎えてくれた。軍隊が来るのは二十年振りということだ。

校庭で村の役員の方々が、宿舎割をして、三々五々と提灯をもった方々の案内で、それぞれの宿舎に向った。米と味噌とわずかな金銭しか渡さなかったのに、風呂は沸いていたし、囲炉裏端での夕食の持てなしは豊かなものであった。わずかな日本酒でも腸に浸み渡った。

家庭の雰囲気にすっかり酔った。何ケ月振りであろう、蒲団にくるまって熟睡した。その後、復員するまで蒲団で寝ることはなかった。戦死して帰らぬ人には最後の蒲団でもあった。

早朝、村の人々に送られて、片品村を離れた。戦時色は未だこの山村には及んでいなかったようだ。日本が負けるなど誰も考えていなかった。戦争中を通じて、たった一夜であったが、この暖い平和な思い出は私の心に刻み込まれていて、忘れることは出来ない。

（第3ページより続く）

いっぱい。柿の実は、夕陽に輝いて白壁とよく似合う。古里の懐しさがある。とうもろこしやいも串を炭火で焼いて食べれば、美しい秋が暮れていく。

冬…木枯しピープー、上州に冬がくる。谷川岳も浅間山も、そして、あの上野村の山々にも雪の訪れ。上州の女は、「おっきりこみ」をつくる。栄養があって、からだが暖たまって簡単につくれる。このころになると、関越自動車道にはスキーをつけた県外車が目につくようになる。このラッシュが過ぎれば、春はもうすぐそこだ。

もし、あなたが旅好きなら、一人でさりげなく上野国（こうづけのくに）の歴史を歩いてみませんか。もし、あなたに恋人ができたら、白い車で日帰りのドライブを楽しんでみませんか。

寄付金

栗田工業㈱から七月二十一日付で当励ます会に二百万円のご寄付がありました。厚く御礼申しあげます。

残暑お見舞い申しあげます

大内俊司
スカイコート㈱
亨和興業㈱
㈶嘉悦学園
光洋商事㈱
大野興業㈱
東南貿易㈱
高周波熱錬㈱
橋本尚吾
西戸榮一
加納保成
松田鉄鋼㈱
明鋼材㈱
野口直志
堀口海運㈱
豊鋼材工業㈱
金森藤平商事㈱
㈱大川鉄工所
中越通運㈱
平和農産工業㈱
北海鋼機㈱

はげまし

発行所
社団法人 機動隊員等を励ます会
東京都中央区八重洲2-4-14
〒104 ミツヤビル3階
発行人 鈴木 實
TEL 03(272)2050
購読料 年間1200円(送料共)
(但し会費の中には購読料を含む)

国民の協力で任務遂行

警視庁への派遣警備

充実した気力と体力

北海道警察機動隊　玉手 一彦

「お巡りさん、ご苦労さま、頑張ってください」、見知らぬ都民にかけられたこの一言がとくに嬉しかったというのが、長く厳しい警備に出動した機動隊員の述懐であった。国民の協力を得ることが、警備完遂への大きな支えとなることはいうまでもない。

東京サミット警備で隊員達は体力と気力の限界をふりしぼったが、無事使命を果たした今は、自信と経験というかけがえのない財産となった。前号では警視庁機動隊に登場していただいたが、今回はこの応援出動に当った各道府県に焦点をあて、感想と今後の抱負を語って貰った。

二十日間にわたる第十二回主要国首脳会議警備を無事終え帰隊した。本警備は天皇御在位六十年記念式典と重なった本年最大のものであり、極左暴力集団のゲリラ攻撃により最大動員三万人という史上最高の警備体制であった。その一員として参加出来たことは光栄であり、七年に一度しかない本警備は、私にとって今後経験することはおそらくないであろうし、大変貴重な体験をすることが出来た。

今回の警備は、地理的に不案内な場所での勤務で不安があったが、その中で車両検問中に停止させたある運転手は「何回も同じにかかった」と不満を口にしていたが、我々の協力依頼に対して最後には、こちらの意を解してくれて協力に応じてくれ、別れ際には「御苦労さん、頑張って下さい」とねぎらいの言葉がきかれた。権利意識の強い世の中、まして大都会東京で人の心の暖かさを、ふと垣間見る思いだった。

また、駅対策で水道橋駅での勤務中、背広姿の老人が近づいてきて「腕章を見たのですが北海道の機動隊ですね、私は以前北海道に住んでいたことがあるのですが、頑張って下さい」と話しかけてきた。またしても歌謡曲の曲目ではないが、東京砂漠にオアシスを見た様で、今回の警備に当たるうえで心の支えになるものだった。

見知らぬ土地での勤務は大変だったが、これらの国民の理解と協力、そしてねぎらいの言葉こそ任務遂行に当たっての一つの励ましであった。我々は、国民に恐怖をもたらす極左のゲリラ行動に毅然として立ち向かう姿勢をもってこそ、国民の理解と協力を得ることが出来るものと信じ、二十日間の長期出動であった東京サミット警備で体験した事を、今後の諸執行務の糧としてさらに勤務に精励していきたい。

東北管区機動隊　菊池 福夫

「管機菊池小隊長から機動隊、二二・一〇東北自動車道、盛岡インター流入どうぞ」、警備輸送車の大型ミラーに映える麗蜂岩手山を後にいざ出陣。マスコミをして史上空前の大警備と言わしめた第十二回東京サミット警備応援のため、壮途五五〇キロの出郷の瞬間である。

日本の治安の良さについては、国際的に評価の高いところだが近年の国際的なテロの時代、そして日本においても戦後第二のゲリラ高揚期とも言われる。そのような情勢下、定期異動により半数の隊員入替えがあり、また管機第一期合同警備訓練期間についても短縮され、更に極左のロケット弾の出現等厳しい状況下での出動であった。

我が警戒区は、国電信濃町・千駄ケ谷・代々木・原宿・渋谷に囲まれた迎賓館地区で、二人一組による二十四時間体制の警戒活動である。主な勤務は、発射物対策で検索・職質の徹底が要求される。隊員のなかには、原宿の明治通りや表参道・大都会東京の雑踏・高層ビルに圧倒されて地に足がつかないのではないかとの不安もあった。しかし、全隊員が任務の重要性を自覚しており、東北弁をものともせず積極的に不審者を職質した。

警戒エリア内には極左等の対象者を一人たりとも絶対に侵入させないとの強い信念をもって警戒活動に当たり、当番初日には、刑事事件の被疑者を現逮し、さらには盗難車両の発見、張込、あわやも被疑者逮捕か、という目ざましい活躍ぶりであった。

大都会での深夜の単独警らは、かって経験したことのない緊張感がただよい、どうすれば自分の担当エリアからゲリラ等の発生を防止することができるかと前段警備から全神経を使った。そして、指揮官として表現できない不安もあった。更に非番運用では夜間までの長時間の勤務となり、身心ともに耐えながら全力投球した。

本警備を乗り越えることができた要因としては(一)、新体制をながら耐えることを主眼とした訓練を全隊員が克服して上京した、(二)、苦しい訓練に耐え機動隊とは何かを身をもって感じとり日本の治安維持にとって最後の砦であることを自覚した、(三)、担当警戒区内住民の方々に激励の言葉や深夜にコーヒーの差入れをしていただき言葉では言い尽くせぬ程励ましていただいたこと等、があげられよう。

一人の負傷者もなく、担当区域から一件のゲリラ事件も出さずに任務解除の無線を耳にした時の感動、そして半月ぶりの郷土の雛蜂南部片富士を目にした時の感動は、私の脳裏から一生離れることがないと思う。

関東管区機動隊

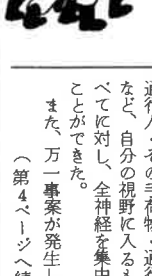
史上空前の警備といわれた天皇御在位六十年記念式典及びサミット警備に、全国三万人の警察官のひとりとして、また関東管区機動隊の一隊員として出動できたことに対し、素直に喜びと感謝の入り混じった充実感を味わっている。

二十四日間という長時間の勤務は、体力と気力の限界ともいえる激務といった方がしっくりくるかも知れない。一分～秒の緊張感の中で一日一日が過ぎていくにつれて、気力は十分あるものの疲れが隠せなくなってきたのも事実であった。

しかし、私達は関東管機の隊員なんだ、この重大警備に向かって、訓練で鍛えられた強じんな肉体と精神力を燃えつくすまで前進しようと隊員同士が励まし合ってきた。

桜の花を横目でみながら、皮肉にも空は味方してくれないのか、五月とはいえ深夜ともなると防寒衣を身につけた日々、雨具を用いた日も数多くあった。成田警備とは異なった意味での守りの警備は、厳戒体制の中にあってスマートな警備が要求されるもので、地味で難しい警備の中で、隊員一人ひとりの決意はただひとつ。「失敗は許されない」サミット警備の無事終了に全力投球することであった。

一部では「過剰警備ではないか」という批判的な声もあったが、国民の大多数は、日本警察の努力を改めて認めてくれたのではないだろうか。最高警備本部からの任務解除の一報命令に続いて最高警備本部長（警視総監）からの訓示を受けた時、思わず目頭が熱くなったのを今でも覚えている。この涙はサミット警備に従事したもの全員が味わったものであろう。三十歳を過ぎた私の肉体と精神を完全燃焼させてくれたサミット警備は、私にとって忘れることができない。



増田 光司

中部管区機動隊　小嶋 正志

警視庁の部隊との任務交替を終了し、小隊バスに引きあげる途中、自分でもスーッと体の力が抜けていくのが分かった。任務を完遂できたという満足感、充実感を味わえたのは、もっと後のことであり、正直なところこのときは、ただ「やっと終った」という安堵感でいっぱいだった。

今回の警備は厳しかった。雨にも降られた、非番運用も続いた。夜間は冷えた。立番中、激しい睡魔に襲われたこともたびたびあった。しかし、そのたびに私は「今、日本中の警察官が一つのことをなし遂げようとして頑張っている。俺たちは、その一翼を担うものとして、ここ東京で勤務しているんだ」そう思って頑張った。これは、全員の気持だったとも思う。

私たちがこの厳しい勤務を乗り切れた背景には、周りの人たちの協力援助というものがあったことも決して忘れてはならない。朝早くから食事を作ってくれた管区学校の食堂の人たち、当番日の仮眠場所を提供してくれた各企業の方々、そして何よりも、我々の活動に対して「大変ですね、頑張って下さい」とねぎらいの言葉をかけてくれた都民の人たち。そういった人達のお陰であることを大いに感謝せずにはいられない。

私は、今年四月に入隊したばかりの「新隊員」であり、今回の警備がいわば「初陣」であった。右も左も分からないことばかりのなかで、大変思い出深い出動になった。

そんな私が、今回最も心がけたことは「自分の受持ち警戒エリアは絶対に守る」ということであった。この気持を強く持つことによって、自ら検索にも力が入り、立番中も流動警戒中も通行人・その手荷物・通行車両など、自分の視野に入るものすべてに対し、全神経を集中することができた。

また、万一事案が発生した場

（第4ページへ続く）

今月の言葉

政府の巧みな舵取り望む

論議の喧しかった衆、参同日選挙が七月に行われ、自民党は衆議院で予想をはるかに上回る三百四議席を獲得し、まさに地滑り的勝利をおさめた。これによって中曽根政権は安泰とあり、日本の政治体制は引き続き自民党の支配下で安定状態が続くこととなった。

政治体制の安定度が増すということは、国民にとっては勿論喜ばしいことである。このことは海外からみても好ましいことには違いないが、一方で、政権の信頼度が強まったので日本に対する諸々の要求を、今までより訴えやすくなったと見ているのではないだろうか。

それにしても、経済問題に対する最近の海外からの圧力は並み大抵のものではない。特にアメリカからの諸要求によって、今日日本が置かれている立場は百五十年前の黒船来航当時のそれに近いのではないかという見方さえある。一向に減らない対日貿易赤字に業を煮やしたアメリカは、日本に対してこれまでの様に市場開放だけではなく、金利引き下げ、経済援助の拡大、産業構造の変革等の要求をぶっつけて来ている。これ等の要求に応えていかなければ、アメリカ国内に澎湃として起りつつある保護貿易主義の動きによって、日本の発展の道がふさがれることとなってしまうであろう。

問題は、従来の輸出主導型の経済構造を内需主導型へと移行させて行く過程で起きるそれぞれの産業、企業への影響の点である。我々企業人としては、マクロ的には方向転換は理解出来るが、ミクロ的には如何にしてこの変化を乗り切るかが最大の問題である。個々の企業にとっては身を削るような努力をしなければならない。政府もこのことは充分認識してくれていることとは思うが、是非とも巧みな舵取りをお願いしたいものである。

さて、私ども機動隊員等を励ます会千葉支部の第六回総会が同日選挙後間もない七月十八日に行われ、その折久方振りに成田国際空港の警備に当っておられる機動隊員の方々と同席させていただく機会を得た。短時間ではあったが交歓のひとときを持って、隊員の皆さんが日本の表玄関ともいうべき空港の警備の重大性をよくわきまえられ、誇りをもって任務に励んでおられることを再認識し、深く感銘した次第である。

日本の政治体制が安定度を増せばそれだけ海外からの期待も高まり、具体的要求をたずさえての日本への往来もますます頻繁になるものと思われる。それだけに空港警備に当っておられる方々は勿論のこと、全国津々浦々のそれぞれの持場で黙々と責任を果たしておられる隊員の方々のご苦労も増すことと思い、精一杯のご支援を送り続けなければと気持を新たにするこの頃である。

（曽根貞雄）

元気で頑張っています
警視庁機動隊

拝啓　父上様と書いたり書かれたりするのは、面映ゆいようだが楽しいものである。世の中は便利になって電話が普及しており、料金も他の物価に比べて格段と安くなった。「カネオクレ」といった口では言いにくいことなら電報やファックスがある。しかし手紙には手紙でなければならない、繰り返して読むことのできる味わいがある。手紙のやりとり、これは離れて暮らす人たちの特権でもあろうか。

これからも宜しく
一機　濱崎　主司

すっかり秋めいてきましたがいかがお過ごしですか。大学を卒業して、はや四年目を迎えましたが、貴君の事ですから立派に警察官として勤務に励んでいることと思います。

私も卒業後、一年間会社勤めをしましたが、期するところがあり、奇しくも貴君と同じ職業に就きました。貴君より一年後輩の新米ですが、未熟ながらも一生懸命頑張っております。

私は去る二月十九日に伝統ある警視庁第一機動隊勤務となり、本年上半期のサミット警備をはじめとする一連の大警備に、基幹隊員として警備に従事することができ、大変光栄に思っています。貴君も県警で警備に従事されたと思いますが、いかがでしたか。勤務先こそ違いはあるが、警察官としての職務は同じです。

あの福沢諭吉は「人生において一番立派なことは、一生涯を貫く仕事のあることである」と説いています。職業に貴賤の別はありませんが、国民の平和と安全秩序の維持を責務とする警察官という職業は、他の職業に比べ公共性の極めて強い職業であり、男子一生を託すにふさわしい職業だと思います。

今後益々お互い公私両面で何かと忙しくなってくる事と思いますが、仕事に誇りを持ち一歩ずつ確実に進んでいく事が大切だと思います。

くれぐれもお身体を大切にし頑張って下さい。（中隊員）

頑張っています
一機　崎山　博司

秋がもう来ているというのに、陽差しの強さがまだ夏を思わせるような毎日ですが、父上、母上には、お変りありませんか。

ところで、まだまだ一人立ちできない私ですが、本年は早々から貴重な体験をさせていただきました。私の自己満足ですが、少しは人間的に大きくなれたのではないかと自負しています。

というのも天皇陛下御在位六十年記念式典をはじめ東京サミット、チャールズ皇太子御夫妻訪日という一連の大警備を上司、先輩、同僚と共に完遂しました。本当に苦しく厳しい警備でした。何度挫折しそうになったかわかりませんでした。

でもやっぱり私は父上母上の子ですよね、いつも聞かされた「克己心」という言葉を苦しい時に思いだすことが出来ました。勿論、同僚の皆がいてくれたおかげでもありました。

六月で二十三歳になりました。歳だけとってなかなか大人になれない私ですが、一日でも早く父上を越えられたらと元気で頑張っています。筆無精なもので便りが途絶えがちですが、近々またお便りします。（中隊員）

帰省中はお世話になりました
二機　小村　耕作

第二機動隊に転勤してから初めての長期休暇は、本当に短く感じられました。帰省期間中は、いろいろとありがとうございました。わずかな間でしたが、今年の帰省休暇は、これまでになく充実していたように思いました。それも、やはり東京サミットをはじめとした一連の大警備を終了した満足感で心置きなくゆっくりと寛げたからだと思います。久しぶりの田舎は大分変わっているのにびっくりしました。父上母上の白髪も目立ってきましたね。

しかし、透き通るような海、抜けるような空の青さだけは変わってなく安心しました。やはり、田舎はいいものですね。

近く私の結婚式を控え、私以上に忙しいことと思いますが、よろしくお願いします。来年は、家族三人？で帰れたらいいなあと思っているのですが、でもまだ、おじいちゃん、おばあちゃんにはなりたくないでしょうね。

お身体には充分気をつけて下さい。私も首都治安維持の戦士として一生懸命頑張っていきますので、これからも見守っていて下さい。（中隊員）

帰省の際には宜しく
二機　杉野　隆平

いかがお過ごしですか、お伺い申し上げます。君のことだから相変らず元気で仕事に頑張っていることと思います。

私の方は、君も御存知のように、一連の大警備のため勤務も一段と厳しいものでした。日本の警察の威信とわが国の国際的信用をも左右する大警察の矢面に立って勤務できたということは、機動隊員として大変な名誉でした。また、サミット警備の初日が私の二十三回目の誕生日と重なり、この世に生を受けて幾度となく回ってくるその日を、ピリピリとした緊張感の中で迎えられ、私の警察人生において忘れることのできない良い思い出となりました。

この前の手紙によれば、私の実家の近くへ引越してきたそうで、こんど帰省した際、一度寄らせていただきますので、その節は久々に一杯やりたいものですね。

一層の御自愛をお祈りいたします。（中隊員）

教官ありがとうございました
三機　中崎　英樹

先に行われた天皇陛下御在位六十年記念式典、主要国首脳会議等、一連の大警備を終え、ほっとしたのも束の間、また多忙な毎日を送っていらっしゃることと思います。

私はサミット期間中、特機の中隊長伝令として、米大、ホテル・オークラ地区の警備にあたりましたが、本当に辛いものでした。しかし、偶然にも会えた同期生が一生懸命に頑張っている姿を見、また「頑張れよ」等励まされ、なんとかこの警備を無事に遂げることができました。今となっては、勤務の辛さや疲れなどは「完遂したんだ」という自信と充実感に変わり、爽快な気分が残っています。

現在は、広報係員として勤務しています。新米係員として先輩の足を引っぱらないよう努め、素晴らしい警視庁広報マンを目指して、日夜訓練に励んでおります。

同期の仲間と会う度、教場、川路広場、寮等、初任科一年間の生活が走馬燈のように駆けめぐり、教官に叱咤激励されたことが思い出され、私を奮い立たせてくれます。改めて教官への感謝の念と共に〃頑張らねば〃という気持ちでいっぱいです。

今後の教官の御活躍と御健勝をお祈りすると共に、再会し教官の温かい御指導がいただける日を楽しみにしております。（広報係員）

兄さん頑張ってますか
三機　石田　勝広

今年の上半期は、天皇御在位六十年記念式典や東京サミットの警備に明け暮れました。この警備では、大変辛い勤務が続きました。隊員の皆が、力を合わせ成し遂げた大仕事で、私の人生にとっても貴重な体験だったと思っています。

自分自身よく体を壊さずに仕事ができたとびっくりしています。これも、機動隊にきてから、訓練やジョギングなどをして体を鍛えあげたからだと思います。健康を考えた時、運動を日常生活に取り入れることは絶対に必要なことだと思います。暑さで体もだるくなり動きたくない時もありますが、運動をして全身から汗を出した時は、爽快で明日の仕事の糧になります。

兄さんの仕事は工場での作業ですから、いつも汗びっしょりで頑張っていることと思い：。晩酌のビールがうまくなるように、気持ちの良い汗をかいてください。

そのうち土産話しをたくさん持って、そちらの方へ帰りたいと思います。その時は、また二人で酒でも飲みましょう。それでは、会う日を楽しみにしています。お元気でお過ごし下さい。（中隊員）

頑張りました
四機　桐島　俊彦

ご両親さまには、お変りなくお暮しのことと思います。早いもので機動隊に着隊して一年二カ月が過ぎ、隊内生活にも慣れ厳しい勤務のなかにも楽しい毎日をおくっておりますのでご安心下さい。

先般は主要国首脳会議をはじめ天皇陛下御在位六十年記念式典、英国皇太子御夫妻来日など、警視庁が総力を挙げて取組んだ警備に、連日連夜、息つく暇もないほどの忙しさでした。これほどの大警備に、機動隊の一員として従事できたことは、私にとってこれからの警察人生に大きな力となるものでした。

とりわけ厳しい勤務に嫌な顔も見せず、黙々と取り組んでいる先輩方の横顔に真の警察官の姿を見た様な気がします。また、警備中に理解ある都民から「お巡りさん、大変だね、ご苦労様」と一声かけられた時には、疲れもふっ飛びました。今思うに、厳しい警備に最後まで従事できたのも、このように、都民の理解と協力さらには励ましがあったからだと思っています。

この警備を通じて、改めて警察の職務の重大さを認識すると同時に、自分の選んだ道が間違っていなかったことを確信しています。警察官としての誇りと自覚を持ち、若輩ながら精一杯努力しております。

では、お体を大切にお過ごしください。（中隊員）

心の故郷・尾瀬へ
四機　山田　武

「夏が来れば思い出す、はるかな尾瀬遠い空ー」、この詩のように、雄大で草花の美しい尾瀬は、東京育ちで田舎を知らない、私にとっては心の故郷であり、私の一番好きな所です。

尾瀬は行くたびに、澄んだ空気、自然の水、そして水芭蕉が私に違う感慨を与え、暖かく迎えてくれます。私にとって、尾瀬は疲れた心を癒してくれる唯一の場所なのです。

そして、尾瀬に訪れた人々が笑顔で、行きかう誰れとでも屈託なく交わす「こんにちは」という挨拶。都会のギスギスした人間の心を澄んだ心に洗い落してくれる場所です。また、歩き疲れた時、自然の水を沸かして飲むコーヒーは、都会のどこの店で飲むコーヒーよりもおいしい。

思うに、尾瀬の雄大な景色は、日本でも数少ない残された大自然であり、観光道路など造らず自然の宝庫をいつまでも残して欲しいと思います。

そして、季節がおりなす尾瀬の自然は、全てのものを呑み込むほど寛大で、夏には多くの人々を暖かく迎え、冬には降り積もる雪が美しい風景を演出して、私達を楽しませてくれます。このような雄大な自然のある尾瀬に行ってみませんか。（中隊員）

前略　おふくろ様
五機　高柳　和義

お変りはないでしょうか。いつも故郷佐賀の風景とともに、おふくろが暑い夏の盛り畑に出ている姿を思い出しています。

今年の前半はかなり厳しい勤務でしたが、やはりおふくろの子。私も根性で乗り切りました。今年はおふくろに喜んでもらえるような気立てのいい嫁さんを東京で早く見つけたいと思っています。楽しみにして下さい。

話しは変りますが、体の調子はどうですか。いつまでも若くはないのですから、畑仕事の時など決して無理しないで下さい。先日送った小遣いは必ず使って下さい。いつも仏壇にあげたまま全然手をつけないおふくろだから。

久しくおふくろの手料理を食べていないので、今から楽しみにしております。田舎の川原で童心にかえって遊んでみたいと思います。

帰郷できる日を楽しみにしながら、仕事に打ち込んでいきます。繰り返えすようですがくれぐれも体には気をつけて下さい。（中隊員）

前略　母へ
五機　山下　忠雄

高知の方はいかがですか。母の日に贈った「扇子」使っていますか。いつも母さんは使わずにしまって置く癖があるので、多分扇子も箪笥の中でしょうが、遠慮なく使って下さい。最近母さんから「近況を知らせなさい」「東京の親戚に挨拶に行きなさい」「下着は間に合っているか」等の便りがないということは、初孫の世話で忙しいのだろうかと思っています。今年も端午の節句には柏餅をつくったのですか。故郷を離れて六年。節句の季節になると、朝早く兄貴と二人で近くの山で柏の葉を刈って餅をつくってもらったことが、つい昨日のように想い出されます。

さて、私の近況ですが、今年の上半期はサミット警備をはじめとする重要な警備が行われ、厳しい勤務が続きました。しかし、史上最大と言われる警備も気力と体力で成し遂げました。体は極めて健康ですので、安心して下さい。これも毎日かけ足訓練、柔道の練習で鍛練しているからだと思います。

これからは、畑仕事などなるべくしないようにして体に充分気をつけて下さい。特に風邪には気をつけること、帰省休暇を楽しみにしております。（会計係員）

山登り雑感
六機　郡司　辰男

学生のころ、八月といえばいつも合宿で長期間夏山登山し、

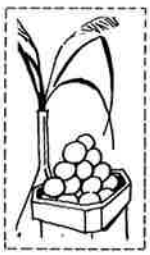
全身汗と泥にまみれて、青春を謳歌していたころを懐かしく思い出します。最近は出無精になり、山や海へ出かけることも少なく、夏の太陽を避けて生活するようになってしまいました。ひまわりでさえ、太陽に正対しているのに。年のせいでしょうか。

先輩がよく言っていました。「車やケーブルを使って山へ登っても、それは快楽であり、重い荷物を背負って、一歩一歩山を登り詰めてこそ歓喜があるのだ」と。静的生活を好む今、まさに快楽追求の連続で、これではいけないと戒めています。

山や海が無理ならばジョギングでもいい。テニスでもいい。家族とともに太陽の下で、思いっきり汗をかき、健康な体づくりを目指したいものです。そして一杯でいいから、冷たいビールを喉にして「喜び」を感じたいものです。

今ごろは、高山植物もさわやかな風を受けていることでしょう。いつか子供たちが大きくなったら、是非一緒に山へ行き、当時の思い出話に花を咲かせましょう。それまでに七十二センチのキスリングが背負えるよう足腰を鍛えておきます。お体を大切に!!

（分隊長）



力を合わせて

六機　小森　彰仁

人間というのは実に勝手なもので、暑ければやっぱり冬がいいと思い、逆に寒ければ早く夏にならないかなと思ったりしますが、どうですかあなた自身は。

でも警察官は、焼ける日も凍つく夜も、毎日毎日耐えて立つ街の防人。これほど重要な仕事は他にはないと私は思います。都民の良き友として愛をもって勤めを果たしているのですから。

このような残暑にも負けないで、立派に勤めを果たせるのは自分自身を丈夫に育ててくれた両親のおかげであり、そしてまた、その後日常の訓練に一人ひとりの警察官が汗を流し、身体を鍛えているからです。

どんなことがあっても、警察官は常に仕事に命をかけてやっているのです。そのことに理解をもってくれている都民が大勢いるのです。警察官のみなさん、一生懸命にがんばりましょう。

（中隊員）

母さん、体を大切に

七機　富高　美充

今年の夏は、そちらへ帰るつもりでしたが、果たせないままとうとうお盆も過ぎてしまいました。私達が元気でやっているということを母さんに見てもらい、安心してもらおうと思っていましたが残念です。結婚して一家の柱になり、家庭を築き上げ、守っていくことの大変さを最近わかりました。父さんも大変だったんだろうな……。

結婚してからの半年は、あっという間でした。私の後には、私を信じてついて来てくれる妻がいると思うと、仕事にも張りが出て、以前よりも毎日が充実しているように思います。たまには喧嘩もしますが、仲良くやっていますので安心して下さい。

ところで、母さん、この前、腰が痛いとか言っていましたが、その後どうですか。母さんは頑張り屋だから、知らずのうちに無理してしまうんですよ。もっと体のことを考えて下さい。

宮崎は、これから台風の季節ですね。「そんなことはわかっているよ」と言う母さんの顔が浮かびますが、慣れていても十分気をつけて下さい。

赤ん坊はまだですが、この次の、良い知らせを楽しみにして下さい。さようなら

（分隊長）

父の言葉

七機　中村　義明

先日のサミット警備期間中は励ましの手紙をいただき、誠にありがとうございました。また、手紙や電話もあまりできず、さぞ心配されたことと存じますが、申し訳ありませんでした。

私としても初めての大警備、それも最も重要な迎賓館警備を担当するということで、事の重要性の認識と治安警備のかなめの機動隊員としての自覚に、緊張と疲労感を隠せない時もありました。でも父上から教わったゲーテの「人間だけは、不可能と思われることを成し遂げることができる。但し、それには、忍耐力がなければならない」という言葉を思い出し、又、都民の温かい理解と協力によって一連の大警備を完遂することができました。私もサミット警備に従事した一人として、都民に対する感謝の気持ちと忍耐力が、この大きな体験を通じて、自分のものになったような気がします。

いつも見守ってくれる父上、母上、本当にありがとうございます。お身体に気をつけて、お過ごしになりますようお祈り申し上げます。

（中隊員）

療養中の親父さんへ

八機　玉城　和也

親父さん、元気ですか。東京は幾分、しのぎやすくなってきましたが、そちらはいかがでしょうか。

昨年の十一月に、お袋さんから突然、「親父さんが交通事故に遭い重傷を負った。明日、帰って来て」との連絡を受けた時は、ほんとうに驚きました。帰ってみると、親父さんはベッドで目を閉じて無言のまま。生きているのか死んでいるのか。かなりの重傷を負っていたんですね。

あれから随分経ちましたが、今は退院してリハビリを受けているとのこと。膝がまだ痛むとは聞いていましたが、もう少しの辛抱。無理をせず、気長に療養を続けて下さい。

私の方は、第八機動隊に転勤して以来、早や三年半。今は、操車係員として先輩方の厳しい御指導に従って頑張っています。まだまだ、車両の運転は未熟ですが、交通事故には十分気をつけて精進するつもりです。

ところで、農作物の成長ぶりはいかがですか。暑さに負けずすく成長しているといいんですが。こんなことも心配している今日このごろです。それから、一つ頼みがあります。嫁さんのこと頼みましたよ。来年は二十五歳になるからね。とにかく親父さん、一日も早く元気になることをお祈りしています。お袋さんにも宜しく。またおたよりします。さようなら

（操車係員）

たった一人の弟へ

八機　石川　龍也

新也、元気かい。兄さんは元気でやっているよ。東京は、まだ秋にはほど遠いといった感じだ。新也は、たしか、デニーズで働いていると聞いたが、一生懸命やっているかい！お客さん相手の仕事だけに、いろいろと気苦労が多いと思うが、先輩方の御指導をよく守り、頑張ってくれ。

兄さんは、今、第八機動隊で勤務している。機動隊と言えば何か、いかめしい感じを受けるかもしれないが、みんな根は優しい人達ばかりなんだよ。新也も知っているとおり、兄さんはウエイトリフティングの選手だから、あまり警備には出ない。

一年間の半分は、訓練に明け暮れている。お陰で、体だけは丈夫だよ。それが兄さんの取柄。ただ、これからはそうばかり言ってはいられない。兄さんは、来年、二十七歳になるんだ。結婚のことも考えなければ。新也は、まだ若いからいいが、こと数年でけりをつけたいと思っている。両親からも、「早くいい娘をみつけな」と言われているが、なかなか機会がなくて……。とにかく、新也は今の仕事を大切にして頑張ってくれ。兄さんも頑張るよ。くれぐれも体には気をつけるようにの。さようなら

（中隊員）

夏バテ知らず?!

九機　小川　竜也

その後、お変わりありませんか。この時期になると、大汗かいて田んぼの『ヒエ』を取っている母上の姿が思い出されます。もう田んぼの消毒は終りましたか。そちらは、東京より暑くて、田んぼの仕事は、さぞ、大変な事と案じております。

私の方は、機動隊で鍛えているせいか夏バテもせず、まして今年一人一倍頑丈な身体ゆえ、元気で毎日の仕事に励んでいます。そちらの方はどうですか。皆んな元気にやっていますか。風邪等ひいていませんか。あまり無理をして体調をくずさないよう気を付けて下さい。

近く、久しぶりに帰省しようと思っています。しばらく帰っていないので、皆んなに会える日を楽しみにしています。帰ったら、母上の仕事の手伝いも出来ると思います。くれぐれも身体に気をつけて、私の帰りとく沢山の土産を楽しみにして待っていて下さい。ではまた連絡します。

（特務係員）

故郷は今

九機　三浦　基

父上、母上、お元気でお過ごしでしょうか。私の方は、父上母上から頂いた疲れ知らず、夏バテ知らずのこの身体をフル回転させて、毎日、仕事に励んでいます。

秋の気配が感じられる今日このごろ、故郷の野山の草や木々たちも、着々と秋の準備をしているのではないでしょうか。

長く厳しかったサミット警備をはじめとする一連の大警備も無事終了し、ホッと一息ついている今、故郷の楽しい光景が私の脳裏をかけめぐっています。

秋祭りやなつかしい近所の人々、昔の友達、親戚のおじさんやおばさんの顔が浮かんできます。大変残念ですが、今年も、この時期には帰省できません。皆さんには、呉々もよろしくお伝え下さい。お身体を御自愛なされますよう。では、今日はこの辺で。

（中隊員）

先生御安心下さい

特車　前田　茂則

降り注ぐ太陽の日差しが、衰えも見せず激しくアスファルトに照りつけている毎日ですが、いかがお過ごしでしょうか。

私も早いもので、特科車両隊に着隊して間もなく三年半になろうとしています。現在は、技術係通信担当として緊張の毎日ですが、元気に頑張っています。去る七月二十五日、巡査部長昇任試験の合格発表があり、私も名を連ねることができました。帰省の折には、合格の裏話をゆっくりと致したいと思っております。

先日、高校の同級生であるM君と三年ぶりに会ったところ、彼も九州人らしく力一杯頑張っているようでした。私も負けてはいられません。さて、福岡の方へは随分帰省をしていませんが、大濠公園の湖には多くの太公望が集まり釣糸を垂らして、にぎやかにやっていることでしょう。折に触れ、あの福岡の空や町並みを思い出しています。

朝な夕な、安ずる日々よ今宵また、福岡の空にも星はふるるか――茂則――（通信係員）

頑張り続けます

特車　伊藤　雅人

父上、母上お元気ですか。私も毎日元気に頑張っています。サミット等、一連の警備も一段落し、訓練、仕事、勉強に張りきっている毎日です。早いもので特科車両隊に着隊して半年。この半年は私の人生で一番、気力体力的に辛い期間でした。

着隊する時に覚悟していたものの、これ程とは思いませんでした。時には、立番している時「なぜ俺は、ここに立っているのだろう」と思ったこともありました。何もかも投げ捨てて、田舎へ帰ってしまおうかと思ったとさえありましたが、父上母上の事を思い浮べると、とてもできませんでした。

東京に身寄りがないので、何かあると、まっさきに脳裏をかすめるのは母上の顔です。そして、よし頑張らなくてはと、いつも心に言い聞かせています。

私は、着隊してから本当の男の仕事の厳しさを知りました。しかし、半年たった今、これからも頑張り抜く自信がついたのも事実です。体に充分気をつけて二人とも頑張って下さい。

（中隊員）

昔のトラ取締法

警視庁特車　森前　昭男

酔っ払い運転は、運転者のみならず、運転者に酒を飲ませた者も罰せられることになっている。

江戸は元禄のころに、これと同じような法令のあったことをご存じだろうか。元禄といえば西鶴、芭蕉、近松などの文芸が興り、遊里や芝居小屋が活況をみせ、商業が発達して町人の勢力が強まり、いわゆる元禄文化が花開いた。

活気あふれた町人文化の台頭で、下級武士たちにも自由の気風が生まれて華やいだ世相となり、酒に酔って気ままな振る舞いも横行するようになった。

元禄九年八月、幕府は、「酒狂のものこれ有り候わば、酒給させ候ものも、越度と為すべき事」という布令を出した。時の将軍は綱吉。我々も気を付けたいものである。「もの知りになる本」（佐雍　知）

お知らせ

当励ます会の北陸支部総会が十月二日（木）午後五時よりセレモニーホール新潟で開催されます。奮ってのご参会お待ちしております。

鉄石の団結
躍進機動隊

鈴木實
小川運輸㈱
芝本龍平
山大鉄商㈱
関東銑鐵㈱
山陽特殊製鋼㈱
高周波熱錬㈱
西野公庸
竹之上誠剛
浅田弥三郎
東海レベラー鋼業㈱
豊田通商㈱
広畑海運㈱
丸橋正彦
自見産業㈱
三星金属工業㈱
早達運送㈱
北越メタル㈱
㈱上野百貨店
㈱佐藤製線所
ゴロク建材㈱

読者の広場

新選組評判記

滋岡長平

幕末の動乱期に、京坂の地を舞台に幕府の手先となって尊王攘夷の志士達を弾圧した新選組に対しては、戦後に天皇制批判のタブーを解かれた事もあって資料の発掘や研究が盛んに発表される様になった。

戦前からも大衆小説の飯の種ではあったが、この時代の鬼っ子は小説・映画はおろかテレビに迄花々しく登場し、実像を通り越して凡て武士道の典型の如く讃美される始末である。近藤勇、土方歳三の剛勇振りはもとより、若くして病死した沖田総司は剣と恋に生きた青春のヒーローとして取扱われて居る。

然し乍ら戦前戦後を問わず新選組を愛惜して筆を取るものは、維新後に不運を託った幕臣や奥羽諸藩士の後裔が多く、百年を経て尚藩閥政府に対する怨念が残って居る風が見られる。

然らば新選組が猛威を振った京坂の地での評判はどうであったか。口さがなき京童は長剣を撫して横行する彼等を壬生浪（みぶろ）と称して嫌悪したと伝えられて居る。由来京都は王城の地であり、町衆は所司代等の幕府方と体質的に合わず勤王諸藩士に好意を持って居た様である。

大阪は城代に依る直轄地であるが、大きな経済力を持つ町人の町であり二百年来権力と民衆が融和して来た都市である。

文久三年春、守護職の配下に認知された直後の新選組は大阪に進出し、芹沢鴨以下が大挙鴻池家に押し入り二百両を強奪、制服を作ったのを初め度々浪速の富家に金品の強請を行う。下寺町万福寺に奉行所の向うを張って九番隊屯所を置き志士の探索検挙を始める。

同年七月、大関小野川部屋と紛争を構え、徒手の力士十数名を殺傷し、大衆の怒りを買った。度重なる事件に町奉行も放置出来ず、処断を策した西町奉行所の名与力内山彦次郎は翌元治元年五月、暗夜に乗じた近藤、土方等十余名に斬殺される。その六月、池田屋騒動、七月蛤御門の変、八月より翌年二月にかけ長州征伐等、変転する歴史の中で新選組は活躍する。改元された慶応元年五月、将軍家茂、長州再征のため下阪に際し新選組も随行する。

当時の大阪ではその繁栄を誇る派手な夏祭が行われて居た。然し昨今の物情騒然たる中では祭どころではない。今年は船渡御を取止めるべきであると、天満神宮司滋岡功長は提案し、各社は同意して居祭と決定した。所が新選組が将軍家在城中であるから最も盛大に行うべしと通達した先方であったから揺らない。滋岡宮司と氏子総代は屯所に呼び出され、白刃を揮って変更を迫られたが、剛直な宮司は脅迫に屈しなかった。

こうした事件が続いてこの粗暴な俄か武士の徒党は、町方の秩序を乱し大阪の民衆に著しく評判が悪かった。

間もなく戊申戦争が始まり、慶応四年四月初下總流山で官軍に包囲された近藤勇は大久保大和と偽って投降、二十五日板橋で斬に処せられる。六月京都三條河原に梟首された後、大阪の千日前刑場に三日間晒されたのは大阪三郷の民家のたっての希望であったと伝えられて居る。

残余の新選組は奥羽、函館に転戦し、土方の戦死と前後して幕を閉じることになるが、如何にロマンと虚像で粉飾しても、体制の中で志を得なかった階層が、斜陽の幕府権力を利用して名利を求めた徒党に過ぎなかったのではないか。

殊にその結成より終末迄僅か六年、無思想の故か多くの内訌、分裂があり、局中法度と称し集団を維持する為に十数名の犠牲者を出して居るのは、最近の新左翼等にも酷似して陰惨な匂がする。

数の遊び

赤木郷八郎

機動隊の皆様、毎日御苦労様です。暑い夏もようやく終り、涼しさにほっと一息ついておられることと思います。

そんなところへ、暑苦しい数学の問題を持ち出して、皆様を悩ます気は毛頭ございません。ほんのお遊びです。楽しんでいただきたいと思います。

（その一）

一・八リットルのビンのなかに、ハエを一ツマミ入れました。このハエは一日ごとに倍、倍とふえ、七日間で、ビンに一杯になりました。

ビンに半分になるのに何日かかったでしょうか。

（その二）

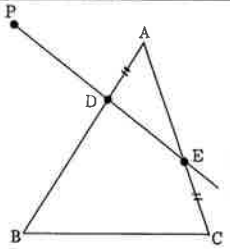
親二人、子二人が町から出て行ったら、その町の人口が三人減りました。何故でしょう。

（その三）

ここに七ケのボールがあり、このうちの一ツだけが、他の六ケに比べて重さが違うが、重いか軽いかわかりません。天秤ばかりを三回つかって、そのボールをみつけ、他のボールに比べて、重いか軽いかをいってください。

（その四）

あたえられた△ABC外のあたえられた点Pから直線を引き、AB、ACと交る点をそれぞれD、Eとし、AD＝ECとなるように作図してください。



最後に漢字遊びです

（一）口に一筆または二筆加えて漢字を二十字以上つくれ。

〔例〕中、田、兄

（二）次の字に偏または旁などを加えて漢字をつくれ。ただし同じものは使わないこととする。〔例〕鰆

春　夏　秋　冬

東　西　南　北

甲　乙　丙　丁

（三）同じ漢字を三ケ重ねて漢字をつくれ。〔例〕姦

答　え

（一）六日

（二）親、子、孫

（三）七ケのボールのうちどれか他に比べて重かろうが、軽かろうが、必ず見つける方法を考えていただくのです。

（四）与えられた点Pと△ABCとで決った直線、角度をして最後は円を描きます。

（第1ページより続く）

合、自分のとるべき措置はどうなのかということも、常に念頭に置いて動務したつもりである。

殊にその警備を通じて、私が学んだことは、我々警察官にとって責任感というものがいかに大切なものであるか、ということである。「確実に自分の警戒エリアを守る」ということが「与えられた任務を全うする」ということにほかならないことを、新鮮な感動とともに、心のうちから自覚できた。

また私は、我々の仕事が、社会的にいかに大きな影響力を持ち、国民から注視されているかということを、身をもって知ることができたように思う。このことは、「職責の自覚」に通ずるものであろう。

日本警察の総力を結集して行われた今回の警備に、微力ではあるが従事できたことを誇りに思い、また私のこれからの警察人生に、大きな自信として役立てていきたい。

中国管区機動隊

立山　尚

私たち中国管区機動隊は東宮御所の南方、カナダ大使館をはじめ、各国の外交関係者が居住する地域を受け持ったが、この地域は期間中、会議に参加する首脳やその家族、また各種要人等の通行が頻繁なため、高所監視、沿道警戒、地下鉄からの吹き上げ対策等に徹宵で当たった。また、最近脅威となっている、過激派が開発した迫撃弾の実効到達距離等を勘案すると、同エリアはその発射地点として適しているため、建造物やその周辺の検索も綿密に実施し、その効果は十分あったと確信している。

十数日間にわたる警備も日を増すにつれ、各隊員の疲労も著しいものがあったが、ときに聞く「毎日大変だけど頑張ってね」という善良な方々のねぎらいの声が、私たちの士気を奮い立たせ、誰ひとりとして疲れを態度に出すことなく、各自の受けもちを、文字通り「死守」した。

私たち隊員が毎日汗と涙を流してまで苦しい訓練を乗り越えてこられるのも、警察官冥利とも言えるこのような警備実施を無事に終えたときの、何物にも代えがたい満足感があるからに違いない。

このサミット警備が成功に終わったことは、迅速・的確な指揮をとった各隊長と、今までの訓練から培われた自信と自覚を持った隊員との結束力がいかに強いものであったかを如実に反映したもので、私自身微力ではあっても、同じ機動隊の一員として役立ったことは、この上ない誇りである。

このなかで忘れてならないことは、至るところで実施した検問・職務質問にも素直に応じて下さった大多数の都民の皆さんの理解と協力、また、このムードを醸成した警視庁の方々の地道な努力であることは言うまでもない。

四国管区機動隊

斎部（いんべ）知幸

長く、眠く、しんどい一週間であった。当初予定されていた出動日が繰り上がったが、情勢はそれだけ厳しいということで、これは気合いを入れていかなければと改めて思った。警視庁警察学校を宿舎として、早速次の日から当務、非番、当務……の厳しい動務が始まった。

我々の守備範囲は千代田区の国電市ケ谷駅～靖国神社付近であり、その内部には、オブザーバーであるEC本部があり、付近には英国大使館もあるといった重要な区域である。検問・高所警戒・遊動警戒などを分担して行い、不法事案の取り締まりに当たった。警視庁警察学校には、サミットまであと○日と書かれた掲示板があり、その数字が減っていくごとに緊張が増していった。

サミット開幕の夕方だったと思う。そろそろ夕食だなあなと思っていた時「金属弾がカナダ大使館方向に飛んだ」との無線。発射地点は我々のエリアの近所である新宿区矢来町であるとのこと。けたたましいサイレンの音とともに、赤色燈を回転させた警察車両が次々と通過していった。同時に、我々の部隊も全隊員が休憩なしの徹底検問・検索を実施した。

期間中、都内国電の十二カ所の駅で小爆発事案が発生。我々のエリア内にある市ケ谷駅は大丈夫なのかと、隊員は必死でゴミ箱等をさがし回った。すると「地下鉄市ケ谷駅構内排水口の中で、爆発物ようの物を発見、現在、防爆マットをかぶせ、梱十枚で包囲している」との無線。結局、これは中にビニール本が入っていたりして、爆発物ではなく、爆笑に終わったが、この時も本当に緊張した。

この他にも、雨の中を神田川沿いに足を棒にして歩いたこと、遊動警戒の際、マイクロ車の中で眠くて仕方なかったこと、検問の際に讃岐弁が通じなくて笑われたこと、地理教示の際、教えてあげられずに困ってしまったこと、等々色々な事が次々に思い出される。

我々の警備するエリアからは絶対に金属弾を飛ばせない、不法事案は起こさせない、胸を張って香川に帰るんだと思い続けながら頑張った。任務解除の時には、やり遂げたぞという満足感でいっぱいだった。期間中においては、我々は同じ目標に向かって努力しているんだという充実感があったし、みんなでやるんだという団結心も一段と養成されたのではないかと思っている。

近畿管区機動隊

田中　登士

出動前の合同警備訓練入校中、極左暴力集団のゲリラ活動・デモ等に対する部隊活動について は連日訓練を重ね、隊員は不法行為に対する闘志がむき出しになっていた。出動の前倒しが決定するや、隊員一同の〝気合い〟も更に高潮し、士気はいやがうえにも最高頂に達した。

と考えていた時「金属弾がカナダ大使館方向に飛んだ」との無線。発射地点は我々のエリアの近所である新宿区矢来町であるとのこと。けたたましいサイレンの音とともに、赤色燈を回転させた警察車両が次々と通過していった。同時に、我々の部隊も全隊員が休憩なしの徹底検問・検索を実施した。

期間中、都内国電の十二カ所の駅で小爆発事案が発生。我々のエリア内にある市ケ谷駅は大丈夫なのかと、隊員は必死でゴミ箱等をさがし回った。すると「地下鉄市ケ谷駅構内排水口の中で、爆発物ようの物を発見、現在、防爆マットをかぶせ、梱十枚で包囲している」との無線。結局、これは中にビニール本が入っていたりして、爆発物ではなく、爆笑に終わったが、この時も本当に緊張した。

この他にも、雨の中を神田川沿いに足を棒にして歩いたこと、遊動警戒の際、マイクロ車の中で眠くて仕方なかったこと、検問の際に讃岐弁が通じなくて笑われたこと、地理教示の際、教えてあげられずに困ってしまったこと、等々色々な事が次々に思い出される。

我々の警備するエリアからは絶対に金属弾を飛ばせない、不法事案は起こさせない、胸を張って香川に帰るんだと思い続けながら頑張った。任務解除の時には、やり遂げたぞという満足感でいっぱいだった。期間中においては、我々は同じ目標に向かって努力しているんだという充実感があったし、みんなでやるんだという団結心も一段と養成されたのではないかと思っている。

近畿管区機動隊

田中　登士

出動前の合同警備訓練入校中、極左暴力集団のゲリラ活動・デモ等に対する部隊活動について は連日訓練を重ね、隊員は不法行為に対する闘志がむき出しになっていた。出動の前倒しが決定するや、隊員一同の〝気合い〟も更に高潮し、士気はいやがうえにも最高頂に達した。

全国から名前も顔も知らない警察官が多数集まる中、すれ違う度に確実に厳粛・毅然と励行される「敬礼」が部隊士気にどのように影響したであろうか。敬礼こそは警察官の精神的基本を表わし、敬礼の善し悪しで警察官の良否が判別できると言われるほど敬礼は規律の根源である。エリア内の流動警戒、部隊車両の移動中においても敬礼や答礼が為されたことによって士気が高揚したことは疑いない。長期間の警備でときとして疲労感に襲われているとき、すれ違う警察官との敬礼により再び身体中に〝ビン〟と張り詰めた一本の芯が背筋を通る。また、敬礼によって他部隊の警察官と連帯感が生まれ、心の中で「共に頑張ろう」と語りかけているようである。組織の連帯感の醸成は百べんの言葉より、こうした敬礼によってなされていると思う。

次に、警備部隊の力の真価は隠れた見えない活動によく表われる。宿舎内での行動、例えば食事・入浴・清掃あるいは動務終了後の帰宿時の部隊移動の整然さ、現場での動務交替の迅速・機敏さ、あるいは出動服、防護具の着こなし、着装等々に部隊規律は明確に体現されている。そして長期間の出動になれば、規律の維持こそ指揮官にとって最大の課題であり、ほんの小さな部分から規律はくずれてくるものであることを考えれば、動務外においてもなおざりにできないところだ。

また、健康管理である。出動中は健全にして強健な身体が最大の原動力である。慣れた生活圏から離れた生活ともなれば精神的・肉体的疲労が蓄積される。健康管理には充分な気配りが必要だ。

そして、見知らぬ土地での部隊活動に欠かせないのが地元の連絡員である。地理に不案内であることほど部隊にとって悩みの種である。我々に随行してくれた警視庁の連絡員は、我々に満足のいく警備実施をさせるため、かゆい所にまで行き届いた世話をしてくれた。

はげまし

発行所
社団法人 機動隊員等を励ます会
東京都中央区八重洲2-4-14
〒104 ミツヤビル3階
発行人 鈴木 實
TEL 03(272)2050
購読料 年間1200円(送料共)
(但し会費の中には購読料を含む)

北陸支部 総会並びに懇親会

治安維持に固い決意

世界各地で事件が多発している。パリでは十日間に五件の無差別爆弾テロがあり、またすぐ隣の韓国でもアジア大会を前に金浦空港で大爆発により五人が死亡した。また、わが国でも、九月末には首都圏で国鉄に対する同時多発ゲリラ事件が発生した。こうした折だけに、北陸支部総会のはげましにもひとしおの真剣さと治安への希いが込められていた。

昭和四十九年三月に発足した当励ます会は来年で満十三年を迎えるが、支部組織のひとつである北陸支部の第十回総会並びに懇親会が十月二日、新潟市のセレモニーホール新潟で開催された。

励ます会会員二百人、それに機動隊員等を招いて合計四百人が参集した会場は熱気溢れんばかりであった。橋本誠・北陸支部世話人の開会のことばで始まった総会は、藤田文雄・北陸支部世話人代表と鈴木實・本部理事長が励ます会を代表して、隊員達の苦労をねぎらうとともに引続き努力されるよう、力強く励ました。

君健男・新潟県知事と鷲崎巍・新潟県警察本部長は、機動隊員が集団警備で県民のために身を挺していることを感謝すると同時に、励ます会の協力と支援に敬意を表する、とそれぞれが来賓として祝辞を述べた。

警察幹部及び世話人等の紹介を経て、乾杯は麻生博・本部世話人が音頭をとり、県警音楽隊の演奏をバックに懇親会へと移った。

昔、院の御所を守護していた侍たちは「北面の武士」と名付けられていたが、いまでは北陸の機動隊を呼ぶのにふさわしい。

日本は島国とはいえ、僅かな海を隔ててその北が近隣諸国に接している北陸は、戦争の恐れなどはないとはいえ、他の地方とは異なったなにがしかの脅威もあるに違いない。会場の一角では日本でもひん発しないとはいえないテロ問題など、会員と機動隊員の真剣な治安論議もきかれ、楽しく賑やかな交歓のうちにも、平和の重大さへの論議が高められていた。

大島樟次郎・新潟県警察機動隊長が「さらに精進努力して国民の期待に応えていく」と謝辞を述べて、参会者一同による機動隊の歌合唱、松田武彦・名古屋世話人の万歳三唱で幕を閉じた。

昨今は世界各地でテロが横行し、テロリストたちの標榜する問題とは全くかかわりのない一般市民にも、多数の死傷者が出た。我国では、抜群の警備力によって大事には至らなかったが、過激派による数々の暴挙がこれまでにも企図されており、これからも機動隊員等の責務が高まっていくだけに、励ます会の励ましにも一段と力が入る。

今月の言葉

フルムーン旅行

私たち夫婦は、今年のゴールデンウイークの前半を利用して、四泊五日のフルムーン旅行に出かけた。例の上原謙と高峰三枝子のモデルポスターで国鉄が宣伝しているフルムーンバス旅行である。夫婦の年令合計が八十八才以上であれば有資格で、料金は格安にグリーン車、連絡船等乗り放題となっている。

私達は丁度百四十才にもなった高令夫婦であるから適格充分であって、自分で楽しみながら行先をあれやこれや選定して、列車の日時と号車の指定と宿泊の予約はこちらの希望も含めて交通公社に依頼して、クーポンにセットされた日程表が出来上る。時間的には余裕をたっぷりともったスケジュールを組んで、のんびりと気軽にマイペースで行動することにした。

ご参考までに私達の今回のコースをお知らせすると、東京から四国琴平の金比羅詣りを皮切りに京都に立戻り、天の橋立を周遊して北陸に向って、山中温泉で最後の垢を落して金沢を経て帰京した。

旅はいい。私は七十年の人生の旅路を振返りつつ、日本の自然と人情の美しさにふれて各地の味覚を楽しむ。家内の方は特に日常の家事一切からの解放感を満喫して、上げ膳据え膳のもてなしに幸わせ一杯の風情であった。このバス旅行は銀婚式記念や、娘が嫁いだのを機会に両親への謝恩プレゼント等々と色々の思いを込めて利用者の人気が高いようである。私達の車中にもそれらしい実年夫婦の幾組かが乗合せていて、微笑ましい風景がよく見られた。

私はこの小文を老夫婦のささやかなのろけを伝えたり、国鉄の宣伝のお先棒をかつぐつもりで書いたのではない。こうした明るく楽しい旅行が出来るのも、国内の法秩序の確立と、平和な社会の維持があればこそであって、今日の日本が豊かで平穏な国情であることを、まことに有難いことだと思っている。海外旅行のプランも考えない訳ではないが、異国の治安が万全でないニュースの多い昨今では、しばらく敬遠したいと思っている。来年も丈夫でフルムーン旅行を、今度は五泊六日に延長して何処へ向って行こうか、と今から楽しみにしている。（馬場鋼太郎）

挑戦

レンジャー訓練を終えて

大阪府警察第一機動隊

第二中隊　田畑　修治

機動隊の訓練の中でも最も厳しいと言われるレンジャー訓練を終えた今、私の胸中は「やり抜いたぞ」という自信と満足感だけが残っている。

この訓練は、決して楽なものではなかった。むしろ、想像を越えたと言える程苦しく厳しいものであり、途中、何度弱気になったことか、しかし、そんな時私を励ましてくれたのは訓練指導係であり、指導員であり、同じ苦しみを味わっている同僚、小隊の先輩達であった。

駆け足で遅れそうになった時、横で声をはりあげて応援してくれた者、うさぎ飛びで一人遅れた者を、ゴールしたにもかかわらず、もう一度その場所まで行き、遅れている者と一緒になってうさぎ飛びをしたり、ロープでブタになりかけている者にのどが痛くなるまで声援したり、皆一人ひとりが他人事と思わずに苦しんでいる者の気持を察し、その人の苦しみを少しでも吸い取ってあげようと必死だった。そうすることによってレンジャー隊員が一つになり、人の心の痛みをわかる人間になっていくのではないだろうか。

私はこのレンジャー訓練を通じ、様々なことを学んだ。まず、人間やれば出来るということだ。

日に日に疲労が蓄積し、足はロープの摩擦と筋肉痛で「もう今日は走れない」とか、ロープを渡る前の体力錬成で、腕がバンバンに張って「あんなに長いロープ、絶対に渡れない」と思っていても、いざやってみると知らぬ間に走り抜いていたり、ロープを渡りきっていた。度肝を抜かれたのは、捻挫をしているにもかかわらず、この厳しい訓練をやりぬいた人がいるということだ。私は訓練の途中でくじけそうになったとき、いつもその人が足をひきずって頑張っている姿を目にし、「あいつはもっと苦しいんだ。こんな事でくじけないぞ」と思っていた。

次に学んだことは、集団というものの中の個人個人が息を合わせ、集団がひとつになれば、すごく大きな力を発揮出来るということである。この厳しい訓練を「一人でやれ」といわれたら、絶対にできないだろう。レンジャー部隊という集団がひとつになって助け合い、励ましあってきたからこそ、やり抜けたのだと思う。

レンジャー訓練三日目位の時、私は、何故体力錬成なんかするのだろうか、という疑問を持った。レンジャー隊員だから、ロープ種目さえきちんとこなせば良いではないかと何時も思っていた。しかし、苦しい体力錬成を実施することによって最初はバラバラであった個人個人が、他の者と息を合わせることが出来るようになった。レンジャー隊員としての体力を養うためだけの体力錬成ではなくて、ひとつの息の合った集団を作るための体力錬成であったことがわかった。

最後に学んだことは、思いやりを持つということだ。この期間中、色々な形で先輩や同僚の思いやりを受けた。大久保自衛隊一日目の時、先輩達は週休だったにもかかわらず激励に来てくれた。また、隊での訓練期間中、待機室の雑用は私達新隊員がやらねばいけないが、私達が疲れているだろうという先輩の配慮で、休息することができた。私が後何年かして先輩と呼ばれる立場になった時、今回、先輩から受けたような思いやりを忘れることなく、後輩に引き継いでいきたいと思う。

私が今回のレンジャー訓練で学んだ事は、これから機動隊で何年も生活していく上において、何が必要かということを教えてくれたような気がする。団結力、勇気、優しさ、強さ。機動隊員は、これら全てを身につけていなければならないと思う。

第三中隊　木下　剛

初日、なかなか起きられない。何とも言えない気持ちである。この気持ちをどう表現してよいかわからない。重い足を引きずりながら出動した。もうここまでくれば諦め、開き直りの精神である。どうにでもなれ、来るなら来いと自分を奮い立たせた。

「集合！」指導員の声が第一グランドに響きわたる。「駆け足、進め！」地獄の日々へと突入していった。かなり速いペースの駆け足、もう何周走ったのだろうか数えられない。十周以上は走っているだろう。一人又一人と遅れだした。息が切れ、喉が渇く、この暑さでの訓練の中、気を抜くと倒れてしまう。

必死で歯をくいしばった。それから腕立て伏せ、腹筋、ダッシュ等、メニューをこなし何分たったであろうか、ようやく第一グランドへと足が進んだ。足はふらふらになり、この暑さに何度もめげそうになったが、何

（第3ページへ続く）

素晴らしい体験の島部派遣　警視庁機動隊

島部派遣の機動隊員たちに夏休みはなかった。同じ年頃の若者たちが羽目をはずして騒ぎまわっている夏の伊豆七島で、鋭い神経を働かせてバカンス客や島民の二十四時間を守っていたのである。そして秋たけなわの今、その機動隊員たちにやっと安らぎの時が戻ってくれていると思う。

三原山の夕陽
～大島～

一機　佐々木　穣

毎年、夏になると島部に機動隊員が派遣され私も第一機動隊大島警察署派遣第一班員として選抜され、やる気一杯でこの勤務に従事した。

七月中旬、明け切らぬ梅雨の夜空をうらめしく眺めながら竹芝桟橋を出航した。折からの台風接近で海は荒れ、経験のない私には船旅が心配であったが、無事に大島へ着いた。

大島署での勤務は、島の出入りの港警戒、弘法浜と野田浜海水浴場の警戒・検問等であり、いずれも大島署員と合同で行った。正味九日間ではあったが、その大半が雨又は曇りで、観光客の出足も鈍っていたように思われた。

勤務で一番印象に残ったのは早朝の港警戒で、大雨で苦労したことと、三原山の警備らで、素晴らしい夕陽を何度も拝め、まさにサンセットパレードそのものであったことだ。晴れた日の浜辺は銀色に輝き、美しい波は東京近郊の海では見ることのできないものである。脳裏に強く刻みこまれた印象は、私の生涯の想い出になる。

警ら中は島の人から声を掛けられ、検問中も自ら停車して「御苦労様です」と激励してくれた。この住民と警察との良好な関係は、大島署員の普段の努力の成果であると改めて感心させられた。ただ、夜間検問を実施すると十分位で島全体にその情報が流れ、当然のことであろうが、奥さんが酒に酔った主人を迎えに行くというのには苦笑させられた。しかし、大島における交通事故の原因の筆頭は、酒気帯び運転や酒酔い運転であるというから、私達の検問もまんざら無駄ではなかったように思われる。

正味九日間の島部派遣ではあったが、大島署の皆様や宿舎となった民宿のおじさんやおばさんの御厚情に感謝しつつ無事本土へ戻った。その日は、警戒派遣期間中とは裏腹に、梅雨も明け、夏らしい太陽の光が降り注いでいた。この貴重な経験を今後の警察活動に十分生かして職務に励んでいきたい。（中隊員）

現代若者気質蔓延
～神津島～

二機　遠藤　春喜

私達は、夜更けの竹芝桟橋を後に一路神津島へと向った。船内は、これから休暇を大いに満喫しようという若者達で、明るく楽しげな雰囲気の中、どこも活気にあふれていた。

翌朝神津港に到着した。港には神津島南駐在所の所長らが出迎えてくれた。署員の、私達に寄せる期待の大きさを肌で感じながら、宿舎で朝食をとり、島内を大巡行したのち勤務概要の説明を受けた。

勤務形態は、早出・普通出・中出・遅出の四つのパターンに分かれている。私がこの勤務を通じて感じた島の印象は、坂道が多いせいか、一度も自転車に乗った者を見かけなかったことと、深夜零時を過ぎてもハイティーンの若者達が島のいたる所にあふれていることだった。特に前浜海岸となぎさ橋付近に集っている者達は、男女がお互いに誰でも声をかけ合い、その場で何組ものアベックが誕生するという都内では考えられないような光景であった。

島の代表と一緒に防犯パトロールを行いながら、早く民宿に帰るように呼びかけても、際限がなかったのには閉口した。又、昼間の交通指導取締りで車両検問を実施したが、観光客（島民を含めて）は、免許証不携帯や無免許等の違反がとても多かった。その他けんか、不審火等の取扱いがあったのには驚いた。

派遣期間中は、機動隊員として与えられた仕事に全力を注いで何とかその任務を全うし、成果もあったと自負している。島部派遣は、通常の機動隊勤務では経験できない様々のことを体験でき、私にとっては非常に有意義であった。（中隊員）

神々の島
～神津島～

三機　政本　義弘

私達三機部隊（班長以下八名）は島部派遣勤務のため、神津島に向けて出発した。周囲の吸いこまれんばかりの海の美しさには驚いた。神津島は伊豆七島のほぼ中間に位置し、南国情緒豊かな島である。その昔、七島の神々が話し合いの場にもっとも美しいこの島を選び集ったという神話があり、島名も、このため名付けられたと言われている。

私達は二名一組で四班に分れ、早出・普通出・中出・遅出のいずれかの勤務に従事し、港警戒、海水浴場警戒、交通取締り、少年補導等様々な活動に当った。

私の相勤者は、ユーモアに富んだ警備係の巡査部長で、行く先々で笑いが絶ええる事がなく、話しかけた島民もすぐに名前を覚えてくれたようだ。島民の警察に対する感情は良好であり、私達に「暑いのに大変ですね」と労りの言葉やジュースを差し入れしてくれる人もあり、島民の温かい心に触れることができた。

普通出の昼ごろ、港付近をパトロール中、港の端にある魚市場の片隅に、接岸中の船の中から桟橋に向って何か白いものをバラまいており、それを子供や大人達が拾い集めているのを見た。近づいて見ると、それは銀紙や白い紙に包まれたお金やお菓子である。尋ねてみると「この船は新造船で今日が進水式で祝い事だ」と、まっ黒に日焼けした若者の元気のよい言葉が返ってきた。私達もタオルを一本ご手渡された。

よかったが、制服の私達に「一杯やっていってくれ」と酒をすすめられたのには閉口した。

この島に澤響寺というお寺があり、夕方近くになると、多くの人が花やバケツを持って集ってくるので、なんだろうと思い、境内に入ってみると中には多くの墓があり、どの墓にも見事なほど沢山の花が生けてあった。

島の人によれば三百六十五日、毎日朝夕お参りして先祖を大切にしているという事だった。僅かの間ではあったが、島の人達から温かい人情と、都会生活の中で忘れかけている大切なものを教わった思いである。（会計係員）

浦島太郎
～新島～

四機　上原　俊春

島部派遣先発隊我ら八名は新島へ向った。台風接近のため、縦揺れ横揺れの船内は、遊園地の乗物以上の醍醐味であったが、なんとか新島接岸まで持ちこたえることができた。しかし、そんな気分を一掃してくれたのは、新島署員の温かい出迎えと、なんといってもトロピカルでありミラクル的な羽伏浦海岸の素晴らしい景色である。

梅雨期のため、前半は観光客の出足も遅く静かな島の生活だったが、七月の下旬ともなると学校が夏休みに入り、海岸周辺もにぎわいを見せた。

七月×日（遅番）、前浜に設置された機動隊前進指揮所に詰め、午後九時頃K主任とともに海岸・歩行者天国警戒のため警ら に出発。花火を楽しんでいる若者を背に海岸沿いを警戒していると、なにやら防波堤に不審なものが動いている気配を感じる。集光ライトで照らしてみると、何んと一メートル四方もある海ガメが必死になってコンクリートでできた防波堤の上を匍匐前進している。思いがけない〝発見物〟に前進指揮所に待機していた勤務員も集め、海ガメの処理について緊急会議を開く。ある者は署まで連行し皆んなのお腹に入れた方がいいと言い、ある者は浦島太郎の童話が脳をかすめ、そのまま海に帰した方がいいと言う。

結局、新島の夜空の星輝くロマンチックな夜にふさわしく海に帰した。〝水を得た海ガメ〟は、潜水艦のごとく龍宮城へと向っていっただろう。一度でいいから食べてみたかったとくやしがるK主任、カメがいつ恩返しに来るかと待ちわびるM巡査、それぞれの思いを胸に新島の夜は静かに更けていった。

七月×日、梅雨明け間近であるかのような晴天（海ガメの恩返しか？）甲ら干しだけに満足できない四人の有志が、ウィンドサーフィンに挑戦。見よう見まねでセイルアップするも、塩水を飲みこむこと数知れず。若干感覚をつかめたかと思うと、沖へ流されたり、テトラポットにへばりついたりの悪戦苦闘。それでも今まで経験した事のないスポーツに熱中、酔いしれ、満足げに帰ってきたことは言うまでもない。

十日間という短い期間ではあったが、いろいろな人人と接することができ、また私にとって久しぶりの街頭活動でもあり、緊張感の中にも島の人々あるいは観光客とのふれあいは貴重な体験となった。（警備係員）

島民とのふれあい
～式根島～

五機　須藤　耕基

一面に広がる青い海が水平線のかなたで大空と接し、天地創造の時代もかくやと思われる風景をかもしだし、太平洋の荒波に激しく洗われている島、そんな式根島に、私は派遣を命ぜられた。

式根島には駐在所が一ケ所、警察官は一名だが、島民の警察に対する信頼は厚い。駐在所勤務員の日々の努力の賜物だと思う。私は島民と警察の良好な関係を壊すことなく、さらに盛り上げようと、微力ではあるが懸命に努力した。派遣期間中、島民との出会い、取扱い等心に残る出来事をあげてみよう。

一　電波よりすぐれた口こみ情報

島民は観光客の送迎を車両で行う。港にはこの時ばかりは大勢の人が集まる。島民は機動隊員の来島を周知しており、今年の機動隊員はどんな人達だろうかと興味を持って見ている。我々の挨拶にも親しみを込めて応じてくれ、島のことなど話してくれる。

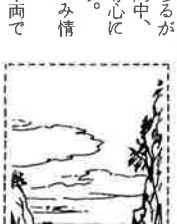
夕方パトカーが二人乗りバイクを追跡、検挙した事件が翌朝には島民の話題になる。伝達の速さには驚くばかりであるが、すべて島民の口から口への伝達である。

二　島民とのふれ合い

漁業と民宿で生計をたてている島民にとって、七月末からの一ケ月は大切な時期であり「観光客は大切な神様」と考えている。これら観光客に楽しく過ごしてもらう事は勿論、良い環境を作るため、島をあげての夜間パトロールや交通広報等を行っている。我々機動隊員も住民と一緒にこれらの活動を実施した。お陰で島内を巡回中観光地図にない道路を走行したり、島の人達だけが行く海水浴場を教えてもらったり、日がたつにつれ住民とのふれ合いも一層深まった。

三　警察官に対する信頼の強さ

夜の徒歩警ら中、五～六人の観光客のグループが道路一杯に広がって歩いていた。道の端を歩くように注意すると、二十歳位の男が食ってかかってきた。すると近くの店の若主人がとんできて「式根を良くしてくれるお巡りさんに注意され、文句を言うとは何事だ」と言うなり、あっと言う間に、その男を組み伏せてしまった。これには我々も驚いたが、当の若い男も呆気にとられていた。警察官はこの島の人達にとっては絶体的な存在であり、強く信頼されている。私は、これほど信頼されている島の人達の期待に応えるべく職務に対する自覚を、一層強くさせられた。



式根島で最も強く印象に残ったことは、警察は国民の信頼の上にこそ成り立つということを一層強く感じたことである。そして、さらに国民の信頼を得るために今後も誠心誠意職務に精励しようと決意を新たにしているところである。（分隊長）

素晴らしい団結力
～小笠原～

六機　牧野　國男

東京湾を出た時は茶色だった海の色が、やがてはコバルトブルーに、そしてエメラルドグリーンに変わり、空には積乱雲が広がり、まさに亜熱帯そのものである。船体の横には飛魚が舞い、二十八時間の船旅も無事に終りを告げ、小笠原の第一歩が始まった。

船のタラップを降りると、小笠原警察署長をはじめ署員の方々の温かい歓迎をうけた。翌日から仕事がスタートしたが、私達の任務は六つある海水浴場のパトロールが主で、最初は観光客も少なく南海の楽園のようであった。後半に入ると観光客が増え仕事も本番になった。船の入港・出港時は、署員一丸となり警戒警備につく。私も最初はただ漠然と立って見ているだけであったが、後半は誰が入港し誰が出港したかを捜査の眼で見れるようになった。

夜間検問を実施すると、一時間後には島民に知れ渡り、車が一台も通らなくなってしまうこともあった。又、焼却場のゴミが燃え広がりそうになった時は全島民が一丸となり、消防車一台を利用して海水を吸い上げ、消火活動にあたった。

島には都会にない素晴らしい団結力がある。又、島の人達は情味がある。私達警察官をいつも親しみの目で見てくれる。私達も島の人達の期待に応えるよう、機動隊員として恥じない行動と仕事をしたつもりである。

島の遊びといえばマリンスポーツが主である。子供から大人、そして主婦までがヨット、釣りなどの趣味をもっている。私達も週休を利用し、署員の方からウインドサーフィンの指導を

していただいた。海の下は珊瑚礁、熱帯魚の素晴らしい世界があり、ボートの横にはサメ、海亀、エイなどが泳ぎ寄ってくる。

昭和四十三年に返還された島。内地とは違った素晴らしい島。この島で勤務できたことを私は一生の思い出として忘れないであろう。

（中隊員）

ビューティフル・アイランド
～式根島～

七機　安達　正義

今回、幸いにも式根島派遣が決まったとき、ある先輩に「あそこは、いいところだぞ」と聞かされたが、その言葉に違わず、どんな形容詞を以てしても表現することのできない、素晴らしい自然を目のあたりにすることができた。今の日本にも、このような美しい所があったのかと改めて感動を覚えた次第である。また、十四日間という短い期間であったが、この間に島民の素朴さ、純粋さに接することができ、目まぐるしく変化する警備事象に心を奪われ、ややもすると忘れがちになる、人と人の真のふれあいの素晴しさを再認識することができた。

式根島では、早朝五時に到着する臨時船の警戒から一日が始まる。朝の明けやらぬ港は、一面が闇の世界であり、打ち寄せる波の音だけが僅かに静けさを打ち消している。昼間の観光客で賑わう浜辺とは、全くかけはなれた空間であり、一瞬、異次元に迷いこんだような気分になる。

東の空が白み始め、徐々に朝日が水平線の彼方から顔を出してくる様は、とても都心では見ることのできない光景で、あまりの美しさに思わず「おー」と大声を出してしまいたい衝動に駆られる。しかし、船が近付く頃になると、そんな感傷に浸っている暇はなくなり、出入りする車両の誘導や整理に忙しくなる。おまけに港作業員の仕事まで手伝わされる。

「おーい、そこの兄ちゃん、これを持って引張ってくれ」

「こら、そこにいたら危ないぞ、もっと下がれ」。私が警察官であることを相手は知っているのかと疑いたくなるような人使いの荒さと言葉の悪さである。最初は「この野郎、何言ってるんだ」と反感を持ったものである。しかし、臨時便も無事出発し、船からはき出された観光客達がそれぞれの宿へ向い、再び港に静けさが戻る頃「どうもありがとう。おかげで助かったよ」と先ほどの作業員達から礼を言われると、それ迄の反感も消え、しばしの雑談の中から、この人達の純朴さというものを感じ、つまらぬことで腹を立てた自分に恥入ってしまうのである。そして、本来の勤務の他に、こうした手伝いをすることも、島民との信頼関係を保つため必要なことであると痛感したのである。

この十四日間の派遣中、色々な意味で貴重な経験をすることができた。この経験が将来どのような形で役に立つか分からないが、私自身をひとまわり成長させてくれたのは確かである。そう思うと、私は、満足感で一杯である。

（庶務係員）

美しい自然と
ロマンの島
～神津島～

八機　岡庭　弘幸

島部派遣第一回要員として神津島に派遣となり、警戒警備勤務に従事した。島に到着して驚かされたことがいくつかある。まず第一に「自然の美しさ」がかくも立派に残されていること。第二には、それにもまして人と出会えば必ず一声かけてくれるという「島民の心の暖かさ」に触れあえたこと等である。神津島は、美しい自然とロマンを秘めた実に素晴らしい環境である。

島での警戒は、主としてパトカーと徒歩で行われた。冬季は自然の荒波に阻まれ、ひっそりと静かに時のうつろいを待っていたこの島も、夏季は、その様相を一変させる。さんさんと降りそそぐ陽光、群青の海を求めて全国各地からやって来る人、人また人で島はうめつくされる。その多くは十代、二十代の若者で、浜を我が者顔に占領し、ラジカセの音を一杯に上げて騒ぎまくり、果ては無免許でレンタバイクを暴走させる。夜ともなれば、家を離れた開放感から、一時の触れあい、「快」を求めて深夜まで酔狂・放歌高吟。我々の諸活動が一層忙しくなるときである。パトカーを駆り、島内くまなく警戒して回り、ほっと一息つく頃にはもう夜も白々と明ける。

都会にはない雄大な自然、島民の方々の豊かな人間性を求めて渡島するのであろうが、日本に残された貴重な大自然を心から味わい、楽しむには、もっと別の方法があるだろうにと、彼らと同世代にある者としてつくづく考えさせられた。

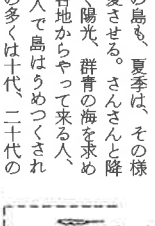
勤務明け等の余暇を利用して、島ならではの素晴らしい体験をする機会もあった。派遣から三日目の夕方、釣具屋さんから竿を借り、桟橋で慣れない手つきながらも糸を垂れてみた。小半時ほどそうしていると、急に浮きが大きく海中に沈んだので、私は、何やら興奮し一生懸命糸をたぐりよせた。しかし、「敵」の引きは重く、なかなか掌中の物とはならない。悪戦苦闘の末、ようやく引き上げてびっくり。糸の先にはなんと三十センチの烏賊が掛かっているではないか。私は、大物をものにした満足感で胸をふくらませ、得意満面、宿に引き上げたのである。

八月の神津島はお祭り一色となる。この間、漁師も陸に上がり、家族共々夏の日を過ごす。島をこよなく愛する島民の姿や自然との触れあいに、私は強い感動を覚えた。この島を訪れる人々も、自然をこよなく愛する人々であるならば、自然との接し方をいま一度再考してほしいと願いつつ島を後にした。

（中隊員）

四年ぶりの訪島
～三宅島～

九機　新井　操



N分隊長以下六名の我が第一班は、「すとれちあ丸」に乗船し一路、二年前に噴火災害のあった、あの三宅島へと向かった。私自身、四年前に警衛警護で一度訪島しており、ある程度の土地鑑もあって、多少の安堵感はあった。

しかし、実際目にしたものは、溶岩で焼きつくされ荒涼とした風景であった。私が以前来島した時の宿泊地であった阿古部落等は、完全に溶岩の下敷きとなり、想像を絶する様相を呈していた。

当時この部落には、雑貨屋の娘で「ミス三宅島」が住んでおり、皆、用事もないのに店の中をうろつき一目見ては帰って来るといったこともあった。当時を思い起こすたびに、一人の死傷者もなく本当によかったと思う反面、さぞ大変な苦労があったことだろうと、今さらながら島民の努力に頭の下がる思いがした。

私達の宿泊先である民宿「若松」では、早朝五時前だというのに、家族そろっての出迎えがあり、大変歓迎されているなと感じるとともに、大きな期待が寄せられていることも痛感した。

民宿の親父さんの、「隊長は誰ですか？」との問いに、H隊長のことかと思い口に出そうとしたところ、N分隊長が「隊長はこの私です」との回答。そうか、ここでは長さんが隊長になるのかと納得。以後、民宿の人は勿論、私達仲間も「長さん」とは呼ばず「隊長」と呼ぶことにした。

前半はまだ梅雨が明けていないせいか、雨や曇の日が続き、時には激しいスコールにも見舞われ、海水浴客等の姿もなかったため、警戒対象を交通関係に向けた。シートベルトや二輪車用ヘルメット等の着装は徹底されており、平素の三宅島署員の指導はもとより、島民の遵法精神は都内と比較にならないことを感じた。

民宿での食事は、正に鮮魚の活造りに舌つづみを打つ毎日で、仕事量に反比例して、食欲の方はいっこうに衰えを見せず、私達の体重とウエストは見る見る肥大していった。

いよいよ離島する際、民宿の奥さんが涙を流して別れを惜しんでくれた時には、さすがに我々も胸がつまってしまった。本当に来てよかったと思う反面、この人達の為に、もっと何か自分に出来ることがあったのではないかと反省もあった。

（中隊員）

豊かな自然
～三宅島～

特車　鈴木　芳信

八丈島は伊豆七島の最南端にあり、東京から二百九十キロ離れた南海上にある南国情緒豊かな島だ。日頃、東京のコンクリートジャングルで勤務している我々にとって、青く澄んだ空と海を背にして勤務できたことは夢の様であった。こののどかで平和な島が同じ警視庁管内とは、とても信じられない思いだった。しかし、勤務は慣れない環境と夏の行楽期のため少しも気を抜く事のできない厳しいものである。

勤務形態は早出・遅出・日勤に分けられ、そのほとんどが「底土(そこど)海水浴場」の警戒で、足場が岩場のため、身の安全を確保しながらの警戒で気の抜けない大変厳しいものだった。パトカーによる警らは、島部全般の警戒・交通取締り・遊泳禁止場所での広報活動等にあたった。

島民の警察に対する感情は極めて良好で、警戒中も「御苦労様です。機動隊の方ですか」と先に声をかけてくれたりして、我々機動隊員に期待しているのが手に取るように分かる。私は、この親切で人情味のある島の人達のためにも、与えられた仕事に全力を注ぎ、その任務を全うするよう心掛けた。十日間という短い島部派遣ではあったが、多くの貴重な体験をすることができた。この次は、仕事を離れて、島の生活を楽しみに行きたいと思っている。

（中部隊）

（第1ページより続く）

とかもちこたえることができた。午前中の訓練は座席懸垂といえば皆に喜ばれる種目であるが、なにしろ始めての経験であったし、やることなすことが、全て苦しかった。ブレーキがきかない。そのせいか足から先に降りてしまう。「ケツから先に降ろせ」指導員の声が飛ぶ。なかなかうまくできない。一回目は不成功に終わった。二回目は、気合をいれてなんとかうまく成功させた。

午後からの体力錬成も午前中にひけをとらないほどの苦しさであった。セーラー渡りも左足に力が入っているせいかどうもうまくバランスがとれない。先が思いやられるばかりであった。

ようやく初日を終え手も足も腹筋もはっており明日からの訓練に不安が残った。毎日同じような事の繰り返しで隊内での五日間が終わった。たいへん長い五日間であった。二日間の休養を置き、この訓練のメインである大久保自衛隊での訓練がやってきた。

バスの中は重苦しいムードに包まれ、自衛隊に近付くにつれ声は少なくなってきた。未だ経験したことのない訓練に皆緊張ぎみだった。

まず感じたことは、広さであった。今まで第一グランドでやっていたせいか特に広く感じた。この日も暑かった。体力錬成は隊での五日間とは比べ物にならなかった。うさぎ飛び、ダッシュにしても隊の二倍いや三倍以上の距離である。いつ終わるのか、いつ終わるのかそんな考えばかりが走った。ロープを終わり午前中の訓練が終わった。食事が喉を通らない。おにぎりをむりやりお茶で流し込んだ。

自衛隊での苦しい二日間を終え、大阪城の登りモンキー渡りも、人並みにこなす事ができ、長かった訓練は終わりを告げた。このレンジャー訓練を終え、長い機動隊生活の階段を一歩登った。これから先いろいろ苦しいこと、つらいことが沢山あると思うが、このレンジャー訓練で培った精神力で乗り越えていきたい。

第四中隊　大野木雄治

初夏の太陽の照りつけるグランドでの駆け足、うさぎとび、腕立て伏せ、かがみ跳躍・・と、休みなく続けられた体力錬成、掌の皮がむけ、全身あざだらけにして取り組んだセーラー渡り、モンキー渡り、後座席懸垂、前座席懸垂・・人間の本能的な恐怖と必死に闘った高さ十メートルでの二本ブリッジからのホール・・どれもこれもみな本当に良い思い出として心に深く刻まれている。

ここで忘れてはいけない事は、私達を一生懸命に指導してくださった訓練指導の方々、そしてあらゆる面で激励し、バックアップして下さった隊長をはじめとする隊員の方々への感謝の気持ちである。私達が何とかレンジャー隊員として指定書を交付されることができたのも、これらの方々のお陰である。

そしてもう一つ大切な事は、隊員同士互いに助け合い、激励しあって頑張ったからこそ、全員やり遂げることができたのだと思う。部隊活動が全ての、我機動隊員にとって、この団結心が〝命〟である。全員が目標に向かって心を一つにしなければならない。

今回の訓練を終えたことにより、私は自分が第一機動隊員であるという誇りを一層高める事ができた。それも特殊小隊の分隊長という責任重大なポストに就いているということに対し、改めて自分は幸せ者なんだと思うようになった。

この訓練で得たものを、今後の機動隊生活に少しでも多く役立て、明るく力強い機動隊を維持していくため、私はさらに精進努力していく覚悟である。

厳正な部隊
燃える機動隊

㈱周東商会
村山文雄
東京ニッケル㈱
大洋製鋼㈱
大東港運㈱
山陽特殊製鋼㈱
高周波熱錬㈱
廣慶太郎
木村利秋
橋山和正
国見山㈱
宮崎精鋼㈱
東海鋼材工業㈱
岡谷鋼機㈱
田島鋼材㈱
広島シャーリング工業㈱
内外運輸㈱
日鐵ボルテン㈱
藤田金属㈱
近藤与助工業㈱
仙台運送㈱

読者の広場

三陸鉄道・南北リアス線

麻生　博

夏の或る暑い日。かつて行ったノルウェーのベルゲンの涼しかった街を思い返し、三陸のリアス海岸に行きたくなって、急遽家を飛び出した。

一ノ関から気仙沼に出て、四十五号線を北上する。景色の良い立派な道路だ。途中一泊。早朝から、田の浜から山田へ、更に浄土浜から田老港へと船に乗り、二〇〇メートルを超す断崖を眺める。餌付に成功した海猫の群が船尾に集って来る。乗客がパンを投げると、空中でたくみにくわえ去り、再び餌を求めて飛来して私達を楽しませる。龍泉洞で泊り、翌朝、島越港から船で断崖と小島の散在する北山崎の風景を楽しんだ。海うり、海つばめの群る島々も珍しい。

更に北上すべく、三陸鉄道島の越駅に行って驚いた。ブルーのドームと屋根をもつ白壁のおとぎの国のような駅舎は、レストランもあり、夢誘われるような造りだ。カルボナード島の越駅、宮沢賢治の童話に出て来る火山島の名前からの命名である。駅は島の越住民が株主になって造った建物で、筆頭株主が駅長とのことだ。次のカンパネルラ田野畑駅は、白壁の民芸風の建物で、村費で建設されたものだ。この二駅は、三陸鉄道開設時に未通の所に新線を引いた時造られたのである。

プラットホームは明るいし、柵も白いパイプ構造で近代的だ。二輛連結の列車が来る。真白い地に赤とブルーで色どられスマートで美しい。車内も片側が四人がけ、他の側は一列で広々として、シートも明るいエンジ色、南国風でサロン的である。ジュースの自動販売機が備えてあり、トイレも国鉄のイメージと著しく違い、車内にありながら目立たず広くて明るい。ブルーに白の水玉模様のスカートに白いブラウスの少女が、白い籠に三陸の景色の入ったマイルド・セブン五ケ入包を入れて売りに来る。女子高校生を思わせる健康で化粧もしない明るい美しい少女だ。思わず土産として買い求める。

列車が止まる。三陸海岸の凹部には砂浜の海水浴場が多い。足場用パイプで造った階段の上に二坪ばかりのデッキがある。一番前の扉だけが開き、海水浴客はここから出入する。シーズン中の臨時の駅なのである。駅には、すべて愛称がある。例えば、はまゆり咲く普代駅・義経の祈り堀田駅　西行の庵野田玉川駅・ソルト・ロード生田駅・琥珀の色久慈駅等々である。

久慈駅は小さいながらスマートで、隣接する国鉄の堂々たる駅舎に比しても見劣りはしない。記念のための切符を求めた所、使用済の切符十数枚を出して来て渡された。切符は、ホテルのラベルのようで、四角・三角・丸・楕円型があり、その表面は景色、図案化された名所・名物が色彩ずりになっている。裏には発行駅・行先・金額の外に、その発行駅の名産が印刷してある。銀色しぶきの田老駅は、わかめとしいたけ、リアスの港宮古駅は、いかとまつも、泉わく小山駅は山女くんせいと山菜等々である。

学校と打合せ、試験のときは特別ダイヤも作っている。すみずみまで配慮が行き届き驚くばかりだ。国鉄・私鉄と全く異質で、共通しているのは、駅員の帽子だけなのでないかと思う程である。第三セクターが成功したのは当然である。そこで詳しく尋ねた。

三陸鉄道が開業したのは、五十八年四月、年間六億円の赤字ローカル線（久慈線・宮古線・盛線）として、国鉄が廃止をきめ投げ出したものを沿線自治体などが出資して開業した全国初めての鉄道である。百円稼ぐのに五百円かかる超赤字路線。当初は初年度一億、更に六年間赤字継続が予想されていた。ところが、初年度から黒字、一年目には開業費六千万円を繰延べ償却せずに、二千五百万円の黒字を計上した。実質は八千万以上の利益とのことだ。

人件費の節約と効率運営のため、ターミナル駅の改札（中間駅は無人）から、車掌、検査係、運転士まで全職員がこなし、人のやり繰りをつけているのが建前になっている。列車もラッシュ時を除けば、バス並みのワンマン運転だ。社員は九十九人、中小私鉄の規準一キロ当り従業員二人で計算すると二百十五名いるところである。そして、半数以上が国鉄定年退職したOBであるというから驚きである。経費中人件費の占める割合も国鉄が七割であるのに、ここでは三割である。

未開通部分を開通させ、初年度に国鉄時代の二倍八十万人を運び、その四分の三は地元民であることから、「おらが鉄道」の意識が、沿線の市町村に満ち満ちている。毎月三日無人駅に近隣の住民が集り、清浄奉仕を行うのもこの表れ、乗客促進を呼びかける運動も各自治体で粘り強く続けている。北リアスと南リアスの門の赤字線の山田線（宮古ー釜石間）を編入する日も近いようだ。

明治時代から国鉄に求めつゞけて来た三陸従貫鉄道の沿線住民の夢が、国鉄と離れてから実現すると云う皮肉な現象が起りつゝある。円高で悩む中小企業経営に携わる私達に、三陸鉄道は色々の教訓を投げかけている。

開拓精神で

北海道江別市　中原和夫

私の家は農家であり、水田七ha（七町）だが（政府の水田減反政策により、休耕を余儀なくされている）その中一haが水田で、小麦が二ha、大豆が四haである。

猫の目農政といわれて、農業政策が毎年毎年基本が変るのに閉口する。私は、北海道の旭川から北へ六〇キロ程の地点にある剣渕町（けんぶちまち）で、昭和三十八年迄の山奥の傾斜地で、大小の石だらけの畑で父と共に悪戦苦闘をして生計を維持して来た。

父は鳥取県の出身で、屯田兵と共に若くして新十津川村へ移住した。水害の多いこの土地を嫌って剣渕町に移った。しかし、剣渕の平担地は泥炭地であったため、開拓すればすぐ作物の育つ山地を選んだという。そして一儲けしたら鳥取県に帰る予定だったが、帰る汽車賃が出来ず、遂に十町歩もの原始林を切り開いてしまい、惜しくて帰る事は出来なかった。

剣渕から南へ百八十キロ程離れたこの江別に移ったのは、昭和三十八年三月十八日であり、次男の淳一が生れたのは十日後の二十八日であった。淳一は幼い頃は気が弱く、もっと華々しく兄弟ゲンカでもしてほしいと、私はいつも思っていたものである。

しかし高校卒業後、自衛隊志望が方向転換。警察官となり厳しい規律に耐えての訓練で、ひ弱な淳一が見違える程逞しくなった。これはひとえに、関係機関の諸先生方や先輩各位の御指導の賜物と感謝申し上げる次第である。

そして又、私の父から受けついだ開拓精神が、淳一にも心の奥に根づいているものと自負しているが、願わくばよき先輩を得て、友人と共に挫折することなく前進して欲しいものである。

（警視庁一機・中原淳一隊員の父親）

ラグビー讃歌

加納保成

最近のラグビーの人気は、相当なものだ。あの広い国立競技場を六万五千人の大歓声で包んでしまう。

ここ数年、国立競技場入場券の上位売上高は、サッカーのペレのさよなら試合以外、全てラグビーの試合で占められているそうだ。青春時代の情熱を、ただひたすら楕円のボールにぶつけてきた私にとって嬉しい限りだ。何故こんなに皆がラグビーに魅せられるようになったのだろうか、その人気の源は何だろうかと自問してみると、ラグビーだけが、かたくなにアマチュアリズムを守っているからだと答えざるを得ない。

国際的競技大会で、メダルの数が国威を象徴するような雰囲気の中で、スポーツが国威昂揚の道具となり、次第に「勝つ」ことが最優先となってきた現在、日本も「勝利ボーナス」「年金の支給」「プロ選手登録」等、勝つための施策を講ぜざるを得ない状況になりつつある。選手も、こうした競技大会の頂点に立つには、生活の殆ど全てをスポーツにつぎこまなければならない運命にある。

スポーツの勝利者が尊敬される理由の一つは、特異な素質に加えて、その素質を十分に発揮できるだけの高度なトレーニングを克服した一個の人格者として、高い人間性が形成されていると見なされるからである。スポーツの勝利によって金銭的報酬、生活の保証を得た選手を、我々は、同じ眼で見ることはなかなかできないことだ。

ラグビーには、こうした潮流に一線を引く、勝敗だけにこだわらないフェアプレイ精神を見ることができるすがすがしさがある。

ラグビーは、最も男を意識させる団体格闘技である。猛練習によって、顔、耳、右半身が変形している者も珍しくない。試合ともなれば命懸けである。両チーム合わせて三十名が争うスポーツであるが、レフリーは一人である。レフリーの目を盗んで姑息なプレーをやろうと思えばできる。それでも激しいプレーはあっても、きたないプレーはない。互いにフェアプレー精神を持ち、ルールの範囲内で相手にぶつかり合い全力を出し切るのが、ラグビーだからだ。

また、ラグビー中だけではない。ラグビーでは試合終了のことをノーサイドという。敵味方に分れて戦ったチームが、試合終了とともにサイドがなくなり、友人に戻るという意味である。

ガッツあふれる相手と戦った八十分間の死闘の後、〝俺も力いっぱいやったが、お前も大したヤツだ〟と思いながら手を出すと、相手も同じ気持ちか、ニコリと白い歯を見せ、力いっぱい握り返してきた時、口では言い表わされぬ感動が湧いてくるものだ。

これからも、ラグビーにアマチュアリズムのフェアプレー精神がある限り、更に多くの人々に愛されるだろうと確信している。

アマチュアという言葉は、フランス語のアモール（愛、愛するもの）を語源にしているといわれている。今年も悔いのない激闘を期待する。

苦しさに負けずに

宮崎市本郷　瀬戸川弘

宮崎の自慢は、気候の良さと自然の美しさで、亜熱帯植物の街路樹やアーケードが南国特有の美観を呈しております。春は全国で一番早い「花の祭典」宮崎フラワーショーが始まり、巨人をはじめとするプロ野球のキャンプインと続き、九州各県から人々が集まってきます。夏は、全国で一番水のきれいな青島海水浴場が人気があります。

より高速を狙って研究開発されている国鉄ご自慢のリニア・モーターカーテスト場も多くの見学者でにぎわいます。真冬でもプレイできるゴルフ場は、東京や関西の人達に喜ばれています。

お国自慢はこのくらいにして、今年のサミットをはじめとする大警備では、大変ご苦労があったと聞いています。稔も警備要員の一員として無事に任務を果たしてくれたことを大変喜んでいます。稔は、高校時代にはバスケット選手として苦しい練習に耐えて、山形国体、宮崎国体に出場する程の実力をつけて大いに頑張ったものでした。その折の苦しさに負けない体験が現在の仕事に役立っていると思います。

これからも身体をくれぐれも大切にし、自ら選んだ警察官の仕事を天職と信じて、日々頑張ってくれることを願っています。

最後に機動隊の皆様方のご健勝とご活躍を遥か宮崎の地からお祈り申しあげます。

（警視庁二機・瀬戸川中隊員の父親）

秋の七草

警視庁三機　菊地義伸

秋の野に咲く代表的な花七種で万葉の歌人山上憶良が歌によみこんだという七種の草をいう。

一、萩（はぎ）
まめ科の落葉低木

二、尾花（おばな）
すすきの花穂イネ科

三、撫子（なでしこ）
なでしこ科の多年草

四、葛（くず）
まめ科の多年生つる草

五、女郎花（おみなえし）
女郎花科の多年草

六、藤袴（ふじばかま）
きく科の多年草

七、桔梗（ききょう）
ききょう科の多年草

この七種の草が秋の七草として昔からいわれているが、奈良時代には、桔梗のかわりに朝顔を入れたことがある。春の七草が新春の食卓にのぼる青物であるのに対し、秋の七草は、風流を楽しむため、どれも美しい花をつけるものばかりで、花をめでることが主である。それに多少の薬効もあるという。

はげまし

発行所
社団法人 機動隊員等を励ます会
東京都中央区八重洲2-4-14
〒104 ミツヤビル3階
発行人 鈴木 實
TEL 03(272)2050
購読料 年間1200円(送料共)
(但し会費の中には購読料を含む)

首都圏防衛に総力

先鋭化する過激派封じ込む

今こそ機動隊を励ましそう

天皇御在位六十年式典、東京サミット、成田空港二期工事、国鉄分割民営化と、過激派にとっては多彩な攻撃目標の一年であった。機動隊の一糸乱れぬガードを破るべく、ゲリラ活動が活発化し、火器の使用がエスカレートした。―そういったこれまでの一年をふりかえって、その任務の重さを加えつつある機動隊の労を感謝し、あらためて、はげましの声を大きく拡げたい。

機動隊の夜間訓練 ―― 規制隊形よし!!

戦後第二のゲリラ高揚期

昨年来、過激派は非公然組織と一般学生も参加する公然組織の両面で武装化に努め、戦後第二期のゲリラ高揚期を迎えた。

極左過激派の総結集勢力は約三万五千人、この中で、ゲリラ化の度合いを強めて来たのは中核派、革労協狭間派、戦旗・荒派、共労党の四派であった。とくに中核派は「革命軍」の軍事力を強化して、昨年十一月の同時多発ゲリラ事件では、千葉動労のストに呼応して首都圏や大阪の国電網をマヒさせた。

昨年のゲリラは成田、国鉄民営化、北富士、関西新空港の反対闘争で八十七件発生、五十二、五十三年に次ぐ多発ぶりであったが、その中心は成田で、半数以上の四十四件が成田に集中された。

ゲリラの中心となっている各派は、非公然・非合法の軍事組織化を唱えて、武装の開発・調達・戦闘技術の訓練を進め、今年上半期は五月の東京サミットと、それに先立つ四月の天皇陛下御在位六十年記念式典への反対闘争にターゲットを絞ってきた。もちろん、成田空港二期工事、関西新空港、国鉄民営化は、一過性でない闘争目標としている。

今年三月末、皇居・米大使館・大阪府警・赤坂御苑に対して、金属弾、火炎弾などのゲリラ攻撃が行われた。ある外人記者は、つぎのように感想をのべた。

「世界の各地でゲリラが多発しているが、世界で一番安全と思われた国の首都にも火炎弾が飛んだ。国際テロの舞台に最も遠いと思っていたTOKYOが不気味な都市にみえてきた。やはり、日本もぜい弱さをはらむ現代に生きている国なのだ」。

発射装置使う武闘集団

さて、天皇式典と東京サミットを迎えて、警備当局は連日三万人の警察官を動員して、都市のすみずみまで目を光らせた。皇居付近はもとより、各国首脳が集まる迎賓館や宿舎周辺、それに主要道路にも機動隊員が立ち並び、一般市民の車両まで検問を強化した。一般市民もまた進んでこの警備態勢に協力した。万一不測の事態が生じた時、わが国は、治安の悪い国、ゲリラやテロを許す社会という印象を世界に与え、国際的な信用を失って、その結果は国民にとっても大きな損失となるからである。

しかし、厳しい警戒網を破って、迫撃弾の発射や、都心駅での発火物騒ぎなど、過激派によるゲリラ事件が起きた。幸い式典やサミット会議そのものへの影響はなく、一般市民の生命、身体の被害もなかった。

五月四日の白昼、各国首脳を迎えて、迎賓館で式典が行われていた時、五発の迫撃弾が発射された。都心のマンションの一室から発射された迫撃弾は、迎賓館を飛び越え、ビルの屋上や路上に落下した。その飛距離は、従来の一・五キロメートルという想定を超え、三・五キロにも達するものであった。弾胴部分には爆薬が詰められ、その破片が鉄製の交通標識を突き破るほどの破壊力を備えていた。―この事件は、どのように警備しても、気狂い集団の全部を把握することは不可能に近く、それだけに一般市民の協力を超えた警備参加が必要であるとの意識を呼び起す警鐘でもあった。

成田「二期」で騒然

一方、成田空港は五月二十日で開港八周年を迎えたが、空港利用客は年々増え続け、六十年度は千百七十万人にのぼった。とくに年末年始などは大混雑で、新東京空港公団では、このまま推移すれば五年後にはパンクする、と二期工事の早期着工を訴え続けて来た。これに対して六月で結成満二十年になる三里塚・芝山連合空港反対同盟も、実力阻止の備えを崩さない。

空港に対するゲリラ活動も先鋭化し、発射物を使った事件が昨年四月来連続的に起り、場合によっては離着陸機も狙える威力を見せ、航空保安上新たな課題となった。

五月二十五日には「空港二期工事阻止」などを掲げた全国集会が、空港近くの千葉県山武郡芝山町で開かれ、千葉県警調べで二千百七十人（主催者側発表八千二百人）が参加した。参加者たちは「空港を麻薬に追い込もう」と気勢をあげ、集会後、空港二期用地内までの約六・五キロをデモ行進し、千葉県警は全国からの応援で八千五百人の警察官を動員して、警戒に当たった。

八月三日、過激派の中で最大勢力の中核派は、東京・日比谷で上部政治団体である革命的共産主義者同盟（革共同）の政治集会を開き、「成田」と「国鉄」を二大闘争目標に設定、八―九月からあらゆる武器、あらゆる手段を使って決戦に突入することを決めた。

一方警察庁は、警官を増員し、全国に潜伏して手製爆弾を密造しては、成田闘争や反権力闘争などを繰り返している中核派をはじめとした過激派の非公然組織の徹底検挙に振り向ける等のため、今年の過激派対策費が五億八千三百万円だったのに対し、六十二年度予算では約六・四倍の三十七億三百万円を要求している。

このあと十月十四日夕刻に、政・官界の中心地である永田町と霞ケ関で、計六発の火炎弾が発射された。火炎弾そのもののパワーは小さいものであったが、しかし、警視庁は厳重な警備網のスキをつかれたことを深刻に受けとめ、十六日から警備人員を五千人から一挙に一万二千人に増やした。

さて、注目の「成田」は、十月二十六日、三里塚・芝山連合空港反対同盟の北原鉱治事務局長派が成田市天神峰などの空港二期工事予定地内にある反対同盟員所有の畑で「二期工事阻止」などをスローガンに全国総決起集会を開いた。集会には、千葉動労、中核派などの支援十二団体を含む計一万二千三百五十人（主催者側発表、千葉県警調査では二千九百三十人）が参加、これに対し警備当局は県内外の機動隊員一万人を動員、開港以来、最大規模の厳戒態勢を敷いた。このため集会は混乱なく終了した。

反対派は「実力阻止」を宣言しており、警備当局は、工事の遂行の安全を守るために一段の努力が要請されているが、ことでわれわれは改めて機動隊の任務を思い起し、はげましの声を強くして行きたいと思う。

今月の言葉

大人の火遊び

大人の火遊び、というと〝危険な関係〟とか〝不倫の恋〟とかが連想されそうだが、私のテーマは、そういった御期待とは違い、本物の火遊びのことである。

世界各地でテロが横行し、テロリストたちの標榜する問題とは全くかかわりのない一般市民にも、多数の死傷者が出た。文化交流の象徴でもあるパリのシャンゼリゼ大通りを、危機感なしに歩くことも出来なくなり、円高で活気づいた日本人の海外旅行ブームにも水が差されるほどであった。

一方、わが日本では、抜群の警備力によって大事には至らなかったものの、過激派によって数々の暴挙が企図された。一番苦労の多かったのが、五月の東京サミットの警備だろう。広い東京を、どのようにゲリラから守ろうとしても、カバーしきれるものではない。

その中を、二キロの距離から狙いをつけた迫撃弾が飛んだ。羽田でも、飛距離こそ短いが同様の事件が起った。いずれも、天は悪に組みせず実被害はなかったが、一般市民に与えた不安感の罪は重大である。

また十月には、首相官邸や官庁街を狙った火炎弾が飛び、不発に終ったものの過激派が犯行を認める発言をするなど、ひとっぱしの革命軍気取りである。

こういった子供の戦争ゴッコのような火遊びを、三十代・四十代のいい中年が、マジに人生を犠牲にしながらやっているというのだから呆れるばかりだ。

この頃の過激派は、若い学生の新入りが少なくて、三万五千人といわれる極左暴力集団のメンバーは、平均年齢がかなり高齢化しているという。高齢化すれば、大人の考え方を持ちそうなものだが、いぜんとして子供の火遊び程度で、精神的成長が止まっていることが問題だ。

過激派のように、大人になり損ねた連中の存在は嘆かわしいが、一方、若い人たちがバカバカしい火遊びに目を向けない大人の考え方を持てるようになったことは、日本の将来のために頼もしいという見方が救いでもある。

（樋浦 忠）

藍綬褒章受章

おめでとうございます

鈴木實・理事長

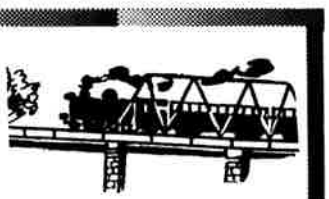
機動隊員等を励ます会の鈴木實理事長が、六十一年秋の褒章で藍綬褒章を受章された。

警察官協力に対する貢献だが、同氏は当励ます会が発足した昭和四十九年から副理事長として大内栄蒼であるとともに、当俊司理事長を補佐、六十一年一月からは理事長に推挙されて今日に至っている。

「私個人というより、励ます会全体の活動に対する受章である。大変な喜びの声を語った。

「私個人というより、励ます会の地道なはげましが機動隊員等の心の支えとなり、それが認知された表れ、と受け止めている」と鈴木實理事長は

北から南から



わしがお国で自慢なものは茄子と胡瓜と笠踊り（山形・花笠おどり）、わしがお国で自慢なものは出雲大社に安来節（島根・安来節）、といった数々の民謡にもあるように、日本のお国自慢には限りがない。全国各警察から寄せられた"わしが県"のなかの一部をご紹介しよう。

ふるさとの味〝シモツカレ〟

栃木県警察本部機動隊

ここで栃木県の代表的な郷土料理「シモツカレ」を紹介したい。このシモツカレは、インスタント食品に代表される飽食時代の中にあって、正に心のこもった手づくりの料理（味）そのものであり、素朴なその味は「ふる里の郷愁」を感じさせてくれる。

シモツカレの起源を探ると、鎌倉初期の「宇治拾遺物語」や、室町時代の御伽草子「精進魚類物語」の中に〝すむつかり〟としてその名が出ており、少なくとも八百年の伝統ある料理で、漢字では「酢慎」と書いたそうだ。

このシモツカレという奇妙な名前の語源は

○下野ばかり説（栃木県だけで作る料理）
○下野の家説
○下野のカレイ説（栃木県で飼われ代りに作った料理）
○酢むつかり説（口元に持ってくるとむっとする料理）等であるが定説はない。

◎材料及び作り方

〈材料〉

塩鮭の頭（一コ）　酢（大さじ二杯）　水（カップ二杯）　大根（八〇〇グラム）　人参（一二〇グラム）　大豆（四〇グラム）　酒粕（一五五グラム）　油揚げ（二～三枚）　砂糖（大さじ一杯）　正油（大さじ二杯）　塩（適量）

〈作り方〉

① 鮭の頭をきれいに洗い二センチ角ぐらいに切る。
② 大根と人参はオニオロシにかける（この時野菜から出る水は捨てない）。
③ 大豆は少し焦げるくらいまで香ばしくフライパンで煎る。
④ 油揚げは、網にのせて少し焦げるくらいに焼いて、縦二ツ切りにしてから細かく切る。
⑤ 酒粕は、小さくちぎっておく。
⑥ 厚手の大鍋に塩鮭の頭と酢、水を入れ、沸騰したら弱火にしてアクをすくいながら三時間ぐらい煮る。
⑦ 次に大豆、大根、人参、油揚げを加えて一時間くらい煮てから酒粕を入れ、砂糖、塩、醤油で調味する（塩鮭の塩分により塩の分量は増減する）。

◎おいしい食べ方

普通煮物は作りたてが美味だが、シモツカレの場合は一昼夜ぐらい冷やし、歯にしみるような冷たい方がおいしいようだ。

◎シモツカレによせて

シモツカレは残り物を巧みに利用しながら、なお栄養価の極めて高い、今様にいう「ダイエット」料理である。出来上がりはあくまでも荒々しくいかにも男性的だが、中身は誠実そのもの、付き合えば付き合う程味の出て来る料理で、明日の治安を守るため灼熱の太陽や風雪に耐えながら、日夜訓練に励む機動隊の姿、精神を彷彿する思いがする。

親鸞聖人と越後七不思議

新潟県警察本部教養課

新潟県は三方の県境を高い山々に囲まれ、雪どけの水が溪流となり、ダムを満たし、または大河となって、米どころ新潟平野を潤しながら青く美しい日本海に注いでいる。こんな新潟に昔から伝わる〝親鸞聖人と越後七不思議〟を紹介させていただく。

親鸞聖人と越後七不思議のいわれ

浄土真宗の開山、親鸞聖人が承元元年（一二〇七年）越後の国府（現在の上越市）に配流の身となり、のち日本の母なる川、信濃川河畔島屋野（現在の新潟市）に移り、建暦元年（一二一一年）赦免となるまでの五年間、各地で説法に動めた際、幾多の霊妙を残したといわれている。これが親鸞聖人の旧跡、越後七不思議として珍重され、聖人の偉徳をしのんで訪れる人も多く、その中には学術的に貴重なものとして国の天然記念物に指定されているものもある。

保田の三度梨（北蒲原郡安田町孝順寺）

保田の里を布教にまわったとき、信徒のささげた焼梨をまいて仏縁を説いたところ、芽が出て繁茂し一年に三度実り、また一枚の葉が二枚に分れて成長したといわれている。当時の木は枯れてしまったが、現在は若木が育っており、今でも一年に三度実をつけている。

小島の数珠掛桜（北蒲原郡京ケ瀬村梅護寺）

小島に逗留した聖人が出立の際、手にした数珠を路傍の桜の枝にかけ仏縁を説いたところ、その桜の木から毎年数珠のように花がつながって咲くようになったといわれている。なお、この桜は世界でも珍しいものとして昭和二年に国の天然記念物に指定されている。

小島の八房の梅（北蒲原郡京ケ瀬村梅護寺）

梅干しの種を植え仏念を説いた際、これが芽を出して枝葉が茂り、花は薄紅の八重咲きで花一つに八つの実を結ぶようになったと伝えられている。

島屋野の逆竹（新潟市西方寺）

島屋野の里で布教の際、持っていた竹杖を地面にさし仏縁を説いたところ、その竹から芽が出、しかも逆方向に枝葉が繁茂し立派な竹藪になったと伝えられている。大正十一年に国の天然記念物に指定されている。

山田の焼鮒（西蒲原郡黒埼町田代尾）

聖人が見送りの信徒と共にこの場所で宴を催したとき、信徒焼いた鮒を献じたが、聖人はこの焼鮒を山王神社境内の池に放したところ鮒は生きかえって泳ぎ出したと伝えられている。

田上のつなぎがや（南蒲原郡田上町了去寺）

護摩堂山の城主宮崎但馬守に招かれて法話を説いた際、城主が献じたかやの実（農民が年貢米の代わりに糸でつないで納めたもの）の一粒を地面に植えて仏縁を説いたところ、芽を出し実を結んだといわれている。

国府の片葉の芦（上越市五智国分寺）

聖人が、越後で最初に配流になった国府では、国分寺境内の草庵に居住していたが、ある日、この地の居多神社に詣で、ここで「わが念願を守りて、その奇瑞をあらわし給え」と祈願したところ境内に生えていた芦が、一夜のうちに片葉となったと伝えられている。

上越新幹線上野乗り入れ、関越自動車道も全線開通し、本県も本格的な高速交通時代を迎え、首都圏との距離も近くなった。歴史と民俗の宝庫〝佐渡〟を始め、風光明媚な景勝地がたくさんある。御来県を心からお待ちしております。

諏訪大社「御柱」祭

長野県警察「旭の友」編集部

「ちからをあわせておねがいだ――」の木遣（きやり）とともに、七～一〇トンの巨木が何十人もの男達を乗せたまま、最大斜度四〇度の山肌を滑り落ちていく。喚声とも悲鳴ともつかない怒号の渦の中、振り落された男達もろとも勢いよく滑り落ちていく。

長野県では、七年に一度行なわれる、諏訪大社御柱祭である。この祭りは、日本三大奇祭のひとつと言われ、今回は東京サミットと重なり、雑踏警備も大変であった。

御柱の起源は、桓武天皇のころ（七八一年頃）、坂上田村麿呂が東北征討に際して、諏訪大社に参詣し「この戦いに勝てば七年ごとにお社を建て替え申し上げる」と戦勝を祈念し、その御神助により無事大任を果たしたことから、七年ごとに建て替えることになったが、御造営がままならず、四隅に柱を建てることとなったというのが、一般的な説として伝えられる。

諏訪大社は、上社に前宮と本宮、下社に春宮と秋宮があり、それぞれ四本計十六本の御柱が建立される。春まだ浅い三月の初め、十数キロ離れた八ヶ岳山麓で切り出された御柱は、三市一郡の住民が氏子となり、四月から五月にかけて山出し、里曳きと、勇壮な祭りが行なわれる。

御柱を引く曳子（ひきこ）の舵をとるテコ衆共に、かなりの酒が入り、一升ビンを腰に下げ、背にしょって歩く。その数は、一本の柱に二千人とも三千人とも言われる。

御柱街道と呼ばれる道筋の家では、振るまい酒が誰にでも振舞われる。御柱の年には結婚できないという。雑踏警備にあたる警察官にとっては、観客を含めてそのほとんどが酔払いという状態の中、まさに〝忍〟の一字の雑踏警備となる。

「人が見たけりゃ諏訪の御柱」のとおり、今回も百二十九万人の人出となった。祭りのクライマックスは、上社三〇メートル、下社一〇〇メートルの急坂を滑り落とす「木落とし」、川幅三〇メートルを渡る上社の「川越し」、そして「建て御柱」である。いずれも、命知らずの男達が御柱に乗ったままで、過去に何人もの死者を出している。

諏訪地方の男達にとって、御柱に乗ることは名誉であり、夢である。酒、喧嘩、そして命知らずの男達。警備陣としては、死者の出ないことをただ祈るばかりである。今回は、観客が一名死亡し、柱に挟まれたり、振り落とされたり、あるいは酔って転んだりで、重傷五人、軽傷二十九人が出た。

神をあがめる祭りとしてはおかしいが、死人が出なけりゃ御柱じゃないといった、勇壮さを誇るこの祭りも、建て御柱からの「七年後に会いましょう」の垂れ幕とともに終了した。約二カ月にわたる長丁場の警備だっただけに、わたる長丁場の警備だった

いかがでしたか、荒川源流への旅。山あいの民宿で一泊したあとは、雲取山（二千十八メートル）を越えて奥多摩へ抜けるもよし、また、三峰口から電車を利用して都心に向かうのもよいでしょう。では、お気をつけて……。

弘法大師・四国遍路と島四国

香川県警察本部教養課

弘法大師

現在までに我が国で大師号を賜わった高僧は十九名。そのうち五大師（弘法、道興、法光、智証、理源）が讃岐（香川県）の出身。

なかでも弘法大師は特に有名。弘法大師は僧名を空海、宝亀五年（七七四年）讃岐国多度郡弘田郷屏風浦（現在の善通寺市）に生まれ、幼名を真魚といった。父は郡司を務めた豪族の佐伯直田公、母は阿刀氏出身の玉依御前である。その非凡な才は十五歳の時の上京で花開くこととなる。

当初は儒教を学ぶが、後に仏教に転じ、四国各地で修行を積み、延暦二十三年（八〇四年）には入唐し、恵果阿闍梨から真言の秘奥を受ける。帰朝後、高野山金剛峯寺を開き、讃岐の満濃池を修築、綜芸種智院の開設など、多方面で積極的な活躍をするが、承和二年（八三五年）六十二歳で高野山で入寂した。

このような経歴を持つ空海は、大師と言えば弘法大師と言われる程人々に親しまれ、日本全国に数多くの弘法伝説を残している。

四国遍路

四国遍路も弘法大師伝説のひとつ。四国各地の霊場を巡拝することは、平安時代の末に京や地元の僧侶、人士の間で行われていたようだ。しかし、遍路として定着したのは江戸時代、貞享五年（一六八八年）に石堂寂本が「四国遍礼霊場記」として弘法大師の遺跡八十八カ所を著してからである。当初の一番札所は弘法大師生誕地の善通寺（善通寺市）であったが、巡礼が盛んになった文化、文政の頃（十九世紀初）、京都、大阪からの巡礼者の多くが鳴門に上陸したため、一番札所を上陸地に近い霊山寺（徳島県鳴門市）とし、讃岐の大窪寺を八十八番結願寺とする現在の形が完成した。

遍路は、八十八カ所の霊場を功徳を求めて巡ることにより、八十八種の煩悩を除き、成仏得度するという信仰である。遍路の服装は白衣姿に「迷故三界城、悟故十方空云々」と書いた菅笠をかぶり〝さんや〟という雑のうを肩から下げ、背に笈、胸に納経・数珠、右手に金剛杖、左手に鈴。右手の金剛杖に「同行二人」と書かれているが、これは常に弘法大師と同行しているという意味である。

江戸時代に遍路が盛んになったのは、本来の成仏得度もさることながら、農民の土地呪縛からの逃避もあった。農民は檀那寺や庄屋などから手形を貰い巡礼の旅に出た。なかに「捨て往来」という手形があり、道中、死んでも知らせなくてよい、その土地の法によって葬ってもよろしいという趣旨である。こんな死者の墓が遍路道添いに残っている昔の巡礼は命がけだったようだ。数か月もかかったこの巡礼も今ではバス、タクシー、マイカーに乗って風の如く走り回り、十日程度で一巡するのが普通になってしまった。

島四国

四国遍路のほかに「二十四の瞳」で有名な瀬戸内海の小豆島に「ミニ八十八カ所」ともいうべき島四国、小豆島八十八カ所がある。この島四国はマイカーで二日程度あれば一巡できるので、春秋には近畿、中国地区から多くの人が来島する。

島四国の風習が始まったのは貞享（一六八四〜八八年）の頃。遍路は本来苦難の無銭旅行、家も妻子も金も、持っているものは全部捨てたつもりで、乞食しながら巡礼する。そこに修行の意義があり、救いの道も開けてくるといわれている。あなたも一度、巡礼においでま〜せ。

富士登山にチャレンジを

静岡県警察本部教養課

日本一の美観を誇る「富士山」その雄大な姿は、四季折々に変化する美しさとともに、我々静岡県人に安らぎを与えてくれている。

富士山の歴史等

富士山の高さは、皆様ご存知のとおり標高三千七百七十六メートル（日本最高）。日本の第二位が山梨県〝北岳〟の三千百九十二メートルだから、その高さのほどが分かる。昔は、晴れた日には東京（江戸）からも霊峰富士を見ることができたと言われているが、今は昔の話である。ちなみに、富士山の体積は一千五百立方キロ、底辺直径は五十キロである。

富士山は、別名富士火山ともいわれる休火山だが、それでは最近の噴火はいつごろかというと、今からおよそ百八十年前の、マグニチュード八・四の地震があった宝永四年（一七〇七年・江戸時代）にまでさかのぼる。この年の十月発生した地震はその後も余震を続け、その影響か十二月十六日（新暦）午前十時ごろから噴火を始め、三十一日の夜まで続いたと言われている。

十六日間の噴火は、大量の火山放出物を噴出し、これらは冬の強い西風に流されて、富士山東麓とその東の地に降り注ぎ、耕地と家屋の焼失・埋没などの大災害をもたらし、現在未だ自然植生の回復を許さない火山荒原を生んだ。この時の火山灰は、江戸にも降ったそうだ。また、この噴火で、富士山南東山腹の〝宝永山〟が出来、現在の富士の姿になった。

これらのことから『万葉集』の中に歌われている富士はもちろんのこと、都良香の紀行文『富士山記』、僧円伊の『一遍上人絵巻』、雪舟・狩野探幽が画いた富士は噴火以前のものであって、浮世絵で有名な葛飾北斎の『富嶽三十六景』、安藤広重の『東海道五十三次』の富士は噴火後のものである。しかし、尾形光淋（一六五八〜一七一六年）の画いた富士は、いったいどちらの富士だろうか。興味のあるところである。富士山の噴火は、記録に残るだけでも十回を超している。

富士登山

「富士山は遠くから見るもの、登る所ではない」なんて言わないでほしい。我が静岡県警察職員は、この富士山を格好の訓練場所とし、毎年挑戦している。

富士山の山開きは七月一日だが、富士登山には梅雨明けのころから八月上旬頃までが最適だ。

富士登山口は、静岡県側の富士宮口（表口）・須走口・御殿場口、山梨県側の吉田口・精進口の五つがあるが、多少苦しくとも登ったんだという実感を持ってもらうために、富士宮口からの登山をおすすめしたい。

このコースからだと、新五合目（標高二、四〇〇メートル）からの挑戦になり、頂上までの所要時間は四〜五時間、家族とゆっくり登ったとしても六時間ぐらいを見ればいいだろう。日帰り登山も十分可能だが、無理な計画は事故のもとで、午後二時頃出発→八合目か九合目の山室に一泊→登頂→御来光→おはちめぐりが無難だろう。

毎年よい時期、富士山は万余の人で賑わっている。富士山周辺には、富士五湖をはじめ花鳥山脈公園、名勝「白糸の滝」、また家族で楽しめる富士サファリパーク、日本ランドなどがある。皆様、思い出づくりに「富士登山」を計画しぜひ一度静岡県にお越しください。

大川内山と有明海

佐賀県警察「警友」編集部

〝伝説と陶芸のくに〟佐賀県から、山と海の隠れた名所について御紹介させて頂こう。

○秘窯の里＝大川内山

県内には数多くの焼き物があるが、そのひとつ大川内山をご紹介する。伊万里市の中央を流れる伊万里川、この川をさかのぼったところに秘境大川内山がある。

大川内でまず目を奪われるのが、山水画にも似た切り立つ大屏風奇岩の景観だ。この地は、江戸時代に佐賀鍋島藩の御用窯が置かれたところである。中国景徳鎮の官窯の組織を模し、分業化した職制を採用して、当代一流の陶工たちを藩命で呼び集め、藩の保護と監視のもとに、超一流の鍋島焼〝色鍋島〟が約二百年にわたって作り出されていた。

ことさらに交通不便なこの地を選んだ理由は、その製造の技術を秘匿するためだと言われており、その秘法が他藩に漏れるのを恐れて、山の入口には関所が設けられ出入りを厳重にしていたようだ。

製品はすべて幕府や諸大名、公家などへの献上品、贈答品として取り扱われ、あくまで市場取り引きではなく、特別な注文生産であった。また、色鍋島は、その気品と精巧緻密が生命とも言われ、各工程間の不出来品の選別、検査は厳重で、ことに色絵の工程は水準以上が要求されたため現存の数が少なく、「鍋島」「色鍋島」の名で古美術界では珍重されている。

現在、大川内山の入口には、藩窯時代の関所が再現され、近くには藩窯公園やピラミッド型をした八百余の陶工無縁塔、高麗人の墓、藩御用窯跡など数々の文化遺産が残っていて、レンガ造りの煙突が立ち並び二十軒ほどの窯元が、秘法を受け継ぎ製作に励んでいる。秘窯の里は今も変らぬ静けさを保ちながら、三百年の歴史と伝統が息吹いている。

○母なる海＝有明海

佐賀県は対照的な二つの海にはさまれている。波が荒くて男性的な玄海灘と、湖のように波静かで女性的な有明海である。

今回は、後者の有明海をご紹介しよう。この海は佐賀、福岡、長崎、熊本の四つの県に囲まれた細長い内湾で、干満の差は六メートルにもおよび、干潮には、広大な干潟となる。

筑後川をはじめとする河川によって運ばれた栄養分がタップリ含まれており、珍しい魚介類や、質量ともに全国一を誇るノリなど漁業資源の宝庫となっている。最近は北海道のムツゴロウ（畑正憲氏）が有名だが、実はムツゴロウもこの海の特産で、その独特な姿はユーモラスで有明海の人気物となっており、かば焼きは珍味で酒の肴にもってこいだ。他にもクチゾコ、ウミタケ、ワラスボ、ガザミ（竹崎ガニ）など、他では味わえない味覚が楽しめる。

この有明海は水鳥の宝庫としても知られ、四月、九月の渡り鳥の季節には、全国の愛鳥家たちがバードウォッチングに訪れる。広大な干潟とエサになる魚介類などが豊富なおかげで、数千羽のシギ、チドリ、カモなどが羽を休めるからである。

波紋を沖合まで何段も描き、朝焼けと夕焼けに染まる干潟は幻想的で、水鳥の鳴き声を聞きながら、心地よい潮風にひたる時、胸は熱い旅情でいっぱいになることだろう。

このほか佐賀には、旅の〝通〟向きの観光地ずれしていない名所や旧跡が沢山ある。時には都会を離れて、佐賀の穏やかな空気を吸ってリフレッシュしてみませんか。

福岡へ博多へきんしゃい

福岡県警察本部教養課

福岡の〝おみやげ品〟としては「博多人形」や「博多織」が全国的に知れわたっているようである。

博多に来るときゃ
ひとりで来たが
帰りゃ　人形と二人づれ

この都都逸（どどいつ）は、ここ博多ではよく唄われた歌詞だそうだ。

福岡と博多、何だかややこしい。そういえば、新幹線、西のターミナル駅も「博多」である。福岡と博多の由来を少し述べてみよう。

「博多」という地名は、そうとう昔から使われていたようで、「続日本記」天平宝字三年（七五九年）の条に〝博多の大津〟とある。そうすると、八世紀には「博多」という地名が定着していたことになる。

一方、「福岡」という地名は、慶長五年（一六〇〇年）黒田長政が入府し、博多湾に流れ込む那珂川の西に城を築いて「福岡」と名づけられたといわれている。

以来、町人の町「博多」と武士の町「福岡」は微妙な感情をはらみながらも、ともに併用されてきた。明治二十二年、市制及び町村制の施行に伴い、市名を「福岡市」とするには、旧福岡藩士の圧力が相当強かったからと伝えられている。

〝博多の大津〟とあるように、博多の町は博多湾によって発展をとげた町だ。大陸と開けた門戸、博多湾は、稲作文化をとり入れ、最澄、空海、栄西らによって、日本人の精神文化に画期的な影響を与えた仏教も、ここから入ったといわれている。

このように、日本の歴史に数多く登場する博多湾の周辺には、それを物語る史跡がたくさん残されている。国宝「漢委奴国王」の金印は、湾の北の先端にある志賀島（しかのしま）で発掘されたもので、現在も金印公園内に、その位置が示されている。

その他、神功皇后の三韓征伐、豊臣秀吉の朝鮮の役など外征の舞台となったのも、ここ博多湾であり、逆に、刀伊の乱、蒙古来襲など、外寇の脅威にさらされたのも、ここ博多湾であった。

これらの史跡として、香椎宮、名古屋城（佐賀県）、元寇防塁、蒙古塚、筥崎宮などが湾岸に保存されている。

福岡といえば、大宰府が全国的に知られているようだが、大宰府は〝遠の朝廷〟といわれるように、外寇に備えた西国の都であり、大宰府政庁跡を中心にたくさんの史跡が残っている。その中でも大宰府を外寇から護るために作られた水城（みずき）は規模の大きさに驚くばかりだ。この水城も、ほぼ昔の姿のままに保存されている。この大宰府には、山上憶良や大伴旅人も赴任したといわれているが、大宰府天満宮の祭神である菅原道真が最も知られている。

福岡の良いところは、工場がなく街が明るく美しいこと。玄界灘の新鮮な活魚料理が食べられること。そして「博多っ子は祭り好き」ということ。「どうぞ福岡へ」「福岡じゃござっせん。博多へきんしゃい」。

自然も人情も豊かな豊の国

大分県警察本部教養課

〝一村一品運動〟発祥の地として知られる大分県から、数多い特産品と郷土料理の中でも代表的なものを幾つか紹介する。

特　産　品

大相撲の千秋楽で、優勝力士に大きなカップに詰めた干し椎茸が贈られているのをご覧になったことは？これぞ大分の特産品ナンバー・ワンで、年間三千トン（全国の１／４）が生産され、日本中の市場はもとより、近年の日本食ブームに乗り海外でも上々の人気だとか。

農産品のエースとしては、爽やかな香りと独特の酸味・かわいい緑の果実カボスがあり、料理の名脇役としての他、麦焼酎にスライスを浮かべて楽しむファンが全国的に増えている。また、海岸線の斜面では各種の柑橘類を産する。

瀬戸内海の西の端である大分は、一方、海の幸も豊富だ。国東半島の沖、周防灘に浮かぶ姫島では、旧塩田跡を利用してクルマエビの養殖が盛んに行われており、地の利（大分空港に近い）を得て、生きたまま東京市場へ運ばれ、食通に好評である。

養殖される水産品はこの他、

（第４ページへ続く）

読者の広場

ジェファソンと桜

滋岡長平

ワシントンは観光の名所に事欠かない米国の首府であるが、歴代大統領を記念する建造物は四つしかない。即ちワシントン記念塔、リンカーン記念堂、ケネディセンター、それにジェファソン記念堂である。

我国では第三代大統領のトマス・ジェファソンの事蹟は一般に余り知られていないと思うが、米国ではこの卓越した政治家、思想家、科学者を民主主義の象徴として、二百年来高い評価を与えて来た。

一九四三年完成した巨大な白亜の記念堂は、北に水を隔てワシントン記念塔、西北にリンカーン記念堂を臨み、東に遠く議事堂を望む風光明媚なポトマック公園の北端に位置して居る。円型の殿堂の中央、黒い大理石の台座の上に六米弱のブロンズの立像が立ち、四方の壁の白大理石のパネル四枚に夫々ジェファソンの箴言が金文字で彫られて居る。

南西の壁に掲げられたのは、一七七六年彼の起草による「独立宣言」の前文「我々は自明の真理として凡ゆる人は平等に造られ造物主によって一定の奪い難い天賦の権利を附与されその中に生命自由及び幸福の追求を含まれる事を信ずる」に始まる米国建国精神の核心が刻まれて居る。第二のパネルは、信仰の自由を主張した彼の言葉、第三の東北のパネルには、奴隷制度廃止の最初の提唱と、自治の完成には大衆の教育が不可欠であると云う信條が述べられて居る。そして第四のパネルには、法も制度も歴史の中で変化する必然性を説いて居る。

独立宣言の後、故郷のヴァージニアに帰ったジェファソンは相続法の改正、宗教の自由化、教育制度の改革を行い、困難な独立戦争下に知事として奮闘する。次いでフランクリンの後任となり、一七八四年から八九年迄駐仏公使を勤め、欧州に在り外交官及び思想家として令名を謳われる。一七八九年七月に始まったフランス革命に遭遇し、同年末帰国するやワシントンに請われて初代の国務長官となり、九三年迄彼を補佐する。退いては初の政党、共和党を組織、一八〇〇年の選挙に出馬、新しい首都ワシントンで第三代大統領に就任する。

そこで年来の主張である小さな政府、簡素な政治を実践する。時に革命後、対英戦争に没頭して来たナポレオンは、ミシシッピー以西のルイジアナをスペインから譲り受ける。然し欧州戦線の維持が精一杯で、新領土を保持する意欲を失ったナポレオンの心中を見抜いたジェファソンは、一八〇三年ルイジアナをたったの千六百万ドルでフランスから買収する事に成功する。

此の天真爛漫であり乍ら頭脳明晰な策士は、合衆国の領土を一挙に三倍弱にしたのであるが、獲得した未開の辺境と先住者を調査し、太平洋岸に達する道を発見するため有力な探険隊をミズーリ河の源流に派遣する。即ち細心にして大胆なルイスとクラークの両大尉は、インディアンを掌握し乍ら一年半の労苦の後太平洋岸に到達し、その使命を完遂したのであった。

ジェファソンはその信條通り大統領を二期で退き、モンティチェロの旧居に帰り、マルチ人間の能力を傾倒して理想の大学の創設に当り、一八二五年ヴァージニア大学を完成する。その翌年の七月四日奇しくも建国五十周年の記念日に八十三才の生涯を閉じたのである。

西ポトマック公園の壮麗なジェファソン記念堂の美観が最も賞讃されるのは四月の第一、二週、一九一二年憲政の神様と謳われた東京市長尾崎咢堂が贈った六五〇本の染井吉野の花が開く桜祭の季節である。その年五月二十七日、タフト大統領夫人と珍田大使夫人が日米両国の親善を祈念して此所に最初の二本を植えたと伝えられて居る。其の後両国の間には不幸な出来事が度々あったが、桜樹は完璧に保存され、歴史の遇然とは云え米国の偉人を取り囲んで、平和の花を年々爛漫と咲かせて居るのである。

タダであること

三澤昭郎

今から十余年前、私が商社勤めをしていた頃の苦い思い出話。当時はガムシャラに成長してきた日本の経済も、量的拡大にカゲリが見え、質的な充実への転換が主張され始めていた。私の育った鉄屋の専業商社も、流行にのって、事業多角化の一環として、沖縄近くの島で砂鉄を堀った穴を活用してうなぎ・エビの養殖をスタートさせた。

ある真夏の朝、支店の幹部会議の席上、本社からきた「初出荷・うなぎ・エビの社内分譲案内」が話題となり、土用の丑の日に、支店全員に味わって貰おうという提案が一部の課長から出された。その上この際、支店の予備費の支出で賄い、全員にタダで配付するのが望ましい、という課長達のオダテに私はうっかり乗ってしまった。

土用の丑の日の前日、支店に航空便の大きな箱が数個到着。うなぎは白焼きというのか、開いて軽く焼いてあるのを、一家庭に十枚ずつとして包み直し、その上にタレの小瓶を調達してつけることにした。

小さなエビは、驚いたことにまだオガクズの中で生きており、うっかり箱を開けたら部屋中をピンピンとハネ廻り、大騒ぎで十匹位の袋に小分けにした。暑い盛りであるので、ドライアイスを入れたビニールの袋に「我社生産のうなぎ・エビを味わってスタミナをつけましょう」と書いて、約五十人の支店全員に夕方配付した。出張中の者、直帰できない者、独身寮へは一括して届けさせる配慮をした。

それから二～三日後、仕事中に女子社員の机に座り、電話を受けながらメモか便箋でもと思い何気なく引出しを開けてみた。何とそこに「我社……味わって……」のビニール袋。一瞬、私は目を疑った。特に良い家庭育ちのお嬢さんで仕事ぶりもテキパキとした模範的な社員と思っていただけに……。「この暑さの中で生ものは一日でダメになる。直ぐ捨てなさい。会社の好意を、こんな不注意で無にすることは何事だ。こんなことでは良いお嫁さんになれないぞ」と思わず人前で怒鳴りつけてしまった。

四～五日後、今度は年嵩の課長が私のところへ。「次長、怒らないで聞いて下さい。女の子達がロッカールームが臭いというので調べてみたら、男子二名のロッカーから例の袋が出てきました。私からきつく注意をして置きましたから……。我々の時代と違って、今の子は食べ物に執着はないようです。そんなことより、社内分譲価格でも〇千円もするものをタダで配ったことが、間違っていたのかも知れませんよ。少しでも負担させるか、希望者だけに買わせるとか、今後こういうことは良く考えてやりましょう。私の家でもよくあることで、私は娘達の小遣いをまきあげても負担させることにしています。そうしないと有難味が分からないようです。会社としておめでたいことだといっても、彼らは貰ったものをどうしようが自分の勝手だ、という気持があるようです」私は黙って苦笑するしかなかった。

現在、私は独立して小さな会社を経営して居りますが、慰安旅行、忘年会、新年会その他の行事は、全て一人当りの費用を発表し、会社負担・自己負担を明確にさせております。又、常々楽しいこと、嬉しいこと、良いことはタダではできない……もしそれができたときは、相手が負担してくれているのだからその厚意には感謝する気持ちを失わないようにと云って居ります。

色々な福祉問題・教科書・給食問題も、一方的な見方かも知れませんが、基本的にはこれらの延長線上にあるような気がします。「日本人は、水と空気と安全は、タダだと思っている」と他国の人に羨望をこめた皮肉を云われるのも当然かも知れません。

息子の成長

宮崎県都城市　柿並秀一

機動隊員の皆さん毎日ご苦労様でございます。文章を書くのは苦手な私ですが、我が子を思う気持など少々綴ってみたいと思います。

都城市は宮崎県の南部に位置し、鹿児島県に近いところにあり、四方を山にかこまれた人口十三万の小さな町です。特別な産業もなく農業が主ですが、特産としてお茶、弓、家具などがあります。又、焼酎も大変優秀なものが出来ます。

次男の招平が、この都城から上京して早や三年が過ぎました。時のたつのは本当に早いものです。誕生の感激、小学校入学、中学への進学、そして柔道部に入部してだんだんたくましくなって行った日々……。さらに高校総体での優勝、警視庁への合格、上京と今思い出しても、全ての事が一瞬にして過ぎ去ったような気がいたします。

今は、私の手許から過ぎ去った子供達との楽しい日々のことを妻と二人で懐しみ、語り合う毎日になってしまいました。機動隊の職場はどんなものか私共は知りませんが、人間関係を大切にして、体に気を付けて元気に頑張ってほしいと思います。隊員の皆さん、健康に留意され元気で頑張って下さい。

喜び、中学への進学、そして柔道部に入部してだんだんたくましくなって行った日々……。さらに高校総体での優勝、警視庁への合格、上京と今思い出しても、全ての事が一瞬にして過ぎ去ったような気がいたします。

今は、私の手許から過ぎ去った子供達との楽しい日々のことを妻と二人で懐しみ、語り合う毎日になってしまいました。機動隊の職場はどんなものか私共は知りませんが、人間関係を大切にして、体に気を付けて元気に頑張ってほしいと思います。隊員の皆さん、健康に留意され元気で頑張って下さい。

（警視庁三機・柿並招平隊員の父親）

（第3ページより続く）

ブリ、ヒオウギガイ、真珠など多数あるが、リアス式海岸は自然の魚類の宝庫で、天然もののタイ、ブリ、アジ等が行く先々で旅人の舌を楽しませてくれる。

〝下町のナポレオン〟の名コピーで有名な「いいちこ」や「吉四六」を初めとする麦焼酎別府の竹細工・天然の入浴剤「湯の花」、日田の小鹿田焼・木工製品などがある。

郷土料理

温暖な気候と変化に富む地形が醸す豊かな自然に恵まれ、四季を通じて、万人の味覚を満足させる郷土料理も沢山ある。

国際観光都市別府では、ゆったりと温泉につかりながら各地の名物料理を、また、お隣りの日出町では、古く将軍へ献上したという美味〝城下かれい〟の料理を是非とも味わっていただきたい。

別府から車で三十分、山ふところに抱かれた由布院盆地は、九州の軽井沢と呼ばれている。高層ビルのない落ち着いた町のたたずまい、レンゲ畑や深い緑の木立の間を辻馬車がのんびりと走る。誰もが心のふるさとと呼んでみたくなるやすらぎのまち湯布院。地鶏料理や山菜料理に舌鼓を打ち、満天の星を仰いで入る露天風呂はストレスを忘れさせる。

お知らせ

当励ます会の支部総会が開催されます。会員各位のご参会お待ちしています。

▽大阪支部総会　十二月一日(月)十七時三十分から大阪商工会議所ビル内「ニューコクサイ」にて。

▽東北支部総会　六十二年一月二十八日(水)仙台市「バレス平安」にて。

若さと根性で栄光の機動隊

東鋼業㈱
杉尾榮俊
芝本龍平
㈱三榮商会
㈱スチールセンター
日誠総業㈱
栗田工業㈱
高周波熱錬㈱
木村政次
黒田一
村上益一
谷本鐵鋼㈱
中京製線㈱
丸定産業㈱
伊勢湾海運㈱
明鋼材㈱
堀口海運㈱
三和鉄構建設㈱
高橋重廣
㈱辻作次郎商店
中越通運㈱